「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies
【編】

After/Withコロナの「国際日本研究」

Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe

――――ヨーロッパからの報告

国際日本文化研究センター

序文

荒木　浩

2020 年 12 月 11 日－13 日の 3 日間、国際日本文化研究センターを舞台にオンラインを結び、「国際日本研究」コンソーシアム主催の「ヨーロッパ日本研究学術交流会議――緊急会議　After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」が開催された。この報告集は、その記録であり、同コンソーシアム刊行の第 5 論集にあたる。

昨年度刊行した第 4 論集『環太平洋から「日本研究」を考える Japanese Studies: Perspectives from the Pacific Rim――「国際日本研究」コンソーシアム記録集 2020』の「あとがき」に誌したように、本コンソーシアムでは、『なぜ国際日本研究なのか――「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』（晃洋書房、2018 年 3 月）、『日本研究をひらく――「国際日本研究」コンソーシアム記録集 2018』（同上、2019 年 3 月）、『越境する歴史学と世界文学』（臨川書店、2020 年 3 月）と、年度ごとに成果報告の出版を重ねてきた。『環太平洋から「日本研究」を考える』は、2019 年 12 月 21、22 日の 2 日間、国際日本文化研究センターを会場として開かれた「国際日本研究」コンソーシアム主催の「環太平洋学術交流会議――環太平洋学術交流の可能性」での発表と議論を軸に構成したものだが、初めて、非売品の刊行物として企画された。日文研のオープンアクセスサイトからも自由にダウンロードできるように、発行形態をリニューアルしたものである。幸い、執筆者からも、利用者からも、国内外を問わず、自在にアクセスできる国際的な学術書の出版形態だと好評である。そこで本書も、同様の出版体制で臨むことになった。

＊

この「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」は、開催された年時とタイトル

から明らかなように、コロナ禍 1 年目の真っ最中に企画された、緊急会議である。私が本コンソーシアム委員会（日文研）の委員長を引き受けた 2020 年度初頭の状況は、3 月以降、COVID-19 という初耳のパンデミックが日本でも深刻となって、多くの国際会議が中止・延期となり、また海外渡航そのものが中断を余儀なくされていく、現在進行形の暗転のただ中にあった。「国際日本研究」という冠自体をどう捉え、動かせばよいのか。呆然として途方にくれた時期である。個人的な時系列で言えば、同年 2 月中旬、ニューヨークで行われた日文研の海外シンポジウムから帰国して以後、急転直下。3 月に渡航予定だったフランスの INALCO・パリ大学のイベントが、チケット購入後、渡航直前にキャンセルされたことを皮切りに、国内出張さえ思うようにならなくなったのは、誰もが経験した通りである。

「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」は、その暗中模索の時期に、コンソーシアム委員会のメンバーで衆知を集めて人選し、企画・立案した。そのおかげか、幸い、今日の目で見ると、いまだ終熄が見えない足かけ 3 年間のコロナ禍を俯瞰するグローバルな記録であり、また未来へ向けての論集となった、という自負もある。

本書に執筆いただいた論者（講演者、発表者、ディスカッサント、司会担当など）も、会議を踏まえつつ、2021 年の時点で、それぞれ過去の発表をレビューしつつ、原稿にまとめていただいている。なお英語の発表やコメントが多かった会議 3 日目は、本論集ではオリジナルな英語論文を掲載するが、対訳を添え、日本語で全文を読むことができるようになっている。ちなみに、最終コーナーでラウンドテーブルのバイリンガルな討議の場を見事に捌いたのは、ジョン・ブリーン氏（現・日文研名誉教授）である。

命名通りの学術会議報告集である。残念ながら、会議開催当時の「緊急会議　After/With コロナ」という形容は、依然そのまま、現在の危機意識と連続してしまう。嘆かわしい事態である。しかしいずれ、時代と事態は大きく転ずる時がくる。未曾有のこの世界的なパンデミックの事実と体験が、いかに変化して浸透し、時を駆け抜けていったか。一つの歴史的記録として、当

時、会議への参加を呼びかけた趣意書（ポスター・プログラムと合わせて、「国際日本研究」コンソーシアムのウェブサイトにも掲載されている）を、企画段階のものと照合しつつ、一部補記・改稿を施して、下記に掲げておこう。

＊＊

「国際日本研究」コンソーシアム（URL: https://cgjs.jp、幹事機関・事務局は国際日本文化研究センター）は、「国際日本研究」や「国際日本学」を掲げる大学院や研究所など、国内の研究・教育機関と相互に連携を図りながら、「国際日本研究」という研究分野の共同的・横断的推進と、教育体制の実践を目指す先駆的な試みとして、2017 年 9 月に、正式に発足しました。広く「国際日本研究」に関わる共同研究会や国際研究集会の企画を進め、若手研究者の参加を促し、また本コンソーシアムを媒介としながら、国内研究者コミュニティーを海外研究者ネットワークと結びつけることを目指しています。

「国際日本研究」コンソーシアムも 3 年目となった昨年度より、コンソーシアム連繋のより広い海外展開を目指して、会員機関と協働しつつ、国際学術交流会議の試みを開始しました。その始発として、2019 年には、地域の視界を「環太平洋」に定め、インドネシア・オーストラリア・ニュージーランド・ハワイなどから研究者を招き、「環太平洋学術交流会議」を開催したのです。

その次年の 2020 年は、本来、ベルギーのゲントで、ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）国際会議が開催される予定でありました。そのことを視野に入れ、本コンソーシアムでは、2020 年度の学術会議として、その対象をヨーロッパに置き、「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」の開催を計画してまいりました。ところが 2019 年末から 2020 年以降、コロナ禍により、多くの国内外の学術会議が中止や延期となりました。本企画につきましても、開催時期・方法・テーマなどについて根本からの見直しを迫られましたが、数カ月の議論を重ね、ようやく新たな形での開催を推進する次第となったのです。

「国際日本研究」は、そして本コンソーシアムは、この時代のこのような

状況下で、いかなる学術的展望を見出すことができるのか。国際的なコンソーシアムの研究連携の未来には、どのような可能性があるのか。まさに After/With コロナの今こそ、新たな学術形態の模索・開発、そして教育交流の構想・進展・議論をすべき時期であると考えます。

EAJS の国際会議は、早々に来年同時期の開催へと延期が決まり、すでに刷新された告知が出ています。そして EAJS のウェブサイトにも掲載されているように、本コンソーシアムの幹事を務める国際日本文化研究センターは、EAJS のイベントとしてシンポジウムを開催します。またそれと連続して本コンソーシアムでも、若手のワークショップを企画・開催する予定となっています。

そこで、こうした近未来の流れに即して、日本研究の国際学術交流会議を、本年度、当初の企画通りヨーロッパを対象として行うこととしたいと考えました。国際日本文化研究センターの連携機関や「国際日本研究」コンソーシアムに関連する研究機関を基盤として、国内外でご活躍の研究者をお招きし、「緊急会議」として「After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」を提言するオンラインシンポジウム（原則として）を開催したいと思います。

基調講演者として、ポストコロナについても広い視野から提言と考察を行っておられる、五百旗頭真氏（兵庫県立大学理事長）をお招きし、またこの状況下で喫緊の課題となる、人文学とオンラインやデータベースの活用をめぐる問題について、関野樹氏（国際日本文化研究センター）に基調報告をお願いし、シンポジウムへと繋げていきたいと考えております。

＊＊

上記の企画が、当日、いかに結実したか。簡単な開催報告は、コンソーシアムのウェブサイトに掲載してあり、詳細は、本書総体にすべて具現している。併せ参照されたい。ただし、本書編集の最終段階にある 2022 年 1 月の段階においても、オミクロンから第 6 波へ、再び闇が迫ってきた。祈りを込めて「After/With」と会議を名付けたコロナ禍のすがたは、残念ながら、い

まだ願いのままに留まっている。同様に喧伝された「ポストコロナ」というかけ声も、もはやあたかも、未来学へと転じてしまっているかのようだ。

＊

ただし「国際日本研究」コンソーシアム自体は、発足以来、順調な拡がりを見せ、2021 年度現在では、18 の会員機関と 3 つの準会員機関で構成された学術ネットワークとして活動している。研究と教育と、またそれぞれを多様につなぐ国際的なハブ機関として、5 年目の一区切りを迎えようとしている段階だ。本書と並行してコンソーシアムでは、これまでの活動の歴史について、『「国際日本研究」コンソーシアム 2017 → 2021　Consortium for Global Japanese Studies 2017－2021』という記録集をブックレットとして作成し、オンライン配布をも行う準備を進めている。同時期に公刊されるこの記録集を本書と併読することで、本会議の意義も、歴史的文脈のなかで立体的に確認されるであろう。

大事なのは、それから、である。批判的継承とフォローアップと。直接の契機としては「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」のラウンドテーブルの議論のなかで、佐藤＝ロスベアグ・ナナ氏（ロンドン大学 SOAS）が対話の継続を提案したことを承け、即座に構成を決定したヨーロッパ WG というミーティングがある。残念ながら、まだ in person（膝つき合わせて）の会合を果たせていないが、その代わりに今日的な DX の恩恵で、会議翌月の 2021 年 1 月から、毎月１度、ヨーロッパの午前、日本の夕刻（JST18：00）にオンラインで集まって、顔を突き合わせながら、対話を続けてきた。メンバーは、佐藤＝ロスベアグ･ナナ氏、アンドレアス･ニーハウス氏（ゲント大学）、エドアルド・ジェルリーニ氏（ヴェネツィア・カフォスカリ大学）、アンナ・アンドレーワ氏（ハイデルベルク大学→ゲント大学）のヨーロッパメンバーと、国際日本文化研究センターのメンバー（荒木浩、楠綾子、安井眞奈美、ゴウランガ・チャラン・プラダン）である。WG の推進とロジスティクスについては、「国際日本研究」コンソーシアム事務局のメンバー、とりわけ特任専門職員の山川彩文（2020 年度）、境野飛鳥（2021 年度）の協力を得て、

1 年以上の議論を重ねてきたのである。

この対話は、2022 年 1 月 21－23 日に日文研において開催の総括シンポジウム「日本大衆文化研究の最前線――新しい日本像の創出にむけて」の 3 日目に、いつものヨーロッパ WG と近しい時間に「パネル⑤「国際日本研究」の新展開――ヨーロッパとの対話から」と題して開催の以下のイベントとして結実する。こちらも記録として掲出しておこう。

＊＊

16:45－17:00　司会：荒木浩（国際日本文化研究センター教授）

17:00－18:00　「「国際日本研究」が求める研究視界とハンドブックとは何か」

基調講演者：佐藤＝ロスベアグ・ナナ（ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 [SOAS] 言語文化学部長・准教授）

ディスカッサント：安井眞奈美（国際日本文化研究センター教授）

ディスカッサント：アンナ・アンドレーワ（ゲント大学研究教授）

18:10－19:00　“In-between: Experiences and Challenges of Organizing the International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS) at Ghent University in Times of Crisis and Transition”

発表者：アンドレアス・ニーハウス（ゲント大学教授）

ディスカッサント：楠綾子（国際日本文化研究センター准教授）

ディスカッサント：アンナ・アンドレーワ（ゲント大学研究教授）

19:10－19:50　「編み合うテクスト遺産　テクストの学際的な再考を試みて」

発表者：エドアルド・ジェルリーニ（ヴェネツィア・カフォスカリ大学非常勤教授）

ディスカッサント：荒木浩（国際日本文化研究センター教授）

20:00－20:45　ラウンドテーブル

ディスカッサント：タイモン・スクリーチ（国際日本文化研究センター教授）

＊＊

上記の議事と内容は、まさにWGで議論し、情報交換してきたことの集約点だが、とりわけ、ゲント大学のニーハウス教授には、「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」直結の問題群として、2020年開催予定のEAJSの延期、翌年は開催されたもののオンラインとなった状況、そして2023年に、延べ3回目の企画として、EAJSがゲントでいよいよ開催される運びとなる準備（ハイブリッド？対面の様態は？）の様子などについて、リアルタイムの報告をお願いした。また成果集として公刊される時を待ちたい。

なお、先に載せた会議の趣旨書でも言及した2020年のEAJSは、1年送りとはなったものの、本コンソーシアムは予定通り若手研究者のイベントを準備し、「EAJS2021 国際次世代ワークショップ」と題して、2021年8月26日（木）10:15－11:45（中央ヨーロッパ夏時間）に開催した。モデレーターとして、コンソーシアムの国際日本研究者データベースや運営の諸事に携わってくれているヨーロッパWGのメンバー、ゴウランガ・チャラン・プラダン、またディスカッサントとして、やはりデータベースを軸として、コンソーシアムの業務に協力してくれている、ポスドクの若手研究者、谷雪妮（日文研）を配し、英語を軸に日本語を一部交えて、以下の発表と論議を円滑に行うことができたのである。

1. 「明末清初における東アジアの外交と王権」
   程 永超（東北大学東北アジア研究センター准教授）
2. “Choshu, Shin Buddhism and the Restoration of the Emperor”
   Mick Deneckere（Faculty of Arts and Philosophy, Ghent University）
3. 「「正法」の近代―サンガ、王、戒律―」
   亀山光明（東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程）
4. 「紅い太陽：近代日中絵画の中の国家アイドルの表現」
   陳　藝婕（総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻）

これらの研究成果も、同時に行われた日文研の海外シンポジウムでの発表と合わせて、日文研刊行のオンライン出版物『世界の日本研究』特別号として、次年度に公刊する準備が進んでいる。以上、まさしく紆余曲折の時空間を経て、本会議の開催趣旨は、予想を超えた充実ぶりで、実現されたと考える。

＊

ところで「国際日本研究」コンソーシアムは、これまで、日本国内の機関を対象として、会員機関を構成してきた。一つのタームを終えて、所期の目標はおおむね達成したと思量される。そこで 2022 年度より、幹事機関である国際日本文化研究センターの第 4 期中期計画・中期目標のなかで、その会員を海外にも拡げて、新しい組織として生まれ変わる方針である。

会員の諸機関とそのメンバー、また本書の読者が本コンソーシアムの活動を見守り、批正していただくなかで、多くの展望とともに、また新たな課題が発見されることと思う。記録論集としての本書が、「国際日本研究」なるものの次のステップへの提言や、改善の一助となることを願ってやまない。

2022 年 1 月 11 日誌す

目次

003　序文（荒木　浩）

第Ⅰ部
コロナ後の国際関係と人文学研究

015　コロナ禍と国際関係（五百旗頭　真）
037　人文学研究におけるオンライン上の研究資源――現状と課題（関野　樹）
059　**Column 1.　コロナと国際関係**（楠　綾子）

第Ⅱ部
コロナ禍と日本研究――ヨーロッパからの報告①

067　イタリアから見たコロナ禍と日本研究への影響（エドアルド・ジェルリーニ）
074　Covid-19（コロナ）を翻訳する（佐藤＝ロスベアグ・ナナ）
084　コロナ禍における見えるものと見えないもの（鋳物美佳）
095　面目を改める？ 新型コロナウイルスとベルギーにおける日本学の現在と将来（アンドレアス・ニーハウス）
103　「良心」を考える（マルクス・リュッターマン）
119　After/With コロナの国際日本研究――パネル発表「ヨーロッパからの報告①」を受けて（安井眞奈美）
128　**Column 2.　国立国会図書館デジタル化資料等の海外送信・その後**（山田奨治）

第Ⅲ部
コロナ禍と日本研究――ヨーロッパからの報告②

137　Pandemic and Kabuki Dramaturgy（Alan Cummings）
149　**［日本語訳］**パンデミックと歌舞伎のドラマトゥルギー（アラン・カミングズ）
159　Covid-19 and Japanese Studies: Some Thoughts from Prague（Toyosawa Nobuko）

174 **[日本語訳]**パンデミックと日本研究に関して――プラハからの発信(豊沢信子)
188 コロナ禍におけるエトヴェシュ大学の現状と試み（梅村裕子）
197 Methodological Concerns of Researching Larp and Educational Roleplay in Japan: The (Im) Possibilities of Remote Fieldwork（Björn-Ole Kamm）
216 **[日本語訳]** 日本におけるライブ・アクション・ロールプレイ（LARP）および教育ロールプレイングの研究方法論における問題点：リモートフィールドワークの（不）可能性について（ビョーン＝オーレ・カム）
236 「ヨーロッパからの報告②」に関するコメント／ Comments on the “Reports from Europe, Part 2”（キリ・パラモア／ Kiri Paramore）
245 **Column 3.　コロナ禍の後に――大学教育・研究の転換とメタバース**（藤本憲正）

付録　「国際日本研究」コンソーシアムについて

253 設立の経緯と趣旨
254 「国際日本研究」コンソーシアム規則
256 会員機関一覧
257 会員機関紹介①　法政大学国際日本学研究所（小口雅史）
259 会員機関紹介②　総合研究大学院大学 文化科学研究科国際日本研究専攻（フレデリック・クレインス）

261 あとがき――闇のなかで“未来図”を描く（白石恵理）

264 執筆者一覧

第Ⅰ部

コロナ後の国際関係と人文学研究

コロナ禍と国際関係

五百旗頭　真

「コロナ禍と国際関係」というテーマで、二つの問題を論じたい。今、世界を揺さぶるコロナ禍と、米中対決模様の国際関係である。米中が二超大国化しようとしている流れのなかで両国の歩みを振り返り、コロナ下での国際関係を検討する。

100年前のスペイン・インフルエンザは、第一次世界大戦末期の1918年に始まった。第一次大戦は、西ヨーロッパの人びとにとって本当にショッキングな事態だった。思いもかけず、かつてない殺りくを繰り広げた。

私事であるが、2000年に1年間ロンドン大学で在外研修した際、子どもたちを同行したが、そのうち4人が中高レベルであり、シェフィールドの田舎にある全寮制の学校に入れた。貴族の邸宅のようなキャンパスで、真ん中に教会があり、その入口ホールへ足を踏み入れると、壁の銅板に名前が彫り込まれている。もしや、学校を創立する際に寄付した人の名前が書いてあるのかと思って近づいてみると、「本校の卒業生にして国のために命を捧げた者」と書いてある。その最初にはボーア戦争（1899–1902）、これはほんの数名であった。ところが、次の第一次世界大戦の犠牲者リストはとめどなく続いていた。イートンやハローなどの名門校をはじめ、あらゆる若者が第一次大戦に加わり、私の子どもたちの入ったその学校でも死んだ卒業生の名前が続く。次代を担う若者がすっかり失われるのではないかと思うほどに死なせてしまったのだった。第一次大戦では、1,000万人くらいの戦死者が出た。

それに加えて、1918年春からスペイン・インフルエンザが始まった。アメリカ中西部カンザス州の陸軍基地から始まり、船に乗ってヨーロッパへ広がってきた。そしてヨーロッパから世界へ拡散したわけである。4,000～5,000

万人が亡くなったといわれるが、正確なところは分からない。かつて日文研でも教えていらした速水融先生が『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』というすばらしい本を 2006 年に発刊された。私はその本を読んで衝撃を受けた。陸軍の基地がいかにコロナの感染に理想的な環境か、軍隊が三密そのものの生活であることがわかる。狭い所にたくさんの兵士を詰め込んで、「ご報告申し上げます」と敬礼しつつ、マイクなしに全館にとどろくような大声で唾を交換するわけである。これが感染源にならないわけはない。当時、私は防衛大学校の校長をしていたが、防大生は 8 人部屋で生活していた。もしこれが防大に入ってきたらどうなるのか、ゾッとする思いであった。

そして、2009 年の新型インフルエンザは、90 年ぶりのスペイン・インフルエンザと同じ N1H1 型の再来だった。メキシコで発生したというニュースを聞いたその直後に、私は校長として、対応をどうするか研究するように防大の会議で指示した。3 カ月後、実際に入ってきたとき、防大では万全の構えをもって対応した。ただ、完全隔離をしていても、発症したときにはすでに他人に感染しているので、毎日増え焦りはしたが、何とか十数名に止めるという経験をした。

スペイン・インフルエンザは、皮肉な結果として第一次大戦を終わらせた。戦場で若者をこれでもか、これでもかと殺したうえ、さらにインフルエンザでバタバタ倒れていく。春先の第 1 波は大したことがなかった。夏場を過ぎたところで第 2 波になって、変異・強毒化した。感染すると、元気な 20 代～ 40 代の人びとが 2、3 日でバタバタ死んでいくというすさまじい猛毒化であった。その結果、交戦国のどちら側も痛手を被った。が、戦力減少は国家機密であり、絶対に言わない。うちはたくさん死んだから、戦えませんと言うわけにはいかない。どちらも強がって口にはしなかったけれども、もう続けられない事態だった。それが、11 月 11 日の休戦協定を後押しすることになった。その意味で、100 年前のスペイン・インフルエンザは、平和を取り戻す役割を果たしたといえよう。

それに対して今、世界は平和であり、人びとは非常に健康に関心がある。

みんなコロナウイルスのことを言うが、100年前に平和をもたらしたのとは逆に、国家対立を激化させる様相である。その後、トランプ時代が終わってバイデンの時代が始まって、米中関係を中心に国際関係はどう展開していくのか、そのなかで日本の役割はどういうものかにつき、話をしたい。

第二次大戦期のアメリカの政策決定過程が私の中心的な研究テーマだったが、アメリカ史のなかで最高のときが、第二次大戦期だと思う。ヒトラー率いるドイツに対応できなくなったイギリスをアメリカは応援に出かけて、戦場でドイツ、日本を打ち破った。のみならず、戦後秩序をつくるという、普通ではなかなかできないもう一つの大仕事を成し遂げた。戦争をやるだけで大変であり、一つの政府のエネルギーをほとんど使い尽くす。ところが、アメリカは第一次大戦の失敗を非常に意識し、今度は変革された新しい世界秩序をつくることに執念を燃やした。一つは自由貿易体制、ブレトンウッズ体制と呼ばれるもので、GATT、IMF、世界銀行に特徴づけられる体制である。

ドイツや日本を叩きつぶしたアメリカであるが、ドイツと日本にも言い分はある。米国は巨大な土地と資源と市場を持っている。ドイツや日本もやる気があるし、能力はある。しかし、資源も市場もない。しかも主要国はそれを囲い込んでしまって、こちらに対して開かない。であれば、どうやって生きていけというのか。剣を持って切り裂くほかないではないか、というのがドイツや日本の正義である。アメリカはその言い分が何であれ、戦争を仕掛けたドイツと日本を叩きつぶす。つぶすのだが、賢かった。もし、ここで仕組みが変わらなければ、また新たなドイツや日本が必ず現れる。それをさせないためには、やはり経済システムを変えなければいけない。資源と市場の独占体制をやめなければいけない。開放体制にしなければいけないというので、ブレトンウッズで自由貿易体制をつくったわけである。これが功を奏し、大戦争が少なくなった。今はブレトンウッズ以後と言われて久しいが、日本が経済復興できたのは、さらに言えば中国が経済的に台頭できたのも、自由貿易体制があったおかげである。GATT、IMF、WTOの体制下でこそ、平和的に世界経済は発展できた。その意味で、米国のつくった戦後秩序は大きな

役割を果たしたといえよう。

もう一つ、政治面の新しい秩序が国連体制である。それまでの世界は、一国一国が皆､国防を全うするに足る兵力を持って臨まなければならなかった。もし、それが十分でなければ、国を奪われることを覚悟しなければいけないという弱肉強食の現実があった。止めどない死闘の繰り返しである。それに対し、弱小国であっても独立を許す、民族の自決を認めるべきであるという考えに立って、国連体制をつくった。その憲章のなかには、一方的な力の行使によって領土を変えてはならないと書かれている｡それを監視するために、世界の警察官として、米、ソ、英、仏、中の 5 カ国を常任理事国として拒否権を持つ大国とする。その下で中小諸国が各自の存立のために軍事力を一生懸命に準備して戦わなくてもいいようにしようと。もとより人間のつくるものは不完全ではあるけれども、ブレトンウッズも国連体制も、それまでの弱肉強食以外に何もなかったときから見ると、大変に進歩した新しい秩序だった｡これをアメリカは第二次大戦に参戦しながらつくり上げた｡大変よくやったと言うべきであろう。

ところが、戦後秩序をつくり、運営してきたアメリカは、今や秩序疲れに陥っている。なぜアメリカばかりが世界の面倒を見なければいけないのか。パックス・アメリカーナで調子良かったときには誇り高く、皆、言うことを聞けと言っていたのが、愚かにもアメリカはベトナム戦争、イラク戦争という間違った戦争をしてしまった。それらを始める前は「全能の幻想」を持ち得るほどに力がみなぎっていた大国であっても、やはり大義なき戦争をやるとガクッと弱る。今はイラク戦争後の弱った時期である。

同時に、大きな傾向で見ると、第二次大戦が終わった直後、アメリカは世界の GNP の半分くらいを独占していた。欧州でもアジアでも、よその国々は戦場になって荒廃したのに比べ、アメリカだけが元気いっぱい。それが今や世界 GDP の 20 パーセントくらいまで、相対的に地位を落としている。そういうなかで、ベトナム、イラク戦争に失敗して、秩序疲れに至った現実があり、もはやパックス・アメリカーナを謳歌する状況ではない。都会の仕

事に行き詰まると、人は故郷を思うのが常である。アメリカもパックス・アメリカーナの秩序を支える仕事に行き詰まると、故郷を思い出す。もともとジョージ・ワシントン大統領のときには、離別演説のなかで、「アメリカは世界に関与してはいけない。このアメリカの新世界のなかで水準の高い立派な理想社会を築くべきであって、ヨーロッパの国々と交わるとろくなことはない、汚れる」と言って、孤立主義を説いたわけである。それを思い出すようになったのがオバマのとき、トランプのときだ。彼らは「もはやアメリカは世界の警察官ではない」と言った。

2014年にロシアがクリミアを奪った。その後、G7サミットがドイツのメルケル首相を議長として開催された。日本ではあまりニュースにならなかったけれども、そのとき、米欧間の激しい対立が起こっている。ヨーロッパの国々が、アメリカに対して「何をやっているのだ」と。「ロシアがこんなに勝手なことをしているのに、アメリカは何もできないのか、阻止もできないのか。冷戦下では考えられなかった。あの頃は、アメリカは体を張ってソ連を抑えたではないか。今は何だ」と、欧州各国の首脳がオバマ大統領を難じた。オバマは「何を言っているんだ。これはヨーロッパの問題じゃないか。自分たちがきちんと対応せずにいて、全部アメリカのせいにするのか」と怒った。それでも多勢に無勢である。オバマは、椅子を回転させて一堂に背中を向け、「おまえたちとは話をしない」という険悪な雰囲気になった。

終わる頃になって、黙っていた安倍首相が発言を始めた。「本日は大変、活発な議論が行われた。自分の理解では、三つの点で激しい意見対立があった。ただ、誰も口にしなかったけれども、我々には前提として三つの合意があると思う。世界の秩序を支え、ともに市場経済を支え、民主主義を守るといった三つの点については、実は我々には共通の前提がある。それがあっての激しい議論だったと自分は理解している。会議が終わったら、メルケル議長は記者団に発表されるだろうけれど、どちらかと言えば、対立点よりは合意があった部分を中心にお話しされたらどうか」と意見を述べた。すると、オバマ大統領が向き直って、「それだ」と。メルケル議長も顔色を取り戻し

て「大変、良い意見だ」と同意したので、米欧の対立を安倍首相がとりなした一幕として伝えられている。アメリカではもはや、世界の警察官を務める力と意志が失われた。それに対して「どうした、アメリカ」という不満、批判が激しく出ている。

アジアについては、2014 年にオバマ大統領が東京にやって来て、「尖閣諸島は日米安保第 5 条の適用がある」と言い、「有事の際には日本をサポートして一緒に戦う」という含意を持つ発言をした。これは中国の台頭のなかで大きなことだったと思う。ただ、米国は本気で何とかする気があるのか、中国側も疑っている。特に、南シナ海では中国がフィリピンからミスチーフやスカボローなどの環礁を奪い、ベトナムからもたくさんの環礁を奪ったうえ、2014 年に強引に埋め立てて基地化を強行した。かつてのアメリカだったら絶対に許さなかった。冷戦期ではあり得なかったけれども、オバマ大統領の強いアクションはない。ペンタゴン、米軍部は、オバマ大統領に「放置せず、対応させてくれ」と求めた。「航行の自由作戦」と呼ばれるが、アメリカの軍艦を送って、中国の行動は許されないことを示すべきだと、ペンタゴンは主張した。しかし、ノーベル平和賞を受けたオバマ大統領である。「今度、習近平がアメリカにやって来る。そのときによく言って聞かせるから待ちなさい」と、ペンタゴンを抑えていた。そうしてやって来た習近平に対して、オバマは二度、三度、南シナ海につき、「あれは世界の公共財、世界の通路であって、中国一国のものではない」と言って聞かせようとした。けれども、習は核心的利益などと言って聞かない。ついにオバマは、2015 年 10 月だったと思うが、ペンタゴンに対して「航行の自由作戦」の許可を与えた。ところが、そのときにはもう工事が大分進んでいた。オバマは甘かった。中国にエンゲージできると思っていた。台頭してくる中国を包摂して経済を発展させれば、民主化するだろうという思いを捨て切れずにいた。それを利して、中国は最近まで一方的に支配を拡げた。その後、トランプに代わって激しい対中姿勢に変わったのは周知のとおりである。

ヨーロッパの場合、一つには、アラブの春という民主化への動きがアフリ

カ諸国、中東諸国で激しくなっていった。そのときには民主化への希望をヨーロッパは強めた。しかし、民主主義は1日にしてならず。旧政権は倒れるけれども、その後、民主主義を支える担い手がいない。結局、内紛状態、内戦状態に陥ってしまう。そういうなかで、中東アフリカからの難民、移民が山のように、豊かなヨーロッパ社会に流れ込んできた。それが今まであった安定した社会・秩序を揺らす。国際主義的で移民受け入れも考えるメルケル首相のような人たちに対して、「いつまで甘い顔をしているんだ、我々の良きものが失われてしまうじゃないか」という反発が強まり、国家主義的な政党が力を持つ。ポピュリズムが高まり、勢力を持つ。ヨーロッパの中心的な英、仏、独では政権を取るには至らなかったけれども、周辺ではそういうポピュリズム指導者が力を持つことになった。

2016年、イギリスはBrexit（ブレグジット）に至る。国民投票の結果、EUからの離脱となった。そして同じ年、アメリカではトランプが大統領に選出されることになって、米欧は非常に荒れた時代に突入することになる。このトランプの4年間は、第二次大戦以降で世界が最も荒れた瞬間であると思う。

中国は建国以来、毛沢東の下で大躍進とか文化大革命を行って大いに荒れていたが、鄧小平がそれを収めた。世界大国によみがえる中国。それは鄧小平の改革開放によって可能になった。1980年から30年にわたって年経済成長率10パーセントを維持し続けた。日本も60年代に10パーセント成長を十数年続けたけれども、中国はその2倍、2010年まで30年にわたって10パーセント成長を維持した。巨大な体格の中国が10パーセント成長を30年続け、大変な存在となった。2010年に日本のGDPを抜いて世界第2の経済大国になった。

戦後日本は、福田ドクトリンに明言されたように、「我々は経済大国になっても軍事大国にはならない」という考えをずっと貫いてきた。ところが、中国は戦後日本とは違って、より伝統的なパワーポリティクスに忠実で、総合国力論を取っている。総合力にはいろいろな要素があるが、なかでも経済力

と軍事力という二つを主たる両輪にして走るという考え方である。戦後日本の平和主義的迷妄には従わず、伝統的なパワーポリティクスの国として伸びていく。戦前日本の「富国強兵」を、中国は今に行っている。

冷戦が終わった頃、湾岸戦争でサダム・フセインの首都バグダードの軍司令部がアメリカの精密誘導により爆発するシーンがテレビでしばしば映された。中国の指導者はそれを見て、「我々はそうなってはならない。もし、しっかりした軍事力を持たなければ同じ運命に陥る。また、ソ連、東欧の国々のように、民主主義の甘ったるい言葉にだまされて全部明け渡してはならない」と。それを「和平演変」と呼び、中国はそうなってはならないと考えた。冷戦終結後、今日に至るまでの30年間に、国防費は彼らが発表しているだけで50倍と、猛烈な大軍拡である。2010年からは経済だけでなく軍事においても世界ナンバー2となり、先端技術についても大変に力を入れている。

私は、たまたま2003年から5年間、新日中21世紀委員会のメンバーとなり、お互いの国を訪問し合いながら泊まり込みの討論を年に2回、中国の識者との間で繰り返した。会議のなかでは、日本の歴史問題や台湾問題などにつき、中国側メンバーが激昂して日本を責めることがある。我慢して聞きながら、やおら「いつまでそんなことを言っているんですか。私も戦前の日本の侵略戦争がよかったとは思わない。申し訳ない、ご迷惑をかけたと思っている。しかし、我々が誰も生きていなかった昔のことをいつまでも言っていないで、もう少し、現在と未来に比重を置いたらどうですか」と言い、だんだんと深く話し合うようになった。我々の側が「きょうは質問したい。中国はすごい勢いで経済力も軍事力も高めて、間違いなく大国になる。それは間違いないが、どういう大国、文明国になるのか。中国の将来像について聞かせていただきたい」と尋ねた。問題が大き過ぎるのか、シーンとしている。「では伺うが、日本やアメリカでは、将来の中国についていくつかのイメージがある。たとえば、かつて経済力・軍事力を高めたドイツや日本は、その力を振るって世界における地位を高めようとした。そういうことを中国はお考えか」と質すと、「とんでもない。我々はドイツや日本と同じ侵略をするような国で

はない」と、強く否定された。「では、どうでしょう。イギリスはパックス・ブリタニカの時代を長く謳歌したけれども、その力が弱ってきたとき、アメリカがそれを引き継ぐ形で、戦争をして奪い取るのではなく、イギリスと連携しながらパックス・アメリカーナの時代を興して、今、世界をリードしている。そういう在り方をお考えか」と訊くと、「いや、我々はアメリカ型ではなく、新しい中国型を考えたい」と。「なるほど。では、その中身はどんなものですか」「それは今、検討中だ」というのが、21 世紀初めの中国人識者の回答であった。

その後、どのように進むか非常に注目していたが、思いがけないきつい形が出てきた。2008 年、中国は北京オリンピックで大成功を果たした。日本も 1964 年の東京オリンピックで「世界の国からこんにちは」と、各国が集まってくれたとき、非常にうれしかった。これでようやく敗戦からよみがえったという手応えを感じた。中国も 100 年を超える阿片戦争以来の屈辱を雪いで、北京に世界中の人が詣でてきた。大変、誇り高く、プライドを取り戻した。

同じ年のリーマンショックで、アメリカ、ヨーロッパ、日本、つまり西側先進資本主義諸国は厳しい経済不況に陥った。そのときに、胡錦濤政権の中国は何をしたか。5 兆元という天文学的規模の財政出動をして中国の景気を支え、米欧日からも物を買い支えた。そのパワーによって世界経済を支えた。世界中が中国を見直し、中国の存在感が高まった。オリンピックの成功とリーマンショック後の国際経済を支えたという自信を持ったことが、私にとってはやや思いがけない結果を招いた。翌年から、鄧小平の遺言である「韜光養晦」、すなわち、「少しばかり力がついてきたからといって、牙や爪を立てて、俺は強いのだと居丈高になるような品のないことをするな。しっかりと自分の実力を養って、謙虚で立派な内実を築きなさい。それまでは、力の誇示は慎むように」と諭した。それが「韜光養晦」であり、胡錦濤の時代は割とそうだった。私が 5 年間委員を務めていたときも、国内的には「和諧社会」、対外的にも「平和的台頭」という議論が強かった。

ところが、2008 年の二つの成功の後、中国のなかでは、「韜光養晦」とい

う鄧小平の遺言を卒業するときが来たと、2009年頃から強いナショナリストの議論が高まってきた。それで胡錦濤主席は、2009年の夏だったと思うが、北戴河の幹部が集まる会議で、判決を下した。「鄧小平の「韜光養晦」の教えは今もなお健在である。大事にすべきである」。これで終わったらよかったが、後段がある。「しかしながら、我々の成すべきことを一層積極的に成せ」と、ナショナリストの主張を公認した。「いつまでも慎み深くではなく、我々の国益になること、将来の発展になることは断行していく。その勇気が必要だ」という愛国派の主張にも配慮を与えた。

翌2010年に尖閣諸島での漁船が海上保安庁の船に衝突する事件が起こり、中国内で反日暴動が広がった。実は、2005年にも中国は反日暴動を起こしている。そのときは日本が国連常任理事国入りを目指して、ドイツやG5で運動を始めた矢先で、それを叩きつぶしたい勢力が反日暴動をやったと見られる。2012年には、石原慎太郎東京都知事が、尖閣を民間所有から都の所有にし、中国に対して強硬にいくべきだと主張し、動いていた。野田政権は、石原都知事に任せていたら戦争を起こしかねないと、中国と穏便な関係を続けるために尖閣の島を国として買い上げたが、中国ではちょうど胡錦濤から習近平への政権移行期で、政争が激しくなる時期であった。胡錦濤の弱腰、日本に甘すぎるという非難のなかで、中国は「あの国有化というのは許せない」と、まるで日本が中国の領土を奪ったかのような言い草で国有化批判を展開する。さらなる三度目の反日暴動が起こるという事態を招いた。

こうして2008年の大成功の後、強気になった中国は、パワーポリティクスの面で粗暴になる。日本は2005年、10年、12年と暴動の対象になったが、おとなしい日本人ゆえ、それに対してやり返すということはしない。たとえば、中国がレアアースを日本に売らないという手段に出たところ、中国のもくろみは外れて、逆に日本は中国から買うのをやめて、それ以外に多角化し、いろいろな技術開発を考えた。中国が思っているように日本はならないのである。それ以後、中国にとって日本は案外侮りがたい存在として一目置かれている面もある。中国的なパワーポリティクスの観点からすれば、強い存在

はアメリカだけである。これに対してはリスペクトする。少なくとも、面と向かって殴りかかるような愚行はしない。日本が真珠湾でアメリカに殴りかかって自滅したようなバカなことはしない。力の現実に従えば、自分より弱い者に対してはきつく当たる。かつて韓国がミサイルの THAAD を導入しようとしたときは、ものすごくいじめた。コロナ禍において、オーストラリアの首相が武漢で何が起こったか、きちんと調査を行うべきだと言えば、猛烈なバッシングをした。チェコに対しても同様で、自国より下の中小国だと思ったら、平気で威圧する中国である。

日本はどちらなのか。日本はその中間で、中国としては三度も反日暴動を行ったのに、必ずしも言うことを聞いてくれない。日本は静かに投資を減らしたり、レアアースに代わるものの開拓に向かったりする。やや侮りがたいところがあるので、日本を格下の中小国のように扱わないほうがよいという認識を一定程度は持っていると、私は観察している。

中国がかなり力を持つに至り、そのなかで中華帝国的伝統への回帰が始まっているのではないか。阿片戦争以来の 100 年の屈辱を雪いで強くなった中国は、かつての中華帝国、中国だけが世界で超法規的存在であるとする伝統を蘇らせつつある。中国のみが宗主国であって、あとは朝貢国である。周辺国が中国の言うことを聞いて、中国の秩序を受け入れれば、存立は許してやる、一定の利益を与えてやる。取るところもあるけれども、すべてを取るわけではない。こうして中華帝国としての秩序に先祖返りしているのではないかと心配するような面が出てきた。弱い国に対する前述のような態度を見ると、そう考えざるを得ない。

さて、コロナ禍になって、国際関係がどう変化したかというのが二つ目のテーマである。2019 年 12 月 31 日に武漢市で 27 名の原因不明のウイルス性肺炎が生じていることを中国が発表して、WHO に報告した。実は、中国が初めて事実を認めたその日に、台湾は入国管理を断行している。ニュースを聞いてすぐにできることではない。それ以前からモニターしていた。中国や台湾、ベトナム、シンガポールなど、中国周辺の小さな国々にとって、中国

とは非常に巨大で恐ろしい存在なのである。だから従うだけではなく、自ら情報をしっかり入手して、中国が言うことではなくて、現実にどうなっているかということをよく確かめる必要がある。複数の説明によると、武漢の医師たちがメール交換をしており、それをモニターしていたということである。それにより、12 月初めから変な肺炎が起きていることを知っていた。そこで、中国が原因不明の肺炎が流行していると認めたその日に、台湾はピシャッと国境を管理し得た。大したものである。

もう一つ、中国周辺の小さな国々は 2003 年の SARS を体験している。広東発の伝染病で、現在のコロナよりも感染力が強かった。香港のホテルで濃厚接触したわけでなく、同じホテルに泊まっただけで感染した人がベトナムに持ち込んだ。同心円的に接触した多くの人に感染して次々に倒す。殺傷力が強過ぎるため、宿を早くに失って世界的パンデミックにはならずに、地域的に終わる傾向がある。SARS も MARS もエボラ出血熱も同様である。自爆攻撃、特攻隊攻撃のように、宿主を大量に殺して自ら消滅する。

それに対してコロナは、100 年前のスペイン・インフルエンザと同様に、気づかれずに忍び込む。専門医たちが「ずる賢い、とても巧妙にやって来る」などと擬人化して説明するように、8 割は無症あるいは軽症で済み、たいして怖いものではないフリをして、社会に根を張る。残り 2 割はクラスターをつくって、ダーッと広げる。バスの車内とか屋形船とか、ライブハウスとか。スペイン・インフルエンザの場合は、第 2 波のときに変異・猛毒化して、殺傷力が急に大きくなった。忍び込んでおいて、ある段階で変異・強毒化し、殺しにくる。今度のコロナの場合にも、同じシナリオが行われるのか。カリフォルニア大学の名誉教授で、人類史と感染症についての碩学であるジャレド・ダイアモンドは、4,000 ～ 5,000 万人が、第一次大戦時にスペイン・インフルエンザで死んだが、それに対して今回のコロナウイルスでは、その 2 倍の人が犠牲になるだろうと予測する。4,000 ～ 5,000 万人の倍に当たる 1 億人近くの人が死ぬとは、すさまじい話である。理由は二つあるという。一つは、人類全体の人口が当時の 4 倍になっていること。そしてグローバル化

の技術発展によって、100年前は船に乗って大西洋をゆっくり移動したのに対し、今は飛行機に乗って1日で地球を回る。そういう環境の変化を考えれば、2倍の人類が死んでも不思議ではないというわけである。

しかし私は、多分そうならないだろうと思う。一つには、コロナが100年前と同じように第2波、第3波で変異・強毒化を起こしたとして、そこまで感染力が強くなるのかという問題。もう一つには、100年前にはなかったワクチンや特効薬、医療体制、それから人工呼吸器やECMO等がある。当時は、入院できる人が限られていた時代であり、ほとんどの人は自宅で、日本だけでも45万人が亡くなったとされる。45万人死んだら、我々の社会は精神的に耐えられるだろうか。当時は近所の医師の診断だけで、ほとんどが自宅で生死の間をさまよい、亡くなる人が出た。そして家族にうつしてしまう。都会でお金のある人は入院できるが、一方で次々と受け入れを断られ、4軒目の病院の前で死んだという悲惨な話もある。

今はそれに対して国民皆保険制度で、進んだ医療制度ができている。ただ、格差は大きい。日本の場合も、冷戦終結後のグローバル化のなかで、以前より格差はひどくなった。フリーターや非正規労働者にその影響が顕著に現れている。だが、国際的に見て、たとえばアメリカと比べるとよほどまともである。アメリカはほんの1パーセントの人が富の約40パーセントを占めており、日本では10パーセントほどとされている。この格差拡大は1980年代の新自由主義に基づいている。60年代の資本主義では、アメリカも「偉大なる社会」で、弱い層にも手当てをすべきとした。自由社会だけれども、そのなかでも公平という要素を大事にするという組み合わせだった。

ところが、ベトナム戦争に敗れて、70年代のアメリカは荒廃した。80年代のレーガンの時代に新自由主義が強くなった。規制緩和や減税によって、「力のある者をどんどん走らせろ」と。「そういう人たちに重い荷物を持たせ、足には鉄の鉛を付けさせて、みんなの面倒を見なければいけないとやっているから、社会全体の経済が駄目になる。その鎖を外して、荷物を下ろして、できる人に走らせなさい」「そんなことをしたら格差が広がるでしょう」「そ

れは広がるだろう、けれど心配することはない。お金持ちがお札を全部自分で食べるわけではないのだ。金は天下の回りものだから、いずれみんなに均てんするから心配することはない」と、新自由主義の人たちは言う。それを信じて、80年代の新自由主義の下でのアメリカ資本主義が勢いを取り戻し、共産体制に勝利した。したがって、90年代のグローバル化、ITグローバリゼーションというものは、同時に新自由主義に乗っかっている。世界中が規制緩和と減税により、元気のある人をどんどん走らせればよいという考えであり、これがグローバルな格差拡大に拍車をかけている。そういう新自由主義、資本主義グローバリゼーションで格差が大きくなっているところは、コロナにももろいのが現実である。

日本の場合は幸いにも、尾身茂、押谷仁、西浦博など、WHOなどで実績を持つ感染症専門家が若干いる。日本政府には過剰な自信家がいないので、その人たちの言うことを一応聞く。過剰な自信家とは、トランプ大統領やブラジルのボルソナーロ大統領、イギリスのジョンソン首相らであるが、無知と偏見によって強気を張り、十分な対処はしない。そういうところへコロナは忍び込み、オーバーシュートを起こす。

広がってきたときに、日本の場合はクラスター対策を行った。これは押谷教授が提案したという。ある日、「尾身さん、変なんですよ。今度のウイルスは」「何だね」と言ったら、「同心円的にみんなに感染せず、8割の人は無症状・軽症なんです。一部のところだけ猛然と感染が走るんです」。それはわけの分からないことだけれども、日本にとっては悪くないのではないか。日本のように医療体制が限られている国でも対応できる。アメリカでは、CDCという感染症の研究所に8,500人のスタッフがいる。日本の場合は、国立感染症研究所といっても基礎研究が中心で、少し厚労省を手伝っている程度。そういう日本と比べると、アメリカはうらやましいばかりのすばらしい対感染症医療体制を持っている。しかし、そのトップにいるファウチ博士が「そんなことをしては駄目だ」といくら言っても、トランプは聞かない。「アメリカは大丈夫だ。春になったら治るから。俺は罹ったけれど、すぐ治る」など

と本当に実行して見せたりして、専門家の言うことに全く耳を傾けようとしない。それなりの知識があって言うならいいけれど、無知と偏見の産物なのである。決め込みの強気によって、こうした社会は全部やられる。

日本の場合、クラスターを捕まえてそこだけを叩いていけば、数少ない戦力でも抑えられる。武漢ウイルスはこれで抑え切れた。ところが、3月後半からヨーロッパで強くなったウイルス、ヨーロッパ株が世界中に広がった。このときにはもはや日本ではクラスター全部を捕まえ切れないけれど、それでもクラスターをつぶした分、かなり抑えられた。今、第3波がやってきて、クラスターがニュースになっているけれども、それ以外の手の届かない市中感染が広がってしまった。

欧米社会は違う。クラスターを追いかけている暇はない。イタリア、スペインで一気に広がって、気がついたときにはオーバーシュートを起こし、不特定多数の市中感染に至っており、手がつけられない。どれがクラスターかと言えない状態である。ヨーロッパでは当初、「アジアだからああいうことになる。我々は医療、文明水準が高いから、あんなことにはならない」と高をくくっていた感がある。ところが、気がついたときには広がってしまって、イタリアもスペインもひどいことになった。そうすると北側のイギリス、フランス、ドイツの人たちのなかには、「南のやつらは日頃からディシプリンがないからね。あいつらはしょうがない」などと言う人もいた。ところが、イギリスでもフランスでも同様に広がった。ドイツだけはかなり頑張っていたが、甘くはない。当時のメルケル首相はかなり血相を変えて、気を引き締めなければいけないと訴えていた。

大丈夫と言っていたトランプ大統領のところが世界一の感染死亡大国となった。これには社会的格差も関連していると思われる。マンハッタンの高級アパートで暮らす富裕層は割と安全だが、川向こうのブロンクスなど、低所得者層が狭いアパートの一室に10人も住んでいるような場所では三密回避は困難であり、感染をなかなか止め切れない。丘の斜面に貧民街があるブラジルも同様である。インドもそうだ。シンガポールは非常によく凌いでい

たけれど、外国人労務者の密集アパートでクラスターが発生した。アジアでも、欧米や途上国でも、気がついたときには手がつけられないというケースが少なくない。日本のように国民皆保険の制度がないうえに格差が非常に大きく、日頃からケアがなかなかできずにいるという社会条件が大きな障壁になっていると思われる。食料も不足して飢餓線上にある途上国では、十分な医療を望めない。

中国が 1 カ月間隠していたことは、トランプに責められても仕方がない。共産体制の国、あるいは権威主義体制の国の秘密主義は問題である。中国の場合、武漢で何が起ころうと、それを国の許可なく現場で公表することは許されない。トップである習近平主席がその報告を受けたのち、意味を理解して事実を認め、そのうえで国家戦略がある。世界に対してどうプレゼンするか、どのように国益につながる形で示すか、そういった結論が出ないと発表しない。それに 1 カ月かかった。これは世界に対する犯罪だと言われても仕方がないところである。

しかし中国自体は、1 月 25 日から春節を迎え、その 2 日前に武漢、湖北省を閉鎖した。日本では、台湾などとは対照的に、愚かにもその春節の観光客を受け入れて、武漢株が広がることになった。幸い、クラスターレベルで抑えることができたとはいうものの、強権国家の中国では、3 月 10 日に習近平自身が武漢の視察に出かけている。それまでには、バラックの病院をいきなりたくさん建てている。「すごいことをやるな、あんなことで効果があるのかな」と思っていたが、3 月 10 日に習近平が視察を行ったということは、あの国の場合、一応抑制のめどが立っていたということだと思われる。

4 月を経て、5 月に入る頃、ジョンズ・ホプキンス大学の調査によると、それまでうなぎ登りだった中国の感染者・死亡者数の伸びが止まった。死者は 4,600 人台で動かなくなった。専門家によっては、その後も死者は出ているが、コロナとは別の死因カテゴリーに分けていると言う人もいる。私は専門家ではないが、中国がよく抑え込んだことは間違いない。強権国家がその気になればできるのだ。そして中国は、国際的な支持や味方を増やす戦略と

して、マスク外交を展開した。一方、国内において言うことを聞かない分子に対しては――我が国にも10億円も国費を出資しているのに言うことを聞かない学者がいると批判する政治家がおられるが――、中国の場合ははるかに厳しい。命が奪われるかもしれない。外国人でも、反中的行動を取ったものはしっかりと制裁する。チェコやオーストラリアなど、中国にとって不都合な真実を口にする者に対しては容赦なく報復する。

さらにもう一つ、危機における中国の自己表現の方法には特徴があるかもしれない。このコロナ禍は中国が出発点になったというものの、「我々中国はしっかりと克服した。我々は弱っていない、強いんだぞ」と、強気を見せたがるところがある。こんな事態に負けはしないと、ウイグル、香港への支配を強化する。尖閣、南シナ海でも支配を拡大する。そしてその先の真の狙いは、台湾統一。これは悲願である。統一に成功すれば、国民挙げて熱狂するだろう。それに対し尖閣の場合、最近ずっと中国の巨大化し武装化した公船がやってきて海上保安庁が苦労しているが、たとえ占領したとしても、よくやったねという程度ではないか。チャンスがあれば、スカボロー環礁やミスチーフ環礁をフィリピンから奪ったように、尖閣もいただくという気持ちは強いだろう。史上一度も支配したことのない諸島を、昔からウチのものだったと強弁して日本から奪い取ろうとする。品の悪い課題設定をしたものである。せっかく賠償辞退により日本人の心を捉えたのに、この件で日本国民を反中に追いやった。

中国は、パワーポリティクスである。1992年の自国の領海法により、尖閣諸島や南シナ海の九段線の内側はすべて中国の領土であると決めた。それ以来、実際に行動を起こしたのは、1995年にミスチーフ、2010年と12年に尖閣、2014年に南沙諸島の埋め立てと軍事化である。我がものであるということを法律で決めたということは、機会があれば奪うと言っているに等しい。だから、その機会を与えないことが第一である。友好的に仲良くし平和的に構えていたら、奪取しないかと言えば、ベトナムやフィリピンから次々に奪っていくところを見ても明らかである。対応力がなければ、フィリピン

のように簡単に取られる。始めは、漁民が嵐を避けて上陸しただけかと思っていたら、武装しており、今に至るまで奪われたままである。その点、ベトナムは戦士なので、1988年の南沙諸島の六つの環礁についてもすぐ気がついて応戦するのだが、旧式の船で対抗したところ、交戦になって沈められ、負けて取られる結果となった。

日本の場合には、海上保安庁が毎日対応している。中国の公船が4隻であれば、7隻くらいで迎えて、領海内へ入らせないように苦労している。しかし、そのレベルを超えてくる危険もある。その場合、日本はやはり侮りがたい。変なことを日本に行うと、自分たちもまずいことになるような潜在能力を日本が持っているかどうかを注視しているであろう。日本はSSMというクルーズミサイルを持っている。これはもともと、ソ連が北海道に上陸する際、沖合の母艦を沈めるために造ったものだが、それを南西方面に転用して、尖閣防衛のために宮古島や与那国島、石垣島で陸上自衛隊のトラックに積んで持っている。だが、最近の中国の大軍拡によって、そんなものは目ではないというほど、中国の軍事力は強大化している。それに対して、日本はどうか。軍拡競争はできない。我々は相手国の首都を火の海にするほどの軍拡競争を行う意思もないし、能力もない。しかし、不当な手出しをしてきたときには、日本は侮りがたい。たとえば、音のしない潜水艦やミサイルについても、やはり日本は侮りがたいからやめておいたほうが賢いかと思わせる。それが大事だ。日本は相対的弱者なので、戦争する気は全くない。だからといって、平和主義と言って備えをせずにいると、相手は無料（タダ）のものはいただきますというところがある。させない力をかなり持ちながら友好的な関係を築くというのが、日本の対応すべき知性だと思う。

今、中国は、先ほど述べた三つの方式によって、中国を怖れている国、あるいは経済支援を望む国を従わせている。ただ、世界の心ある国々にとって中国はひんしゅくであり、尊敬できないという思いが、アメリカはもとよりヨーロッパでも強くなっている。アメリカとの間では、長期にわたる対抗ゲームを習近平政権は覚悟している。それは、本質的に譲らない。アメリカに何

を言われても譲らない。しかし、決裂はしない。無用のけんかはしないけれども、しぶとく持続力をつけ、相手を上回ろうとする。先端技術の優位競争において、もし中国が負けなければ、それは軍事力の面でも、経済力の面でも大きな力になる。優位を21世紀の半ばまでには築くのだという構えである。米中の対立関係はコロナ禍を機にますます激しくなっている。コロナウイルスは、国境や人種を問わない。人びとの命を奪いに、どこにでも迫ってくる。また、SARSと違って、油断させておいて忍び込む、質(たち)の悪いところがある。変異・強毒化すると、何千万人もの犠牲をもたらす危険があるが、幸いにもワクチン開発が進んできたので、厳しいつばぜり合いになっている。つまり、魔のゲーム・チェンジャーとしての変異・強毒化と、プラスのゲーム・チェンジャーとしてのワクチン開発が、激しく競り合う今後の状況である。それにしても、アメリカ・中国の二大国は、人類の安全保障に対する試練であるコロナウイルスに対して、国家対立をもって応えている。これはいかがなものか。

そこで、バイデン政権に移ることになった。バイデン政権の下でどのような政策が行われるのか。バイデンが逆転して優位に立って勝利宣言をすると、ヨーロッパや日本ではほっとしたため息が漏れた。株価も急騰した。アメリカから良識が消えたわけではないという思いが、ほっとさせたのである。トランプの4年間は本当に異例づくめであって、「ポスト真実」などと言いながら、フェイクにまみれ、大統領が先頭に立って好き嫌いや思い込みで押し切った。「アメリカ・ファースト」と言うが、「ミー・ファースト」であって、トランプ自身の再選が最優先。どこでも自国ファーストは当たり前で、日本だって「日本ファースト」が当然であると言える。しかしながら、子どもならファーストだけで済ませるけれども、長じてくれば、相手にも配慮する。相手にも取り分を与える。そうしなければ、持続する関係は続かないということを大人は知っている。さらに、リーダーであれば、全体の秩序や公共益を支えることができなければ、資格はない。トランプはトップの国でありながら、「アメリカ・ファースト」「ミー・ファースト」を恥ずかしげもなく公

言する、本当に前例のないトップであった。

バイデン政権が2021年1月にスタートして、何が変わったのか。まず、トーンとスタイルが変わった。トランプとは違って、融和姿勢。アメリカ国内のリベラルと保守は、お互いに相手を悪魔のように言う。本当に信じて、そういうことを言う。それに対して、バイデンは「共和党か民主党かではない。ユナイテッド・ステーツの国民だ」と言った。いいことを言うと思わせたけれども、根深い分断を簡単に癒やせるわけではない。

政策課題として、1番目はコロナ対処。マスクもしないトランプに対して、バイデンは専門家に聞きながら、合理的対処を諮ると見られる。とはいえ、1,500万の感染者と30万の死者、それを簡単には誰も抑えられない。しかし、ワクチンに救われる可能性は見えてきた。

コロナの次には、経済再生。新自由主義のアメリカ的格差の巨大化をずいぶん進めてきたが、ここで公平さの導入を考えたい。医療制度、オバマケア的なものを再生させたい。しかし、民主党と共和党の勢力が議会で拮抗しており、簡単には実施できない。気分は変わっても、なかなか実際の効果のほどは難しい。

外交政策ははっきりしている。国際機関への復帰、地球温暖化のパリ協定に戻り、WHOに戻る。菅首相（当時）も「2050年カーボンニュートラル」を宣言したところであり、バイデン政権との相性はその面では悪くない。バイデン政権は中国とも、気候変動の面では協力可能である。

中国に対して、米国はどうするのか。お友だちとして仲良くとは、もはやいかない。ファーム（堅固）な姿勢で臨む。対決、競争、協力という三つのレベルがあるとすると、レトリックとしては、対決的な用語もときどき使うだろう。しかし、実態は基本的に競争である。そして協力は、個別分野に限って行うだろうと思われる。

私の持論だが、日本の外交政策は「日米同盟プラス日中協商」を基調とする。同盟はアメリカとの間だが、中国とも協商（アンタント）という、相互利益をそれぞれ図ることができる程度の関係は保っておく。話もできないよ

うな悪い関係にはならないという意味で、日中協商と言っているが、バイデンもおそらく個別分野での合意はできるだろう。たとえば地球環境については協力する、これが協商の関係である。大事なことは、中国に対する抑制効果をどのように持つか。中国は大きい力を持っており、言うことを聞かせるのは容易ではない。それをどうやるかは、バイデンのみならず、日本にとっても課題である。おそらくバイデンはヨーロッパとの関係も直ちに良くしようとする。アメリカにとって一番よいのは、TPP（環太平洋パートナーシップ）に加盟すること。TPP は非常に高い水準の国際協定であり、中国に対してそれは非常に有利なプラットフォームになる。なのに、トランプが蹴飛ばしてしまった。無に帰すと思われたのだが、日本がよく頑張って、TPP11 を取りまとめた。だが、バイデンは TPP に戻ることは難しいだろう。民主党内でも、労働組合をはじめとして反対がある。ともあれ、バイデン外交は、米欧関係を改善し、それに日本やオーストラリアなどを加えて、中国に対する抑制力とするのである。トランプの愚かさは、中国と殴り合いを演ずるのはいいが、その際に周りの国々も総じて殴ったこと。ロシアを殴り、ヨーロッパを叱りつけた。みんなを敵に回して中国を抑えようとしても、中国にとっては楽なものである。脇が甘い。立ち回りを試みるばかりで、グローバルな総合戦略がない。それに対して、バイデンは、ヨーロッパや日本の仲間を固めながら、中国に対して言うことを聞かせようとする。穏当な外交である。

安倍時代に、日本は TPP11、日欧 EPA（経済連携協定）、アジアの RCEP（地域的な包括的経済連携）を準備して、世界の安定勢力の要としての役割を果たしてきた。森友・加計問題や「桜を見る会」で非難を浴びている安倍首相の外交能力については、国内ではあまり言われないが、国際的に見れば大変よくやっている。トランプが世界をつぶしにかかったのに対し、底支えをしたのは安倍外交だと言っていい。世界中の多くの国と前向きの関係を築いた。今、TPP に、韓国が入りたい、中国が入りたいと言う。イギリスも入りたい、タイも入りたい。アメリカがいなくなり、日本がお世話をした TPP に皆がつかまりたいと思っている。日本外交が国際的中心になるのは珍しい。日本

はいつも周辺国で、アメリカの一協力者でしかなかったはずなのに、日本が世界の協調システムの要の位置にある珍しい状況だと言える。

日本にとってここで大事なことは、ヨーロッパと協力することである。EU はヨーロッパ復興基金をつくり、ヨーロッパのなかで貧しい国々、南の国々を支援するという姿勢を示した。東欧の国を含め、遅れた国々に対しコロナ禍からの復興を支えるための基金を設立した。偉いと思うのは、財政規律にうるさく、今まで借金ゼロでやってきたドイツが、コロナ禍に至って、ポンと借金をして基金を作ったことである。日本のように GDP200 パーセントという天文学的な借金をしており、いわば破れかぶれ。そのうえ、対コロナの財政出動をしても大差はないと、さらに積み上げる。ドイツのほうが日頃は締まり屋であるが、ワクチンに関しては協力をする。ヨーロッパと連携しつつ、日欧でバイデン政権に脱トランプの国際運営を促していく。日米欧で国際ルールを再建する、それを日本外交の軸とできるだろうか。

中国に対し、尖閣や南シナ海の一方的な支配拡大は駄目だということをどう分からせるか。中国はリアリストであり、力でしかなかなか納得しない。アメリカには覚悟を持ってやってもらわなければいけない。一方的に利益を拡大するのではなく、相互主義で進むべきことを中国に認識させる。大国は尊敬を受けることが大きなソフトパワーなので、力があると尊敬される面があるけれども、そのうえに行いが立派であれば、威信を保つことができる。権威を持つ。中国にはその味を大国として持ってもらいたい。こちらのほうが強いと力を誇示するだけではなく、さほど強くない国に対してもそれを包摂して守るような行動ができる、そういう大国に目覚めてもらうにはどうしたらよいか、それが課題である。

人文学研究における オンライン上の研究資源 ——現状と課題

関野　樹

はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的な感染拡大に伴い、海外への渡航制限はもちろんのこと、国内ですら往来が難しくなっている。研究者にとっては、図書館や文書館などで史資料の探索、閲覧が立ち行かなくなっており、学会や研究会を通じた研究者間のコミュニケーションも思うように進まなくなっている。そういった状況下でも研究を進めようとすれば、オンライン上で公開された史資料やデータを利用するなど、オンライン技術に頼ることになる。本報告では、これらのオンライン上の研究資源について、After コロナ／ With コロナだけでなく、コロナ禍以前から進められてきた取り組みの概要を紹介する。

本報告は、二つの話題から構成される。一つ目は、データ間の連携に関する取り組みについてである。オンライン上に公開されたデータが相互に連携することにより、単独のデータではなし得なかった機関の違いや地理的制約を越えたデータの利活用が実現している。画像データに関する IIIF、研究データの構築に有用なセマンティック・ウェブ技術と Linked Data、およびデータの利活用を支える取り組みについて紹介する。加えて、これらの技術を応用して構築された基盤データを紹介する。歴史地名、および江戸期以前の和暦の日付を扱うためのデータなどであり、日本研究に関する研究データを作成する際にこれらを取り込むことで、他の研究データとの連携を実現することができる。二つ目の話題では、研究の場としてのオンライン環境について

考える。オンライン上の研究資源の在り方について検討するとともに、研究の場としてオンライン環境が今後どのように使われていくかについて、会議のメインテーマでもある「After コロナ／ With コロナ」も踏まえながら、課題を抽出する。

1．データ間の連携に関する取り組み

1-1．IIIF

（1）IIIF とビューワ

IIIF（一般には「トリプル・アイ・エフ」と呼称）は International Image Interoperability Framework の略で、画像データを扱うための国際規格の一つである[1)]。JPEG (Joint Photographic Experts Group)、PNG (Portable Network Graphics)、GIF (Graphics Interchange Format) といった画像そのもののデータ形式ではなく、インターネット上に公開された画像を相互運用するための規格であり、画像を取得する仕組みや、画像に関するメタデータを記述する方法などが含まれている。

IIIF では単独の画像だけではなく、書籍のページや絵巻、絵画のコレクションなど、複数の画像で構成される画像資料も対象にしている。通常、このようなコンテンツは、ページ送りなどの機能がついたビューワで閲覧する。また、これらのビューワの多くは、画像の一部を拡大したり、ページを並べて表示したりする機能も備わっている。しかしながら、こうした機能の操作方法はビューワによって異なっており、コンテンツごとに異なるビューワが用いられている場合は、それぞれの操作に慣れる必要がある。IIIF では、このような複数の画像で構成されるコンテンツについて、画像ファイルの場所、画像のタイトル、画像の表示方法などを記述する方法を定めている。したがって、この規格に則って作成されたコンテンツは、公開元が異なっていても IIIF に対応する同じビューワで閲覧することが可能となる。この結果、ユーザはコンテンツごとにビューワの操作を覚える煩わしさから解放される。

IIIF に対応するビューワの多くはウェブブラウザ上で利用するものであ

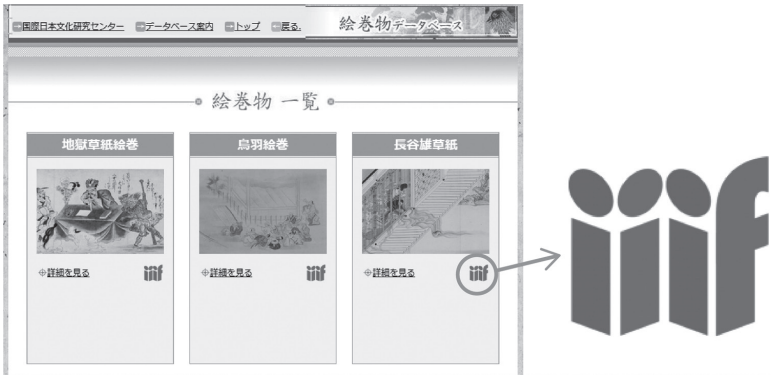


図1　日文研のデータベース（絵巻物）に表示されているIIIFのロゴ。IIIFマニフェストに紐づけられたこのロゴをビューワにドラッグ＆ドロップすることにより、画像を閲覧することができる。

り、Mirador[2)]、Universal Viewer[3)] が世界的に活用されている。国内でも情報システム研究機構の人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）がIIIF Curation Viewer[4)] を開発している。IIIFに対応する画像を公開している場合、その多くはウェブページ上にIIIFのアイコン【図1】が表示されている。このIIIFのアイコンをビューワにドラッグ＆ドロップすれば画像をビューワに表示することができる。この操作でビューワが最初に読み込むのがIIIFマニフェストと呼ばれるファイルである。ここに、画像ファイルの場所、画像のタイトル、画像の表示方法などが規格に則って記述されており、ビューワはこの情報に基づいて画像を取得し、画面に表示している。IIIFマニフェストには、このほかにも、画像の作成者、画像に関する権利情報などのメタデータが記述されており、ビューワを通して確認することができる。

（2）IIIFによる画像の利活用

画像を取得するための規格を統一することは、ビューワの使い勝手を良くするだけではない。規格が統一されることで、異なる機関から公開されている画像を組み合わせて用いることができるようになる。【図2】は、国際日本文化研究センター（日文研）から公開されている百鬼夜行絵巻（上段）と、

図２　IIIF ビューワ（Mirador）に表示された二つの百鬼夜行絵巻（上段：国際日本文化研究センター蔵、下段：国立国会図書館蔵）。

国立国会図書館から公開されている百鬼夜行絵巻（下段）を並べて表示したものである。このような画像の比較も公開ページに表示されている IIIF マニフェストに紐づけられたアイコンをビューワにドラッグ＆ドロップするだけで容易に実現する。

IIIF には、画像の一部のみを取得する仕組みも規定されている。この仕組みを活用した事例として、CODH の「顔貌コレクション」が挙げられる[5)]。さまざまな絵巻、絵本に描かれた人物の顔の部分のみを IIIF 技術を応用して集めることにより、特定の人物の描かれ方の違いや、絵師ごとの顔の描き方の特徴を解析する研究にも活用されている[6)]。

このほかにも IIIF には、画像をビューワの画面上のどこに表示するかを指定する機能がある。これにより、一つの画像では収まらない絵巻や複数の図郭で構成される地図をつなげて表示したり、複数の機関に分かれて収蔵されている絵画の断片を画面上で再構成したりすることが可能となる。

IIIF のこれらの機能が従来の画像公開と異なるのは、画像ファイルそのものを利用者側に渡すのではなく、画像ファイルは公開者の手元に置いたまま、閲覧方法を指定することによりこれらの機能を実現している点にある。画像の一部のみを取得する機能においても、画像のどの部分をどのように取得す

るかをIIIFマニフェストに記述することで実現している。したがって、公開者としては、自身の知らないところで画像ファイルが拡散するという懸念を軽減することができる。

(3) IIIFによる画像公開

日文研でも2020年3月からIIIFによる画像データの公開が始まっている。「吉田初三郎式鳥瞰図データベース」は、大正から昭和にかけて吉田初三郎とその弟子らが日本各地の名所などを描いた鳥瞰図747点(2021年7月現在)を集めたものである。日文研のサイト上ではビューワとしてMiradorを用いているが、各ページに表示されたIIIFのアイコンをドラッグ&ドロップすることで、他のビューワでも閲覧が可能である。このほかにも、【図2】の百鬼夜行絵巻を含む「絵巻物データベース」がIIIFで公開されており、今後もIIIFに対応するデータベースを増やすことが検討されている。

国内でもIIIFで画像を公開する機関は増えている。たとえば、コロナ禍以降、一躍有名となったアマビエの画像は、京都大学が所蔵しているが、これも「貴重資料デジタルアーカイブ」からIIIFで公開されている。ほかにも国内外の美術館、図書館、大学などが、資料の画像をIIIFで公開しており、その数は年々増えている。IIIFによる資料の公開が広がることで、画像資料の新たな相互運用が実現し、研究の発展に資することが期待される。

1-2. セマンティック・ウェブとLinked Data

(1) セマンティック・ウェブ

セマンティック・ウェブは、データ内に記述された言葉の意味をコンピュータが自動的に解釈できるようにすることにより、既存のウェブページではなし得なかった高度な処理を実現することを目指したものであり、WWW (World Wide Web)を考案したティム・バーナーズ=リーにより提唱された[7)]。

セマンティック・ウェブにおいて、データは、RDF (Resource Description Framework)と呼ばれるデータ形式で記述される。単一のRDFデータは、主語、

述語、目的語の三つを含んでおり（RDF トリプル）、主語と目的語を述語によって関連づけることにより、データが表現する言葉の意味を記述する。また、RDF において記述対象となるものをリソースと呼ぶ。【図 3】は、本稿の著者についての情報を RDF で記述した例である。

<http://resource.hutime.org/TatsukiSekino>	<foaf:familyName>	"Sekino"
<http://resource.hutime.org/TatsukiSekino>	<schema:affiliation>	<http://www.nichibun.ac.jp/>

図 3　RDF データの例。それぞれの行が RDF トリプルに対応しており、左から主語、述語、目的語の順に、スペースで区切られて並んでいる。

主語はいずれも <http://resource.hutime.org/TatsukiSekino> で、著者自身を表している。このウェブページの URL のようなものは、URI (Uniform Resource Identifier) で、著者個人を一意に識別するための ID として用いられている。ドメイン名（ここでは、hutime.org）は、ドメインの所有者が管理しており、それにさまざまな情報を付加した URI もドメインを管理する者以外には作り得ない。この性質を利用して、インターネット上のリソースを識別するための ID として、URI が用いられる。なお、ウェブページを識別するための URL は、URI の一つとして位置づけられる。

次に、述語として <foaf:familyName> が用いられている。これは、FOAF (Friend of a Friend)[8] という規格で定められた familyName という述語であることを示しており、目的語が主語の姓（Family Name）であることを意味している。そして、"Sekino" は目的語であり、述語の意味から、これが <http://resource.hutime.org/TatsukiSekino> の姓である。したがって、このデータの 1 行目は、<http://resource.hutime.org/TatsukiSekino> が指す人物の姓は "Sekino" であることを示している。

同様に、データの 2 行目は、二つ目の RDF トリプルで、<http://resource.hutime.org/TatsukiSekino> が指す人物の所属が国際日本文化研究センターであることを示す。この 2 行目の目的語には、国際日本文化研究センターのホー

ムページの URL が RDF リソースを指す URI の代わりに用いられている。また述語には Shcema.org という規格[9] の affiliation が用いられている。この RDF トリプルでは、二つのリソース（人物と機関）の関係が記述されている。

RDF で用いることができる述語には、記述対象や分野に応じてさまざまな規格が存在する。これらは RDF Schema というデータで定義されており、ある述語がどのような主語と目的語に使えるのか、述語は何を意味するのか、上位・下位の概念を表す述語や同義の述語にどのようなものがあるかといった情報が記載されている。こうした述語は、定義を RDF Schema としてインターネット上で公開することにより、新たに自分自身で作り出すことも可能である。

（2）Linked Data

Linked Data は、データのウェブとも呼ばれている[10]。我々がふだん利用するウェブページでは、ページ内のリンクをクリックすることで、別のウェブページや画像、映像などのファイルを閲覧することができる。つまり、リンクを通じて、ウェブページや画像、映像などが相互に関連づけられている。この仕組みをデータ間で実現しようとするのが Linked Data である。これらは、他のデータからリンクされることを前提としてインターネット上に置かれており、人が閲覧するだけでなく、機械により処理することができる。また、自由な利用を認めるライセンスを付与して提供される Linked Data を Linked Open Data (LOD) と呼ぶことがある。

現在公開されている Linked Data の多くは、セマンティック・ウェブの技術による RDF データとして構築されている。また、ウェブページ内に埋め込まれ、検索エンジンなどで利用される JSON-LD のデータも Linked Data の一種と考えられる。

（3）セマンティック・ウェブと Linked Data の活用

セマンティック・ウェブも Linked Data も、生活に密着するような実用面

では、大々的に普及している状況ではなく、その活用例を表立って目にする機会も少ない。一方で、研究面、特に研究データを構築する場においては重要な技術の一つとなっている。

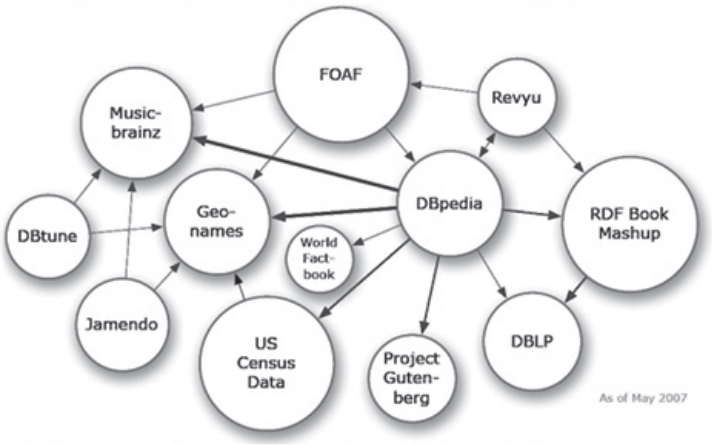
例えば、場所に関する Linked Data として、世界中の地名に関するデータを集めた GeoNames[11] が世界的に利用されている。「京都」という地名に対しては <https://sws.geonames.org/1857910/> という URI が与えられており、京都市を指すこと、各国語での表記（約 70 種類）、緯度・経度、上位・下位の階層の地名などの情報が RDF データとして紐づけられている。こうした関連情報も有用であるが、研究データを構築する場合は、この「京都」を表す URI（<https://sws.geonames.org/1857910/>）が重要である。新たに構築されるデータのなかで、何らかの場所として京都を示す場合に、「京都」と文字で記述するのではなく、この URI を記述することができる。これにより、データで示される場所が「京都府」でも「京都駅」でも「京都盆地」でもなく、「京都市」を意味するところの「京都」を記述したことを明示できる。さらに、他のデータにも同じ URI が記述されていた場合、それが同じ「京都」に関するデータであることが明確になる。URI がただ一つのリソースを一意に区別するという性質により、文字による記述のあいまいさを解消することができる。

このようなセマンティック・ウェブ技術を利用した Linked Data の利点を活かすため、さまざまな分野で Linked Data の構築が行われ、相互に連携している。【図 4】は、代表的な Linked Data とそれらのつながりを表したもので、急速に拡大している様子が見てとれる。2007 年頃には基礎的な内容が中心であったが、現在はライフサイエンスなどの学問分野をはじめ、政府機関なども参加している。

1-3．データの利活用を支える取り組み

（1）FAIR 原則

公開データが満たすべき条件を示したものとして、FAIR 原則がある [12]。



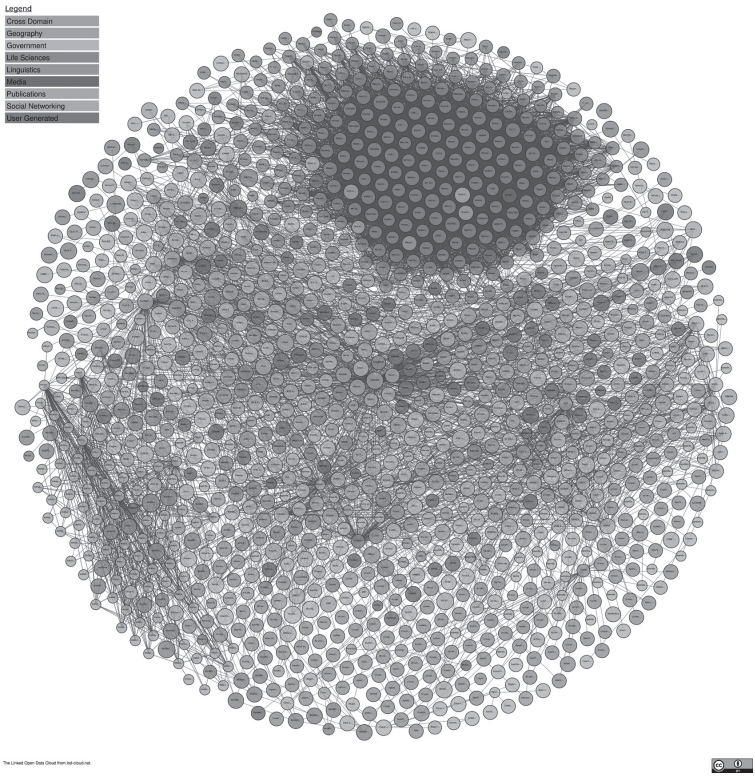


図4　Linked Data のひろがり（lod-cloud.net による The Lined Open Data Cloud）。上図は 2007 年 5 月 1 日、下図は 2021 年 5 月 5 日の状況を示す。

FAIR は公平性を意味する fair ではなく、Findable、Accessible、Interoperable、Reusable の略であり、FORCE11 (The Future of Research Communications and e-Scholarship)[13] などの研究の相互連携を議論するコミュニティーでの議論を経て、2015 年頃に策定された。複数の団体から文章表現や細かな基準が異なる版が公開されているが、基本的な考え方は同じである。

Findable は、検索によってデータを見つけることができることを指している。データに関する情報を記したメタデータを伴っていること、そして、他のデータと明確に区別できるよう、データにグローバルかつ永続的な識別子（ID）が付与されていることなどが求められる。この要件を満たす ID の典型例として、RDF で用いられる URI や論文などに付与される DOI (Digital Object Identifier) などが挙げられる。

Accessible は、無償で誰もが使える方法（通信手順）によりデータにアクセスできることを求めている。実際には、ウェブページの閲覧に広く用いられている http (Hyper Text Transfer Protocol) がデータのアクセスにも一般的に用いられる。アクセスの手がかりとしては、Findable で規定された ID を利用できることが前提となる。また、データそのものが利用できなくなった場合も、メタデータにはアクセスできることが求められる。

Interoperable は、IIIF のようにデータが相互運用可能であることを求めている。たとえば、画像や映像が特定のソフトウェアでしか閲覧できないデータ形式ではなく、広く普及した形式であることは、相互運用が可能であることの要件の一つである。画像データをどのウェブブラウザでも閲覧可能な JPEG や PNG 形式とすることなどが挙げられる。また、メタデータの形式やその中で記述されているデータ項目についても、広く普及したものを用いることが求められる。最も一般的で幅広いデータに適用されているメタデータの形式としては、“title”、“creator” などの 15 のメタデータの記述項目を定めたダブリン・コア（Dublin Core）が挙げられる [14]。一部の項目は、記述に用いる語彙も規定されており、データの記述言語を示す “language” では ISO-639[15] に定められた言語コード（日本語は “ja”、英語は “en” など）、

データの記録形式を示す “format” では、MIME (Multipurpose Internet Mail Extension) のメディアタイプ[16]（カンマ区切りテキスト［CSV ファイル］は “text/csv”、JPEG 形式の画像は “image/jpeg” など）で記述することなどが推奨されている。

Reusable は、データが二次的に再利用できることを求めており、データの利用ライセンスが示されていることが主な要件である。独自の利用ライセンスを策定するケースもあるが、CC ライセンス（Creative Commons License）などの既製の利用ライセンスを活用するケースも増えている。

（2）既製の利用ライセンス

FAIR 原則の Reusable を満たすための利用ライセンスも含め、現在最も普及している既製の利用ライセンスは、CC ライセンスである。CC ライセンスは、非営利団体のクリエイティブ・コモンズ（国内では、特定非営利活動法人コモンスフィア）が電子データとして提供される著作物のために策定した一連の利用ライセンスである[17]。

著作物の提供者は、四つの条件の組み合わせにより 6 種類の利用ライセンスから選択することができる。利用ライセンス本体は、それぞれの種類に対応したライセンスの本文（コモンズコード）として策定されているが、各利用ライセンスを示すアイコン（コモンズ証）を提示することで、当該利用ライセンスが適用されていることを明示することもできる。

CC ライセンスで提示することのできる四つの条件は、【表 1】のとおりである。「表示」が条件となった場合、著作物を利用する者は、著作権者のクレジットを表示しなければならない。「非営利」「改変禁止」はそれぞれ、営利目的での利用や著作物の改変を禁止する条件である。「継承」は、著作物を翻案または改変することで新たに創作された著作物に、元の著作物と同じ CC ライセンスを付与することを求めるもので、元の著作物に付された条件が先々まで継承されることを保障する。

表１　CC ライセンスにおける四つの条件

アイコン	名称	説明
	表示	著作物のクレジットを表示すること。
	非営利	営利目的での利用をしないこと。
	改変禁止	元の著作物を改変しないこと。
	継承	改変した著作物に同じ CC ライセンスを付与すること。

これら四つの条件のうち、「改変禁止」と改変されることを前提とした「継承」は両立しない。また、クレジットの表示は常になされるものと考える。その結果、CC ライセンスでは、四つの条件を組み合わせることにより、6 種類の利用ライセンスを定めている。

表２　CC ライセンスにおける 6 種類の利用ライセンス

アイコン	名称	説明
	CC BY	クレジット表示
	CC BY-SA	クレジット表示・改変後もライセンスを継承
	CC BY-ND	クレジット表示・改変禁止
	CC BY-NC	クレジット表示・非営利
	CC BY-NC-SA	クレジット表示・非営利・改変後もライセンスを継承
	CC BY-NC-ND	クレジット表示・非営利・改変禁止

この 6 種類の CC ライセンスのほかに、【表 3】の著作物の利用に制約がない状態であることを示すアイコンがしばしば用いられる。PD（パブリックドメイン）は、保護期間満了もしくは権利放棄などにより権利が消滅している、または、もともと権利が発生しておらず、当該著作物の利用に制限が

ない状態を示す。一方、CC 0 は、著作権者が当該著作物に関する（可能な限り）すべての権利を放棄した状態を示す。法律上、放棄できない権利の扱いについて不確実さが残る点で、パブリックドメインとは異なるとする意見もあり、権利を完全に放棄する場合は、パブリックドメインとすることが推奨される。

表 3　著作物に制約がない状態を示す表示

アイコン	名称	説明
PUBLIC DOMAIN	PD	保護期間満了等による権利の消滅
PUBLIC DOMAIN	CC 0	権利の放棄

オープンデータという観点では、商業利用や改変を制限する利用ライセンスはこれに該当せず、PD、CC 0、CC BY および CC BY-SA が付与または提示された著作物がこれに該当すると考えられている。

CC ライセンスは、本来、著作権者が自身の著作物に対して使用する利用ライセンスである。このため、著作物ではないデータ（特に、観測、調査などにより得られるファクトデータ）への適用はそぐわない。さらに、データの所有者、管理者、公開者などによる使用は想定されていない。しかしながら、データを取得または管理する者が利用に際してクレジットの表示を求めるために、これらの者を著作権者に、著作物をデータに読み替えて CC ライセンスを適用することがしばしば行われている。一方、こうした CC ライセンスでカバーできないデータのための既製の利用ライセンスとして、Rights Statements [18] や Open Data Commons [19] なども検討されている。

1-4．基盤データ

（1）歴史地名辞書データ

地名は、場所を特定するうえで最も基本的な情報である。Linked Data の例として示した GeoNames のように、地名辞書データには、地名に関連する

情報として、地名の読み方、上位または下位の地名、地名を代表する緯度・経度などを提供する役割がある。そして、地名が指している場所を URI などで一意に識別する機能は、データを構築するうえで重要である。こうした地名辞書データは、現代の地名については、GeoNames だけでなく、国内向けにも国土地理院[20]など、いくつかのデータやサービスが整備されている。しかしながら、古記録や古文書などの歴史史料に登場する地名となると、現代の地名に関するこれら情報は必ずしも有効ではない。土地の併合や分離などにより地名が変わることはごく当たり前であるし、地名の表記も頻繁に変わる。このため、人間文化研究機構と有志の研究グループである H-GIS 研究会の合同により、歴史地名辞書が構築された。

明治から昭和初期に陸軍の陸地測量部が作成した地図や吉田東伍が編纂した『大日本地名辞書』などから収集された約 30 万件の地名について、緯度・経度が比定され、単純な表形式のデータ（カンマ区切りテキスト）として公開された。この歴史地名辞書の特徴は、検索機能などは一切設けず、データだけを公開している点にある。利用ライセンスは、CC BY に準拠したもので、作成者のクレジットを提示すれば、誰もが自由に利用することができる[21]。このような公開方法が功を奏して、データの利用がさまざまな形で進んでいる。たとえば、検索機能はいくつかの研究機関や民間企業により実装されており、歴史地名辞書に記載された地名の位置を地図上に表示する機能を開発した研究機関もある。さらに進んで、歴史地名辞書のデータをアプリケーションに組み込む事例も現れている。

（2）暦 LOD

地名と同様に、研究データ間の連携で要となるのが、時間の情報である。ほぼすべてのコンピュータにおいて、時間は西暦で処理される。しかしながら、日本研究で扱われる史資料では、和暦の日付が一般的である。このため、和暦の日付を直接扱うためのデータを構築し、これを Linked Open Data として公開したのが暦 LOD である[22]。暦 LOD は、時間情報システム HuTime

のサイトからCC BYで公開されている。

暦LODでは、年号、暦年、暦月、暦日それぞれにURIが付されているのが特徴であり、元禄15年12月14日であれば、<http://datetime.hutime.org/calendar/1001.1/date/元禄15年12月14日>が当該暦日に対するURIである。このURIを用いることで、和暦の元禄15年12月14日を指定したことが明確になる。また、セマンティック・ウェブ技術に則って、この日付に関するさまざまな情報が紐づいており、この日が火曜日であること、西暦（グレゴリオ暦）では1703年1月30に相当すること、さらにリンクを辿ることで、他の暦との関係（たとえば、清朝の康熙41年12月14日）であることなどを知ることができる。さらに、暦月（元禄15年12月）は<http://datetime.hutime.org/calendar/1001.1/month/元禄15年12月>で表され、この月の長さが30日間（大の月）であること、暦年（元禄15年）は<http://datetime.hutime.org/calendar/1001.1/year/元禄15年>で表され、この年が閏年であり（閏8月）、384日間の長さであること、年号（元禄）は<http://datetime.hutime.org/calendar/1001.1/era/元禄>で表され、元禄元年9月30日から元禄17年3月12日までの5,653日間であり、前後の年号がそれぞれ貞享と宝永であることなどを、リンクを辿ることで知ることができる。

（3）他機関等での取り組み

空間と時間以外のデータでも、さまざまな機関が基盤的な情報を構築して公開している。なかでも特筆すべきなのが、情報システム研究機構の人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）と国文学研究資料館が構築したくずし字画像のデータセットである[23)]。現在、国文学研究資料館で大規模な古典籍のデジタル化作業が進められているが、これらのデータの中から文字の画像が切り出され、それぞれがどの文字種であるかを判読した結果と紐づけられた。2019年11月現在で4,328の文字種、108万6,326文字のデータが公開されている。この大規模な字形のデータは、文字そのものの研究はもちろんのこと、これらの字形のデータを人工知能（AI）の学習データと

して用いることにより、くずし字を自動で認識させる取り組みも進んでいる。

1-5．研究データに求められること

データサイエンスの手法や研究スタイルは、人文系のデータにも及んでいる。単に画像やテキストなどのデータを閲覧するだけではなく、これらを加工したり他のデータと組み合わせたりすることによって、統計や推論を駆使したデータ処理、新たなデータの構築などが行われている。さらに、AI の学習データとして使われたり、アプリケーションの中に組み込まれたりといった形で、データを用いた二次的な研究成果も生み出されている。本稿で紹介した IIIF や Linked Data などは、このようなデータの相互運用のためのしくみであるし、歴史地名辞書や暦 LOD などの基盤データも、再利用されることを前提に作られている。

従来の人文学においては、データベースを構築してデータを検索する機能を提供するとともに、データ自体をいかに上手く見せるかという点に重点が置かれてきた。データとデータベースは不可分であり、結果として、数多くのデータベースが公開されるに至った。しかしながら、IIIF や Linked Data のような相互運用性を考慮したデータの提供方法の出現、そして、昨今のデータ利活用の多様化に鑑みれば、データベースではなくデータそのもののほうが主役となりつつあり、従来型のデータベースはデータを使ったアプリケーションの一つと見た方が妥当である。最近、「データ駆動型の人文学」という考え方も盛んに唱えられるようになってきた。さまざまな画像やテキストを電子化してオンライン上で閲覧できるようにするだけではなく、データそのものを利活用できるような提供方法や利用ライセンスの整備、他のデータとの相互運用性の確保、さらに、異なる学問分野からの利用も見据えて、データに関する専門的な知識の提供や共有なども求められるようになると考えられる。こうした要求に応えるためには、データやデータベースを作ってから考えるのではなく、データ構築に取りかかる前の段階で、データ提供の方法や第三者によるデータの利活用を踏まえた計画的・体系的なデータ構築が必

要である。

2．研究の場としてのオンライン環境

(1) 発表の場として

コロナ禍以降、オンライン上での研究会や学会報告が急速に広まったことは、周知のとおりである。これらのオンライン会議では、地理的な制約を受けずに世界各地から参加者を募ることができる。また、オンライン会議では、会場という物理的な制約もない。会場の収容人数を気にせず、多くの参加者を受け入れることができる。

コロナ禍以前から、講演会などの動画を YouTube などで公開することは行われてきた。YouTube などの動画は、後から見直すことができる利点はあるものの、視聴者の質問や疑問に発表者が直ちに答えることはない。昨今のオンライン会議とこれらとの違いは、発表者と聴衆が同じ時間を共有し、リアルタイムで議論を進行させることができる点にある。

オンライン会議用のツールを使った工夫も日々進化しているようである。たとえば、チャット機能を用い、発表内容に関連する史資料などへのアクセス情報（ウェブページの URL など）を共有することは、日常的に行われている。発表に対する質問やコメントをチャットに書き込むことで、発表と並行して議論が進むということも頻繁に見かける。また、オンライン会議用のツールの録画機能が活用され、会議の録画を後から YouTube などで閲覧できることも多くなった。この録画機能は、議事録の代わりとして有用であるため、対面での会議でさえも、参加者全員が Zoom などのオンライン会議用のツールを立ち上げ、会議の録画や発表資料の共有を行うことがある。

(2) 議論の場として

オンライン会議の代名詞ともいえるほどに普及してきた Zoom や Webex では、発言者が一名であることを想定している。司会・進行役によって統制された中で議論が進められる研究会や学会発表においては使いやすく、特定

の学問分野内で議論を深めることは比較的容易である。一方で、さまざまな学問分野の者が自由闊達に意見を交えるような場では、会議の成否は司会・進行役の力量に大きく左右される。

対面による学会では、休憩、移動、はたまた発表者が交代する僅かな時間など、あらゆる時間と場所を使って出席者同士が議論を重ね、話題の裾野を拡げたり、新たな考え方を導き出したりしつつ、人脈形成にもつなげてきた。研究発表を主としたオンライン会議を従来のような議論の場とすることは、なかなか難しいようである。

懇親会のように参加者が入り交じって議論するためのオンラインツールもいくつか提案されている。たとえば、SpatialChat は、画面上で自身のアバターを操作し、話したい人のアバターのそばに自由に移動することができる。近くにいるアバターの声は大きく、遠くにいるアバターの声は小さく聞こえるため、実際の懇親会場にいるような感覚で話ができる。同様の機能を持ったツールが複数提案されており、懇親会だけでなく、学会のポスター発表のような複数人による議論が中心となる場でも活用が少しずつ進んでいる。

(3) 研究実践の場として

研究発表の場だけでなく、研究を進める場としてのオンライン環境の活用も進んでいる。クラウド上に研究資料やデータファイルを置き、複数の研究者が共同でデータ構築やデータ解析などの作業を進めることは、コロナ禍以前から行われてきた。また、クラウドソーシングのように、作業自体を外部の者に委ねる方法も、オンライン環境ならではの研究の進め方である。さらに、オンライン会議との組み合わせによる研究実践も行われるようになってきた。参加者がオンライン会議用のツールでコミュニケーションをとりつつ、リアルタイムで、クラウド上のデータシートを編集したり、研究方針を考えるための図を作成したりといった共同作業が実践されている。

オンライン環境を使った研究実践の典型例として、国立歴史民俗博物館、東京大学・地震研究所、京都大学・古地震研究会が中心になって進めている

「みんなで翻刻」プロジェクトが挙げられる[24]。もともとは地震史料を読むために始まったもので、一般市民の参加者も交えながらこれらの史料を翻刻してデータ化を進めている。また、くずし字を読むための教育用のアプリを開発したり、上級者が初心者にアドバイスしたりする仕組みも作られており、作業者のトレーニングからデータ構築までのすべての工程がオンライン上で実現されている。

(4) オンライン環境の利用

オンライン上では、文字、画像、音声、映像などを共有したり相互に連携したりすることができる。見方を変えれば、オンラインで提供できるものは、視覚と聴覚で知覚できるものに限定されている。食べ物の画像やそれらを調理したり食べたりしているときの映像をオンラインで伝えることはできるものの、味やにおい、食感や喉越しをオンラインで伝えることは、現在の技術では不可能である。また、触覚もオンラインで伝えることが難しい。手触り、温度、湿度をオンラインで伝える方法は確立していない。

いわゆる五感とは異なるが、臨場感のようなその場にいなければ伝わりにくい感覚もオンラインでは伝わりにくい。仮想現実（Virtual Reality）のような技術も発達しつつあるものの、その場の空気感、つまり、におい、湿気、温度、風などは、実際に現場に行かないと体験できないものである。

研究対象や研究の方向性が決まっている場合、オンライン環境は幅広い参加者による議論や共同作業に有効である。一方で、研究者はその場の雰囲気、空気感も含めた実体験から新たな着想を得ることが少なくない。画像や映像はその場の空間の一部を切り出したものにすぎず、見ているものがどうやって製作され、どのように使われていたのか、どういう場所に置かれているのかは、やはり現場を訪れなければ理解することが難しい。オンライン環境だけでは、研究を新たな段階に引き上げてゆくことは難しいであろう。

また史資料についても、実際のものを使わなければ分からないことが多い。史資料の紙や墨の物性を調べることは、オンラインではできないし、複雑な

三次元構造のモノ資料も、実際に手に取ることによって得られる情報の量と比べれば、オンラインで得られる情報はごく一部でしかない。オンライン上での史資料の提供や利活用は発展しているものの、それらがすべてではなく、実際の史資料を代替するものではない。

With コロナの状況下では、オンライン上でできること、できないことを、上手く切り分ける必要がある。オンラインでできることを増やす一方で、貴重なオフラインの機会を有効活用することも求められる。

おわりに

オンライン会議が増えることにより、研究会や学会などへの参加の敷居が大きく下がった。地理的な制約や移動に要する時間が不要になったということだけではなく、参加の手軽さやネット特有の匿名性も影響してか、異分野の研究者、そして、企業、行政などの研究者以外の人びとが研究会や学会に参加することも増えている。また、オンライン会議にすることで、聴衆からの発言が活発になったという話もしばしば耳にする。学際研究をアプローチの一つとする「国際日本研究」コンソーシアムにおいても、オンライン環境の利活用は、学問の裾野を広げる絶好の機会である。もちろんこれは、我々が異分野の研究者を迎え入れるということだけではなく、我々自身も他の研究分野に進出する機会でもある。After コロナ／ With コロナを新たな飛躍の機会に転換することを期待したい。

1　IIIF Community. IIIF | International Image Interoperability Framework. https://iiif.io/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

2　Project Mirador. Mirador. https://projectmirador.org/index.html（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

3　Universal Viewer community. Universal Viewer. https://universalviewer.io/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

4　情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデー

タ共同利用センター(CODH). IIIF Curation Viewer. http://codh.rois.ac.jp/software/iiif-curation-viewer/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

5 情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター(CODH). 顔貌コレクション(顔コレ). http://codh.rois.ac.jp/face/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

6 鈴木 親彦・髙岸 輝・本間 淳・Alexis Mermet・北本朝展, 2020. 日本中世絵巻における性差の描き分け― IIIF Curation Platform を活用した GM 法による『遊行上人縁起絵巻』の様式分析. じんもんこん 2020 論文集: 67–74.

7 Tim Berners-Lee, James Hendler and Ora Lassila, 2001. The Semantic Web. Scientific American, vol. 284, no. 5, pp. 34–43.

8 FOAF Project. Friend of a Friend (FOAF). http://www.foaf-project.org/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

9 Schema.org. Schema.org. https://schema.org/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

10 Bizer, C., Heath, T., and Berners-Lee, T., 2009, Linked Data - The Story So Far, International Journal on Semantic Web and Information Systems, 5(3), 1–22.

11 GeoNames Team. GeoNames. http://www.geonames.org/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

12 Mark D. Wilkinson, et al. 2016. The FAIR Guiding Principles for scientific data management and stewardship. Scientific Data 3: 160018.

13 FORCE11. About FORCE11. https://www.force11.org/about（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

14 Dublin Core Metadata Initiative. About DCMI. https://dublincore.org/about/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

15 International Organization for Standardization (ISO). ISO 639-1:2002 Codes for the representation of names of languages―Part 1: Alpha-2 code.

16 N. Freed, J. Klensin and T. Hansen 2013. RFC 6838 Media Type Specifications and Registration Procedures. https://www.rfc-editor.org/rfc/rfc6838.html（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

17 コモンスフィア. クリエイティブ・コモンズ・ライセンスとは. https://creativecommons.jp/licenses/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

18 RIGHTSSTATEMENTS.ORG. Rights Statements. https://rightsstatements.org/en/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

19 Open Knowledge Foundation. Open Data Commons: legal tools for open data. https://opendatacommons.org/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

20 国土地理院. 位置参照情報 ダウンロードサービス. https://nlftp.mlit.go.jp/isj/index.html（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）
21 人間文化研究機構. 歴史地名辞書データの利用について. https://www.nihu.jp/ja/publication/source_map/about（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）
22 HuTime Project. 暦 LOD. http://datetime.hutime.org/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）
23 情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター(CODH). 日本古典籍くずし字データセット. http://codh.rois.ac.jp/char-shape/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）
24 国立歴史民俗博物館・東京大学地震研究所・京都大学古地震研究会. みんなで翻刻 - MINNA DE HONKOKU. https://honkoku.org/（最終アクセス：2021 年 10 月 8 日）

Column 1.

コロナと国際関係

楠　綾子

国際関係もこの1年半、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に翻弄された。

人類の歴史が感染症の歴史でもあったことは知識としては知られていても、とりわけ近年の国際関係論研究においては、感染症問題は開発協力の分野で議論されることが多かったように思われる。後天性免疫不全症候群（AIDS）やエボラ出血熱などに典型的にみられるように、開発途上国は感染症に対して概して脆弱で、感染症対策には国際的な支援を必要とする。その支援のありようが国際関係論研究の主たる分析対象となってきた。COVID-19のように、世界各地にくまなく滲透するある種の「パワー」としての感染症は、ほとんど分析の視野の外にあったのではないだろうか。グローバルな人の移動が制限され、サプライ・チェーンが麻痺する結果として、局所的に、あるいは世界的に物資の供給不足が発生すること、世界経済が停滞すること。国際的な援助を必要とする紛争地や途上国の人びとに支援の手が届かず、人間の安全保障がいっそう脅かされること。当然に予測される現象であったし、可能性として想定されてはいたけれど、実際の未知のウイルスの猛威はすさまじかった。

この1年半の人間社会の経験が国際関係論研究にどのような影響を与えるのか、必ずしもまだ見えてはいない。COVID-19の世界的流行はまぎれもなくグローバリゼーションの産物である。感染の予防や拡大阻止のために国家がとった行動は多くの場合、むきだしの主権の行使そのものであった。他方で、世界保健機構（WHO）を中心とする感染症分野のグローバル・ガバナ

ンスや医学分野の国際的な知的ネットワークは、未知のウイルスの性質、治療や予防に関する知見の蓄積や情報の共有を可能としているが、ワクチン接種の偏在性はグローバル・ガバナンスがうまく機能していないことの実証にほかならない。グローバリゼーションの光と影、主権の強さと弱さが凝縮されたCOVID-19をめぐる諸現象に、国際関係理論のテストケースを見出すことは困難ではないであろう。

IT技術は人の思想や行動、国家のふるまいに変容をもたらし、国際関係は宇宙空間にまで広がったけれど、未知のウイルスに直面したとき、少なくともワクチンや特効薬がそれなりに効力を発揮するまでは、人の接触を断ち都市を封鎖するという原始的な対処法しかないのが現実であった。生身の人間存在の限界と技術の進歩がつくる世界との懸隔は、COVID-19という大規模災害――全世界で累計496万人以上（2021年10月末）が死に追いやられた――によって明らかになったことかもしれない。もうひとつ明らかになったことは、このパンデミックによって国際政治の長期的な潮流に変化は生じていないという事実であろう。とりわけ、政治的リーダーシップを低下させるアメリカと台頭する中国、両者の関係が生み出す緊張は、コロナを経てますます顕著になった。

COVID-19の世界的流行がなければ、2020年大統領選挙は現職大統領ドナルド・トランプの勝利に終わっていたかもしれない。感染者数・死者数とも世界最多の被害を招く一因となった感染症対策、感染拡大にともなう大規模動員の困難、郵便投票の増加などがトランプ再選の壁となったことは間違いないであろう。それでも、トランプの存在は圧倒的であった。2016年までの大統領選挙では、多国間協調の枠組みに否定的で極端に孤立主義的な議論がまともに扱われることも、そもそも政治的、外交的見識がほとんど欠落した人物が予備選で勝利して正式の候補になることも、ほとんど想定されていなかった。慣れとはおそろしいもので、4年もするとトランプの奇矯な言動に世界はそれほど驚かなくなった。予測可能性を欠くアメリカが常態とな

ることを世界も日本ももしかしたら覚悟し始めたところでかろうじて踏みとどまったのが、2020 年大統領選挙であった。

「アメリカ第一主義」を唱えるトランプの外交は粗野で粗暴であった。イラン核合意や気候変動の抑制に関するパリ協定からの一方的離脱などは国際協調に軋みを生じさせ、同盟をコストと称してはばからず、安全保障と経済利益を公然と取引しようとする姿勢は、同盟国との間でも摩擦を引き起こした。たしかにオバマ政権の格調高い国際協調主義とは対照的であった。だが、国際秩序の維持に従来のような資源を投入しない、パワーを行使することに消極的な米国は、けっして新しい現象ではない。

反政府勢力を弾圧し市民に化学兵器を用いたシリアのアサド政権に対して、2013 年夏、当時の米国政府は介入を示唆しつつ空爆作戦を見送った。普遍的価値と国際政治におけるリーダーシップを説きながら「米国は世界の警察官ではない」（“Remarks by the President in Address to the Nation on Syria,” September 10, 2013[1)]）と語るバラク・オバマ大統領は、米国政府がリベラルな価値の追求、地域秩序の維持のために力を行使する意思を失いつつある事実を浮かび上がらせた。オバマの外交政策の基本方針は、テロリズムを除く国際安全保障問題に対しては直接的な関与を抑制する一方で、中国やロシアとの大国間協調を通じて核不拡散や気候変動など地球規模の課題の解決を図ることにあったとみられる（森 2020）。アフガニスタン、イラク戦争に続く対テロ戦争に疲れたアメリカ社会において、軍事力のあらたな投入が積極的に支持される見込みも薄かった。しかし、結果的には、ウクライナや南シナ海での現状変更を許し、中東の混乱は収拾されることなく、米国のリーダーシップの欠如は国内外の批判にさらされた。

一方、中国との関係では、米中関係正常化以来の関与と支援を基調とする米国の対中政策が、振幅を繰り返しながらしだいに強硬姿勢へと移行したのがオバマ政権期であった。中国に関与と支援を継続すれば、中国の経済成長につれて市民的自由が拡大するという期待は確実に失われていった。中国の急速な軍備増強と南シナ海での人口島建設およびその軍事拠点化、人権抑圧、

米国の政府機関や企業に対するサイバー攻撃、人民元問題など各種の問題が、習近平政権の下で進む社会統制の強化と相まって新しい国際関係を定着させようとする中国の長期的な戦略と理解されるようになった。サイバー・セキュリティの強化、「航行の自由作戦」の開始（2015 年 10 月）など対抗策が積み重ねられ、環太平洋経済連携協定（TPP）交渉も推進された（片田 2015；佐橋 2021）。

トランプ政権の下で米国の対中政策はいっそう強硬になった。4 年間を通じて米中間の貿易摩擦は激化し、関税合戦というべき状況が出来した。これに連動して中国への科学技術の流出の阻止など経済安全保障に関わる法整備が進み、政権の人権問題への関心も強まった。そしてインド太平洋地域の平和と繁栄が政権の目標としてしばしば語られるようになった。インドからアジア太平洋にいたる地域で安全保障、公平な競争、市民社会、法の支配、基本的人権といった普遍的価値を一体として推進する「自由で開かれたインド太平洋（Free and Open Indo-Pacific: FOIP）」構想である（“Remarks by Secretary Mattis at Shangri-La Dialogue,” June 3, 2017[2)]）。

2020 年大統領選挙に際して、民主党大統領候補ジョー・バイデンは、米国が国際秩序の維持に再びリーダーシップを発揮すること、国際社会と協力してグローバルな諸課題の解決に取り組むこと、人権や民主主義の擁護、同盟国重視など、トランプ外交から訣別する決意を明らかにしていた。一方で、彼は「中間層のための外交」を掲げ、経済安全保障を重視し、米国経済の活性化に力を注ぐ方針を鮮明にしている。「公正な貿易」の下での競争を推進することが保護主義の台頭を阻止するという信念、労働者や環境の保護、透明性の確保、中間層の賃金の維持を可能とする貿易のルール形成を米国の手で進めなければならないとの主張には、TPP のような多国間自由貿易協定への距離感がうかがえよう。そして、「軍事力は米国の死活的な利益を守る必要があり、目的が明確かつ達成可能である場合にのみ、アメリカ国民への事前の同意を得たうえで行使される」（Biden 2020）。国際秩序の形成、維持のために必要があれば軍事力を行使するという意思は希薄であった。トランプ

とバイデンのどちらの政権が成立しても、オバマ政権以来の「世界の警察官ではない」米国の潮流は大きく変わらないことが予想されたのである。

中国に対する厳しい姿勢にも両者にそれほど違いはないと観測された。「グローバルに影響力を拡大し、自己の政治体制モデルを売り込み、最新の技術に投資することを通じて長期戦を戦っている」中国は、米国にとって「特別な課題」である。地球温暖化や感染症などグローバルな諸問題について中国と協力する可能性は模索する一方で、中国による米国企業の技術や知的財産の窃取、国営企業に対する不透明な補助制度を問題視し、人権抑圧に対しては民主主義諸国が協調して対処することを説く（Biden 2020）。自由で民主的なルールの形成、枠組みの構築に対中政策の力点が置かれていることは、「取引」（deal）で得られる成果次第で豹変する可能性が否定できないトランプよりも、より構造的な対立が生まれる可能性を示唆していたといえよう。2020 年大統領選挙の結果、「自由で開かれたインド太平洋」の推進の動きはさらに加速している。

After/With コロナ時代の国際秩序は、米中「冷戦」（“A new cold war: Trump, Xi and the escalating US-China confrontation,” *Financial Times*, October 5, 2020[3)]）ともいわれる対立状況によって形成されるのだろうか。冷戦期、天然痘やポリオなどの感染症対策は、米ソが競争しつつも協力可能な数少ない分野であった（詫摩 2020）。リアリストは、アナーキーの国際関係において国家間協力は困難であるという見方を基本的立場とするが、非伝統的安全保障分野での国家間協力が可能なことを示す事例であろう。けれども、ワクチンや治療薬の開発・供給は影響力拡大の手段としても利用されるし、希少な物資は囲い込みと争奪戦の対象となる。そして、非伝統的安全保障分野における協力は軍事や経済といった伝統的安全保障分野における対立を代替できないのである。

1940 年代後半から 1970 年代初頭までの冷戦期も米中は厳しく対立した。米ソ対立に加えて米中対決が東アジアの冷戦構造を形作っていた。その意味

では、米中対立は新しい現象ではないが、大国化した中国、秩序を作る意思と能力をもつ中国との関係は未知の領域である。そして、米国は冷戦期の米国ではない。自由で民主的なルール形成の意思は明確だが多角的な自由貿易の枠組みには慎重で、同盟国との協調関係を重視するが力の行使の意思は必ずしも明確ではない米国である。この新しい組み合わせが生み出す関係に日本も日米関係もさらされることになる。

1 https://obamawhitehouse.archives.gov/the-press-office/2013/09/10/remarks-president-address-nation-syria（最終アクセス：2021 年 9 月 10 日）
2 https://www.defense.gov/Newsroom/Transcripts/Transcript/Article/1201780/remarks-by-secretary-mattis-at-shangri-la-dialogue/（最終アクセス：2021 年 9 月 10 日）
3 https://www.ft.com/content/7b809c6a-f733-46f5-a312-9152aed28172（最終アクセス：2021 年 9 月 10 日）

参考文献

» 片田さおり「アメリカの TPP 政策と日本」『国際問題』No. 644（2015 年 9 月）。
» 佐橋亮『米中対立――アメリカの戦略転換と分断される世界』中公新書、2021 年。
» 詫摩佳代『人類と病――国際政治から見る感染症と健康格差』中公新書、2020 年。
» 森聡「政治の分極化と対外関与負担の抑制――バラク・H・オバマ」青野利彦・倉科一希・宮田伊知郎編著『現代アメリカ政治外交史――「アメリカの世紀」から「アメリカ第一主義」まで』ミネルヴァ書房、2020 年。
» Joseph R. Biden, Jr., “Why America Must Lead Again: Rescuing U.S. Foreign Policy After Trump,” *Foreign Affairs*, March/April 2020. https://www.foreignaffairs.com/articles/united-states/2020-01-23/why-america-must-lead-again. (Last accessed: September 10, 2021)

第Ⅱ部

コロナ禍と日本研究

ヨーロッパからの報告①

イタリアから見たコロナ禍と日本研究への影響

エドアルド・ジェルリーニ

この長い一年で忘れた人も多いだろうが、コロナのパンデミックに遭遇したのは世界で、中国の次にイタリアが最も早かった。2020 年 2 月 22 日に、北イタリアの病院で初めて、新型コロナウイルスの死者が出て、1 カ月後に 7 万人以上の感染者が現れた。その頃、毎日の死者数は上昇するばかりだった。そして 3 月 9 日からのほぼ 3 カ月、イタリア人は非常に厳しいロックダウンを経験した。その緊急対策のおかげで、夏になってやっと新しい感染者数は数十人に激減したが、ご存知の通り本会議が開催された 12 月には、また感染者が急増し、いわゆる第 2 波の最中にあった。当時のニュースによると、たった 1 日で 1 万 7000 人もの新たな感染者が確認されている。死亡者も当然多い。この空前の状況により、イタリアの大学の日常は、2 月後半から混乱に陥ってしまった。私はその頃、まだ日本にいたが、ヴェネツィア・カフォスカリ大学の同僚たちから伝わった情報によると、2 月末から急に遠隔授業という新しい形式が必要不可欠になった。さすがに 1 ～ 2 週間ぐらい、授業の停止があったが、教員らも学生たちも、最初のショックを乗り越え、聞いたことのない Zoom やら Teams やらというソフトをたちまち習得し始め、すでに教材として配給されていた Moodle を使いこなした末に授業と試験を行うことになったという。大変だったはずだが、授業のやり方をあらためるには良い刺激となったかもしれない。私も聞いたことのないブレンディッド（blended）という授業法、つまり、教室での活動があって、自宅でのネットによる活動もあってという新しいやり方に、いろいろとチャレンジさせられるようになった。

前述のとおり、イタリアでのコロナウイルスによる感染状況は、夏以降少し落ち着いた。したがって、席数を減らしたり、距離を保たせたりするなどの対策を実施して、9 月からまた教室で対面授業が行われるようになった。全員の学生を受け入れることができない状況のなか、一年生を優先するという方針がほとんどの大学で決められた。その後、残念ながら、第 2 波が到来し、再度ロックダウンが始まったのである。

このような非常事態でメチャクチャになったのは、授業や学生生活だけではない。研究活動も大きな影響を受けた。たとえば、イタリア日本学会（AISTUGIA）の年次大会は、初めてオンラインで行われた。会員の中には高齢のベテラン学者がたくさんいて、このようなハイテクの形式には心配があった。しかし結局のところ、参加者が多く、成功だったと言える。逆に、いつもより参加者数は多かったようである。イタリアの各地から集まることは不便な面もあり、オンラインだと誰でも、特に身体の不自由な方がたも楽に参加できるというメリットが明らかになった。そしてまた、この非常事態のおかげで、日本と世界との新しいつながり方が生まれた。日本でのシンポジウムやワークショップに、世界中の人々が参加できるようになった。また、日本国内の歴史ある学会も、オンラインで行われるようになった。これからもしばらくは、オンラインと対面、両方の形式で行われていくのではなかろうか。そのほうが、参加者は集まりやすいからだ。私自身が経験したのは、早稲田大学の河野貴美子先生と一緒に企画した「テクスト遺産の利用と再創造―日本古典文学における所有制、作者性、真正性―」というワークショップだが、これはなんと、220 人もの参加者を集めた。アメリカや中国からの参加者も少なくなかった。オンライン形式の場合、多くの予算がなくとも海外のゲストを招聘することが可能になった。私も数カ月前、イエール大学のエドワード・ケーメンズ（Edward Kamens）先生のご招待により、イエール・ジャパン・コロキアムというプログラムで “Which future for the past? Japanese premodern literature between cultural heritage and digital humanities”（過去にはどんな未来を与えるか？ 文化遺産とデジタル人文学とのはざまの日

本前近代文学）という講演を行うことができた。ロックダウンや旅行の制限がなければ、このようなチャンスはなかったのではないかと思う。

もう一つ気づいたことがある。このような、研究者同士の新しいつながり方は、新しい所属感をもたらしたのではないかということである。私にとって、特に二つの重要な「つながり」ができた。一つは、東北大学の「文語文プロジェクト」という、オンラインのみの研究会。これは東北大学の佐藤勢紀子先生が幹事をしていらっしゃる、文語と漢文の教育、とりわけ外国人への教え方についての研究会で、大勢の実践者が参加して、大変有効で参考になっている。あと、もう一つの重要な「つながり」は、早稲田大学の河野貴美子先生のゼミである。2020 年の夏まで、早稲田大学に招聘研究員として所属し、河野先生が指導される大学院の授業に参加させていただいた。インターネットを通じて今でも毎週月曜日、少し早起きして、そのゼミに参加するのである。これはもちろん、対面授業が回復したらできなくなることだが、海外から日本の大学で行われている授業やゼミに参加できることは、大変貴重な経験である。何らかの形で、このようなつながりがアフターコロナでも続いていけばいいと思う。日本に滞在する研究者は多分気づいていないだろうが、海外にいる学生や若手研究者の立場から見ると、このようなチャンスが与えられると大きなメリットがある。まず、イタリアなどの国では研究会のために人を集めることは難しい。一つの作品を一緒にじっくり読むというメンバー自体がそもそも少なく、毎週集まることはまず無理である。日本の研究会やゼミに参加できることは、大変ありがたいことだ。

オンライン研究会には、もう一つ、メリットがある。日本語での研究会に初めて参加する留学生にとっては、今どこで何を読んでいるか、原稿や資料の何ページに当たるのかを把握するのはかなり大変だと思う。私には、そういう経験が結構ある。画面共有というシステムでは、その問題を解決できる。そしてまた、Zoom などのチャットを通じて参加者同士でリンクを交換したり、資料や参考文献を紹介し合ったりすることが容易である。今みんなが話している作品はこれだとか、どういう字で書くとか、すばやく伝えられる。

そして、その研究会の習慣や個人的なやり方にもよるが、当日ではなく、事前に発表原稿や資料を共有することも簡単であり、特に予習が必要な留学生にとってはありがたい。外国の学生の場合、その場で急に日本語の論文を出されると、すばやく目を通すことが精一杯だと思う。予習できる時間があれば、自分で頑張って先に読んで、質問もゆっくり考えることができる。これには、日本語の学習者にとってはさらに便利な効果がある。数カ月間の留学で集めたPDFは、紙媒介のレジュメよりも保存しやすく、またテクスト検索も可能である。ある意味で学術日本語の個人的なデータベースができてしまう。たとえば、この表現はいつどのように使うのかなど、論文を書くうえで大変参考になる。

しかしもちろん、この一年間には問題もたくさん起こった。まず、研究活動に携わる者にとって、家で仕事をすることは、場合によって大変不便である。メディアでも話題になったが、コロナ禍は、人々の経済的な格差を明らかにした。つまり、小さな家に住んでいる人、たとえば子どもと一緒に暮らしている人の場合、仕事がなかなか捗らない。仕事専用の部屋などがある、より大きな家に住む人であれば、そのような問題はない。さらに、最も深刻な問題は、図書館や資料館を使えないことである。個人で持っている本しか使えないと、論文を書くことは大変困難である。20世紀の半ば、エーリヒ・アウエルバッハ（Erich Auerbach, 1892–1957）という書誌学者が、ナチスドイツから逃亡して、トルコにしばらく滞在した。そこには十分な参考資料を所蔵する図書館がなく、仕方なく自分の記憶に頼るしかなかったと、代表作『ミメーシス』の序文で語っている。もちろん、アウエルバッハの時代と違って、今日ではインターネットという道具がある。一次資料や参考文献はある程度閲覧することができる。しかしなお、ネットで得られる情報と資料数は、大学図書館の資料規模に及ばないと思う。たとえば、日本文学全集が公開されていない。もちろん「ジャパンナレッジ」などの有料サービスである程度は読めるが、たとえばイタリアでは「ジャパンナレッジ」のアカウントを購入している大学はほとんどない。理由として、予算という壁もないこと

はないのだが、ヴェネツィア・カフォスカリ大学の場合は、高額な会員サービスの購入を拒否するという方針を定めている。ネットでアクセスできる有料サービスであれば、個人で登録し、支払いをすれば良いと。しかし、これもまた先ほどの問題につながる話で、研究者の活躍が各々の個人的な経済状況によって左右されてもよいのだろうか。物価が安い国では、研究者の給料も安く、日本ではさほど高額ではないと感じられるサービスが、他の国では負担できない価格になっている場合もあるだろう。個人の環境と経済状況によって、研究のクオリティーが変わらざるを得ないという現実がここにある。

もしかすると我々は、21 世紀に手に入れた可能性に富んだ新技術をちょっと無駄にしているのではないかと思うことがある。昔の習慣と考え方をそのまま変えることなく、21 世紀も研究を続けているのではないかと。具体的な例をあげよう。私が現在関わっている一つの翻訳プロジェクトがある。それは、カフォスカリ大学の同僚ピエラントニオ・ザノッティ氏と共同で 3 年ぐらいかけて行っている、石川啄木の詩集『悲しき玩具』のイタリア語訳である。最初から最後まで、直接会わずに Skype のみを通して遂行している。会わなくても、このような仕事が可能であるという時代に生きており、そのための技術がすでにある。古典文学研究の場合、たくさんの資料がますますデジタル化され、インターネットで公開され、本会議初日の関野樹教授による報告のとおり、IIIF とか、資料共有とか、自由交換、利用制限なしなどの望ましい方針が広がってきていることはうれしい。しかし、まだ問題は残っている。ある日、『悲しき玩具』の翻訳のために、明治 45 年の初版の表紙を見たいと思い、国立国会図書館のサイトを調べて、デジタル版のあることがわかった。よかった！とクリックしてみると、“Available only at the NDL” というメッセージが現れた。国会図書館内からのみ、デジタル版にアクセスできる。つまり、その画像はデータベースにはあるが、海外からは表示できないということであった。いうまでもなく、これは著作権と関わる問題だが、そもそも明治時代に出版された本には著作権がかかっていないはずであろう。私には不思議に思えた。

これは、文学作品に限ったことではない。学術論文の場合も大体同じである。日本の学術雑誌では、まだデジタル化されていない、オープンアクセスで公開されていないものは少なくない。もちろん、すべてではない。*Monumenta Nipponica* はすでに 2005 年からデジタル版でも出版され、最初の 5 年間は有料だが、そのあとは無料で閲覧・ダウンロードできるようになっている。個人的な考えに過ぎないが、すべての学術雑誌がこのような出版スタイル、あるいは最初からオープンアクセスで刊行されるべきだと思う。日文研や早稲田大学、国文研などではすでにこのような方法による研究成果の公開がある程度行われている。ところで、ここには少しおかしな点がある。私立大学は別にして、国立大学や国立研究所などで行われている研究は、基本、国からの経費で賄われている。しかしその研究成果は有料出版になる場合が少なくない。つまり、税金で支援された研究の成果が民間企業の利益になる、という矛盾である。ヨーロッパではどうだろうか。私は今、「マリーキュリー・アクション」（Marie Sklodowska-Curie Actions: MSCA）という、欧州委員会が支援するフェローシップのもとで働いている。このフェローシップの契約書には、研究成果をオープンにすることが義務づけられている。少し猶予はあるが、基本として研究期間中に執筆した論文などはすべてオープンアクセス、つまり無料でネット公開しなければならない。これははっきりとした政治的な方針であり、今後とも強化するよう期待したい。

ここで、視野を少し拡大してみよう。世界人権宣言によると、科学の進歩とその恩恵にあずかる権利を有する者は、人類全体であると定められている。すべての人間が、科学研究の成果を楽しみ、利益を享受すべきである。研究成果をオープンにすることは、このような政治的な方針、ビジョンを具現化する一手段であり、著作権というシステムと概念自体を考え直す必要に迫られていると言えるだろう。社会の共通善は今、個人的な利益を保証する著作権と衝突しているのではないか。研究成果を人類の共通善だとすれば、著作権はその共通善を規制してしまうシステムにほかならない。大学で行われる研究成果が、出版社の商品として扱われてよいのか。従来、出版社は必要不

可欠な存在だったが、インターネットの時代には、個人で本を出版するのは割と容易になった。ここでは、さまざまな出版社の編集部の方がたが一生懸命に担っている重要な役割を軽視しているわけではない。ただ、学術出版の場合には、ほかの公開のあり方、また、これまでとは異なる出版社の協力のあり方が考えられるのではないかと言いたい。全社会によって支えられている研究成果をただ一民間業者の商品にしてもよいのか、という大きな問題については引き続き考えなければならない。

では、アフターコロナにおいて、図書館、博物館、美術館などはどのように変わるべきだろう。デジタル技術をもって何をなすべきか。大学、特に国営の教育機関や研究施設の役割と、社会における位置をどうとらえ直すべきか。そしてまた、ソーシャル・ディスタンスという制限が緩和されたあと、人間と人間の関係をどのように構築し直すべきか。これらについては、より平等な社会を作るという目的を念頭に置いて、我々研究者一人ひとりに考える義務があると思われる。特に、人文学の研究に携わる人間であれば、なおさらであろう。

Covid-19（コロナ）を翻訳する

佐藤＝ロスベアグ・ナナ

はじめに

「コロナ」という名前を聞くようになったのは 2020 年の 1 月以降である。当初は「ウーハンウイルス」と呼ばれることもあったが、中国に対する差別を引き起こすとして使用を中止、イギリスでは Covid-19 と呼ばれるのが通常となった。Covid-19 は感染症であり、ヒトからヒトへと感染する可能性があると報道され、私自身は MARS や SARS が流行りそうになった時のことを思いだしていた。心のどこかで、Covid-19 も以前の感染症のようにパンデミックとまでは行かないことを願っていた。しかし、Covid-19 の勢いはとどまるところを知らなかった、というよりは Covid-19 が既知のウイルスとなった時には、とっくに感染が世界中に拡大していたのである。その後のイタリアの調査によれば、Covid-19 ウイルスは 2019 年 11 月の段階でイタリアにすでに存在していたというし、イタリアにウイルスが棲息していたのであれば、当然イギリスや他のヨーロッパの国々にも存在していただろう。思い返せば 2019 年 12 月に熱を出し下痢をして寝込んだ。もしかしたら Covid-19 だったのではないかと友人と話したりもした。というのは、その友人も同じ症状で Covid-19 と後から診断されたからだ。

今回は現在進行形の Covid-19 について書く機会を得て、いまここで起きていて私が経験していることを記録するような気持で本稿と取り組んでみたいと思っている。

構成であるが、本論では、まず、イギリスにおける Covid-19 対策を説明する。そして、私が所属する大学におけるいわゆるエリア・スタディーズ研究（含む日本研究）への影響を概観し、Covid-19 禍での新しい研究の模索

について論じ、その後、今後の展開や展望について述べてみたい。

1．イギリスにおける Covid-19 対策

イギリスでは 41,709,984 人が Covid-19 に感染し、そのうち 636,806 人が亡くなっている（2021 年 7 月 18 日時点[1)]）。翌 7 月 19 日からは自由の日をうたい、ロックダウンを完全に解除するという計画である。当の首相は Covid-19 に感染した厚生大臣の影響で、自主隔離を強いられ自由の日に人前に出ることはできないらしい。他国からの批判は多く、感染率は未だ非常に高く、イギリス内部でも懐疑的な声が聞こえている。G7 の会議では、いわゆる Covid-19「弱者」に対してもフェアに対応する政策が必要だと説いていた首相ではあるが、結局、最も大きな影響を受けるのは、いわゆる社会的弱者と呼ばれる者たちではないだろうか。

イギリスでは、特に、高齢者や基礎疾患を持った人たち以外では、Black Asian Minority Ethnic (BAME) と呼ばれる人たちが Covid-19 の影響を大きく受けた。メディアなどでも BAME における深刻な感染状況などが報道された。たとえば、ロンドンのバス運転手にはいわゆる BAME の人たちが多く、とりわけソマリア出身者が多い。特に初期の頃にバスの運転手が感染し、亡くなるケースが報告された。政府に助言を与える識者グループ SAGE（Scientific Advisory Group for Emergencies）のサブグループとして、Ethnicity Subgroup: Covid-19[2)] が組織されているのもこのような状況に対応するためである。しかし、コミュニティーは非常に複雑で、BAME と一口に言ってもそれぞれが異なる言語や文化を有しているし、同じ言語文化コミュニティー内部でもジェネレーション間で考え方が違っており、いつどのような経緯でイギリスに移住してきたのかによっても、Covid-19 に対して、当然ではあるが、異なる意見や態度が存在する。ワクチン接種はボランティアなどの協力によって翻訳や通訳がなされ、かなり進んではいるが、民族、少数コミュニティー間の感染や死亡率の高い理由は解明されていないし、まだ継続している。この問題にはのちほど第 4 節で戻ってくる。

余談ではあるが、筆者が所属しているロンドン大学 SOAS はアジアやアフリカ、中東を専門に研究する機関であり、教員も学生もそのコミュニティーや国から来ていることが多い。私の学部だけでも Covid-19 に感染した教員は 6 名いた（症状が出た者という意味）。私の同僚の場合は、2021 年 1 月初旬に政府がロックダウンを緩めて小学校を開校した際に、子供が学校に行き、そこで感染し、家に持ち帰り家族内で感染を広めたケースが多い。ロング・コビットになった者はそのうちの 3 分の 1 であり、身近で考えても深刻である。さらなる余談であるが、2 学期の始まりは、代理教員を探すために椅子に座りながら走りまわることとなった。

2．Covid-19 のエリア・スタディーズへの影響

イギリスの大学において日本学といえば、通常はエリア・スタディーズ（リージョナルと呼ぶ人もいる）の範疇に入る。日本における地域研究というように考えていただければ合点がいくのではないだろうか。エリア・スタディーズの研究者は専門にしている地域を訪問して資料を集めたり、ディシプリンによっては人にインタビューなどをしたりして研究を行う。つまり、いわゆるフィールドワークを行う人たちである。Covid-19 になり、フィールドに出ていた者の中には急きょ帰国しようとするも飛行機が飛ばず現地に残ることになり、保険の適用を心配しなければならないケースがあった。いわゆるサバティカル中で、予定していたフィールドワークを急きょとりやめたために、資料が集められず、研究が進まなかった同僚なども数多くいる。私は幸いにも（？）管理職についておりフィールドワークは全く予定していなかったのだが、海外に研究に出ている同僚、研究や交換留学で海外にいる学生などの対応に追われることとなった。Covid-19 の感染拡大を受けて、3 月に入り国境を封鎖する国が続々と出てきた。と同時にイギリスが呼び戻し政策をとったために、そのような国に留学している学生を呼び戻す必要ができてきた。一度国境が封鎖されてしまうと、学生はその留学先にいつまで滞在しなければならないのか先が見えなくなる。出国できるうちにイギリスに

戻すというのが政策であった。このような事態は初めてなために、保険も何がどこまで、そしていつまで有効となるのかわからない。また問い合わせをしようにもなかなか保険会社に連絡がつかないという状況が発生していた。一方で留学している学生全員がイギリス出身というわけではなく、国によって呼び戻し政策も異なっていたために、学生の中には自分の国に帰らず、またイギリスにも戻らないことを決意した者もいた。留学先国の方がイギリスよりも安全だと思い、また家には年齢のいった家族がおり自分が家に戻ることでCovid-19を持ち込んでしまうことを懸念し、留学先に留まることにしたのである。大学としては、ただ戻ってくれれば良いということではなく、呼び戻した後の補講についても考えなければならず、留学先の大学がオンライン授業を行ってくれる場合はそちらに、そうでない場合は他にお願いする、またはSOASで追加のオンラインの授業を提供するなどの措置をとった。とにかく連日会議の連続で、常に決断を迫られるという状況であった。よりによってなぜこんな時に管理職についているのかと何度思ったことか。

誰もがこのウイルスがパンデミックにならないことを願ったと思うのだが、ウイルスは感染拡大し、前節で言及したように、イギリスではとうとう2020年3月23日にロックダウンに突入した。大学の理事会では常に、イギリス政府からだけではなく他国の政策からもならい、危機管理を高めるように提言していた私にとってはある意味朗報であった。当然大学のキャンパスも閉鎖され、海外どころか電車、バス、車に乗ってただ出かけることすら禁じられたため、徒歩圏で行けるところにしか足を延ばせなくなった。スーパーマーケットからは物がなくなり、店に行列ができるようになった。日本と同様にトイレットペーパーを求めて、あちらこちらのスーパーに人がつめかける。キッチンペーパーやベーキングペーパーなども品薄になった。食べ物も店の棚から消えて、卵やパンなども店頭にない。パンを焼こうにも小麦粉やベーキングパウダーが手に入らない。車を持っていないので、スーツケースを転がして遠くの人のあまりいない小さなスーパーまで買い物に行ったりもした。もちろん、この間も多くの会議がオンラインで続けられ、さまざまな

対応に追われていた。

個人的に一番つらかったのは、Covid-19 初期の頃の東アジア人に見える人に対するヘイトである。幸い私は道で叫ばれたり、にらまれたり、あからさまに避けられる程度であったが、人によっては暴力を受けたり、いじめを受けたりした。ロックダウン中にベランダで夫の髪の毛を切っているとき、向こうのベランダから「ファック東アジア人」と中指を立てて叫ばれたときには、少々恐怖を感じた。居住地を特定されていることが恐怖心を起こさせたのだと思う。パンク風の少年だったが、東アジア人風の女性にそんなことを叫んでいるエネルギーがあるのであれば、もうちょっと社会に抗するなどにエネルギーを使うべきではないのかとも思ったりした。さて、悪いことばかりではなかった。飛行機や車の量が減り、ロンドンの空気は急激に澄んでいき、鳥が以前よりも鳴くようになり、きつねを見かけるようになった。CO2 が激減したのは、知られていることだ。木曜日の夜の 20 時になると、どこからともなく拍手が聞こえてくる。それは NHS（National Health Service）で働く人びと（医師や看護師など）に感謝と尊敬をこめて送る拍手であった。鍋やフライパンをたたいたり、花火を飛ばす人もいた。ベランダに立って鍋をたたきながら医療従事者に感謝のエールを送るとき、その瞬間だけ皆がつながっているような気がした。Covid-19 禍では最も過酷な仕事の一つであろう医療従事者。十分な資金も資源もなく、防護服やマスクなども不足するなか、未知のウイルスにかかった人たちを介護する。イギリスの医療ドラマとして知られる *Casualty*[3] では、医療従事者が Covid-19 にかかり亡くなる話や、患者に接することに恐怖を感じるリアルな描写があった。そういえばイギリスの首相も Covid-19 にかかり、入院し集中治療を受けた。その際に介護にあたった看護師に感謝をこめてお礼をするために自宅に招いたのは有名な話だが、そのうちの一人が国の NHS 従事者に対する扱い方を批判し、職を辞任した[4]。NHS に従事する者へのケアは薄く、職場での安全が確保されなかっただけではなく、収入そのものもかなり低く、生活が楽ではないケースがほとんどである。いつまでたっても改善されない NHS の

状態に抗議の声を上げる者は少なくない。結局、医療従事者も搾取されているのである。

大きく脱線してしまったが、話を研究に戻そう。いわゆるエリア・スタディーズの研究者にとっては非常に難しい事態になったことはすでに述べた。フィールドに行けないため、資料はオンラインで集めるか、いわゆる現地にいる知り合い等に頼んで集めてもらうという方法程度しかない。しかし、それではなかなか研究が進まない。エリア・スタディーズは、Covid-19に、その研究の在り方や方法論を問われることとなった。日本研究者の場合は、日本の書物や雑誌などが著作権の関係でデジタル化が進んでいないため、日本に行けなければ読めない、手に入らない資料がたくさんある。いまだに、現地の図書館や大学の図書館に行かないと入手できない情報も多い。私は個人的には図書館にこもり、いろいろな書物を探しては何か「新しい」発見をするという研究手法を好んでいるが、Covid-19 禍では好みの問題を言っても実行が不可能なので、頭をひねって異なる研究方法やテーマを見つけるしかない。実際に、私は 2 年以上日本に戻れずにいる（本稿執筆時）。Covid-19 対策に追われているため、いくらすべてがオンラインといっても、何かあったときのために、ロンドン付近から離れるわけにはいかないという意識があるからだ。しかし、Covid-19 禍といえども（または Covid-19 禍だからこそ）出版や助成金獲得のプレッシャーは大きくのしかかってくるので、どのような打開策があるのかを同僚と話し合ってみたりもした。有力候補として挙がってきたのは、共同研究である。いわゆる現地の研究者と共同で研究を立ち上げるというものである。次に出た案は、共同ではないが、現地の学生などにアルバイトとして資料収集をお願いするというもの。そして、最後の案は、現在私が行っている Covid-19 とイギリスの移民研究である。

3．Covid-19、日本学、そして移民研究

ロックダウンが続いていた 2020 年 5 月、私は United Kingdom Research Innovation（UK リサーチ・イノベーション：UKRI）が Covid-19 に関する研

究助成を行っていることを知った。すでに言及したように、私も含めて多くのスタッフや学生がヨーロッパ以外の地域の出身者である。また、イギリスのメディアでは特に Covid-19 が BAME コミュニティーの間で広く感染していることを報道していた。私は日本大使館に登録しているので、大使館からも Covid-19 に関する日本語の情報を得ていた。元来懐疑的な私は、夫がドイツの出身なので、二人で英語、日本語、そしてドイツ語圏から Covid-19 の情報を収集し、最も信頼できる情報を自分たちで選び取り、行動をしていた。情報というのは国益やイデオロギーなどの影響に左右されかねない。従って一つのソースではなくて複数から情報を得て、そこから信頼できそうな情報に基づいて行動することにしたのである。これも一種の文化翻訳と呼べるだろう。UKRI に応募した研究計画の発想点はここにあった。なぜ特に BAME の間で Covid-19 が広がっているのかを考えたときに、社会格差だけではなく、言葉の問題や文化の問題、もっと踏み込めば、どこから Covid-19 の情報を得て、何を信頼できるソースとし行動するかによって、ウイルスに対する理解も態度も違ってくるのではないかと考えたのだ。もちろんそれによって感染率や死亡率も影響を受ける。私たちの専門を生かして身近な社会に何かしら貢献できる方法がないかと考えていたときに思いついたのが、ロンドンの BAME コミュニティーを調査するということだった。ロンドン西部には大きな日本コミュニティーもある。文化翻訳という観点から調査を行えば、日本に行かずとも日本に関わる翻訳の研究ができる。このように考えて、大学の同僚たちと “Covid-19 research project report: Cultural translation and interpreting of Covid-19 risks among London’s migrant communities” (AH/V013769/1) という研究テーマで応募した。2020 年 8 月にインタビューに呼ばれて、11 月に正式に助成金が下りることを知らされた。開始日は 12 月 1 日と定められてはいたが、まずは研究助手と契約を結んだり、プロジェクト運営事務担当者を公募したりしなければならなかったので、クリスマス休暇などをはさんだこともあり、研究そのものを始められたのは 1 月も終わりになってからだった。その頃もロックダウン中であり、最初から出鼻をくじか

れることになった。とりあえずは、インタビュー前の下調べもかねて、オンラインでアンケートを行うことにした。各々の言語でアンケートを行うのか、それとも英語で行うのかをメンバー間で議論したが、とりあえずは英語のみのアンケートにして様子を見ようということになった。英語では回答を得るのが難しいのではと思えたコミュニティーもあったが、15 のコミュニティー言語のうち 12 が目標の回答数 30 を達成し、全部で 680 にのぼる回答を得た。もちろん、この結果があらゆるコミュニティーの考えを反映しているなどとは考えていないが、少なくとも何らかの傾向を映しだしていると考えることはできる。アンケート調査の結果は予想通りのものもあったが、意外な結果もあり、当然のことながらコミュニティー間でも異なっており、またはコミュニティー内で違っているものもあった。しかし、興味深いことに 74%以上が、イギリス以外の、英語以外の言語で Covid-19 に関する情報を得ていると回答し、そのうちの 81%が英語以外の情報が有益であると答えた。

ワクチンに関する質問では、意外なことに 77.4%が「接種を受ける予定だ」と回答した。安全面に関する懸念、情報不足などの声はあるが、それでもワクチン接種に関してはいくつかのコミュニティーを除いては前向きであった。各コミュニティーのボランティアワーカーの助けもあり、イギリス内でのワクチン接種はかなり進んでいる。9 月現在は、いわゆるブースターに話が移っている。ワクチンの効果は 6 カ月を過ぎると弱くなる。そのために三度めの接種を行い、効果を持たせる政策である。

現在の私たちの研究関心は、ロング・コビットに関する情報伝達と Covid-19 からの回復にある。この点も含めて、現在は 15 コミュニティーからのインタビューをほぼ終えた（2021 年 9 月現在）。興味深いのは、コミュニティーの言語でインタビューを試みたが、インタビューを受けた人のなかでは英語による会話を好んだケースが比較的多かった。ただし、日本コミュニティーはこの限りではない。その結果を分析する段階に入っている。関心のある方は私たちのウェブサイトを見てほしい[5)]。

おわりに

学術論文というよりは経験談的な論考となってしまった。しかし、現在的な問題であるがゆえに、本稿を執筆している間にも新しい種類の Covid-19 が生まれてもいて、この書籍が刊行される頃にどのような状況になっているのか、全く読めない。ロンドンを見る限りすでに Covid-19 を過去の出来事のように人びとはふるまっているが、感染率や死亡率は非常に高い。夏の間、ドイツとギリシャに行く機会があったが、イギリスと比較しても政府の対応は異なっている。ドイツでは比較的厳格にマスクの着用が義務づけられていて、レストランやカフェなどでも必ず登録をしなければならなかった。感染者数に応じてそれぞれの州がルールを変更することになっていて、滞在中に感染者が増えたため、危険度が上がり、レストランやカフェなどでは身分証明書とワクチン接種証明を見せなければ入れないことになった。きちんと守っている店とそうでない店があったが、政策としてみれば合理的だと思えた。

ギリシャの場合は、数多くある島の一つに行っただけなので何とも言いにくいが、気温が高く建物は吹き抜けになっていて風も良く吹いている場所のせいか、それほど厳しいルールがあるようには感じなかった。ただ、レストランで店内に座った際にはワクチン接種証明の提示を求められた。10 月のロンドンではワクチン接種証明なども見せずにレストランやカフェに入れてしまう。公共交通機関や店内でもマスクをしない人がたくさんいる。「ワクチン接種をすれば Covid-19 にかからない」「Covid-19 は過去のもの」という誤った理解がなされている。あるタクシーの運転手は「マスクは体に害を及ぼす。マスクは取った方が良いよ」と、マスクをしている私に言ってきた。大いに不安な状況である。

Covid-19 に関して興味深いのは、Covid-19 をどのように理解して対応するのかに一貫性がないことだ。これは個人レベルから国レベルまでさまざまで複雑だ。もちろんどんなことにも共通しているかもしれないが、それが顕著に出た例が Covid-19 ではないだろうか。そういう意味で Covid-19 を人び

とが、自治体が、国が、どのように翻訳して行動しているのかを研究することには意義があると思えるし、同じように感染力の強いウイルスが生まれ出たときの教訓にもなるのではないだろうか。いろいろな国や地域の人たちと連携して研究を続けていきたいと考えている。

本書刊行時の Covid-19 の行方を思いながら、とりあえず筆をおきたい。

1 Responding to COVID-19 (gavi.org). https://www.gavi.org/covid19（2021 年 9 月 26 日にアクセス）

2 Ethnicity_Subgroup_Terms_of_Reference__1___1_.pdf (publishing.service.gov.uk). https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/932609/Ethnicity_Subgroup_Terms_of_Reference__1___1_.pdf（2021年9月26日にアクセス）

3 BBC One - Casualty - Characters. https://www.bbc.co.uk/programmes/profiles/2L0npHsDX4lzkMLSgQFMZCj/characters（2021 年 9 月 26 日にアクセス）

4 Nurse who cared for Boris Johnson resigns over ‘lack of respect’ for NHS workers | NHS | The Guardian. https://www.theguardian.com/society/2021/may/18/nurse-who-cared-for-boris-johnson-resigns-over-lack-of-respect-for-nhs-workers（2021 年 9 月 26 日にアクセス）

5 UKRI/AHRC Covid-19 research project report: Cultural translation and interpreting of Covid-19 risks among London’s migrant communities (AH/V013769/1) | SOAS University of London. https://www.soas.ac.uk/cts/covid-19-project/（2021 年 9 月 26 日にアクセス）

コロナ禍における
見えるものと見えないもの

鋳物美佳

はじめに

この原稿を書いているのは2021年8月9日、東京。昨日、同じ東京のどこかでオリンピックの閉会式があったらしい。明日、私は1回目のワクチン接種を受ける。ヨーロッパからやや遅れて日本でもワクチン接種が始まっているが、感染拡大は止まっていない。もはや第何波だかよくわからないが、この波は繰り返すたびに大きくなる傾向にあるらしいことだけはわかる。

コロナ禍はまだ収束していない。コロナに関して何かを述べるときには、日付が必要である。なぜなら、今日考えていることについて、明日もそう考えているだろうと確信できないから。明日何が起きるかわからないのは世の常であるが、ことコロナに関しては、たった1日で事態が、それもかなり大きな規模で劇的に変化するということを、われわれは経験してきた。たとえば予想を遥かに上回る増加率の「今日の」感染者数。あっという間のロックダウン。

一言で言えば、遠いところが見えない。時間的にも、空間的にも。数カ月後の予想が立たない。遠い国に暮らす人の感覚が、今まで以上にわからない。

以下に記すのは、2020年12月12日の報告の記録である。まだ変異種についてほとんど誰も知らなかった頃。このとき私は、まだフランスにいた。日本への帰国を含めた後日談は、少し長い補遺として原稿の最後に記す。

1．私という視点

コロナ禍の真っ只中にいる今、コロナについて語ることは難しい。俯瞰的

に考えることはできない。けれども記録すること、立ち止まって考えることは重要である。そこで今回は、私という個人の経験を起点として、そこから見えることを描くことにする。本節では、まず私とは誰かについて手短に述べる。

私は哲学の研究をしている。とくに人間の身体運動について研究しており、近年では武芸などで行われている型稽古を題材に、わざを習得するなかで心や体はどのように変化していくのか、あるいはわざが伝わるとは何なのかということを考えている。背景にあるのは、意志的な運動と習慣形成の関係はどのようにあり得るのかという問題意識である。

次に、コロナ禍における私の動きについて。私の所属はフランスのストラスブール大学であるが、博報財団日本研究フェローという研究助成金を得て、2019 年 9 月から 2020 年 8 月まで国際日本文化研究センター（日文研）に外来研究員として滞在した。目的は、型稽古を実践している人たちにインタビューを行うことである。2020 年 3 月までに 13 人のお話を伺うことができたが、それ以降はコロナ禍のため対面インタビューは行っていない。2020 年春に中断を余儀なくされたときの率直な感想としては、残念だと思う一方で、3 月までに 13 人のインタビューをとることができて、とりあえずギリギリセーフだとも思った。8 月には ZOOM インタビューを行う幸運もあり、結果的には 14 人のインタビュー結果を手に、2020 年 8 月 27 日に日文研での滞在を終え、フランスに帰った【図 1】。

少し話が逸れるが、この日本からヨーロッパへの移動について少し記したい。私は、羽田空港からフランクフルト空港へ飛び、ドイツでヨーロッパへの入国手続きを行うことになっていた（ストラスブールは、パリとフランクフルトのちょうど中間に位置する街である）。2020 年夏といえば、すでに国を跨ぐ移動に大きく制限がかかっていた時であったので、ストラスブール大学の雇用証明書など、移動を正当化するための書類をできるかぎり集めた。ところがドイツの入管では、ひとつも質問されることなく通された。空港内に大規模な PCR 検査の会場があったので、係の人に私も受ける必要がある

図１　ほとんどだれもいない羽田空港（2020 年 8 月 27 日）

か訊いてみた（本心を言うと、受けてみたかった）。けれども日本から入国した人はその必要はないとのことで、本当に拍子抜けするほどあっさりと入国できてしまった。これは、後述するように、この時の日本での 1 日あたりの感染者数（874 人）がドイツのそれ（1,561 人）に比べて低かったからである。感染者数が自国よりも多いところから入ってくる人に対しては危機感を募らせるが、感染者数が自国より低いところから人が来る分にはお咎めなしらしい。おそらくドイツからフランスに入るのも同じ理由で（フランスの新規感染者数は 6,111 人）すんなり入ることができた。

研究発表の場について。参加を予定していた学会はいずれもオンラインになった。発表する場という意味では確保されている。ただし学会は発表するだけの場ではなく、むしろそこでの偶然の出会いがその後の研究にとって貴重な財産になるので、自宅から繋ぎ、終わったらブチっと切るリモート学会発表でどれほどの学術的意義が失われたか定かではない。落語「百年目」の諭すように、難莚草（なんえんそう）がなければ赤栴檀（せんだん）も枯れるだろう。また学会発表の聞き手としても、考えさせられている。オンライン発表の聞き取りにくさは、音以外のツールも積極的に使用するなどして、早急に手を打つべきである。原

稿読み上げ式の研究発表も、対面よりオンラインの方が聞く集中力を維持しにくいと思う。論文執筆に関しては、もともとPDFのやりとりで校正をしていたので、今のところはそこまで影響がない。ただ、フェローシップが1年遅れだったらと想像すると、おそろしい。コロナを避けるようにして14人のインタビューを取れたことは、単なるラッキーで済ませられる話なのだろうか。

2．コロナというトンネル、二つの視点

次に、コロナ禍という現象について、思うところを述べてみたい。当会議のタイトルには「After/With コロナ」とある。たしかに今の状況はウィズコロナであるだろう。一方、アフターコロナが具体的にどのような世界になるのかは、うまく想像できない。この想像できなさについて考えてみたい。

ここで、突飛に思われるかもしれないが、二つの視点を紹介したい。有名な話なのでご存知の方も多いと思うが、川端康成の『雪国』の冒頭の一文に関するものである。日本語では、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」。サイデンステッカーによる英訳は、“The train came out of the long tunnel into the snow country”。日本語の文を読んだときに思い描くイメージは、汽車に乗ってトンネルの中にいた、光が見えてきた、出たら雪国だった、であろう。他方、英語の文はそのような印象を与えない。上空からトンネルの出口を眺めていて、そこから電車が出てくるところを思い描かせる。言語学者の金谷武洋は、前者をトンネルの内側からの「地上の視点」、後者をトンネルの外側からの「神の視点」と名付け、認知的差異を生み出す文法的差異について論じた。

このことをコロナ禍に応用して考えてみたい【図2】。コロナ禍をひとつのトンネルであると考えてみると、神の視点から見たアフターコロナは、想像できそうである。おそらく経済的に大きなダメージがあるであろう、国際的なパワーバランスが大きく変わるであろうことは想像に難くない。一方、地上の視点に立ってトンネルの中から考えると、アフターコロナにどのよう

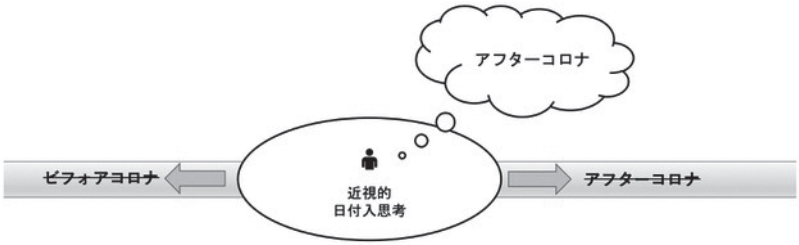


図 2

な感覚でいるかは想像できない。それどころか出口の光がどこにあるのかさえよくわからない。そして振り返ると同じように、トンネルの入り口にあたるビフォアコロナももう見えない。今、たとえばコロナ前の大相撲の映像を見て、お客さんが密集している光景にぎょっとすることがある。他の場面でも多かれ少なかれそうではないだろうか。「うわっ、人が多いな」という驚き。ソーシャルディスタンスが叫ばれて長いが、コロナ以前の物理的距離の常識を、私たちは肌感覚ではもう忘れてしまっているように思う。

さて、トンネルの中で、入口も出口も見えず、どちらの方が近いかもわからず、私たちには今、何が見えているのか。それはとにかく近距離で起こっていることである。直近の感染者数、死者数、ロックダウンの計画、逼迫した医療現場。コロナ禍は、われわれを近視にした。というのも、今日考えていることが、明日も妥当だろうとは思えないからだ。実際、ある日突然、私の授業に出席していた学生がコロナ陽性と判断されて、翌日からそのクラスはオンライン授業になったことがあった。日ごとに、考えている常識というものが変化していく。それはなぜかというと、状況がめまぐるしく変わり、その結果われわれの身体感覚、肌感覚というものがものすごいスピードで更新されて、ずれていくからである。

ところで、今見えている問題は、新しく生まれた問題というよりも、もともと構造的に存在していた問題が顕在化したと考えるべきだろう。外国人や障害者に対する「意図のある」視線、いい加減な情報が踊り狂う環境、移動

を前提とした経済戦略の限界、人間が地球に対して行う危うい搾取の仕方。いずれも、コロナ禍よりずっと前から存在していた。コロナは既存の網にうまく乗って拡がったのである。では、これらの問題はコロナを機に改善されるのだろうか。残念ながら、それは非常に疑わしい。これもすでに多く指摘されていることであるが、歴史的に見れば、コロナ禍のような事態は初めてのことでもなければ、おそらく最後でもないだろう。大きな感染症が流行するたびに、人類は既存の問題が顕在化するのを見、流行が喉元を過ぎればその熱さも忘れていった。でもだからこそ、歴史学者の藤原辰史も作家のパウロ・ジョルダーノも、記憶にとどめることの難しさを十分認知しながら、それでも忘れてはいけないと警鐘を鳴らしている。われわれは、コロナ前の状態に完全に戻りたいわけではない。何に変わって欲しくて、何に変わって欲しくないのかを、立ち止まって考える必要がある。構造的に変える労を、進んで執る必要がある。

3．日本とフランスの違い：共有されない私の恐怖

ここでは、私の経験した日本とフランスの違いについて述べたい。あくまで私個人の経験した限りのことである。先述した通り、2020 年 8 月 27 日に私は日本からドイツ経由でフランスに帰ってきた。日本、ドイツ、フランスと、感染者数が少ないところから多いところへと順に移動していったので、すんなり目的地に到着した。この移動によって、あるトンネルから別のトンネルへ突然ワープしてしまったような印象である。この戸惑いについて考えたい。

ひとまず日本とフランスそれぞれの、2020 年 8 月末から 11 月末までの感染状況およびその対策を確認しよう【表 1、表 2】。8 月 31 日のフランスの 7 日間の平均感染者数は 6,691 人、平均死者数は 14 人。9 月 1 日から 11 歳以上のマスク着用義務化が始まったが、感染者数は一向に減らず、10 月 17 日にパリなど主要都市で夜間外出禁止令。10 月 23 日からはストラスブールもその対象となった。それでも感染拡大は収まらず、10 月 30 日には全国的なロックダウン。11 月 2 日には 7 日間の平均感染者数が 55,282 人、同じく

表１　７日間の平均感染者数の推移
2020 年 8 月 31 日～同年 11 月 30 日

	フランス	日本
8 月 31 日	6691	593
9 月 7 日	8045	543
9 月 14 日	10238	491
9 月 21 日	12258	434
9 月 28 日	11517	522
10 月 5 日	16540	511
10 月 12 日	23151	535
10 月 19 日	34496	554
10 月 26 日	39621	659
11 月 2 日	55282	849
11 月 9 日	29723	1371
11 月 16 日	18474	1929
11 月 23 日	11182	2068
11 月 30 日	10574	2207

Cf:worldmeters.info

表２　７日間の平均死者数の推移
2020 年 8 月 31 日～同年 11 月 30 日

	フランス	日本
8 月 31 日	14	14
9 月 7 日	31	12
9 月 14 日	53	9
9 月 21 日	64	6
9 月 28 日	72	7
10 月 5 日	72	4
10 月 12 日	107	6
10 月 19 日	183	6
10 月 26 日	322	8
11 月 2 日	541	6
11 月 9 日	591	10
11 月 16 日	571	13
11 月 23 日	503	19
11 月 30 日	407	30

Cf:worldmeters.info

死者数が 541 人。このあたりがフランスにおける第 2 派のピークである。その後はロックダウンの効果が見え始め、11 月 28 日にロックダウンの第一次緩和。11 月 30 日の 7 日間平均感染者数 10,574 人、死者数 407 人にまで下がった。第二次緩和は 12 月 15 日に予定されているが、これは目標としている数字が達成できていないので、おそらく不可能であるという見通しである。

一方、日本は今第 3 波に向かっているようである。2020 年 8 月 31 日の日本の 7 日間平均新規感染者数は 593 人、死者数は 14 人。10 月半ばまでは感染者数 550 人から 600 人の間で推移していたが、10 月末から徐々に数字が上がってきて、11 月に入ると 1,000 人代に突入、11 月 30 日には感染者数 2,207 人、死者数 30 人を記録したとのことである。

二つの国の数字を比べてみてわかるのは、明らかにフランスの方が状況は深刻だということである。そもそもフランスの人口は日本のおよそ 2 分の

1であるというのに、11月30日にフランスでは事態が改善された結果、感染者数10,574人、死者数407人。同じ日の日本では、事態が悪化した結果、同2,207人と30人という数字。ところが驚いたことに、あくまで私の経験をベースに申し上げるが、フランスには日本ほどの危機感が感じられなかった。私がフランスに移動した8月27日、日本では874人の新規感染者が出て、その数字はとても多いと報道されていた。ところが同日のフランスの感染者数は6,111人（別の数え方では7,000人を超えたとも言われている）。874人の国から6,111人の国へ行くと、私にはもう大流行に思えて、とても怖かった。けれどもフランスにいる人からすれば、それまで似たような数字が続いていたのだから「感染爆発」とは言えない。だから私の恐怖はフランスにずっといた人には全くピンとこないもので、結局のところ、今に至るまで、フランス社会の誰とも共有されたという感じがしない。

いくつか象徴的な出来事を挙げたい。8月末にストラスブール市はスポーツ祭典を開催した。私が帰った翌日である。フランスで習い事をするときは、9月を年度始めとして、9月に登録をして翌年6月ぐらいまで通うことができ、7、8月は休んで再び9月に登録する、という1年のサイクルがある。したがって8月末は新規登録者を募る時期である。ストラスブール大聖堂の横の大きな広場に各クラブがスタンドを立ててアピールをしていた。しかし、1日6000人を超える感染者が出ているなかで、これからスポーツをしようと誘ったり登録したりする人がいるということが私には理解できなかった。私は合気道をしているが、合気道の稽古では素手で多くの人と触れ合うことが必要である。合気道クラブが言うには、みんなが清潔な服を着て稽古に通えばよい、ということであったが、どうしても私には衣服が問題であるとは思えなかった。結局この年、私は合気道に登録しなかったが、それでも私の合気道クラブは新規登録者を得て、10月末にロックダウンが始まるまでずっと稽古をした。また9月には、フランス全土で、マスク着用は本当に感染症対策として有効なのかという議論があった。日本ではマスクの有効性に関する議論は2020年春にはすでに決着を見ていたように思う。まさか9月にま

だそのような議論が聞かれるとは思ってもいなかった。マスクの着用義務化は人権に反するという判決があったのもこの時期である。そのうち次第に身近なところで感染者が出るようになり、10 月 8 日には、私の担当している学生の一人がコロナの陽性と判断され、翌日から授業は対面からオンラインに切り替わった。その時の学科の対応としては、当該学生が出席していた授業だけをオンラインにする、というものであった。すると他の授業の学生から、本当に対面授業を続けて大丈夫なのかという問い合わせがあった。私個人としては、一人陽性者がいれば潜在的にはもっといるだろうと考えていたので、懸念ももっともだと思った。が、同僚たちは違った。その学生はやや高齢の学生であったため、「彼女は少し高齢だから心配しているのかな、それも仕方ないね」と言っていた。そのとき私は、ここでコロナを怖がるには、高齢であるとか基礎疾患があるといった理由が必要であるのだと思った。8 月の日本ではすべての世代ができるだけ外出を控え、医療を逼迫させてはいけないという考えから、政府の旅行促進キャンペーンも懐疑的に思われていた時期だったので、日本とフランスの間の大きな温度差を感じた。

とはいえ、2020 年 12 月の今、私の恐怖がだんだん薄れてきたのも事実である。恐怖とは相対的なものなのかもしれない。感染症対策は、集団的にひとつのことを信じなければ有効性は確保されないが、そのためには集団的に恐怖の対象を共有することが必要なのかもしれない。夏から秋にかけて私が感じていた恐怖とフランスにいる人たちの感じている恐怖のあいだには、大きな隔たりがあった。だから私の恐怖は誰にも共感されなかったし、そのような人たちに囲まれて生活しているうちに私の恐怖も次第に薄れていったのかもしれない。

恐怖が少しずつ薄れてきた今、改めて考えてみると、私の恐怖にピンとこなかったフランスの人たちは、規制されない以上はできる限りの生活を維持しようという原理のもとに行動していたように思う。このような状態のなか、日常生活を可能な限り営み続けることは、少なくとも精神衛生上はいいのかもしれない。またロックダウン中でも、必要とあれば大規模デモは行われて

いた。規制に対する敏感さはフランス社会の特徴であろう。それに対して恐怖を感じていた私は、規制する側の視点に立っていたように思う。日本社会で自粛警察が話題になるのは、規制する側の視点の共有が浸透している証左でもあるだろう（フランスでは自粛警察の話など聞いたことがない）。あくまで個人的な意見であり、どちらがいいという話ではないが、コロナが共同体と共同体の行き来を困難にした結果、それぞれの共同体で何を「当たり前」と思うかは、相当な違いを見せているように思う。

おわりに：ささやかな提言

以上のことを踏まえてささやかな提言をさせていただくなら、このような状況においては、ある共同体における「当たり前」を他の共同体に持ち込まないようにしよう、ということである。日本の当たり前は、別の場所では当たり前ではない。逆もしかり。自戒もこめて、不寛容に陥ってはいけないと思う。それから、偶然の出会いの場を確保すること。コロナ禍が炙り出した構造的問題に立ち向かうこと。アフターコロナがビフォアコロナと同じであってはならない。

最後にこれは、詳しく述べることができなかったが、私の研究からみて、身体感覚というものはリモートと相性が悪い。身体知を伝承する人たちにとって、今回のコロナ禍のインパクトがいかほどのものか、とても心配だ。身体文化が先細らないように、必要なサポート体制を構造的に備える必要がある。

補遺

2021 年 8 月の立場から追記する。報告をしてから今までのあいだに変異ウイルスやワクチンなどが登場した。2020 年 12 月の時点では想像だにできなかった新たな展開である。日本でももはや、感染拡大防止を最重要とする生活ではなくなったように思う。

2021 年 1 月 10 日に私は再びフランスから日本に帰った。その日のフラン

スの感染者数は 15,994 人、日本は 1,494 人。関西国際空港ではリスク地域からやってきたことを示す赤い札を首にかけられ、出発前と空港到着時の 2 回の PCR 検査の後、2 週間自主隔離をした。2 週のあいだ、毎日保健所から状況確認の電話がかかってきた。最終日には今後の生活方針について訓示のようなものも受け、刑期を終えた囚人の気分になった。

今、コロナ禍に関して強く思うのは、数値化の危険である。もちろん状況を把握するために数値化することは極めて重要である。しかし、ひとたび数値化してしまうと、すべてが相対化される。より多いか少ないか、より危険かそうでないか。800 人に比べて 6,000 人は多い。同じように、8,000 人に比べて 60,000 人は多い。8,000 人から 60,000 人を見上げるとき、6,000 人のことは忘れている。結局数字は、それ自体で多いとか少ないとかは言えず、常に何かを基準にして、それに比べて多いか少ないか判断される。コロナ禍が始まって以来、毎日のニュースで数字が踊り、私たちは数字に踊らされている。その数字に基づいて恐怖を感じているのだから、やはりそれは相対的な恐怖だし、取られる措置も流動的だろう。しかし、それでいいのか。美学者の伊藤亜紗は、数字が人を見えなくすることの危険を指摘している。数字に余白はない。数字の網の目は、細かいようで粗い。客観的指数としての数字と、その網の目から落ちてしまう「何か」を、立ち止まって考える必要があるように思う。

参考文献一覧

» 伊藤亜紗編『「利他」とは何か』集英社新書、2021 年。
» 金谷武洋『日本語は敬語があって主語がない』光文社新書、2010 年。
» パウロ・ジョルダーノ、飯田亮介訳『コロナの時代の僕ら』早川書房、2020 年。
» 藤原辰史「パンデミックを生きる指針——歴史研究のアプローチ」WEB サイト「B 面の岩波新書」岩波新書編集部、2020 年。https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic（最終更新 2020 年 11 月 18 日、最終確認 2021 年 8 月 11 日）

面目を改める？
新型コロナウイルスと
ベルギーにおける日本学の現在と将来

アンドレアス・ニーハウス

本稿ではベルギーにおける日本研究と、コロナ危機がベルギーの大学に与えた影響について説明する。筆者が所属するゲント大学を例にとって、コロナ危機への対処方法や、この危機が教育や研究、今後の活動に与えた影響について述べる。ゲント大学日本学科の職員はコロナ危機にとりわけ悔しい思いをした。本学は 2020 年のヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の国際会議の開催地に選ばれ、約 1,000 人の参加者を見込んでいたからである。その後、EAJS の理事会は方針転換を余儀なくされ、会議は 2021 年にオンライン開催されることになったが、2023 年にはゲントでの開催が可能になるよう期待を寄せている。

まず、コロナ危機がゲント大学や日本学科、またベルギーの日本学に与えた影響についてだが、現在ベルギーには、BA と MA を取得できる日本研究学科が三つある。うち二つは 1970 年代に発足した歴史の長い学科で、フランドル地方のゲント大学とルーヴェン・カトリック大学（UCL）にある。どちらも大所帯の学科で、両大学合わせて 300 人以上の学生が在籍している。三つめは翻訳と通訳に重点を置いた学科で、ベルギーのフランス語圏にあるブリュッセル自由大学（ULB）にある。以上 3 学科のほか、やはりフランス語圏にあるリエージュ大学に、副専攻として日本語と日本哲学を学べる学科もある。ベルギーの大学で日本学を学ぶ学生の数は安定して増加傾向にあり、コロナ禍においても高い水準を維持している。中国学と日本学の受講者

数を比べると、日本学のほうが 3 ～ 4 倍多い。ゲント大学の昨年度の数字を紹介すると、日本研究の BAI プログラムには 62 人、BAI 日本語コースにはさらに多くの学生が登録したが、中国研究の BAI プログラムに登録した学生は 15 人だけだった。

高い受講率と翌年以降の継続受講率の安定性が幸いして、フランドル地方の教育機関における日本学の教授やスタッフの人数はここ数年で増加し、ブリュッセル自由大学は早稲田大学と連携した新しいプログラムの設立に向けて動いている。現在、ルーヴェン・カトリック大学の日本学の教授の人数は 3 名、ゲント大は 3 名である。

ベルギーの人材登用の特徴は国際色の豊かさにあり、現在、日本学を教える教授のうち 4 名がドイツ国籍、1 名がフランス国籍、1 名が日本国籍で、ベルギー国籍の教授は 1 名しかいない。ゲント大に新しく着任したアンナ・アンドレーヴァ教授はロシアのパスポートを持っている。

日本学の教授たちの研究内容に注目すると、研究対象がほぼ人文科学の分野に集中していることが分かる。ルーヴェン・カトリック大学では日本史、日韓の外交･政治史、日本の法律、ゲント大学では日本のスポーツ史、スポーツ社会学、身体史、思想・哲学史、宗教、医学史、リエージュ大学では中国哲学と日本哲学、ULB では言語学と言語習得が研究されている。このほか日本－ EU 関係の研究も行われている。

ここまでで、ベルギーにおける日本学の現状をざっと把握していただけただろうか。人口約 1,200 万人の国に日本学を学べる大学が四つあるのだから、まずまず結構な状況と思われるかもしれないが、ジェンダー研究などの人文科学を概して無用のものとみなしたり、研究の自由を脅かしたりする政治的脅威（日本だけの問題ではない）に加え、経済状況がベルギーの日本学におよぼす影響も、今後ますます拡大しそうだ。ベルギー政府は大学に回す予算の大幅削減を発表し、各学部は次の 5 カ年計画で職員数の削減を迫られている。政界からは小さな研究分野はたたんで大きな研究クラスターに統合せよという圧力が高まっている。過去には中国研究と日本研究をフランドルの一

大学に集約させるべきではないかという議論も起きた。

加えて、コロナの影響で増加した教育コスト全般を、少なくともゲント大学では、学部や学科が負担しなければならない。このような予算外のコストに圧迫され、学術活動はさらに減るだろうし、職員数の減少も視野に入れざるを得ない。だが、コロナ危機は大学にとって単なる財政危機にとどまるものではない。今までの教え方、研究の進め方、研究コミュニケーションのあり方にまで疑問を投げかけるものだ。

次に、ゲント大学の COVID-19 対応と、研究にも直接影響が出ている現状について述べる。これはゲント大学の話だが、ルーヴェン・カトリック大学も似たような状況下にある。フランドル地方の大学は、数十年前から教育の国際化を推進してきた。ゲント大学で交換留学を希望する学生の数は増える一方である（2018/19 年度に卒業した修士課程の学生 5,952 人のうち 1,385 人［23%］。日本学だけなら約 86%）。東洋言語・文化学の修士課程を含む一部のプログラムでは、ほとんどの学生が交換留学を希望する。

このため、ゲント大学は世界中のパートナー機関と連携している（日本にも日本学のパートナー大学が 17 校ある）。コロナ危機が顕在化しつつあった 2020 年 1 月末、ウイルスは中国の一地方で拡散していただけでなく、他の国でも拡散の初期段階にあった。最初はゲント大学からそう遠くない中東で、続いてゲント大のキャンパスがある韓国の仁川で感染が発生した。危機が急迫したのは 2 月後半、イタリアでアウトブレイクが起きた時だ。数カ国で防疫措置が始まり、影響を受けた地域の大学は休講または学期再開の延期措置を取った。

ゲント大学はめまぐるしく変化する状況に合わせて渡航方針を調整し続けた。学生たちは大学側のやり方に失望し、時には理解できず、怒りさえも覚えた。外務省の危険情報が発令された国や地域、また学術活動が不可能になった（授業がオンラインに限定されるなどにより）国や地域への渡航許可が下りなくなったからである。職員に関しては、特別なケースで、なおかつ学長

の許可を得た場合に限り出張許可が下りる状況が続いている。日本学科でも日本訪問の中止を余儀なくされた。この訪問はゲント市とゲント大学の合同ミッションで、市長と副学部長が姉妹都市の金沢で二つの展覧会（うち一つはゲントの交換留学生による写真展）を開催し、東京では同窓会の分会を開き、大使館でイベントを行い、パートナー大学や日文研をはじめとする研究機関を訪問する予定であった。これらの活動は中止または延期された。

ゲント大学に滞在していた留学生や研究者は、母国に帰国できないことを不安がるようになった。海外でのミッションや留学をキャンセルせざるを得ないケースが目に見えて増えた。たとえば、日本人交換留学生は全員、日本の大学から呼び戻された。

ベルギーにもパンデミックの嵐が吹き荒れ、深刻な影響を及ぼした。第2波の間にヨーロッパで最悪の感染率を記録し、2020年11月には死亡者数が1万人を超えた。ただし、それ以前の2020年3月時点ですでにコロナ危機は大学の全機能に影響をおよぼす脅威となっていたのである。

フランドル地方の各大学の学長は、3月の第2週にはかなり思い切った対策を講じた。ゲント大学は3月16日に「対面授業」から「オンライン」へ、ほぼ全面的な切り替えを行った。キャンパスから学生の姿が消え、学食やスポーツ施設は閉鎖され、学生団体も直ちにあらゆる活動を中止した。教職員にとってはテレワークが日常になった。9,000人以上いる教職員のうち、学内で働く職員の数は、平均わずか200人にまで絞られた。テレワークに切り替えられる業務がないため退職せざるを得なかった職員がいた一方、授業の記録やストリーミング配信、ITインフラの調整や新しいソフトウェアの導入、研究活動の再編成などの業務に追われて残業を余儀なくされた職員もいた。同時期、国全体がロックダウンに入った。当初は4月3日（ベルギーのイースター休暇の開始日）までの予定だったが、その後、何度も延長された。

学年末が近づく頃には、このパンデミックの早期収束の望みが薄いことが明らかになり始めていた。大学の2020/2021年度は、対面授業とオンライン授業が混在する体制で始まったが、10月19日にはオレンジコード（感染リ

スク中程度）からレッドコード（感染リスク高）に引き上げられ、再びオンライン授業が主流になった。同時期、国レベルでは、レストランやカフェが再度の休業を余儀なくされた。フランドル地方の大学は第 1 波の間に活動を調整したが、ルーヴェン・カトリック大学のように 10 月になってもオンライン授業に切り替えなかった大学もあった。

コロナ危機は確実に、学者、講師、事務職員の職業生活に大きな影響を及ぼした。彼らはロックダウンの渦中にあって危機管理や学期途中でのオンライン授業への切り替え、年度や試験日程の再編成、交流プログラムの再編成など、柔軟性と創造性を求められる仕事に当たらねばならなかったうえ、仕事量は大幅に増えたため、精神的な重圧を感じていた。ただし、学術スタッフに限っていえば、授業を持つ職員や、管理職の立場にある職員が、メールボックスからあふれるほど大量の仕事が押し寄せてきたと感じていた一方、これを好機と捉えて研究に専念できる職員もいた。また、幼い子どもがいる職員は、学校や保育園が一律で休校や休園になったため、仕事と私生活の両立が困難になったと感じていた。高齢者などハイリスクの親族がいる職員も、同じことを感じていた。

最近の研究で、コロナ危機の精神的影響は若い世代ほど深刻であることが明らかになったが、学部や教育プログラムはコロナ関連の検査の開始直後から、学生のメンタルヘルス問題の増加を警告していた。たとえば、芸術哲学科は 3 月中旬には交換留学の中止を決めたが、これが発表されると一部の学生は深刻なフラストレーションやストレス、不安など精神的な不調に陥り、メンタルヘルスチームがグループカウンセリングを実施しなければならなかった。特に日本学科の学生は、交換留学の中止が原因で心理的な問題を抱えたことが明らかになった。

さらに、学生間の不平等を増大させるというオンライン授業のリスクも顕在化した。すべての学生が安定したインターネット環境、適切なコンピュータ機器、学習用の個室などを持っているわけではない。家庭内の平穏については言わずもがなだ。これは間違いなくすべての大学が注目せねばならない

テーマであり、コロナ危機が社会的・経済的に困難な状況にいる学生や、健康問題を抱える学生の排除につながらないような対策が必要だ。ベルギーだけでなくオランダでも、日本学を学ぶ学生は、このグループに属している傾向が強いようである。ゲント大学だけでなくルーヴェン・カトリック大学でも、日本研究の学生は、哲学部の平均的な学生よりも学習カウンセラーに相談する頻度が高い。

コロナ危機は、実に広範囲にわたるジレンマを突きつけ、見直しを迫っているが、日本研究のような国際的なプログラムにおいては特にこの傾向が顕著である。

> ①学生や講師の流動化を最大の特徴とするグローバル化の方針は、コロナ危機に照らしてもなお、是であるといえるのか。大勢の学生の受け入れと送り出しを続けることは許容できるリスクなのか、それとも恒久的な “internationalisation@home” 構想へ舵を切るべきなのか。さらに今後は “@home” という言葉が文字どおりの意味になる可能性まで考慮すべきではないか。たとえば、パートナー大学の学生の受講をもっと容易にすべきではないか。そのためには交換留学の定義を再考し、双方の協定内容を見直さなければならない。
> ②どうすれば、安全かつ持続可能で有意義な学術交流が行えるのか。この問題は、すでに提起した持続可能性の懸念にもつながる。地球の反対側から講演者を招いてたった 2 日間の会議を開催することに、どれほどの意義と影響があるのだろうか。
> ③まだキャリアが浅く、学会やワークショップで発表や議論をする機会の少ない若手研究者をどのように支援するのか。
> ④自分たちの研究をどのように進めていくのか。最近、フィールドワークを行っている私の同僚数人が *Nature Ecology & Evolution* 誌にフィールドワークの将来に関する論文を発表したが、そのなかで彼らが求め

ているのは制度的・財政的・技術的な変化である。他の研究分野でも同じことが当てはまるだろう[1)]。

⑤授業の質をどのように保証するのか。オンライン授業への突然の切り替えによって、デジタル化が必ずしも万能の解決策ではないことが明らかになった。また、言語の習得には対面授業やキャンパスでの演習が欠かせないことも証明された。

以上は、現在日本学が直面している課題の一部に過ぎず、筆者もこれらの課題のすべてに対して答えやアイデアを持っているわけではない。しかし、国際日本文化研究センター（日文研）、「国際日本研究」コンソーシアム、アジア研究協会（AAS）、EAJS などの国際的な研究組織は、日本研究の将来を共に考え、重要な役割を果たさなくてはならない。これらの組織は、将来を見すえたアイデアを生み出すためのロビーグループやハブとして機能しなくてはならない。個人的な経験から言わせていただくと、せっかく日本学の将来について会議やワークショップが開催されても、善かれと思ってなされた提案が熱心な一個人の思いつきと片付けられ、その場限りで立ち消えになってしまうことが多いように思われる。その主な原因は、煩雑な事務手続きや難解なルール、枠にとらわれない発想への意欲を萎縮させてしまう組織内外のヒエラルキーではないか。要するに筆者が求めているのは組織間の気軽な連携と、事務手続きの削減、ヒエラルキーの解体だが、これらはとくに独創的なアイデアというわけではない。最後に強調しておきたいのは、私たちはコロナ以前の日常への回帰を望むべきではないということだ。現在のウイルスが最後のウイルスというわけではないのだから。

杉田玄白は「面目を改める」という言葉を使って、身体を単に見るだけではなく、まったく異なる視点から見直すという新しい手法を説明した。私たちも、教え方、学び方、伝え方、研究の仕方を根本的に見直す時期に来ているのかもしれない。

1 E.M.L. Scerri, D. Kühnert, J. Blinkhorn, et al. “Field-based sciences must transform in response to COVID-19,” *Nature Ecology & Evolution* 4 (2020): 1571–1574. J.R. Paula. “Lockdowns due to COVID-19 threaten PhD students’ and early-career researchers’ careers,” *Nature Ecology & Evolution* 4 (2020): 999. B. Maas, K. E. Grogan, Y. Chirango, et al. “Academic leaders must support inclusive scientific communities during COVID-19,” *Nature Ecology & Evolution* 4 (2020): 997–998.

「良心」を考える

マルクス・リュッターマン

はじめに

当学術交流会議の課題を受け、コロナおよび文化研究との接点について考察を深めるにあたって、診療所、病院などの現場での問題が特に気になった。そもそも注目していた詞（ことば）であり、疫病への対処でよく目についた「良心」について考えてみたい。きっかけは、あまねく報道されたトリアージという問題である。治療の優先度によって、患者を選ぶこと。順位の難しい判断には籤（くじ）に任せる例もあったようだが、是非の合理判断が望ましいため、なるべく納得ゆく基準を求めて、患者の手当て順番を決定する努力が、医療関係者の心を苦しめ、疲労させた。コロナ危機で端的な情報はイタリアから届いたし、中国やベルギーをはじめ、諸国において、そして日本も含めてトリアージが行われていた。医学的な倫理観には本来、良心概念が不可欠であるといってよい。手術や、手当て、診断などの必要性や、情報提供、相談の内容をめぐって、比較的頻繁にジレンマに近い決断を迫られる。最近、日本では妊産婦の病院たらい回しが話題になった。誰を先にという判断基準そのものが重要な倫理問題であり、現場では「良心」的に対処している。そして個々の利害を主張するものに対して倫理的規範が守られ、問題解決に添った専門知識と判断の自由が保障されることが期待され、一定の教養、訓練、公平感および正義感も求められている。かくして、医療のみならず、近代社会ではいわゆる「良心」が法典にまで浸透しているコンセプトとして定着。「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない」、このように日本国憲法にも見え、多くの国の基本法に記されている[1)]。本論ではとりわけ個人的判断の自由を重視したく、精神的基盤たる「良心」の性質を見ていく。

ところで、個人的な話を許されるなら、私の履歴から語りたいと思う。17歳の頃、西ドイツには兵役があった。父も兵隊による国防の必要性を重視していた。国と父親とに対して私は反対意見を表明して、二方面の葛藤に苦慮していた。結局、憲法による保障に甘えて、兵役の義務を免除されるよう、連邦軍に拒否届け出をした[2)]。最終的にいわゆる「良心検査」（Gewissensprüfung）を裁判官によって受けることとなった。なぜ兵役を拒否しているのか、その裏付けまでが求められた。兵役という強制そのものをどう思うかはさておいて、ここで注目したいのは、ナチスの暴政を経験した国、その反省を徹底させようとした連邦共和国が憲法（厳密には「基本法」と呼ぶ）によって「良心」に基づいて個人が判断して主張する拒否権を保障していた事実である。さようにして近代国家の多くでは「良心」という詞と多岐にわたって出会うようになった。たとえば、議員の議会の場などにおける可否判断、あるいは消費者としての商品購入の判断、あるいは原子力発電所の作動や温暖化対策についての意見形成、あるいは、開戦参戦問題など、いろいろな場で「良心」による判断力が問われている。予期し難い事故の場合はなおさらのこと。コロナの危機のように、医学などでも専門家の人数や施設の容量が不足すれば、手術優先の患者選定というジレンマでまたとない善悪、是非、可否の判断力を要する。

さて、普遍概念としての conscientia[3)] をラテン語のままで共有されればよいと、あるいは適切な詞を探って、それぞれの言語に当てた方がよいと、大きな思想概念の議論がここですでに分かれる。しかし、いったん概念の普遍性を信じる主体がいれば、何らかの形で表現を拾って合わせる歴史もあらゆる言語で起きている。下記でまた触れるが、聖書をはじめ、各教理が伝播するにしたがって欧州の各言語で conscientia が翻訳され、そして多くの概念と組み合わされて近世の宗教や啓蒙思想を経て世界で受容された経緯がある。もちろん、conceptus（「概念」）自体もこのような経緯に乗ってきた[4)]。対して英語の場合、conscience や concept はいずれも原義のままである。ラテン語の conscientia という概念はあえて言えば、「共に智（さと）る」という意味だが、

現在一般的に採用されている訳語は「良心」である。「共に智る」とは果たして普遍的なものであるか。この概念に適う、日本語の自発語があるか。伝来語として特定できる適切な詞がほかにあるか。もしあるなら、比較しても「良心」が妥当な訳語か。これらの問いをかけて、確認したい。

1．概念由来について

人間は不安になり、良し悪しをめぐる悩みを覚える。このような内省は特定の文化圏に由来しているとは思えない。たとえば、ハンナ・アーレントは政治行動論[5]のなかでソクラテスが「神霊の様」＝「ダイモーンの印」（ダイモニオン）を感じた事実[6]を指摘している。この感覚を聴覚に准（なぞら）え、「ダイモーンの声」という。つまりは過失を予言して、その回避を勧告する心内（現代でいえば脳）の何らかの認識的働きを指している。進化過程の各レベル、人間文化の諸地域でおそらくこのような内省に馴染みはあるし、表現もいろいろと当てはめていると思われる。あえて言えば日本語の表現「気が咎める」も、ルソーの「心内の声」（la voix de l'âme）[7]も、その類に入るかと思われる。しかし、言語の発展にしたがって、理性的な自覚および具体的な理解が深まり、表現が複雑に伝来している現在、もっと細かく見る必要がある。なぜなら近代の政治思想を中心に公論が展開するにつれて、世界で思想の伝統が強く欧州の流れを汲み、その概念の体系も採用し、特定のニュアンスも連想するようになったからである。なおかつ、古くから多岐にわたって伝わっていた単語を借りて翻訳語として使用しているからである。

欧州の流れといえば、キリスト教の聖書では「最後の審判」は閻魔大王御前の天門のように准えられている。個人は存命中にはおのずと自身の行為の証人となり、最後は裁判所への出頭を免れない。その様は、罪の意識を伴っている[8]。conscientia は心内の証人との語り合いを意味し、行動主体の自我に対して「共に智る」自我を指す。キリスト教の詳細は割愛するが[9]、個人の道徳的能力（判断力）の有無についてのアベラールの説によれば、罪の意識が無ければ、罪を犯すことすらありえないという見解が特に注目に値す

る。ここでは「心内の声」はある権威（主に神）を仰いで内省することをいい、その最も著名な表現が各地の宗教対立、改宗運動（とりわけマルティン・ルター）[10]、およびその反動[11]に現れている。権力が確信に強制を加えても、理念を変えられないという抵抗の声が各地で上がった結果、啓蒙教訓書の類でも信仰の内面的判断が個人の心内に位置づけられ、それぞれの悩みや考えが葛藤・拮抗し、量られ、審判を受けるかのように擬えられている。そして、害してはいけない内心、保護すべき自主諮問の場たる「智識」（Gewissen、訳語の「良心」のこと）と呼ばれている（メリサンテス[12]）。とりわけ、宗教改革の教理や神学において伝播した結果[13]、「智識＝良心」を「神と共有する智識」と解釈された。結局は「智識の宗教」＝「良心の宗教」（“Gewissensreligion”）と自称し[14]、「福音派キリスト教徒の特質」と自負している[15]。

ちなみに、罪と恥とを対照した場合、前者を悪行を犯したという理性的判断とし、後者を不快な心地とするかと思われる。しかし、そのいずれかにより文化を性格づける見解にしたがって、東洋（もっぱら日本文化）を恥の文化と指定し、対する西洋の文化を罪でもって特徴づける仮説が絶え間なく議論されるなか、良心問題を罪概念と離れがたくセットにして見る（かえって恥の良心との縁が薄いとする）学風も注目に値する[16]。この対照的見方の妥当性についてはここで議論する余裕はないが、「智識＝良心」も「罪」も心性・情緒を支配し、西洋の同一観念を生み出すのに加担する一齣に相違ない。

かくして「最後の審判」に系統的に由来すると描かれる[17]伝承が近代思想につながっている。カントはその著名な『人倫の形而上学の基礎づけ』[18]で人類の普遍的基準（kategorischer Imperativ、定言的命令）を提唱したうえで、個人がその基準に沿って是非を心内で量る主体を「智識」（＝「良心」）として捉え、心内の裁判所（innerer Gerichtshof）という比喩で描いている[19]。一般にこの基準は黄金律とも呼ばれるが、ここでの特徴は神や自我の好み、望みをもとに、他人にもそれに基づく幸運を願う姿勢にあるばかりではなく、

自我を超越して、全人類に当てはまりうる普遍性にある。このような定言的命令によって、人は他人を手段に使うことなく、他人の生まれたままの自主的品位（Würde）を尊重することにつながっている。自主的品位の原理をもって普遍の保障を思い描いた。

したがって、自らの行為を絶え間なく「智識」（良心）の裁判に掲げて普遍的基準を省みるという理想がプロテスタントの教派から形而上学的な理想主義に継承されたという見解が根強い。一方、同じような原理は実用的な政治思想（プラグマティズム）、いわば政治行動史においても認められる。ジョン・ミルトンなどは王の主権を法的に限定し、貴族身分や都市共同体の自由概念の実践的採用を受けて[20]、一部の個人男性の市民権を経て、身分に関わりなく、害すべからざる普遍的人権へと論理的に拡大した意味が大きい。根本権利を理由とする抵抗権などを裏付けるに個人の「良心」（conscience）による判断力を重視し[21]、これをあたかも「共に歩む者」のごとく捉えている[22]。実際、英国の貴族や、ヴァージニア州が先鞭をつけた北アメリカの殖民地 13 州の市民[23]やフランス共和国[24]の国家市民に、そしてその挙句、個人に普遍的で根本的な権利（fundamental rights）に基づいた思想、規範、法律において抵抗権も認められた経緯がある。その品の低い自我に対して品の高い自我が諮問する想定において、前者が後者に「答え」を表現しなければ通れない。responsibility の語意は、まさにこの答える能力にある。そして同様に、同じ普遍的基準に沿った諮問と想定されているからこそ、基本権は国家によって保障され、裁判でも提訴の対象になりうるという論理が徐々に打ち出された。つまり、「良心」などは普遍的なものであると主張されたかも知れないが、「自由」「平等」「普遍」「三権分立」「多数決定」「民主」「抵抗権」「少数派の権利」その他の概念から構成されて、そして必ずや連想されている体系と文脈から外し難く、優れて欧州的な形成過程を遂げた歴史があるように見受けられる。よって、日本や中国、朝鮮半島などでは、もともとは上記の過程の主体として位置づけられていない文化で一連の概念が受容され、なおかつ別の体系と文脈に根ざす語意に翻訳されているので、「良心」

という単語の少なくも二重に使用される複雑さを見逃してはいけない。単純に言い換えれば、近世・近代における東洋の多くの概念では、各々の言語の単語と漢字用語、いわば漢字文化圏外（西洋など）由来と漢字文化圏内（東洋）由来が混在するため、訳語の意味と妥当性を検討するには意義があると思われる。

2.「良心」の意味と訳語としての妥当性の検討

現在多用される「共に智る」というコンセプトは、西洋で形成されたものである。漢字文化圏に導入され、「良心」という訳語として普及した。しかし、「良い心」は漢字文化圏の伝承のなかから選び取られた。確認は未だ不十分だが、たとえば西周は、1868（慶応 4）年刊の『万国公法』においてconscience を「独知」と訳し[25]、中村正直は 1871（明治 4）年刊の『西国立志篇』において「良心」と訳した[26]。詞の選択の根拠はまだ分からないが、妥当な選択であったのだろうか。

上記で見たように、なかんずくジレンマのような局面、選択の判断を迫られた際、機械的に行動するのではなく、理性で個人が教育や育成、理念と信仰、道徳と法律などの条件や規範の影響によって形成した基準を掲げて決断する行為は、人類文化のいたるところで認められる。是非を分別する行為の一特徴は、一定の躊躇（retardation ＝延期）であると思われる。一考から熟考まで、躊躇期の長短はあるが、軍配をどちらへ上げるか悩む（思い患う）。先述の傍でダイモニオンの語り、「最後の審判」、閻魔王の記録、黄金律などに触れたように、自我の心の内の是非判断に伴う葛藤もしくは拮抗するモチーフは特定の文化の系譜に限らない。知名度はともあれ、世界の多くの語りものや理論には類似のモチーフが伝わっていると思われる。

たとえば、『平家物語』の「敦盛の最期」[27] が著名な描写を宿している。熊谷次郎直実という主人公は敵方敦盛を「助けたてまつらばや」と言いながら、仲間が襲って来る戦局にあっては、卑しい彼らの手によって亡くなるより、私熊谷の手によって亡くなるほうが敦盛の恥にならない、とする。

「心苦しゅうこそ思うに」と言って、「図らずも」頸に刃を当てて、殺さざるを得ない。その挙句、罪の意識を深くして、「熊谷が発心の思ひは進みけれ」と仏教的な反省（「懺悔」）に至り、出家する。幸若舞、古状揃などのなかでこのストーリーが再生され、伝承され、社会的に普及してきた。それに伴いモチーフの普遍化、一般化も見られる。ちなみに、熊谷の晩年の悔いはいかにもドイツの三十年戦争を描く『冒険者ジンプリチシムス』（*Der abenteuerliche Simplicissimus*）[28] などの話に似ている。「懺悔」をここでは「神様御面前の決算報告」（vor Gottes Angesicht [...] Rechenschaft）という。

または契沖の仮名遣い研究（『和字正濫要略』）において、「私無き」研究に触れているところ[29]、「古書をひきて証すること」を方法に（『禮記』の三王の徳のように）非私的な学問（現代でいえば objectivity、客観主義）の理想を立てた。ここもまた研究者の贔屓に対して、我心を超越する基準を据えながら、古語の本義を解釈する場にあたって、分析的な判断を和学者に求めている。そこで証拠によって、判断力、そして正しい正しくないという分別の重要性を訴えている。このように高い理想に叶わない謙遜から歌学書を『厚顔抄』と名付けたこともある。

最後の例として、荘子の『斉物論』[30] を取り上げたい。聖人の理想を掲げて、認識の是非を弁ずる箇所が内面的な問答のように描かれる。議論の主旨では、「相知」ることは無理であるということで、是非の分別、客観的に正しい判断の裏付けは得難いと結ぶ。人間の智識では、常に最終的な判断を保留しなければならないと。つまり、認識過程において判断を retardation（躊躇）という性質で特徴づけたが、躊躇を究極的に suspension（保留）に拡大し、時間かつ空間的延びを「無竟」や「忘年」にまで極めている。なお、是非の超越問題は『摩訶止観』などとの関連性も見逃せないが、ここでは割愛する。

以上三例を取り上げて、「良心」（「智識」「共に智る」）の間接的描写として読んでみた。戦局の罪をめぐる懺悔、引用の裏付けでもって古典の語義を義する論理、是非判断の暫定性（最終的に判断を保留すること）のそれぞれを、良心の患いとして読み捉えられると思われる。

なお、「良心」という言葉自体の典拠は『孟子』にあり、いわゆる性善を説く著名な箇所である[31)]。

> 孟子曰：「牛山之木嘗美矣，以其郊於大國也，斧斤伐之，可以為美乎？是其日夜之所息，雨露之所潤，非無萌櫱之生焉，牛羊又從而牧之，是以若彼濯濯也。人見其濯濯也，以為未嘗有材焉，此豈山之性也哉？雖存乎人者，豈無仁義之心哉？其所以放其良心者，亦猶斧斤之於木也，旦旦而伐之，可以為美乎？其日夜之所息，平旦之氣，其好惡與人相近也者幾希，則其旦晝之所為，有梏亡之矣。梏之反覆，則其夜氣不足以存；夜氣不足以存，則其違禽獸不遠矣。人見其禽獸也，而以為未嘗有才焉者，是豈人之情也哉？故苟得其養，無物不長；苟失其養，無物不消。孔子曰：『操則存，舍則亡；出入無時，莫知其鄉。』惟心之謂與？」

これによれば「良心」というものは、もともと木が山で美しく生えるように、ほとんどの人に与えられたものとして、妨げなければ、きれいに育つ。もともと人間の情も発達し、立派になる。もし環境が悪ければ、あまり育たないかもしれないとはいえ、「良心」は先天的に与えられたものである。言い換えれば「良心」とは、木のように生えて伸び、人生の軌道を決め、仁義の心も山林のように立派に現れてくる様が本質である。不幸にも、孟子の王陽明などによる受容や、その展開の歴史においても、現代訳語の「良心」を逆訳することが見かけられるが[32)]、この思想はあくまでも “good (original) heart”（「良心」）の議論にすぎない[33)]。

果たして、ここでいう「良心」の性善説が「共に智る」という意味の conscientia の訳語として十分機能しているのだろうか。「良心」は「ダイモーンの声」に当たるのだろうか。ルソーの「心内の声」のようなものだろうか。裁判に准えられた是非判断の思い煩いを意味しているのだろうか。判断力と答える能力を指す言葉になるのだろうか。

先述のメリサンテスは Gewissen ＝ conscientia というものを、神が鏡のよ

うに反映され、自我の行動に伴う評価、あるいは価値づける知識のように捉えている。啓蒙思想では、神が何らかの内面的な権威か、あるいは理想的基準（たとえば、著名な定言的命令）に置き換えられた。これは是非の判断、善し悪しの判断、真実か無実かという分別や理性を指すものとして、結果的に個人の心内で弁じ合うことを指している。いわば対話的であり、問答のようなものであり、個人の意識内の祈りのようである。権威とのやりとりがあり、必然的に答える能力が付いてくる。答える能力をresponsibilityという。『孟子』による「良心」は自然発生の傾向で、木に擬えられている。自然環境によって枯れても、このメンタルな傾向を果たして自我の行動に伴う声、「共に智る」もう一人の自我と同等に扱えられるだろうか。むしろ、性善と逆に人心は先天的に悪いと想定しても、「共に智る」自我がありうるので、「性」の議論とは別に位置づけるべきではないか。そこで是非を弁える能力を端的に表現する概念は『孟子』で提唱されるか確認してみれば、いわゆる四端説が目につく[34]。

> 由是觀之、無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無辭讓之心、非人也。無是非之心、非人也。惻隱之心，仁之端也；羞惡之心，義之端也；辭讓之心，禮之端也；是非之心，智之端也。人之有是四端也，猶其有四體也。有是四端而自謂不能者，自賊者也；謂其君不能者，賊其君者也。凡有四端於我者、知皆擴而充之矣。若火之始然、泉之始達。苟能充之、足以保四海苟不充之、不足以事父母。

『孟子』の四端説では、人間の「心」（たましい）の働きを論じて、惻隱は同情・慈悲（仁）をいい、羞悪は廉恥・恥じ（義）をいい、辞譲は譲り合い（禮）の心理を意味している模様。そして是非もしくは良し悪しを分別し、発揮する能力を「智」であるという。『孟子』によれば、是非之心は普遍的な能力であり、理想的な権威は聖人に例えられている。このような能力を蓄えて、徳を身につけようとする人間を「大丈夫」という。ちなみに「大丈夫」

の主体について、伊藤仁斎の解釈では普遍的に人間（民衆・庶民）を想定したのに対し、荻生徂徠は指導層のような官僚を想定したようで、その普遍性を問うようである。このような人類の普遍主義問題はさておき、心内の聖人と共に歩く「大丈夫」を「共に智る」者として捉えてみれば、性善説まで従わなくても、是非の判断力は十分成り立つので、訳語として「良心」よりは、「是非」を分別するこころ、すなわち「智」を提唱した方が相応しいかも知れない。

結びに代えて――「共に智る」＝ conscientia の普遍性について

「良心」と翻訳された語について考えるとき、「智」という概念を借りて捉えやすいという小論の結論に次いで、普遍概念の問題へと視野を広げて考えてみたい。二点を確認しなければならないと思われる。一つには、conscientia は普遍的な概念なのか。普遍的であれば、何によって特定できるか。そして、特定が可能なら、果たして一単語でもって包括する必要があるのか。あるいは、語り物のように、個体の描写におけるいくつかの具体的表現も普遍的な概念として十分に資するのか。これは文化比較においての普遍概念の議論（universalism、普遍主義においての位置づけ）として要確認であると思う。二点目は、人間文化において普遍の有無を確認しても、かかる記号が実在するものを指すのか、あるいは仮に便宜上の表現に過ぎないかという確認も必要であると思われる。つまり、唯名論（nominalism）という問題である。もし、対象の言葉が唯名であって、その実在が二次的であればこそ、視角によって評価は多様に分かれ、共通概念をつくること、ひいては訳することも優れて難しいと思われる。したがって、欧州の思想家が主張するように、conscientia は普遍的な価値なのか。さらに、conscientia は実在なのか、ただのネーミングなのか。もし普遍的でない唯名を普遍的と提唱すれば、見解の暴力性（権力）も救済性（解放・自由）も絡んでくると思うが、いずれにしても訳語の選定はいっそう難しい課題となろう。「神」「人権」「正義」「真実」「善」「自由」「平等」「客観」などのように、定着の訳語「良心」（＝私が優先したい「智」）もフィクション的なアイデアを指す記号に過ぎない

かもしれないが、もしこの訳語の「良心」が伝来の語意とずれてしまうなら、このようなずれをきちんと自覚する必要があろう。conscientia の概念形成論にあたって、間接表現や描写の多元的伝統も、論理的形跡も、由来論を相対化し、あたかも西洋思想出現のような歴史記述を越えていくような必要を信じ、小論で世界史記述に貢献する前提として、伝来を確認する作業中、誤解を招きかねない訳語を別語に変える仕事も不可欠だと思う。

良心＝智につき、表意の自由や抵抗権につながる伝承は必然的であるか。聖人の普遍性が庶民の普遍性へと広がるべきか、あるいは、ただのエリートの特質に限定される見解も妥当か。是非判断の保留や放置の傾向がよいと思われる局面、よくないと思われる事情。あるいは、責任感、答える能力を求めるべきか、あるいは正しいことが人間には最後まで分からないというような、消極的な見方に傾いて、答えに疲れて「忘年忘義」というふうに無竟、天倪（てんげい）に任せて、議論を止めることが許されるのか。諸々の要素をめぐり、各分野において理論の地が大いに余っていると思われる。

1　日本国憲法第 19 条。1946（昭和 21）年の『日本国憲法マッカーサー草案』第 18 条も参照。ドイツ連邦国基本法によれば、国会議員の判断では最終的に良心にのみ従うべしという原理が保障されている。“(1) Die Abgeordneten des Deutschen Bundestages werden in allgemeiner, unmittelbarer, freier, gleicher und geheimer Wahl gewählt. Sie sind Vertreter des ganzen Volkes, an Aufträge und Weisungen nicht gebunden und nur ihrem Gewissen unterworfen.” GG (= Grundgesetz), Art. 38.

2　未成年であることを理由に受理を断られたため、裁判を起こした結果、拒否届を公認された。本来連邦軍が実施する受理後の検査も、ひき続き裁判所にて行われた。

3　これもまた、由来は古代ギリシャ語の *syneidēsis* にある。

4　conceptus は、独語では中世神秘思想者マイスター・エックハルトによって Begriff と訳された。

5　Hannah Arendt. *The Human Condition*. Chicago, IL: The University of Chicago Press 1998, pp. 159–60. See Trevor Tchir. *Hannah Arendt's Theory of Political Action: Daimonic Disclosure of the 'Who*.' Cham, CH: Palgrave MacMillan, 2017. Jennifer Gaffney. “The *Daimon* as Metaphor: Naming the Ground of the ‘Who’ in Arendt’s Theory of Political Action,” *Existenz* 14/2 (2019), pp. 80–82.

6 『ソクラテスの弁明』『パイドロス』『クリトン』を中心とするプラトンの諸作品や、プルタルコス著『ソクラテスのダイモニオンについて』の伝説に基づく。田中龍山『ソクラテスのダイモニオンについて―神霊に憑かれた哲学者―』（晃洋書房、2019 年）参照。

7 ジャン = ジャック・ルソー（1712–78）の「心内の声」＝「魂の声」も参照。Jean Jacques Rousseau. *Émile* IV, 1762: “La conscience est la voix de l’âme, les passions sont la voix du corps.”

8 Boris Hennig. “Schuld und Gewissen bei Abelard,” *Dialektik* 2003/1, pp. 129–43.

9 パウロ (『ローマの信徒への手紙』8, 18–25); アウグスティヌス (『神の国』20) ; 偽アンブロシウス（Ambrosiaster）『悔いについて』（De paenitate）4; ピエール・アベラール『倫理学』37, 2; 45, 5; 63, 9。

10 Martin Luther. *Von weltlicher Obrigkeit, wie weit man ihr Gehorsam schuldig ist*, Hauptstück, p. 264. “Zum Glauben kann und soll man niemand zwingen...Gedanken sind zollfrei. Was solls denn nun, daß sie die Menschen im Herzen zu glauben zwingen wollen, obwohl sie sehen, daß es unmöglich ist? Sie treiben damit die schwachen Gewissen mit Gewalt dazu, zu lügen, zu verleugnen und anders zu reden, als sie es im Herzen meinen und beladen sich selbst so mit greulichen fremden Sünden. Denn alle die Lügen und falschen Bekenntnisse, die solch schwache Gewissen tun, fallen zurück auf den, der sie erzwingt.”（要約すると、人の考えは無税の取引と同様、「自由」であり、世俗的強制による干渉は無理であり、強制を加えることによって個人の弱々しい意識に対して信仰の否定や転倒につながり、その証言を奪っても、それが偽りになり、甲斐がない。）

11 たとえば、トマス・モア（Sir Thomas More, 1478–1535）が王に対して所属は認める一方、神への隷属が絶対優先であることを主張した伝説など。

12 Melissantes (= Johann Gottfried Gregorii) 著作の君主の鑑（*Fürstenspiegel*）のように。*Curieuser Affecten-Spiegel*. Frankfurt am Main, Leipzig, 1715, pp. 57, 251 (“damit man das Gewissen nicht verletze”).

13 Amesius. *De conscientia et eius jure vel casibus*, 1630. Friedrich Balduinus. *De casibus conscientiae*, Wittenberg, 1628. J. Stolterfoth. *Bericht vom Gewissen*. Lübeck, 1654. Friedrich Schleiermacher. *Der christliche Glaube. Nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt*, Berlin: G. Reimer, 1821/22: 83, 1. Et al.

14 Karl Holl. *Geschichtliche Aufsätze zur Kirchengeschichte I*. Luther (3. Der Neubau der Sittlichkeit. 8. Die Kulturbedeutung der Reformation), Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1921.

15 Martin Rade (1857–1940): “ein Sondergut evangelischer Christen,” “Mitwisserschaft mit Gott.” “Das Gewissen des evangelischen Theologen. Vortrag, auf der Theologischen Konferenz in Treysa am 16. Juli 1912 gehalten,” *Zeitschrift für Theologie und Kirche* 22–5 (1912), pp. 273–92. Gerhard Krause et Gerhard Müller (eds.). *Gesellschaft / Gesellschaft und Christentum VI—Gottesbeweise* (Theologische Realenzyklopädie, Bd. 13). Berlin / New York: de Gruyter, 1984, p. 228.

16 Ruth Benedict. *The Chrysanthemum and the Sword*. Boston: Houghton Mifflin Co., 1946, pp. 222–24. Boris Hennig. “Schuld und Gewissen bei Abelard.”

17 伝承にたよらずに、人類の意識進化によって発生する可能性があるにもかかわらず。

18 Immanuel Kant. *Kritik der praktischen Vernunft. Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* (Werk-ausgabe, Bd. 7). Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1977, p. 51. いわゆる黄金律に似通う性質がよく指摘されている。黄金律は実に普遍的に認められる倫理である。たとえば『論語』第 12 章（顔淵）2 の跋文（「己所不欲，勿施於人」）参照。https://ctext.org/analects/yan-yuan（最終アクセス：2021 年 10 月 15 日）。
仲弓問仁。子曰：「出門如見大賓，使民如承大祭。己所不欲，勿施於人。在邦無怨，在家無怨」。仲弓曰：「雍雖不敏，請事斯語矣」。Zhong Gong asked about perfect virtue. The Master said, “It is, when you go abroad, to behave to every one as if you were receiving a great guest; to employ the people as if you were assisting at a great sacrifice; not to do to others as you would not wish done to yourself; to have no murmuring against you in the country, and none in the family.” Zhong Gong said, “Though I am deficient in intelligence and vigor, I will make it my business to practice this lesson.”

19 *Die Metaphysik der Sitten* (hg. v. Wilhelm Weischedel, Werkausgabe Bd. 8). Frankfurt a.M.: Suhrkamp, 1977, p. 572 (“Das Bewußtsein eines inneren Gerichtshofes im Menschen (»vor welchem sich seine Gedanken einander verklagen oder entschuldigen«) ist das Gewissen.” Die Metaphysik der Sitten. Des zweiten Hauptstücks erster Abschnitt. Von der Pflicht des Menschen gegen sich selbst, als dem angebornen Richter über sich selbst § 13.

20 ジョン・ミルトン（John Milton, 1608–74）著 *Areopagitica*（『言論・出版の自由』または『アレオパジティカ』）によれば、害すべからざる権利をもって自然状態を仮説として、暴政と感じた場合、王権に対して貴族の抵抗権があることを主張。Blair Hoxby. “Areopagitica and Liberty,” in Nicholas McDowell and Nigel Smith (eds.). *The Oxford Handbook of Milton*. Oxford University Press, 2009. Jürgen Hüllen. “Die Entstehung des individualistischen (personenhaften) Naturrechtsdenkens: John Milton

und John Locke als Wegbereiter," in Ruprecht Kurzrock. *Menschenrechte. 1. Historische Aspekte* (Forschung und Information. Schriftenreihe der Rias-Funkuniversität). Berlin: Colloquium Verlag, 1981, pp. 71–79. ジョン・ロック（John Locke, 1632–1704）の *Two Treatises of Government*（『統治二論』）も参照。

21 "Give me the liberty to know, to utter, and to argue freely according to conscience, above all liberties."*Areopagitica. A Speech of Mr. John Milton for the Liberty of Unlicenc'd Printing, To the Parlament of England*. London, 1644, p. 34.

22 "The virtuous mind that ever walks attended by a strong siding champion, conscience." *Comus*, *A Maske Presented at Ludlow Castle*. London: Hvmphrey Robinson, 1637.

23 独立宣言（1776 年）（Bills of Rights もしくは Declaration of Rights）の主体、基本的権利は、1787 年公布の連邦憲法の追加法（1789–91 年の Amendments）によって全合衆国の法として継承された。

24 Marquis de La Fayette と Jeffersons によって北アメリカの宣言が伝わって、1789 年の『人間と市民の権利の宣言』（Déclaration des Droits de l'Homme et du Citoyen）に、さらに 1791 年および 1793 年の共和国憲法に浸透。

25「其正と不正とを弁別するは衆人の独知警醒の際に在ること必あり」。Henry Wheaton. *Elements of International Law*. 1836.

26 S. スマイルズの『自助論』（1859）の翻訳。Samuel Smiles, *Self Help*.

27 一方系の流布本、高木市之助その他（校注）『平家物語』下（日本古典文学大系 33）岩波書店、1960 年、219–222 頁。

28 J.J. Christoph Grimmelshausen. *Der abenteuerliche Simplicissimus*. Vollständige Ausgabe. Nach den ersten Drucken des »Simplicissimus Teutsch« und der »Continuatio« von 1669 herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Alfred Kelletat. Mit 22 Bildtafeln nach den Kupfern der Gesamtausgabe von 1683/84. München: Winkler Verlag, 1959 (Ist gar ein fein kurz Kapitel und gehet nur Simplicium an). 望月市恵訳『阿呆物語』上中下巻、岩波文庫、1953–54 年。同じ章で Gewissen にも触れている。なお便宜上、https://www.projekt-gutenberg.org/grimmels/simpl/simpl523.html（最終アクセス：2021 年 10 月 15 日）も参照されたい。

29『契沖全集』第 10 巻、岩波書店、1973 年、669–736、675 頁。

30『荘子』「斉物論」12、https://ctext.org/zhuangzi/adjustment-of-controversies（最終アクセス：2021 年 10 月 15 日）。英訳は James Legge による。"The Writings of Chuang Tzu," in Max Müller (ed.), *The Texts of Tăoism* (The Sacred Books of China, vol. XXXIX and XL). Oxford: Clarendon Press, 1885, "The Adjustment of Controversies."

31 https://ctext.org/mengzi/gaozi-i?searchu（最終アクセス：2021 年 10 月 15 日）＝孟子曰：

“牛山之木嘗美矣，以其郊於大國也，斧斤伐之，可以為美乎？

Mencius said, ‘The trees of the Niu mountain were once beautiful. Being situated, however, in the borders of a large State, they were hewn down with axes and bills - and could they retain their beauty? Still through the activity of the vegetative life day and night, and the nourishing influence of the rain and dew, they were not without buds and sprouts springing forth, but then came the cattle and goats and browsed upon them. To these things is owing the bare and stripped appearance of the mountain, and when people now see it, they think it was never finely wooded. But is this the nature of the mountain? And so also of what properly belongs to man; shall it be said that the mind of any man was without benevolence and righteousness? The way in which a man loses his proper goodness of mind is like the way in which the trees are denuded by axes and bills. Hewn down day after day, can it - the mind - retain its beauty? But there is a development of its life day and night, and in the calm air of the morning, just between night and day, the mind feels in a degree those desires and aversions which are proper to humanity, but the feeling is not strong, and it is fettered and destroyed by what takes place during the day. This fettering taking place again and again, the restorative influence of the night is not sufficient to preserve the proper goodness of the mind; and when this proves insufficient for that purpose, the nature becomes not much different from that of the irrational animals, and when people now see it, they think that it never had those powers which I assert. But does this condition represent the feelings proper to humanity? Therefore, if it receive its proper nourishment, there is nothing which will not grow. If it lose its proper nourishment, there is nothing which will not decay away. Confucius said, “Hold it fast, and it remains with you. Let it go, and you lose it. Its outgoing and incoming cannot be defined as to time or place.” It is the mind of which this is said!’

32 良心论＝ *On Conscience*

33 Gerhard Leinss. *Japanische Anthropologie. Die Natur des Menschen in der konfuzianischen Neoklassik am Anfang des 18. Jahrhunderts. Jinsai und Sorai*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1995. とりわけ pp. 193, 240。伊藤仁斎は『語孟字義』にて孟子の善説、荻生徂徠は『弁明』にて「本心」を「良心」とする解釈を批判したことなどについて触れる。Iso Kern. “The ‘Wirkungsgeschichte’ of Wang Yangming’s ‘Teaching in Four Propositions’ up to Liu Zongzhou and Huang Zongxi,” in *Concepts of Philosophy in Asia and the Islamic world*. Vol. 1: China and Japan (Intercultural Philosophy / Études de philosophie interculturell, vol. 25). Amsterdam et al.: Brill, 2018, pp. 273–323.

34 公孫丑章句上 6。https://ctext.org/si-shu-zhang-ju-ji-zhu/gong-sun-chou-zhang-ju-shang（最終アクセス：2021 年 10 月 15 日）。

下記英訳は A. Charles Muller による。http://www.acmuller.net/con-dao/mencius.html#div-4（最終アクセス：2021 年 10 月 15 日）。

“From this point of view, we can say that if you did lack concern for the infant, you would not be human. Also, to lack a sense of shame and disgust would not be human; to lack a feeling of humility and deference is to be ‘in-human’ and to lack a sense of right and wrong is to be inhuman.”

“The sense of concern for others is the starting point of humaneness. The feeling of shame and disgust is the starting point of fairness. The sense of humility and deference is the starting point of propriety and the sense of right and wrong is the starting point of wisdom.”

“People’s having these four basic senses is like their having four limbs. Having these four basic senses and yet claiming inability to act on them is to cheat yourself. To say that the ruler doesn’t have them is to cheat the ruler. Since all people have these four basic senses within themselves, they should all understand how to enhance and develop them. It is like when a fire just starts, or a spring first bubbles out of the ground. If you are able to develop these four basic senses, you will be able to take care of everybody within the four seas. If you do not develop them, you won’t even be able to take care of your own parents.”

After/With コロナの国際日本研究
――パネル発表「ヨーロッパからの報告①」を受けて

安井眞奈美

2020 年 12 月 11 日から 13 日まで開催されたシンポジウム「ヨーロッパ日本研究学術交流会議――緊急会議 After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」は、国内外から多くの研究者がオンラインで参加し、たいへん有意義なシンポジウムとなった。本稿では、筆者が司会を担当した 2 日目のパネル発表「ヨーロッパからの報告（1）」の内容を紹介し、After/With コロナにて国際日本研究を進めていく具体案を模索したい。

2020 年 12 月は、新型コロナウイルスが発生してからほぼ一年、世界がさまざまなレベルでパンデミックの真っただ中にあった時期である。このタイミングに、After/With コロナにおける研究や教育、社会貢献の可能性について議論した内容をここに記録しておくことには意義があると考える。パンデミックや自然災害は、ともすれば簡単に記憶の彼方に追いやられてしまう。速水融・国際日本文化研究センター名誉教授は『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』にて、約 100 年前に多大な死亡者数を出したスペイン・インフルエンザを人々は忘れてしまい、ほとんど研究もなされてこなかった、と記している [1)]。現在のコロナ禍で経験したこと、発言したことを、次への足がかりにしたい。

なお、本稿で取り上げるパネル発表「ヨーロッパからの報告（1）」のパネリストは次の通りである（敬称略、所属は当時のもの）。エドアルド・ジェルリーニ（ヴェネツィア大学）、佐藤 = ロスベアグ・ナナ（ロンドン大学 SOAS）、鋳物美佳（ストラスブール大学）、アンドレアス・ニーハウス（ゲント大学）、マルクス・リュッターマン（日文研）、ディスカッサントは白石

恵理（日文研）、パネル発表の司会は安井眞奈美（日文研）、総合討論の司会は荒木浩（日文研）が務めた。

1．オンライン会議のメリット

After/With コロナの「国際日本研究」の展開を考えるにあたって、コロナ禍で急成長を遂げたオンラインによる Web 会議サービスの恩恵を無視するわけにはいかない。今回のシンポジウムは、日文研での会場発表とオンラインでの発表を組み合わせたハイブリッド方式で開催され、時差を考慮して日本では夕方、ヨーロッパでは午前中の開催となるよう調整がなされた。

Web 会議の「移動しなくてもよい」というメリットは、国際会議や国際シンポジウムなどの開催と参加を容易にし、グローバルなつながりをこれまで以上に加速させている。また、身体に不自由があり移動の困難な人びとも、会議に参加しやすい環境が整えられつつある。たとえば日文研での共同研究会（「身体イメージの想像と展開」安井・マルソー代表[2)]）では、聴覚障害のある研究者のために、これまでオンラインを利用した学術手話を取り入れてきた。学術手話は通常の手話と異なり、より専門的かつ学術的な内容にも応えられるよう訓練を受けた専門家による手話である。学術手話により、聴覚障害のある研究者が議論の流れを把握して意見を述べるなど、より積極的な参加が可能となり、満足度が高まっている。予算を確保し、発表者、コメンテーター、司会があらかじめ学術手話の専門家と入念に打ち合わせをするなど、さまざまな協力の得られたことから継続につながった。

オンラインのメリットは他にもある。パネリストの一人で哲学の分野から身体技法の研究を進める鋳物美佳氏は、日本に滞在中に始めた謡（うたい）の稽古を、フランスに帰国後もオンラインで続けているという。またイタリアのエドアルド・ジェルリーニ氏は、毎週月曜日朝 6 時 45 分から、研究仲間が日本の大学で担当している文学作品の講読ゼミにオンラインで参加している。日本語による講読ゼミなどの機会は、海外にいる日本語学習者には貴重なチャンスである。しかし、誰にでも開放されているわけではないため、まずは制度

の整備が必要となるだろう。またジェルリーニ氏は、日本の国会図書館のデータベースにある資料が、デジタル化されてはいるが海外で閲覧できない点について、著作権が邪魔をしているのではと疑問を呈した。著作権の研究を進める山田奨治氏（日文研）によると、まさにこの時期に、国会図書館が掌握する資料を、個人が自宅のパソコンで閲覧できるしくみが文化庁の協力のもと進められており、これが実現すれば研究環境が改善され、日本研究にも大きな進展がもたらされるだろうという[3)]。しかし、海外からのアクセスは考慮されていないため、山田氏はぜひ海外からも要望を挙げてほしいと語った。

オンラインの Web 会議はコロナ禍で急速に普及し、また学術論文のオープンアクセスもより一層進むなど、研究発表のさまざまな機会が生まれている。After/With コロナの時代に、これらの機会を駆使して研究を進めることは、もはや必須となっている。2020 年秋から冬にかけて、国内外で矢継ぎ早にオンライン Web 会議や講演会が企画され、筆者も発表や司会などの依頼を受け、一時的に毎週末、登壇することとなった。このシンポジウムも、一年前から依頼を受けていた別のシンポジウムの発表と重なっていたが、時間がずれていたため、この日は合計で約 7 時間、オンラインで登壇することとなった。移動時間を考慮せずに済むため連続の参加が可能となったわけだが、当然のことながら身体の疲労は増加する。Web 会議やオンライン授業は優れた点がある一方で、心身の緊張や疲労なども同時に指摘されており、オンラインでつながる自らの身体性についても再考を迫られている[4)]。

2．コロナ禍のさまざまな試み

コロナ禍で「移動しなくても」つながれる Web 会議の普及は、移動できない状況を受け入れざるを得ないことの裏返しでもある。ディスカッサントの白石恵理氏は、美術史研究の立場から、絵画や資料などの実物を鑑賞するという肌感覚ともいうべき身体感覚を、コロナ禍でいかに確保していくのかという重要な点を指摘した。資料を直（じか）に観に行ったり、フィールドワークに出かけたりできないコロナ禍において、研究の進展を妨げる要因は多い。コ

ロナ禍のさまざまな制限は、たとえば異文化のフィールドワークを基にデータの収集を行う文化人類学などの研究分野に大きな打撃を与えている。筆者のフィールドはミクロネシアのパラオ共和国であるが、人口 2 万人弱の小さな島嶼国の医療体制は脆弱で、他の太平洋島嶼国と同様、新型コロナウイルスを水際で阻止するため、早い時期から海外渡航者の受け入れを止めてきた。今後、いつパラオでフィールドワークを開始できるか目処は立っていない。

文化人類学界では、研究の根幹をなす長期滞在型のフィールドワークや実習が行えないことに危機感を抱き、2020 年 9 月には日本学術会議地域研究委員会文化人類学分科会によるシンポジウム「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」を開催し、筆者も登壇した[5)]。コロナ禍で「移動できない」状況こそを記録に残しておくことが重要であり、また大学や大学院でのフィールドワーク教育では、身の回りのことから問いを見つけて参与観察を行う具体的な視点や方法が示された。

再び、今回のシンポジウムに戻ると、パネリストの鋳物氏は 2020 年 8 月に日本からフランスに帰国した際、フランスの感染状況が日本と比べて非常に深刻でありながら、フランスの人びとが日本ほどの危機感を抱いてはいないことに驚いたという。感染症による身体の不安へのこのような対応の違いは、After コロナを考えるうえでのヒントを与えてくれる。

佐藤 = ロスベアグ・ナナ氏は「文化翻訳」の立場から、移民が多く 200 言語以上が話されている大都市ロンドンにて、エスニック・コミュニティーの人びとがコロナにどのように対応しているのかを明らかにする研究を始めた。BAME つまり Black Asian Minority Ethnic Community が研究対象となり、まさしくロンドン大学 SOAS の Oriental and African Studies の研究蓄積が生きてくる分野と言える。また佐藤 = ロスベアグ氏は、研究成果を即時に公表して、一般社会に役立てる社会貢献の意義を強調した。

パネリストのマルクス・リュッターマン氏は、「良心」という日本語を思想史のなかに位置づけ、またラテン語で「共に智る」という意味の conscientia などとの対比から分析し、コロナ禍において「良心」という言葉

が用いられる実例を交えて発表した。佐藤＝ロスベアグ氏の「文化翻訳」の研究と響き合う興味深い論点であり、世界がともに経験したコロナ禍を、人類学的かつ文化翻訳の視点から分析していくことは、国際日本研究の今後にも重なってくると言える。

リュッターマン氏が「良心」という言葉を聞くきっかけとなったのは、ヨーロッパのコロナ禍で鮮明となった医療のトリアージの問題、つまり治療の優先度によって患者を選ぶ事態に直面せざるを得なくなったからだという。疾病の対策における基準は歴史のなかで創られたものであり、「良心」という概念は医学的な倫理観にも関わってくる。リュッターマン氏は、日本の出産の場におけるトリアージの問題にも言及した。日本では2021年8月に、コロナに感染した妊婦の入院先が見つからず自宅療養中に早産し、新生児が死亡する事態が生じている[6)]。コロナの治療と産科を両立できる医療機関が限られていたことが背景にあるが、この事態を受け、コロナ感染の妊婦を受け入れる医療機関が増え、また母親がコロナに感染した際、新生児を預かる助産所が現れるなど各地で協力体制が強化された。現代の産科医療における出産の現状については、筆者らの研究グループがフィールドワークを続けており、今後も注視していきたい[7)]。

3．研究と仕事の環境

日本の近代化におけるスポーツと体育の役割を研究するベルギー・ゲント大学のアンドレアス・ニーハウス氏は、2020年のヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の国際会議の開催校担当者として、約1,000人の参加者を見込んで準備を進めてきたが、コロナ禍で早々に延期を決断した経緯や、ゲント大学日本学における「コロナ危機」への対応などを詳細に報告された。

まず、コロナ危機は大学での研究者と事務職員の生活に等しく大きな影響を与え、授業の担当者や管理職にある人びとは仕事量が膨大になり、メールが爆発的に増えたことを指摘した。その一方で研究に専念できる立場の人も生み出し、“splendid solitude”（すばらしき孤独）という英語もよく聞かれる

ようになったという。

コロナ禍において大学の授業はオンラインに切り替わったが、ヨーロッパ各地ではロックダウンのため大学のキャンパスに入れない状況が長らく続いた。筆者のイタリアやハンガリーの友人たちからは、在宅勤務は可能となったがオンライン授業の準備の大変さに加え、子どもの学校、幼稚園、保育園などが休校・休園になったため子どもと一日中自宅で過ごさねばならず、研究を中断せざるを得なかったという声も聞かれた。この点は、個人差が大きいものの、学校が一時、休校となった日本も同様である。

ゲント大学では、他の大学と同様、短期・長期を含めた留学を中止せざるを得ず、このことは一部の学生に深刻なフラストレーションや、ストレス、不安を与え、メンタル・ヘルスチームによるグループカウンセリングを実施しなければならないほどだったという。また近年の研究で、コロナ禍における影響が若い世代ほど深刻であることが明らかになり、大学では学生の精神面でのサポートを考えたプログラムなどに力を入れていることが報告された。

ニーハウス氏は、オンライン授業について、学生全体が安定したインターネット環境、適切なコンピュータ機器、学習用の個室などを持っているわけではなく、その整備とサポートにも注力しなければならなかったことを併せて指摘した。ネットでつながるのは簡単であるが、ネット環境そのものが整備されているのかどうか、相手の置かれている状況を考えることも必要であろう。

4．何気ない会話、出会いの場を再び

ニーハウス氏の提案は、日文研や「国際日本研究」コンソーシアム、アジア研究協会（AAS）、EAJS など国際的な研究組織が、日本研究の将来を共に考えていく重要な役割を果たし、将来を見据えたアイデアを生み出すためのロビーグループ、ハブとして機能しなければならない、というものである。この点は、筆者も全く同感である。

そして、それを解く鍵は「人」であり、アイデアを生み出す熱心な人びとが、煩雑な事務手続きや、分かりにくいルール、組織内外のヒエラルキーによって意欲を失速させてしまわないように、組織間のゆるやかな連携、事務手続きやヒエラルキーを削減・解体させた関係を生み出すことの重要性を主張した。この点は、シンポジウムにてパネリストが共感した点でもある。With/After コロナに向けて、確実で具体的な一歩が示されたと言える。

コロナ危機は、その流行以前より存在していた経済的な格差、医療の脆弱さ、成長を前提とした経済戦略の行き詰まり、ジェンダーによる不平等などを明るみに出すこととなった。それらを脇に追いやらず、社会に貢献できる「国際日本研究」を今後、どのように進めていけるか、取り組むべき課題は数多い。

シンポジウムでの示唆的な発表を受けて議論が盛り上がったことから、佐藤＝ロスベアグ氏が、今後も継続的に話し合いを続けることを提案した。そして「即効性が大事、1 月からすぐに始めましょう」との実行力に満ちた発言により、シンポジウムの翌月から、「国際日本研究」コンソーシアムの今後の展開をテーマに、月一度のペースでオンラインによる少人数のミーティングが始まった。毎月顔を合わせて近況を報告し、雑談も交えてアイデアを出し合うことが、刺激的かつ意義のあることだと改めて感じている。この積み重ねを、2021 年度のシンポジウム、また 2022 年度から始まる日文研の新たな第 4 期中期計画に合わせて、「国際日本研究」のグローバルな新展開に結びつけていきたい。

幸いなことに日文研では、コロナ禍における制限のなかでも外国人研究者の方がたを受け入れる体制を維持することができた。とは言え、せっかく日文研に来られても、コロナ対策のため対面式の研究発表や交流の場は少なく、また調査に出かけられないなど、研究環境は決して万全とは言えなかった。もちろん、なかには却って研究に集中できると、図書館にこもって執筆を続ける方もおられた。

コロナ前には月 1 回、日文研所長主催のランチ・ミーティングにて、外国

人研究者の方がたと所内研究者がレストラン「赤おに」のサンドイッチを食べながら、雑談に花を咲かせる場があった。そのときの会話から共同研究のアイデアが生まれたり、海外訪問が実現したり、何気ない会話がいかに重要であったかを思い知る。現在、ランチ・ミーティングはオンラインに切り替わり、人数が多くなればグループに分かれて雑談するなど、食事の提供はないが、楽しいひと時を過ごしている。

現在、日文研では、コロナ禍で海外出張はできないものの、関係者とともに今後の方向性を模索している最中である。日文研がハブとなっている「国際日本研究」コンソーシアムのネットワークを活かし、対面式とオンラインを駆使した国際シンポジウムや、雑談が可能なゆるやかな情報交換会など、また若手研究者の皆さんに新たな出会いと発表の場が継続的に提供できるような企画を立案中である。ゲント大学が開催校となったEAJS2020年大会は、2021年8月に世界中から1,170人が参加し、入念な準備とコロナ禍での対応、オンラインでの工夫を取り入れ、成功の内に幕を閉じた。今後の国際会議のよきモデルケースとして学ぶべき点が多い。

今後も日文研が、国際日本研究の拠点として、「国際日本研究」コンソーシアムの拡充を図り、After/With コロナの国際日本研究を国内外の研究者の皆さんとともに盛り立てていけるよう、まずはアイデアの宝庫である雑談の場や偶然の出会いを、コロナ禍で中断したままにせず、取り戻していきたい。

1　速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ――人類とウイルスの第一次世界戦争』藤原書店、2006年、14–16頁。

2　日文研共同研究会「身体イメージの想像と展開――医療・美術・民間信仰の狭間で」（2018–2021年度　代表・安井眞奈美、ローレンス・マルソー）

3　詳しくは、本書所収の山田奨治によるコラムを参照のこと。また、山田の近著『著作権は文化を発展させるのか――人権と文化コモンズ』（人文書院、2021年）では、著作権の切れた本を国立国会図書館がネット公開し、出版社が抗議した件への国会図書館の対応（2014年）についても紹介している（220頁）。

4　コロナ禍の「身体の不安」とメディアについては、安井眞奈美、アルバロ・エル

ナンデス「序　身体とメディアをめぐる大衆文化論」（安井眞奈美、アルバロ・エルナンデス編『身体の大衆文化――描く・歌う・着る』KADOKAWA、2021 年）を参照されたい。

5　日本学術会議地域研究委員会文化人類学分科会主催「日本学術会議　公開オンラインシンポジウム　コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」（2020 年 9 月 19 日開催）にて、第 1 部「学部教育・大学院教育への影響と対応」、第 2 部「フィールドワークを重視しない人類学教育はありうるのか？」の発表およびディスカッション。

6　「一人で自宅療養の感染妊婦、入院先見つからないまま腹部はり・出血訴え…自宅出産し新生児死亡」読売新聞オンライン（yomiuri.co.jp）2021 年 8 月 21 日。https://www.yomiuri.co.jp/national/20210820-OYT1T50072/（2021 年 8 月 30 日閲覧）

7　安井眞奈美・中本剛二・伏見裕子「コロナ禍のお産――妊産婦と家族にとっての「思いがけないお産」」『日本民俗学』307（2021 年）、120–126 頁。

Column 2.

国立国会図書館デジタル化資料等の海外送信・その後

山田奨治

日本の国立国会図書館（NDL）は、図書・雑誌・古典籍など 279 万点の資料をデジタル化している。それらは「インターネット公開資料」（56 万点）、「図書館送信対象資料」（151 万点）、「NDL 内提供資料」（72 万点）に 3 区分されている（点数はいずれも 2021 年 7 月時点）[1)]。日本の著作権制度のあり方を審議する文化庁文化審議会著作権分科会では、2020 年度の課題として、これらのうち「図書館送信対象資料」を個人が自分のパソコンやスマートフォンで閲覧できるようにするなどの法改正を検討していた。「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」が開催されていた 2020 年 12 月半ばの、まさにその時期に、文化庁はその中間まとめに対するパブリック・コメントを募っていた。

この改正は、日本国内に居住する者よりも、むしろ海外の日本研究者に多大な恩恵をもたらしうるものである。筆者はそう信じて、日文研教員としての義務感からこの問題についての情報発信と、関係各方面への働きかけをしていた。その一環として、会議の場でもこれに関する情報提供と、パブリック・コメントへの意見送付を呼びかけた。この小文では、そこにいたった経緯とその後の動きについて、執筆時点での状況を書き留めておく。

NDL の「インターネット公開資料」は、主に著作権保護期間が満了した著作物で構成されている。一部の国で行われているようなアクセス遮断さえなければ、世界中のどこからでもインターネットのブラウザで資料を閲覧で

きる。それに対して、「図書館向けデジタル化資料送信サービス」（「図書館送信サービス」）は、著作権存続などの理由でインターネット公開はできないが、絶版等で入手困難な資料について、審査をへて登録された 1,300 を超える国内図書館の特定のパソコンからのみ閲覧し、複写を取ることも可能にしている[2)]。また、2019 年 1 月 1 日施行の改正著作権法により、「図書館送信サービス」の対象が海外にある図書館にも広げられた。

ところが、NDL が課している参加条件は、海外の図書館にとってたいへん厳しいものである[3)]。たとえば、サービスを利用するための専用パソコンを用意すること（設置場所の問題が生じる）、閲覧中に利用者を監視すること（その間、司書を拘束することになり、利用者のプライバシー保護の観点からも問題）、同サービスが現地の法律に照らし合法的であると現地の弁護士が保証すること（そうした保証はできないうえに、たかがデータベースの利用契約にこれを求めるのは非常識だといわれる）、契約書は日英併記であるが日本語を正文とすること、紛争時の管轄裁判所を東京にすること（どちらも海外のリーガルチェックを通すことが困難になる）などである[4)]。こうした「参入障壁」により、海外の日本資料専門図書館のほとんどは申請を断念しているのが実情だ。法改正までしてできるようになったはずのことが、事実上「絵に描いた餅」になっている。管見の限りでは、米国と欧州でそれぞれ 1 館だけが申請にこぎつけ、まずは複写不可の閲覧のみで許可が下りた。そこへコロナ禍が起こり、欧米のほとんどの大学が立ち入り禁止になった。NDL の「図書館送信サービス」は図書館内での利用が前提なので、海外でのサービスは事実上始められないことになった。

世の中はリモート時代である。利用者が来館できなくても、図書館にいる司書が自宅にいる研究者や学生に対して、リモート会議システムの画面共有機能を使って NDL の画面を見せながらレファレンス業務を行うことは、技術的には造作もないことだ。米国ではこうした行為にはフェアユースを主張することができるだろう。しかし、NDL との契約でそれは禁止されている[5)]。こうしたことから、海外の日本資料専門司書のあいだにフラストレーション

が溜まっていた。

海外司書の不満の種はほかにもある。2020 年当時までの日本の著作権法では図書館間相互貸借（ILL）の文献複写サービスは紙コピーの郵送のみが許され、PDF 化してのメール添付はいうまでもなく、ファックス送信すらもできなかった。そのため、海外の図書館が日本から複写を取り寄せるには郵便しか手段がなく、コロナ禍で国際郵便が麻痺した影響をまともに受けた。そのうえ、大学にも立ち入れないとなると、日本から送られた複写物を受け取ることもままならなかった。

日本政府はコロナ禍を受けて、図書館のデジタルトランスフォーメーション（DX）を一気に進める施策を打ち出した。首相官邸にある知的財産戦略本部が発表する「知的財産推進計画 2020」に、図書館が保有する資料へのアクセスを容易にするために著作権法を改正する方針が盛り込まれ、文化庁の文化審議会での検討が急ピッチで進められた。2020 年 12 月の中間まとめで、「図書館送信サービス」を個人が利用できるようにすることと、複写物の送信をデジタルで行うことを含む改正について、補償金の有無などいくつかのパターンが案として示された。それらは図書館利用者にとっては有益なことばかりであったが、海外にいる利用者が対象に含まれるかは、脚注にわずかに言及があるだけで、実現性の面で甚だ心許ないものだった [6)]。そこで、冒頭に書いたように、この中間まとめに対してパブリック・コメントを送って海外に強い要望があることを伝えようと、この会議に集う欧州の日本研究者に呼びかけたのだ。

パブリック・コメントの結果をみると、イタリア日本研究学会、ドイツ語圏日本研究学会、ロンドン大学 SOAS、北米日本研究資料調整協議会（NCC）をはじめ、海外の有志からも意見が送られている [7)]。これらを受けて、報告書案には海外から意見が寄せられたことが追記され [8)]、文化審議会において承認された。

しかしながら、報告書の文言よりも法案がどう作られるか、国会審議において立法者の意思がどのように記録されるかのほうがはるかに重要である。

成立した改正著作権法では、NDL の「図書館送信資料」(「絶版等資料」)の送信先を個人に広げ私的に複製できるようにすること、その際に利用者を ID とパスワードで管理すること、ILL の文献複写ではメール送信やサーバーを介しての送信を可能にすること(「図書館資料の公衆送信」)、その際に図書館が補償金を支払うことが盛り込まれた[9]。また、参議院文教科学委員会で文化庁次長は、このサービスは送信先を国内に限っているものではないと答弁した[10]。

海外からの利用についての文化庁の公式見解は、次のようになっている。

> 絶版等資料の個人向けのインターネット送信に関するサービスの利用については、法律上その送信先を国内に限ってはいませんが、海外在住者への送信については、送信先の国の法律との適用関係や当該国の法律との関係における適法性確保の在り方など、国内向けの送信では生じ得ない様々な課題がありますので、それらの検討をした上で実施の可否が判断される必要があると考えています[11]。

国内法の著作権法で海外の機関や個人を規制できないので、NDL をはじめとする国内図書館の行為を縛るしかない。それが理由で、このようにもってまわったような言い方になってしまう。

小文の執筆時点で、改正著作権法の実際の運用については、関係者協議会でガイドライン作りが進められている。このガイドラインの内容次第で、利用者の利便性は大きく左右される。しかしながら、この種の協議会は権利者団体の代表者が多くを占めており、国内の図書館関係者や、図書館利用者の利益を代表できる者は少数派である。著作権改正にかかわる審議会によく見られる構図が、ここでも再生産されている[12]。

日本の行政は、個人よりも団体からの声によく耳を傾ける。したがって、団体を作っている業界の要望は政策に反映されやすいが、個人利用者の便益はおざなりにされる。それでも声を上げずにいれば、利用者の要望は何もな

いことにされてしまう。その点で、今回、海外の研究者らがパブリック・コメントなどで要望を伝えたことには、大きな意義があった。

「絶版等資料」の個人向けインターネット送信は 2022 年 6 月までに、「図書館資料の公衆送信」については 2023 年 6 月までに始まることになっている。コロナ禍への対応として間に合うかどうかわからないが、これが日本の図書館の DX にとって大きな機会になることはまちがいない。しかし、この変化が海外の日本研究者にどこまで恩恵をもたらすかは、まだ予断を許さない[13)]。

1 https://www.ndl.go.jp/jp/preservation/digitization/index.html（2021 年 9 月 20 日閲覧、以下同様）
2 閲覧のみの図書館もある。リストは https://dl.ndl.go.jp/ja/soshin_librarylist.html
3 参加条件は権利者等との合意によるもので、NDL が独自に決められるものではない。海外図書館向けの参加案内は、https://www.ndl.go.jp/en/library/dcts/index.html
4 https://www.ndl.go.jp/en/library/dcts/pdf/Agreement.pdf
5 日本国内の図書館での同種の行為は、著作権法の定めによって禁じられている。
6 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/chosakuken/hoseido/r02_02/pdf/92676701_01.pdf の脚注 19。
7 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/chosakuken/hoseido/r02_03/pdf/92766601_01.pdf
8 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/chosakuken/hoseido/r02_03/pdf/92766601_02.pdf の脚注 29。
9 https://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/detail/mext_00014.html
10 https://kokkai.ndl.go.jp/#/detailPDF?minId=120415104X01420210525&page=9&spkNum=66&current=6
11 https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/r03_hokaisei/index.html の 問 4。問 8 も参照。
12 日本の著作権法改正にかかる力学については、山田奨治『日本の著作権はなぜこんなに厳しいのか』（人文書院、2011 年）、同『日本の著作権はなぜもっと厳しくなるのか』（人文書院、2016 年）を参照のこと。
13 2021 年 12 月 22 日のリリースによると、NDL デジタル化資料の個人向け送信については、当面、海外在住者を除外して 2022 年 5 月にサービスを開始する。海外

への提供については「その適法性を担保する方策を含め引き続き対応を検討する」となっている。https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2021/211222_01.html（2021 年 12 月 21 日閲覧）

第Ⅲ部

コロナ禍と日本研究

ヨーロッパからの報告②

Pandemic and Kabuki Dramaturgy

Alan Cummings

We have already heard from many of the other panellists about the challenges that we have been facing in our academic work over the past nine months since the pandemic began. Whether we are located in Japan or Europe, these challenges have been both multifaceted but also remarkably similar in the demands that they placed on us as teachers and researchers working in the field of Japanese Studies. Most of us have at this conference been wrestling with the complex pedagogical and technological difficulties of trying to create online courses that will continue to engage our students, and the tasks of having to retool our tried and tested classroom techniques to fit online spaces that are on the one hand can be freeing and safer feeling for students, but at the same time impede the creation of any true sense of community. I am sure, like many of the attendees at the conference, I have struggled most with my new undergraduate and postgraduate students. How do you come to know a new student in your class whose face you have never seen? How can you create a sense of community amongst students who have never met each other and whose sole involvement with each other is in a virtual classroom? These are questions that we all continue to wrestle with and this conference has certainly helped in realising that others are facing similar problems. But as my days have been consumed with an ongoing series of thorny pedagogical problems that sometimes seem next to insoluble, no matter what positive spin our institutions try to put on them, research has proved a welcome escape and distraction, even with the serious restrictions that Covid has imposed including restrictions on physical access to university libraries and other archives.

Like many of us, the experience of Covid-19 has prompted me to adapt, by considering both new research questions relating to my normal area of research, the kabuki theatre, and figuring out how to work with reduced access to research resources. In particular, I became interested in the experience and representation of pandemic on kabuki theatre. Some of my research has focussed on the great nineteenth century playwright Kawatake Mokuami (1816–93), who was active in the major Edo (and later Tokyo) theatres from the 1850s until the early 1890s, but initially I struggled to think of much concrete representation of pandemics themselves in his plays. Doctors, disease, medicine (and its converse, poison), and illness are common enough tropes in the dramaturgy of Tokugawa period kabuki, but these plots almost always focus upon a single sick individual who will either die or, more often, be cured through the deployment of some magical object or substance that the play's other characters will go through many pains and travails to obtain. The focus therefore is placed upon the experience of the individual, their immediate family, and the wider *ie*.

The experience of a pandemic on society as a whole was one that seems far less present in theatrical narratives—which in itself is surprising as Edo saw several periods of pandemic during the years when Mokuami was active. For example, there was a cholera epidemic that began in the seventh month of 1858 (Ansei 5), said to have been brought by the *Mississippi*, part of Commodore Perry's squadron. The pandemic reached its peak in August. Figures for deaths in premodern pandemics are always uncertain, but we estimate that somewhere between 100,000 and 200,000 died in Edo, including the artist Utagawa Hiroshige.[1)] The mortality rate was between 2% and 4%, which is broadly similar to that in European cities during nineteenth century cholera epidemics. Rumours swept the city that those who were struck by the illness would suddenly keel over dead, and some wags even started referring to illness as *korori* コロリ. Theatres and the pleasure quarters remained open, but visitors were said to be very few, and the only businesses that were making profits

in the city were doctors and drug stores. At the height of the pandemic in Edo, up to 10,000 were dying per month and coffin-makers and crematoriums were unable to keep pace with the death rate in the city.[2] Sake barrels were being repurposed as coffins, and in Sudachō, Kanda 50 to 60 funeral processions were passing per day, and in Nihonbashi as many as 100.[3] One popular song of the time summons up a deeply familiar sentiment of waiting, mired in gloom and uncertainty, for the light of a new day:

> やえ雲も待つ間に映(は)えて久方の夜に隈(くま)あらぬ今日(けふ)の月影
>
> Waiting for a break in
> These thick, layered clouds
> A shining, distant
> Evening where no shadows
> Will spoil the moonlight[4]

We can see too that magical thinking was just as common in bakumatsu Japan as it is with some of us today, since the first character of each line in the Japanese poem also spells out a linguistic prayer against disease: やまひよけ (disease expelling).

However, while I mentioned earlier that there is little evidence of the pandemic in Mokuami's work from the period, a thought began to niggle with me and I decided to read back over a famous play of his that was performed at the Ichimura-za just six months after the start of cholera outbreak, in the second month of 1859. The play is titled *Kosode Soga azami no ironui* (小袖曾我薊色縫, *The Short-sleeved Soga Robe—Sewing a Thistle-patterned Corpseshroud*) and it follows the adventures of a triumveate of thieves called Seikichi, Izayoi, and Hakuren. The play's most striking scene captures a moment of life choice, when the fallen priest

Seikichi is presented with an opportunity to radically alter his destiny by choosing either compassion or criminality. He chooses the latter, but the audience is pulled into his dilemma since Seikichi is shown as being a good but weak man whose sudden shift into criminality is shown as arising out of a moment of extreme personal crisis. It's a fascinating scene to consider in light of the pandemic that Mokuami, the actors and the kabuki audience of 1859 had managed to live through, particularly in its exploration of the powerful drive towards individuality and the limitations of self-fashioning in bakumatsu Japan.

The play opens with Seikichi, a Buddhist priest, being dragged onto the stage in chains, about to be exiled from Kamakura. He has been criminalized by breaking his vows of chastity (*nyobon* 女犯) by consorting with a prostitute called Izayoi. Seishin presents himself in a mode of deep contrition:

> Seishin: It is said that when an only child takes the tonsure, nine generations of his family will be born in Heaven. In order to pray for the spirits of my mother and father, I shaved my head and accepted the teachings of my master Kyōzen. For the past twenty-five years I have recited the sutras both day and night. Yet I was still unable to free myself from the cycle of transmigration, and I strayed into the ways of carnal pleasure and I must accept my punishment. From now on I will revert to my original intentions, with my heart fixed upon the truth for the first time. For the benevolence you have shown me in commuting my heavy sentence to one of banishment, I thank you… I will seek out any old dilapidated temple deep in the mountains where I can apply myself to austerities and recover my original priestly vocation. [5)]

However, as Seishin sets out for Kyoto, he meets Izayoi on a moonlight riverbank, to the accompaniment of romantic *kiyomoto* music. She has run away from the pleasure quarters to try to see him one last time. Seishin talks of shame of

having broken his vows, and encourages her to return to the pleasure quarters and find a good client to look after her. Izayoi, however, reveals that she is pregnant with Seishin's child and she is determined to kill herself. Seishin is trapped in an exquisite ethical dilemma—if he lets her kill herself, then he will be responsible for the death of their child. If he takes her with him, then he will be guilty of abducting her from the pleasure quarters. He decides all they can possibly do is to die together by throwing themselves into the river. The *kiyomoto* music swells into heights of Liebestod emotion:

> "Turning to the west / their hands joined in prayer / freezing in the late spring chill / into the river / with a splash they leap / like waterfowl / leaving behind floating notoriety alone."[6)]

So far, so romantic. However, the play then takes a turn. Both lovers are swept downstream. Izayoi is pulled into a fishing boat and saved. Seishin also manages to make it to the bank, having failed in his attempt at drowning himself—the son of a fisherman, he learned to swim before he could walk. Convinced that Izayoi is already dead, he begins to gather rocks to weigh himself down so he can complete his half of the suicide pact, but as he does so, he is distracted by the sounds of music and merriment from a passing pleasure boat. Just then a young page, carrying a large sum of money appears. He suddenly collapses in pain on the riverbank nearby and Seishin hurries over to his aid. Seishin helps to revive him but then suddenly tries to steal the packet of money he felt inside the page's kimono. They struggle, and in the melee the cord from the money pouch gets wrapped around the page's neck, and he dies.

Seishin is initially horrified by what has just occurred, and his immediate impulse is to kill himself. But just as he is about to stab Motome's sword into his belly to expiate his crime, the moon emerges from behind the clouds and a thought

strikes Seishin. Traditionally used as a symbol of Buddhist enlightenment, here the image of the moon presages something entirely different, as Seishin's famous speech of transformation reveals:

> Seishin: But, wait… It's only this moon and me who know that Izayoi has drowned and that I stole the lad's money and killed him. A man lives for a mere fifty years. If all goes well and I live for another ten or twenty years, even if I'm wearing rags, with just a bit of money I can have some fun. If we're all going to end up dying, isn't it better to live and have some fun like that lot on the boat? And besides, whether I kill one or a thousand, I've only one head for them to chop off. I've already committed one wicked deed, so I might as well become a thief and housebreaker and live in luxury on the belongings of others. All this talk of killing myself—what on earth was I thinking of![7)]

Seishin's actions and his transformation in this scene are shown to be founded on a unique conjunction of factors that have come together to leave him psychologically bereft. He has committed a crime and been banished from the temple and the city in which he has lived since the death of his parents in childhood. He has learned that his lover Izayoi is pregnant and imagines that she and her unborn child have drowned. He himself has failed in both his intention to recommit himself to his faith and his intention to die together with Izayoi. Finally, for reasons that he himself seems unable to comprehend, he has committed a murder of an innocent passer-by.

Together these factors represent a unique conjunction of psychological and spiritual crises that impel Seishin towards a decision that he knows will place him outside of civilized society and make him subject to severe legal reprisals. Setting aside his moral culpability, his legal crimes in addition to the original *nyobon* now include an attempted love suicide, robbery and murder. Any of those alone would

earn him a sentence of death from the Tokugawa magistrates. The question posed by the scene is how the audience would react in a similar circumstance. In one sense then, Mokuami shows a character being confronted with a succession of events which, one by one, have severed the ties that bind him to law-abiding society—the loss of his parents, his teacher, his temple, his girlfriend, and finally his unborn child. We are left then with the sense of a human being faced with a moment of extreme psychological crisis, and at the end of it coming to a decision that is striking in its sense of individuality.

Why should Seishin reject the option of death at this moment? One explanatory factor that is constantly present in the staged production, though far less obvious on the printed page, is the music from the pleasure boat just upstream from Seishin. He refers to several times over the course of this scene, first as an impediment to him focussing on the next world when he is still planning to drown himself. Later, he brings up the image of the boat and the wealthy guests on board as a constrastive image as he ruminates on the role of fate in human lives. Finally, the image of the boat is used again as a justification for his decision to reinvent himself as Oniazami Seikichi and follow a path of criminality as his transformation moves towards completion. The boat itself is clearly an image of what seem to Seishin as first arbitrary and later unfair differences in wealth. The music of the *kiyomoto* musical ensemble who are on stage for the duration of this scene is thus given a naturalistic premise—the music is coming to the ears of the characters and the audience from the pleasure boat. The presence of the *kiyomoto* music throughout this scene provides a layer of seductive sensuality and fantasy over what would otherwise be an unrelentingly grim scene.

This music has two specific functions in terms of the drama. Firstly, it functions as an aural symbol of the pleasures of the world for Seishin, pleasures that he describes evocatively as “living in a riot of pleasure like that, surrounded by geisha and male entertainers—that is one life.” But, poignantly these are also

pleasures that Seishin has been denied up until this point, and then punished for indulging in when he fell in love with Izayoi. The second function of the music lies in its power of seduction. Of all the styles of Edo *jōruri*, *kiyomoto* is the most feminine in its use of a high, nasal voice—Alison Tokita describes the effect as "lustrous, sensuous and refined with a great breadth of emotional expression."[8] The effect of this music throughout the scene, I would argue, is aimed at seducing the audience as much as it is used to seduce Seishin. The entire scene is scripted to create to create a sense of complicity between the character on stage and the audience, and the seductive effect of the music as it tugs Seishin towards life, equally tugs the audience into an uneasy though simultaneously pleasurable sense of identification with the figure of the criminal. Shorn of family, partner, child, home and way of life, how many of us could resist the seductive pull of a life of leisure and pleasure?

The question of how criminals came into existence was one Mokuami had considered several times before this and that he would consider throughout the rest of his career, but in those earlier plays, the reasons for a character's propensity for criminality were always explained in a much simpler fashion that reflected official attitudes towards criminals too: some people were simply born evil and that was why they committed crimes. When it comes to the on-stage characters' self-reflection on the reasons for their criminality, many of Mokuami's criminal heroes provide a simplistic and conventionalized rationale, as Hattori Yukio has argued,

> The central characters of the *shiranamimono* plays have little to say about what drove them into the paths of wickedness. Or rather, they do talk about it but they present conventionalized confessions of their past, such as "ever since I was a boy (or girl), I had sticky fingers… (*tekuse ga waruku*)" They leave the impression that their motive is of no real importance.[9]

A good example is the central criminal character Kozaru Shichinosuke from the 1857 play *Amimoyō tōrō no kikukiri*, which was largely based on a

kōdan by Kenkonbō Ryōsai, blended with a second plotline about the famous Yoshiwara courtesan Tamagiku.[10] The central character in the *kōdan* is an insouciant Sumidagawa boatman-turned-pickpocket, gambler, pimp, blackmailer and eventually murderer, while Mokuami's adaptation initially presents him as a footman in a samurai household, who later reveals that this was a just a disguise he had adopted in order to steal. Reflecting on his route into criminality towards the end of the play, Shichinosuke comments,

> Shichinosuke: I was born the son of a fisherman called Shichigorō in Oshimamachi in Fukagawa. I had sticky fingers so everyone would call me by the nickname Kozaru, but my real name is Shichinosuke and I'm a pickpocket.[11]

This kind of conventionalized explanation for criminality—that it was an innate quality—strikes an eerily similar chord to Henry Fielding's famous description of Tom Jones that he was "born to be hanged." Statements by criminal heroes that equates their criminality to a childhood trait are common in many of Mokuami's earlier bakumatsu criminal narratives. The focus in much Tokugawa literature on criminality is therefore on the wise judge and the trope of *kanzen chōaku*: the figure of the criminal is used not to challenge subjectively imposed moral and legal boundaries, but rather to reinforce the socio-political hierarchy. But plays like *Kosode Soga azami no ironui* (and others that followed it) switched the focus to highlight the criminal and to explore more deeply the question of just what created a criminal.

However, I would argue that the significant change in motivation and the emotional reality that Seishin's decision to become a criminal is grounded in in *Kosode Soga azami no ironui* is a significant change in Mokuami's dramaturgy at this time. In *Kosode Soga azami no ironui*, Mokuami for the first time imagines

criminality as a means of self-fashioning, a way of altering individual life courses that were supposed to be dependent on class, status and birth. It therefore marks a radical shift away from the idea that criminality is innate or that criminals are the victims of the laws of cause and effect (*inga ōhō*) set in motion by their parents, which had formed the basis for many of Mokuami's earlier plays. One example can be seen in the case of Kozaru Shichinosuke in the aforementioned *Amimoyō tōrō no kikukiri*, where Shichinosuke's criminality is placed into an ever-tightening loop of cause and effect which was initiated by his father Shichigorō, who steals seventy *ryō* from a clerk called Yoshirō at the start of the play.

Compared to these kinds of plays, the decision to dramatize a moment of conversion to criminality in *osode Soga azami no ironui* represents a decisive rupture in kabuki dramaturgy. It can also be read as a moment where the on-stage character pushes against the dictates of kabuki's traditional *yatsushi* paradigm (or indeed, the circular plot structures that can be observed in *ningyō jōruri* that have been examined by C. Andrew Gerstle.[12)] *Yatsushi*'s fall and rise patterning, which allows for a character to move through several liminal forms of social life and class, invariably ends up in a second transformation, in which the original status is regained through the defeat of the villains. The focus in the *yatsushi* scenes is on the tribulations and the fortitude of the character as he endures them, but the end result is always the return to the original status. As a dramatic structure, it is essentially conservative and affirming of the social status quo. Mokuami's criminal transformations, however, push against the limits of *yatsushi*: it is a life course that is chosen, rather than being forced upon a character, and as such there is no possible return from it to a regular, non-criminal existence.

Examined in this light, I believe that the bravado of Seishin's statement that "whether I kill one or a thousand, I've only one head for them to chop off", and his desire to live henceforth for pleasure rather than duty or religious devotion, requires some further contextualization. The decision to create a scene where the

Edo audience could watch a character being given the opportunity to choose a life of his own, rather than submitting to the one forced upon him by familial or social circumstance, seems like it could only have come from the rupture of something that alters the conventional strictures that bind a society. Something, perhaps very much like a major pandemic?

1 Gramlich-Oka has compiled a useful chart of death figures for Edo from several different contemporary Tokugawa sources, including *Kitsukō nenpu* and *Bukō nenpyō*. See Gramlich-Oka, 2009: 36.
2 Kurachi, 2016: 212.
3 Minami, 1980: 77–78.
4 Quoted in Kinton, 1858.
5 "Kosode Soga azami no ironui," in *Kabuki kyakuhonshū: ge*, ed. Urayama Masao and Matsuzaki Hitoshi, *Nihon koten bungaku taikei* (Tokyo: Iwanami Shoten, 1961), p. 311.
6 Ibid., p. 323.
7 Ibid., pp. 334–35.
8 Alison McQueen Tokita, *Kiyomoto-bushi: Narrative Music of the Kabuki Theatre,* vol. 8 of *Studien zur traditionellen Musik Japans* (Kassel; Basel; London: Bärenreiter, 1999), p. 1.
9 Hattori Yukio, "Mokuami no shiranamimono," in *Edo kabukiron*. Tokyo: Hosei Daigaku Shuppankyoku, 1980, p. 399.
10 For an analysis of the differences between Ryōsai's original *kōdan* and the kabuki adaptation, see Imaoka Kentarō, "'Amimoyō tōrō no kikukiri' no dokujisei."
11 Kawatake Itojo and Kawatake Shigetoshi, eds., *Mokuami zenshū*, vol. 3, p. 290.
12 See Gerstle, *Circles of Fantasy: Convention in the Plays of Chikamatsu*.

List of Sources

» Bettina Gramlich-Oka. "The Body Economic: Japan's Cholera Epidemic of 1858 in Popular Discourse," *East Asian Science, Technology, and Medicine*, no. 30, Special Issue: Society and Illness in Early Modern Japan (continued) (2009): 32–73.
» C. Andrew Gerstle. *Circles of Fantasy: Convention in the Plays of Chikamatsu*. Cambridge, Mass.: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1986.

» Hattori Yukio. “Mokuami no shiranamimono,” in *Edo kabukiron*. Tokyo: Hosei Daigaku Shuppankyoku, 1980.
» Inumaru Osamu. “Edo Meiji no hitobito wa ekibyō ni dō tachimukatta no ka? Shibai ni miru senjintachi no chie,” *Warakuweb*, 2020. https://intojapanwaraku.com/culture/84892/ (Last accessed: September 1, 2021)
» Kawatake Itojo and Kawatake Shigetoshi (eds.) *Mokuami zenshū*, vol. 3. Tokyo: Shun’yōdō, 1924.
» Kurachi Katsunao. *Edo no saigaishi: Tokugawa Nihon no keiken ni manabu*. Tokyo: Chūōkōron Shinsha, 2016.
» Kinton Dōjin 金屯道人. *Ansei korori ryūkōki* 安政箇労痢流行記. 1858.
» Minami Kazuo. *Ishin zenya no edo shomin*. Tokyo: Kyōikusha, 1980.
» Alison McQueen Tokita. *Kiyomoto-bushi: Narrative Music of the Kabuki Theatre*, vol. 8 of *Studien zur traditionellen Musik Japans*. Kassel; Basel; London: Bärenreiter, 1999.
» Urayama Masao and Matsuzaki Hitoshi (eds.) *Kabuki kyakuhonshū ge: Nihon koten bungaku taikei 54*. Tokyo: Iwanami Shoten, 1961.

［日本語訳］

パンデミックと歌舞伎のドラマトゥルギー

アラン・カミングズ

パンデミックが始まってから9カ月のあいだ私たちが学術活動の場で向き合ってきた課題について、すでに大勢のパネリストから発言があった。こうした課題は、日本にいようとヨーロッパにいようと、日本研究という分野で教員や研究者として働く私たちに対する要請として、多面的であると同時に驚くほど似通っていた。この会議に出席した私たちの大半が、学生が持続的に関与できるオンライン・コース構築の試みという教育的・技術的に複雑な困難に直面してきた。これまで試行錯誤してきた授業の手法を、オンライン空間に合わせて再構築するという作業は、学生にとって自由で安全な感覚をもたらす一方で、同時に、真の意味での共同体意識の形成を妨げている。他の多くの参加者もきっと同じだと思うが、私が最も苦労したのは新しい学部生や院生への対応だった。一度も顔を見たことのない新入生たちとどう知り合えばいいのだろう。これまで一度も会ったことがなく、互いの関与は仮想の教室内だけという学生たちのあいだにどのようにしてコミュニティ意識を持たせることができるだろう。こうした問題と私たち全員が格闘し続けている。そして、この会議のおかげで皆が似たような問題に向き合っていることが分かったのも確かだ。しかし、学校側がどんなに肯定的な改善を試みても、時に解決できないような教育上の問題を抱えながら日々を過ごすにつれ、たとえコロナ禍ゆえに大学図書館ほかアーカイブへの物理的アクセス規制など厳しい制限があったとしても、研究こそが好ましい逃げ道、気晴らしとなっ

ていった。

多くの同僚と同じく、コロナ禍の体験により、私も自分の専門分野（歌舞伎）に関連する新しい研究課題を検討し、研究資源へのアクセスが制限されている場合の対処法を工夫する必要に迫られた。具体的には、歌舞伎に現れるパンデミック経験とその表現に興味を抱くようになり、なかでも 19 世紀の偉大な戯作者、河竹黙阿弥（1816–93）を取り上げることにした。1850 年代から 1890 年代初めまで、江戸（のち東京）の主要な劇場で活躍した人物である。私はまず黙阿弥作品に現れるパンデミックそのものの確かな表現について考えようと腐心した。医師、病気、薬（そしてその逆の毒物）は徳川時代の歌舞伎のドラマトゥルギー（作劇法）にありふれた約束事だが、その筋書きはほぼ常に一人の病人を中心に、その病人が死ぬか、あるいはさらに多くの場合、作中人物たちが艱難辛苦の果てに手に入れた魔的なアイテムを用いて回復する仕立てになっている。だから焦点はその本人、肉親、広い意味での「家」の経験に絞られる。

作品の中で、ほとんど語られていないのが社会全体の経験としての疫病だった。江戸時代、黙阿弥の活動期間中に何度か疫病が流行ったのだから、これ自体が驚きだ。たとえば安政 5 年（1858）の文月（7 月）に始まったコレラの流行はペリー提督率いる艦隊のミシシッピ号がもたらしたといわれ、8 月にピークに達した。前近代のパンデミックの死者数はいつも曖昧だが、このときは江戸で推定 10 万～ 20 万人が死んだとされ、浮世絵師の歌川広重も犠牲者の一人である [1)]。致死率は 2 ～ 4 パーセントで、19 世紀ヨーロッパの都市で起きたコレラ流行のときの数値とほぼ合致する。疫病に罹るとその場でコロリと倒れて死ぬという噂が市中に広まり、この病気を「コロリ」と呼ぶ戯（たわ）け者まで現れた。芝居小屋や郭（くるわ）は営業していたが、ほとんど訪れる客もなかったそうで、儲けたのは医師と薬屋だけだった。江戸の疫病のピーク時にはひと月 1 万人が死に、棺桶屋と焼き場は市中の致死率に追いつけなかった [2)]。酒樽が棺桶代わりに使われ、神田須田町では葬列が毎日 50、60 と行き過ぎ、日本橋では 100 件にも達した [3)]。当時流行ったある歌からは、

沈鬱と不確実性に身動きもとれぬまま曙光を待つ、あのなじみ深い感情が伝わってくる。

> やえ雲も待つ間に映(は)えて久方の夜に隈(くま)あらぬ今日(けふ)の月影[4)]

この歌の各行の頭文字をつなげると、「やまひよけ」という呪(まじな)いになっていることから、幕末日本のこの呪術的な発想が一部の現代人のそれと相通じることも見てとれよう。

先ほど、この時代の黙阿弥の作品にはパンデミックの形跡がほとんどないと述べたが、一つの考えが私の頭にこびりついて離れず、コレラ流行が始まってからちょうど半年後の安政6年（1859）如月（2月）に市村座で上演されたある有名な戯作を読み直すことにした。題名は『小袖曾我(こそでそが)薊色縫(あざみのいろぬひ)』。清心（清吉）、十六夜(いざよい)、白蓮(はくれん)という盗賊三人組の冒険譚である。劇中、最もハッとさせられるシーンは、破戒僧の清心が、慈悲をとるか犯罪をとるかの選択によって自身の命運を一転させる機会に直面する、人生の選択の瞬間だ。清心は後者を選ぶが、観客は彼のジレンマに引きずりこまれる。なぜなら善人だが弱い人間として描かれた清心がいきなり犯罪者に豹変することが、個人の極端な危機的瞬間からの脱却、そこからの浮上として描かれるからだ。黙阿弥や、安政6年の歌舞伎役者や観客が何とか生き抜いた疫病という視点、とりわけ個への強い欲動の探求と、幕末日本における自己像構築（self-fashioning）の限界という視点からみるとき、これは実に興味深い場面である。

冒頭、縄をかけられた僧侶清心が舞台に引き出されてくる。十六夜という名の妓女と関係して禁欲の誓いを破った女犯(にょぼん)の罪により、鎌倉から放逐されようとしているところだ。清心は深い後悔の念を吐露する。

> 清心：一子出家なす時は、九族天に生ずとて、亡き父母の菩提の為、剃髪なせし此清心。我師教善の教を受、是迄廿五年の間、日夜勤行なしたるも、未だ凡俗の輪廻放れず、色道に迷ひ入、終にお上の御仕置蒙り、

> 今ぞ本心に立返り、初て目覚めし我心。重き刑罪御赦免あって、追放仰せ付られし御仁恵の程、有難ふ存奉りまする。[5)]

ところが、京都への旅路についた清心は月夜の川岸で十六夜と出会う――ここでロマンチックな清元節の響き。十六夜は清心と最後に一目会いたいと郭を抜け出してきたのである。清心は破戒の恥を語り、十六夜に郭へ戻り、面倒をみてくれる良い顧客を見つけるよう諭す。しかし十六夜は清心の子どもを身ごもっていることを明かし、自害する覚悟だ。清心は二進(にっち)も三進(さっち)も行かぬ倫理的ジレンマに陥った。もし十六夜を自害させてしまえば、自分の子も殺してしまうことになる。もし彼女を旅に伴うなら、郭から妓女を誘拐した罪に問われる。二人にできるのは川に身を投げて心中することしかないと清心は覚悟を決めた。沸き立つような清元節が(『トリスタンとイゾルデ』の)「愛の死」の激情にまで高まっていく。

> 西へ向かひて合す手も、氷る余寒の川淀へ、ざんぶと入るや水鳥の、浮名を跡に[6)]

ここまではロマンチックそのものだ。ところが、ここで芝居は一転する。入水した二人はともども川下へ流されるが、十六夜は網舟に引き上げられて命拾いする。いっぽう清心は死のうと思っても身体が沈まず、これまた何とか岸へ這い上がった――彼はそもそも漁師の伜で、よちよち歩きを始める前から習うともなしに水練を覚えていたのだ。十六夜はもう死んでしまったに違いないと思いこんだ清心は未完の心中をやり遂げようと重しにする石を集めるが、通りすがった遊山舟から流れてくる賑やかな楽の音や人の騒めきに気を逸らされた。ちょうどそのとき、懐に大金を携えた若衆が現れ、川岸で突然の癪(しゃく)に苦しみ始める。清心は介抱に駆け寄って蘇生に努めるが、懐の金に気づいていきなりそれを盗もうとする。二人がもみ合ううちに財布の紐が若衆の首に絡みつき、彼は死んでしまった。

清心はこの出来事に始めは震え上がり、衝動的に自害しようと考えた。けれど罪滅ぼしのために若衆求女（もとめ）の刀を腹に当てたとたん、雲間から月が姿を現し、清心はある考えに打たれる。月は伝統的に仏教的悟りの象徴として使われるが、ここではそれがまったく異なるものの前触れとなった。清心の有名な変身の台詞。

> 清心：然し、待てよ。今日十六夜が身を投たも、又此若衆の金を取り、殺した事を知たのは、お月様と俺斗（ばか）り。人間僅か五十年。首尾能（よく）行けば又十年、弐拾年も生延（いきのび）て、襤褸（つづれ）を纏ふ身の上でも、金さへ有れば出来る楽しみ。同じ事ならアノ様に、騒ひで暮すが人の徳。一人殺すも千人殺すも、取られる首はたった一つ。迚（と）ても［どうせ］悪事を仕出したからは、是から夜盗・家尻切（やじりきり）［家屋などの後方を壊して侵入する押し込み］、人の物は我が物と、栄曜栄花をするのが徳。こいつは滅多に死なれぬわい。[7]

この場面での清心の行動と変貌ぶりは、いくつもの特異な要因の組み合わせにより心理的な喪失感に襲われたことを示している。彼は罪を犯して、自分が両親の死後ずっと過ごしてきた寺と街を追われることになった。恋人の十六夜が身ごもっていると知らされ、彼女とまだ生れぬ赤子は溺死したと思っている。彼自身はといえば、信仰を取り戻そうという意志と、十六夜と心中する意志の双方とも貫けなかった。おまけに、自分でも訳が分からぬうちに無辜の通行人を殺めてしまった。

こうした要因によって、心理的・精神的危機が特異に結びつき、清心はある決断に追いこまれていく。その決断によって自分が文明社会からはじき出され、法的に厳しく制裁されるだろうことを彼は知っている。道義的責任とは別に、彼の法的な罪状にはそもそもの女犯のほか、今や心中未遂、盗み、殺人が加わった。このどれ一つをとっても、徳川の司法から死刑判決を科される。このシーンで観客は、もし自分が同じ状況に置かれたらどうするだろ

うと問われる。つまりある意味で、黙阿弥が登場させた人物は次から次へと起きる出来事に見舞われ――両親、師、寺、恋人、ついにはまだ見ぬ子を失い――その一つひとつを経るごとに、彼を遵法社会につなぎとめていた絆がほどけていく。こうして私たちは極度の心理的危機の瞬間に直面し、最後には個人的に印象的な決断を下す人間になったかのような感覚に陥るのである。

では、なぜ清心はこの瞬間、死という選択を退けねばならなかったのだろうか。それを説明する一つの要素が、上演中つねに舞台に存在している。脚本からはあまり伝わってこないが、それは清心のすぐ上流の遊山舟から聞こえてくる楽の音である。この場面を通じて清心は何度かこれに言及している。最初は彼がまだ入水自殺を念頭にあの世に心を凝らしていたとき、集中を邪魔するものとして。次は、人生における運命の役割について思いをめぐらせる清心が、舟と裕福な船客たちをそれと対照的なイメージとしてとらえるとき。そして最後に、清心が自分は「鬼薊（おにあざみ）清吉」として生れ変わり、犯罪の道を行くと決め、変貌が完結に向かうとき、それを正当化するものとして再びこの舟のイメージが使われる。舟そのものは、貧富の差を始めは偶然の所産、のちには不公平ととらえる清心の心象を明白に代弁している。舞台に出ずっぱりの清元連中が奏でる音楽は、従って、この場における自然論的な所与の前提だ――音楽は遊山舟から登場人物と観客の耳に届く。この場面全編をつうじた清元節の存在は、それがなければ何とも陰鬱なこの場面に、幾重にも層をなして蠱惑の官能と幻想をもたらすのである。

演劇という観点で考えると、この音楽は固有の機能を二つ果たしている。まず、清心にとってそれは俗世の快楽の聴覚的シンボルだ。彼はそれについて思わせぶりに、「あれあのやふに面白ふ、芸者幇間を伴ふて、騒ひで暮すも人の一生」と語る。だが如何せん、それはまた、このときまで清心が拒みつづけ、十六夜と恋に落ち、それに溺れて罰せられた快楽でもある。清元節の第二の機能はその誘惑の力にある。高音の鼻声を使う清元は江戸の浄瑠璃様式の中でもいちばん女性的だ――アリソン・トキタはその効果を「艶っぽ

さと官能と洗練、そしてどこまでも広がる情動的表現」と述べている[8]。このシーン全体に流れる清元節の効果は、清心を誘惑する以上に観客を誘惑するのが目的だと私には思える。この場全体が舞台上の登場人物と観客のあいだに共犯関係を生み出すように書かれており、音楽の誘惑効果は清心を生にたぐり寄せるのと同じく、不安ではあるが同時に後ろめたい快感をともなう、犯罪者への共感に観客をたぐり寄せていく。人生から家族、伴侶、子供、家、暮らしを奪われて、いったい何人が安逸と快楽の人生からの誘惑に抗えるだろうか。

犯罪者がどう生れるかという問題について、黙阿弥はこの作品以前から何度も考え、また全生涯を通じて考え続けることになるが、特にこのような初期の作品では、登場人物が犯罪に走る理由は、犯罪者に対する公的な考え方を反映した、ごく簡単な形で説明されるのが常だった。つまり、そういう人はそもそも生まれついての悪人であり、だから犯罪に手を染めるという見方だ。舞台の登場人物が自分の犯罪の理由を振り返るとき、黙阿弥の犯罪ヒーローの多くは単純な従来型の理屈をつける。これについて服部幸雄はこう述べている。

> 白浪の主人公たちは、悪の道に入った動機をあまり語らない。いや、語らないのではないが、大半の者は「餓鬼（お娘（むす））の折から手癖が悪く」と類型的に過去を告白するばかりで、実はそんなことはどうでもよいといった顔付をしている。[9]

この良い例が1857年の作品『網模様灯籠菊桐（あみもようとうろのきくきり）』の主人公、小猿七之助という犯罪者だ。江戸期の講釈師、乾坤坊良斎（けんこんぼうりょうさい）の講談をもとに、吉原の名妓玉菊の話を第二プロットとして絡めたものである[10]。元ネタの講談では、主人公は隅田川の気ままな船頭転じて掏摸（すり）、博打打ち、女衒（ぜげん）、喝上げから、果ては人殺しに終わる男だが、黙阿弥の作品ではまず武家の中間（ちゅうげん）として登場し、やがてそれが盗みのための偽装であることが分かる。芝居が終幕に向か

う頃、七之助は自分の辿った悪への道を振り返ってこう言う。

> 七之助：わしやあ深川大島町で、網打七五郎といふ漁夫の伜で手癖が悪く、小猿小猿と渾名に呼ばれた七之助といふ巾着切り。[11)]

犯罪性についてのこのような従来型の説明（「持って生まれた性格」）は、ヘンリー・フィールディングの有名な主人公トム・ジョウンズが「生まれながらの絞首台行き」（born to be hanged）と描写されるのと奇妙に符合する。犯罪ヒーローが悪事の理由を幼少期の性向に帰そうとするのは、初期黙阿弥の幕末犯罪物によく見られる。徳川犯罪文学の多くは賢い裁判官や「勧善懲悪」の約束事に焦点が絞られ、犯罪者という人格が、主観的に押しつけられた倫理的・法的限界への挑戦ではなく、社会的・政治的ヒエラルキーを補強するために使われる。ところが『小袖曽我薊色縫』（と、それに続く作品群）のような作品では、焦点を犯罪者その人に移し、犯罪を生み出したものはいったい何かという問題をさらに深掘りしていく。

しかしながら私の見るところ、犯罪者になるという清心の決断の動機と感情的現実の重大な変化が『小袖曽我薊色縫』に埋め込まれているということは、このとき黙阿弥のドラマトゥルギーが重要な変化を遂げたということではなかろうか。黙阿弥は『小袖曽我薊色縫』で初めて犯罪行為を自己像構築の手段、つまり階級・ステータス・出自で決まるとされる個人の人生コースを変える手段と考えた。だからこれは、黙阿弥の多くの初期作品の基礎となっている、犯罪性は生まれつきであり、犯罪者は両親次第で決まる「因果応報」という掟の犠牲者であるという考え方からの抜本的な脱却である。そのような初期作品の一つの例が前述した『網模様灯籠菊桐』の小猿七之助だが、この作品で七之助の犯罪性は因果応報のタガをはめられ、それにどんどん締めつけられていく。そもそもこの因果は芝居の冒頭、父親の七五郎が輿四郎という（道具屋の）手代から 70 両を盗んだことから始まった。

この種の作品と較べると、『小袖曽我薊色縫』で描かれる犯罪への転向の

瞬間を劇にするという決断は歌舞伎ドラマトゥルギーにおける決定的な断絶である。それはまた、舞台の登場人物が歌舞伎伝統の「やつし」パラダイム（すなわち、日本近世文学研究者アンドリュー・ガーストル［C. Andrew Gerstle］のいう「人形浄瑠璃における筋書きの循環構造」[12)]）の命ずるところに逆らう瞬間とも読める。「やつし」の零落と上昇パターンでは、登場人物は社会生活と階級の閾（しきい）的な形態をいくつか経て、やがて必ず第二の変身にいたるが、本来のステータスに戻るには悪者をやっつけねばならない。「やつし」場面の焦点は登場人物がその艱難辛苦に耐え抜くことにあるが、最後はいつも本来のステータスに戻る。これは演劇の構造としては本質的に保守的で現状肯定的だ。だが黙阿弥の犯罪への転向は「やつし」の限界に挑む——黙阿弥のそれは登場人物が強いられたというより、みずから選んだ人生コースであり、であればこそ、そこからふつうの非犯罪的存在に戻ることはできない。

このように見てきたとき、「一人殺すも千人殺すも、取られる首はたった一つ」と嘯（うそぶ）く清心の言葉にちらつく強がり、そしてこれからは義務や献身ではなく、快楽を求めて生きたいという欲望には、もう少し状況説明が必要であろう。登場人物が家族や社会の事情によって強いられた人生に従うのでなく、自分自身の人生を選ぶ機会を与えられ、それを江戸の観客がみることのできるような場面をつくるという決断は、社会を縛る因習を変える断絶に似た「何か」からしか訪れなかったのではないか。それは、もしかすると世界的パンデミックにそっくりな「何か」だったのかもしれない。

（訳・朝倉和子）

1　ベティーナ・グラムリヒ＝オカは、『橘黄年譜』や『武江年表』など徳川時代当時のいくつかの異なる文献から死者数の有用な表をまとめあげた（Gramlich-Oka 2009, p. 36）。

2　倉地克直（2016）、212 頁。

3　南和男（1980）、77–78 頁。

4　金屯道人（1858）から引用。
5　裏山政雄・松崎仁校注（1961）、311 頁。
6　同上、323 頁。
7　同上、334–335 頁。
8　Tokita, 1999, p. 1.
9　服部幸雄『江戸歌舞伎論』（1980）より「黙阿弥の白浪物」（399 頁）。
10　良齋オリジナルの講談と歌舞伎バージョンの違いについての分析は、今岡謙太郎（2002）を参照のこと。
11　河竹糸女・河竹繁俊編（1924）、290 頁。
12　Gerstle 1986 を参照のこと。

参考文献

» Bettina Gramlich-Oka. “The Body Economic: Japan’s Cholera Epidemic of 1858 in Popular Discourse,” *East Asian Science, Technology, and Medicine,* no. 30, Special Issue: Society and Illness in Early Modern Japan (continued) (2009): 32–73.
» C. Andrew Gerstle. *Circles of Fantasy: Convention in the Plays of Chikamatsu*. Cambridge, Mass.: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1986.
» 服部幸雄「黙阿弥の白浪物」『江戸歌舞伎論』法政大学出版局、1980 年。
» 今岡謙太郎「『網模様灯籠菊桐』の独自性」『歌舞伎――研究と批評』第 29 号（2002 年 6 月）。
» 犬丸治「江戸・明治の人々は疫病にどう立ち向かったのか？芝居に見る先人たちの知恵」『和楽 web』2020 年 3 月 10 日。https://intojapanwaraku.com/culture/84892/（最終アクセス：2021 年 9 月 1 日）
» 河竹糸女・河竹繁俊編『黙阿弥全集』第 3 巻、春陽堂、1924 年。
» 倉地克直『江戸の災害史――徳川日本の経験に学ぶ』中央公論新社、2016 年。
» 金屯道人（仮名垣魯文）『安政箇労痢流行記』天寿堂、1858 年。
» 南和男『維新前夜の江戸庶民』教育社、1980 年。
» Alison McQueen Tokita. *Kiyomoto-bushi: Narrative Music of the Kabuki Theatre*, vol. 8 of *Studien zur traditionellen Musik Japans*. Kassel; Basel; London: Bärenreiter, 1999.
» 浦山政雄・松崎仁校注『歌舞伎脚本集　下』日本古典文學大系 54、岩波書店、1961 年。

Covid-19 and Japanese Studies: Some Thoughts from Prague

Toyosawa Nobuko

The "Emergency" Conference by the Consortium for Global Japanese Studies organized by the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken) in Kyoto, was held via Zoom in December 2020 shortly after the second lockdown came to an end in the Czech Republic. Unlike the first lockdown that lasted for three months in the spring of the same year, the second lockdown began on 22 October and lasted for a little over a month. As shown in the "Total Coronavirus Cases" provided by the WHO (figure 1), infection cases began to increase rapidly in the Czech Republic in late October 2020.[1] The government's swift actions forced non-essential businesses as well as schools to close, and it set protective measures for

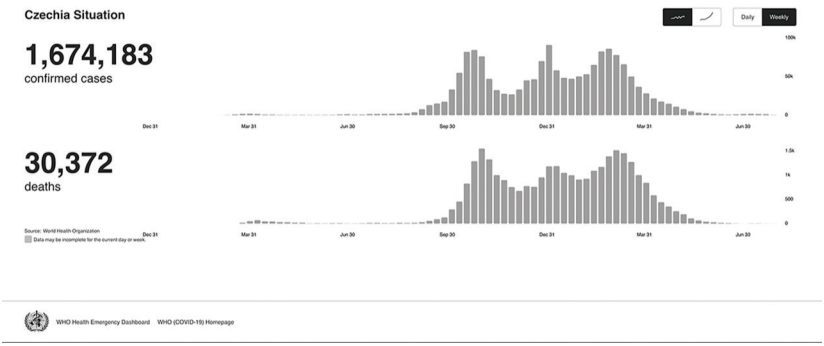


Figure 1. Total Confirmed Cases and Deaths from World Health Organization
In the Czech Republic, from 3 January 2020 to 4 August 2021, there have been 1,674,183 confirmed cases of Covid-19 with 30,372 deaths, reported to WHO. As of 1 August 2021, a total of 10,182,068 vaccine doses have been administered (last accessed: August 5, 2021).

the elderly by designating early morning hours as the time when they could shop. Workers were encouraged to work from home, and distance learning was introduced in schools, involving parents to supervise their children's daily learning.

The second lockdown felt much more severe, although the measures were almost the same as the first lockdown. I saw drastically less people during the commuting hours, and my destinations were also limited to a handful of places: home, office, and supermarkets. The city of Prague was totally empty with no tourists and its shops closed. This conference took place in my living room, in isolation, which is otherwise located in a modern urban space. The virtual connection enabled the participants to feel a sense of togetherness. Reports on respective conditions in European cities reassured us that our experiences were very similar. In the midst of uncertainty where we were negatively impacted by the pandemic, this conference was a valuable avenue to connect to the broader community of Japanese Studies scholars.

I thank Professor Araki Hiroshi for inviting me to join this conference. In the preparation stage, it allowed me to observe the situations in the Czech Republic more closely in order to convey the conditions precisely to the audience. The conference gave me a chance to meet scholars I had never met before, albeit via Zoom. More importantly, their reports about their institutions' struggles offered a chance to face the negative impacts of the pandemic and rethink what our attempts might be in the near future to rebuild what we have lost in the first year of the pandemic.

At the conference, I shared interview results from my colleagues at Masaryk University, most notably of the Head of the Department of Japanese Studies, Dr. Jiři Matela.[2)] The challenges at the universities were shared by teachers and staff, and this time around, all students, including the shy and reserved ones, had to be actively responsible for their own education by asking for help and support. This includes additional efforts and expenses because most students had to set up

workstations at home with good wi-fi access and a functioning computer. I heard various accounts of great anxieties the situation caused for many students, who worried about wi-fi stability, noise problems, and the overall quality of their home-office environment. Needless to say, Covid-19 impacted all students, not only those learning Japanese. But language learners were profoundly affected by the pandemic, insofar as it required distance learning for second language acquisition. Without feeling the intimacy that constitutes direct dialogue, for example, any attempt to acquire a foreign language over the computer screen is compromised. Language acquisition demands strong will and desire from the learners. But in this time of the pandemic, both the teachers and learners had to be united in spirit to believe that language learning was still effective through repetition and doing drills and exercises as long as there were "authentic" and situationally realistic contexts. Even if one felt some sort of artificiality involving the lessons, they had to pursue it optimistically. It is my sincere wish that students who were unable to travel to Japan due to Covid-19 will still sign up for future study-abroad programs and pursue their initial intellectual endeavors. Especially in the Czech Republic, where college education is not everyone's choice after high-school, I hope that these students will have the opportunity to test their Japanese in real situations in Japan with Japanese people as the study-abroad opportunity in the final year was designed to do.

I have decided to revise my report of the December 2020 conference by focusing on the observations I made during lockdowns. The negative impacts of the pandemic stirred much discussions for a change, which I will address later, and we need to consider seriously how to help students realize their goals in the university, including the study-abroad experiences that might be disappearing as an option. Rather than taking a radical approach to change, I believe that we can implement small adjustments to curricula to overcome the gap in the research environment that exists in the field to produce a brighter future of Japanese Studies in Central Europe and beyond.

Covid-19 was an opportunity for me to ponder over my research environments here in Prague. In these months of multiple lockdowns, I had time to think clearly about how the field could continue to prosper. As someone who studied and completed degree programs in US universities and worked in the United States and United Kingdom before coming to Prague, I have a reference point of the American research institutions for comparison, and because of this, I had moments of doubt in the beginning of my appointment at the Oriental Institute. While our institute is among the most respected research institutions for Japanese historians to pursue careers in Central Europe, the research environment here at first appeared to me quite modest. Yet I soon realized that the issue involved not the institute but myself and my expectations. In fact, I quickly came to see the "lack" of facilities and resources as a challenge issue facing Japan Studies scholars like me around the world. My intention in addressing this issue is of course, not to complain about it. Rather, we can transform our ostensible weaknesses into strengths and potentials for the future of Japanese Studies around the world.

I came to the Oriental Institute of the Czech Academy of Sciences in the spring 2017 after spending over two decades in the American Midwest. I did my graduate training at the University of Illinois, and because I worked as a teaching and research assistant most of the time, my tuition for graduate school was waived. Additionally, I received a small monthly stipend, with which I paid rent, bought food and books that now make up my personal library. Although I was a foreign student in an American state-funded university, our graduate programs were equipped to support most of the graduate students. Many US universities provide fellowships in the humanities with the understanding that, unlike fields of law and medicine, people with a PhD in History would have a difficult time repaying their loans and that they would have to take out to finance their expensive graduate educations particularly at a private university. I do not think that I could have earned my PhD in my home country of Japan because my parents were not supportive of my pursuit

of higher education, which would have made it financially impossible for me to enroll in. Graduate programs in Japan are not so generously fund graduate students and studies, as my sister had to eventually repay her "scholarship" to the foundation after completing her Master's degree in Psychology.

Scholarships and fellowships mean different things depending on the country. At least in the US, normally scholarships are for the undergraduate students and fellowships are for the graduate students. The purpose of these financial aids is to enable students to pursue research in a chosen field and let them utilize their skills and intelligence for the well-being of the society and world after their graduation. Students are, by definition, in the process of developing their intelligence and critical thinking to a fuller extent, and, thus, by allowing them to study, scholarships help them to reach their intellectual potential, and not just obtain certain skills and techniques. Scholarships are valuable means for students to attend university. From the point of view of social welfare, they are also vital investments for the formation and nurturing of civic minded citizens for the betterment of future society. When university education is "free," as in various countries in Europe, giving additional financial aid to students might not seem necessary. However, being a full-time graduate student is like having a full-time job: graduate seminars are intellectually and physically demanding, and students usually have more than one class each day to keep up with the reading and writing assignments. Therefore, having a limited number of prestigious fellowships available to prospective graduate students would encourage applicants to consider more seriously a career path as an educator, researcher, or writer. Graduate programs would then attract higher quality applicants.

My position at the Oriental Institute demands that I remain an active scholar in my field and continue publishing academic papers and monographs. It also includes the crucial responsibility of nurturing the next generation of scholars who will carry on research and scholarship in the Czech Republic, a task which I take seriously. My work will indeed prove limited if the Japanese Studies field I

care so much about does not take deeper root in the country. I believe this would be very unfortunate as Czechs are keenly interested in the Japanese culture. Japanese Studies is a popular major for university undergraduates, but there is still room for improvements in the graduate programs as the venue to train young scholars. Comprehensive graduate programs should ideally be equipped with scholarships, fellowships, and assistantships so that students maximize their time as junior researchers, assistants, and teachers within the relevant intellectual milieu.

In this regard, it is noteworthy that there already exist a handful of organizations whose aims are to vitalize Japanese Studies internationally, and they provide overseas research institutions with grants for building libraries, run book donation projects, offer start-up funds to establish undergraduate program for Japanese Studies, and fund fellowships for graduate students with the specialization of Japanese Studies.[3)] Their activities are remarkable not only for helping students, but also for bringing scholarly books on Japanese society, history, culture, and politics to the university libraries in countries where Japan still remains rather exotic. In particular, the Czech Republic steadily nurtured the development of Japanology. In addition, over one hundred years of Czech-Japan diplomatic relations has even made some Czechs as zealous practitioners of Japanese culture. However, understandably, until recently the scholarship in this field has been produced primarily in Czech, making it difficult for non-Czech speakers, including myself, to access the rich history of Czech writing on Japan. This also means that traditional understanding of Japan in the Czech Republic is distinctly Czech and lacks an international perspective. By (re-)creating my present position after a decade of vacancy, the Institute sought to internationalize Japanology and make Czech Japanology more visible to the world. In the same vein, I hope that Czech scholars of Japan can have a bigger global impact. Therefore, I sincerely urge young Czech scholars to study Anglophone, Japanophone, and Czechophone scholarship on Japan to create the great waves of new ideas and interpretations, of which they are eminently capable, in the global field of Japanese Studies.

Before Covid-19, I had a number of occasions to meet Czech Japanologists and their students at conferences. I also had an opportunity to visit and give a lecture at the Department of Japanology at Masaryk University in Brno, one of the best programs for Japanese Studies in this region [figure 2]. At that time, my lecture was for undergraduate students in the department on the topic of seventeenth-century Japanese peoples' emerging awareness of the outside world as observed in popular media such as theatre performances and guidebooks. Afterward, I found the students' questions sincere and informed, as they had studied well by reading the original literature or in translation. Even if they were not specializing in early modern history, the students knew much about the early modern era as a moment of

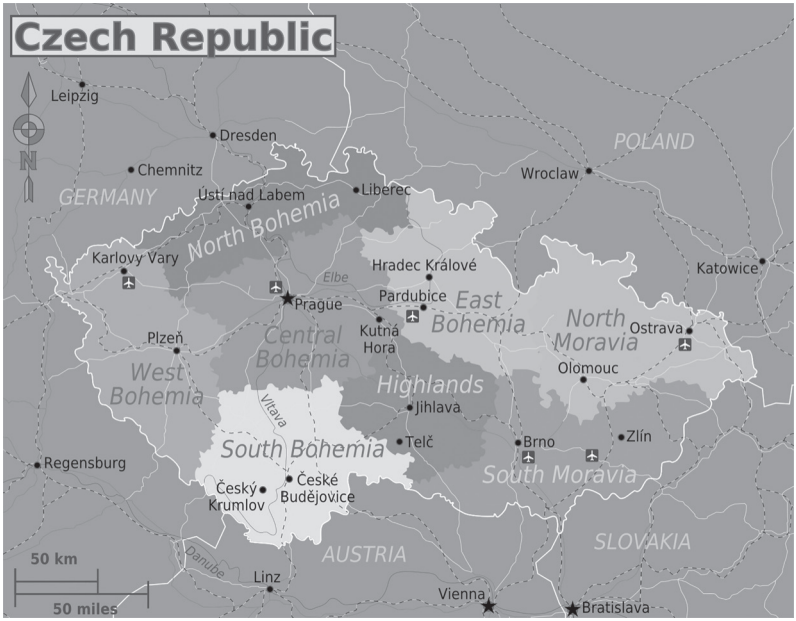


Figure 2. Map of Czech Republic
In the Czech Republic, students can study Japanese language, history, society, and culture at Charles University in Prague, Masaryk University in Brno, and Palacký University in Olomouc, among other smaller universities. The map "Czech-regions wts.png" was made available by Globe-trotter and Globe-trotter is licensed with CC BY-SA 4.0. To view a copy of this license, visit https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0 (last accessed: August 5, 2021).

cultural maturity and renaissance for the Japanese culture. The students and scholar I met in Brno form a quite large group, and they are uniquely passionate about their research and practice, be it Japanese linguistics, early modern Japanese literature, or medieval Japanese philosophy.

One might assume that university education has become the mainstream path for better future jobs almost universally, and in some countries the simplification of "everyone goes to university today" is not an exaggeration. At least, this was the case in many developed countries before Covid-19. However, there are still places where studying at college and university levels is not a normal course of education. The Czech Republic is one such country, and going for graduate training in the humanities and social sciences requires a significant level of commitment on the side of students because such a choice implies a need to simultaneously earn monthly and yearly living expenses, even if the money for room and board, books, and computers were fortunately paid. Many graduate students I have met here are committed in this way, and some teach Japanese privately to anime fans to have savings for their own study. While this is admirable of the graduate students, is it sustainable? Or, is it ideal that students spend much of their time and energy on earning money for expenses when they should focus on their graduate training to maximize their time and resources of the program to advance their study? Obviously, if one needs to work and go to school, the time to work on the school and research materials shrinks, and it consumes one's energy as well, hence, prolonging their study.

Another aspect that I noticed in the country that does not seem justifiable is the resources. The General Library of the Oriental Institute might have the highest holdings of books and periodicals related to the Orient, but their Japanese Studies collection is far from robust. The Institute is not solely to be blamed for the collection's development. In fact, it holds rare and special materials from Tibet and North Korea, among others, that exist nowhere else in the world. Due to the long, previous vacancy of the chair of Japanology at the Institute, collecting the literature

and materials to support a Japanese Studies program was not maintained, and thus the Japanese collection currently lacks the resources found in most US universities with Japanese Studies programs.

From the beginning of my appointment, it has been my long-term goal to build a research library for Japanese Studies at the Institute. I have been more than fortunate to receive support from the Japanese Embassy in Prague whose recommendation was vital for securing the Read Japan Project from the Nippon Foundation in the winter of 2020. We have been tremendously grateful to the Japan Foundation, who also in the winter of 2020, granted us a generous financial support to build the Japanese Studies collection, which enabled us to purchase a handful of precious series on Manchurian literature and films produced during the Japanese imperial period. With this grant, the Japan Foundation also provided us with the Japan Knowledge Lib online resources, which has remarkably improved my personal research environment. The only downside of this gift is that I am the primary user of Japan Knowledge Lib given that I am the only researcher in Japanese Studies at the Institute. We are the only institution in the country that has access to Japan Knowledge Lib, and if we can extend access to other Japanologists beyond the institutional boundaries, the precious gift from the Japan Foundation will surely be better utilized. At the same time, we are also promoting our new purchase of the Manchurian collection for other Japanologists to use. By sharing our collection with other scholars, we hope to hold seminars and workshops for research exchanges. Most recently, we are in the process of accepting a personal book collection of the German award winning Japanologist, Prof. Dr. Irmela Hijiya-Kirschnereit of Freie University Berlin. A series of these moves for building the collection has just begun, but our institute will continue to work on building our resources so that it will be one of the best places for researchers in Central Europe and beyond for Japanese Studies research.

Having said this, I must admit that our steps are yet small and the completion of an ideal research environment will take some time. The price of subscription for a reference material database is prohibitively expensive for Czech research institutions, due to the fact that our currency value is about one-fifth of the Japanese yen (although the Czech Republic is doing extremely well economically in Europe). Even during the pandemic, it is positively evaluated that "the government introduced a generous package of emergency support measures, including job retention schemes, income support to the self-employed, and parents that had to stay at home, as well as loan and guarantee programs to boost firm liquidity."[4] The measures remained largely effective in 2021 with additional support for boosting consumption and growth. In short, forecasters predict that the Czech Republic has the potential to grow economically in the near future as it shifts toward more digital upskilling and energy projects that improve energy efficiency and reduce carbon emissions, as well as air pollution. I would urge foundations working for the vitalization of global Japanese Studies to consider Central Europe as a test-case for investment. There are great number of passionate professors at multiple universities, coupled with the steady interest of Czechs in Japanese culture, including popular culture and cuisine, it is a great moment to stimulate the attention of students and the public about Japan. It would be wonderful to have the Japan Knowledge Lib database in all university libraries where students and scholars could use a service which far more comprehensive than sources like free online dictionaries. Such high-quality databases would allow students to immerse themselves in a Japan-like environment, albeit in cyber spaces, in their learning and research. By creating such virtual Japanese spaces in a corner of the library, students might find further incentives to improve their Japanese. The frequent use of Japan Knowledge Lib would implicitly communicate to them why one should choose more appropriate and authentic academic sources of information.

More importantly, our efforts to make our institution one of the beacons in Europe for Japanese Studies will progress meaningfully only by working with other institutions and universities and engaging in close dialogue with them. I am deeply indebted to the interlibrary loan service "Blauer Leihverkehr" administered by Staatsbibliothek zu Berlin (Berlin State Library) for numerous articles that they promptly sent to me.[5] Largely because we need to move forward with publication and the presentation of research without a functioning research library at our home institution, it is necessary for us to utilize other institutional support, such as "Cross Asia" of Blauer Leihverkehr. Likewise, I would also like to highlight the vital role that the Consortium could perform as a leader and facilitator by providing Japanese Studies researchers in the world with the bountiful resources and the expertise. Not only can the Consortium play a significant role in minimizing the gap in the research environments globally, but also can make the field of Japanese Studies more global and interconnected.

I am highly aware of the recent calls for action to change the way we do research. Researchers who are unable to travel to use archives and libraries due to travel restrictions are now suggesting the launch of a new set of research and inter-collegiate and inter-university exchange standards as it becomes clear that the ongoing pandemic crisis is changing our reality. They ask if we are unable to travel to use library and archival materials, unable to go to the excavation sites, or to conduct ethnographic research, how can we maintain the current systems and standards of research? We cannot conduct research, but we are expected to demonstrate findings at conferences and in publications. In a provocative article titled "Field-based Sciences Must Transform in Response to COVID-19," the authors point out that utilizing online meetings and extending the terms of a grant have limits because those actions assume an eventual return to pre-pandemic normality. However, we are unable to predict when normality will return, and instead of waiting for it, we must "radically reshape the way we operate in science."[6] They go on to state that the

most urgent required change is to find “alternative ways” that require “less travel” as well as ensuring “equitable research partnerships and the elimination of nominal collaborations that overwhelmingly favor the career advancement of partners in the Global North.”[7] Moreover, the authors are reminding us that this change has long been advocated to help combat climate changes.(It is even more timely now after the recent floods in Germany and Belgium demonstrate once again that the climate change is real.) For all of us it is, as they claim, a “goal long-advocated for by the movement to decarbonize field sciences.”[8]

This new strain on an already stressed field of research is not limited to or specific to the scholars of Japanese Studies but humanities and social sciences in general. The pandemic has affected universities and research institutions universally. I share many of the concerns raised by the authors, who have thoroughly considered institutionally significant and meaningful changes in academia in the near future. However, my reservation would be that we cannot identify the “new normal” in Japanese Studies without having a good view of the future potential research environment. Would our new normal uphold similar degrees of quality, originality, and utility to attract future generations to the field of Japanese Studies? As in the case of the study abroad problem in Masaryk University and beyond, by adjusting our research to a new set of standards, would the introduction of a “new normal” standard be the solution? Could new Japanese Studies programs maintain a rationale for the production of knowledge, sustained by a solid basis of expertise of researchers?

These are rather abstract questions, and without seeing the results of how badly the lack of study abroad programs in university curricula will impact our students, we will not be able to make a meaningful comparison. In order for our work to be evaluated more fairly, we also need sufficient discussions of all parties, not just scholars and students who want to see new changes. In addition, we will also need inputs from the grant agencies, publishing houses, administrators of universities and

research institutions, before modifying standards for research and education. I have raised this issue to highlight once again the initiative that we hope the Consortium might lead in the coming years. If language learning and research can develop more systematically through mutual collaboration with Japanese research and educational institutions, could we not make better use of our shared resources and expertise? I would hesitate to propose radical actions because teaching and research excellence are our goals, and we should pursue genuineness, fairness, and objectivity as much as possible in our profession. We have to remain committed to authentic scholarship, which requires long-term research and writing with meaningful exchanges with specialists in the field. Given the current parameters for academic funding, these steps are hard to come by and difficult to be materialized quickly. Even now, in an ongoing pandemic, we are still expected to publish our research in internationally renowned journals or monograph series. One could argue that the current standard is fair to the grant agencies and justifiable to them, and evaluation committees are showing flexibility and understanding in the current circumstances. However, their flexibility is not in a "new" manner reflecting long-term changes in research methods, publication requirements, and standards.

The pandemic has given me an opportunity to reflect on the value of research and education, and I have come to realize the profound differences that exist in research environments around the world. By improving the research environment, especially access to research resources and services in the Czech Republic, I am optimistic that hardworking scholars and a large number of ambitious students could energize the field and make the Czech Republic a center for research in Japanese Studies. In any case, I will continue to nurture, in any way possible, future students who aspire to become full-fledged scholars of Japanese Studies.

The lockdowns imposed many negative and often harsh situations upon us, but they have also shown the possibilities of distance learning and value of IT resources.[9] As economists predict that the Czech Republic is going to experience

an economic growth in the second half of 2021, I hope that grant agencies and foundations will find Central Europe as a place where recovery efforts for students and scholars can establish strong roots to eventually grow robust Japanese Studies programs.

1 I thank the WHO for generously making their data open and allowing users to freely copy, reproduce, reprint, distribute, translate, and adapt the work for non-commercial purposes. "Total Cases for Czechia: World Health Organization; 2021": https://covid19.who.int/region/euro/country/cz (last accessed: August 6, 2021). License: CC BY-NC-SA 3.0 IGO. At the WHO Health Emergency Dashboard WHO (COVID-19) website this data is interactive and more informative.

2 Interview with Jiři Matela (November 3, 2020) via Skype. I am grateful for his valuable input.

3 I would like to acknowledge my deep appreciation to the Nippon Foundation and the Japan Foundation for their invaluable gifts of books, support, and understanding to build the Japanese Collection in our library at the Institute. I would also like to note that we would not be selected for the Nippon Foundation Read Japan Project had we not had the warm support of the Japanese Embassy, most notably, Mr. Shōji Ikuo.

4 "Economic Forecast Summary (May 2021),"*OECD Economic Outlook*, vol. 2021, Issue 1: 39–41: https://www.oecd.org/economy/czech-republic-economic-snapshot/ (last accessed: August 8, 2021).

5 For more information about the service, see https://crossasia.org/en/service/blauer-leihverkehr/.

6 Eleanor M.L. Scerri et al., "Field-based sciences must transform in response to COVID-19," *Nat Ecol Evol* (2020): https://doi.org/10.1038/s41559-020-01317-8 (last accessed: December 6, 2020).

7 Ibid.

8 Ibid.

9 See, for example, a range of innovative pedagogical approaches and online webinars and talks, such as AAS Digital Dialogue, "*Teaching About Asia in a Time of Pandemic*," Monday December 14, 2020, 3:00 Eastern Time. This event was held after the successful publications of David Kenley, ed., *Teaching About Asia in a Time of Pandemic* (Columbia University Press, 2020), and Vinayak Chaturvedi, ed., *The Pandemic: Perspectives on*

Asia (Columbia University Press, 2020). There also emerged a website, "Japanese Studies Events Database," that allows scholars and students across borders to participate online in academic events on Japan: https://datastudio.google.com/u/0/reporting/621571f0-8678-4efd-a158-c90f85b53513/page/DbleB.

Works Cited

» Chaturvedi, Vinayak, ed. *The Pandemic: Perspectives on Asia*. Columbia University Press, 2020.

» Kenley, David, ed. *Teaching About Asia in a Time of Pandemic*. Columbia University Press, 2020.

» Scerri, M.L. et al. "Field-based sciences must transform in response to COVID-19," *Nat Ecol Evol* (2020): https://doi.org/10.1038/s41559-020-01317-8 (last accessed: December 6, 2020).

» "Economic Forecast Summary (May 2021)," *OECD Economic Outlook*, vol. 2021, Issue 1: https://www.oecd.org/economy/czech-republic-economic-snapshot/ (last accessed: August 8, 2021).

» "Total Cases for Czechia: World Health Organization; 2021": https://covid19.who.int/region/euro/country/cz (last accessed: August 6, 2021).

［日本語訳］

パンデミックと日本研究に関して
――プラハからの発信

豊沢信子

2020 年 12 月、京都の国際日本文化研究センターでオンラインによる「国際日本研究」コンソーシアム主催の「緊急」会議が開かれたのは、チェコ共和国の二度目のロックダウンが終わって間もない頃だった。同年春の第 1 回ロックダウンが 3 カ月続いたのに対し、二度目の封鎖は 10 月 22 日に始まり、1 カ月余り続いた。WHO の「コロナウイルス総感染者数・死者数」【図 1】に見るように、チェコ共和国では 2020 年 10 月後半に感染者が急増し始めた [1)]。政府はただちにノンエッセンシャル業務を停止させ、学校は休校、高齢者保護のために早朝の数時間を高年齢層の買物時間に指定した。勤労者

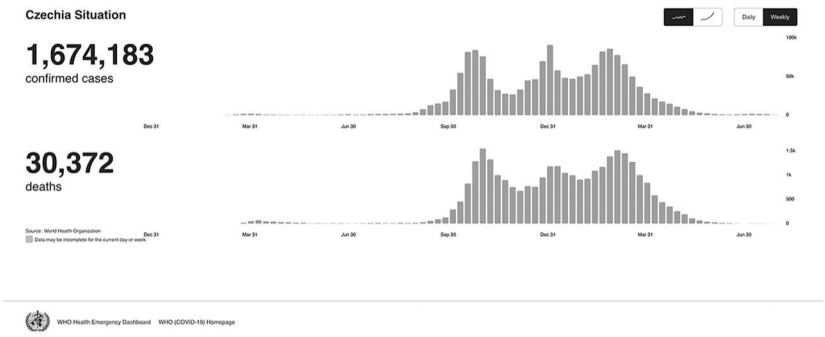


図 1　WHO によると、チェコ共和国における 2020 年 1 月 3 日から 2021 年 8 月 4 日までの Covid-19 確定症例は 1,674,183 件、死者 30,372 人。2021 年 8 月 1 日までに 10,182,068 人がワクチン接種を受けた。最終アクセス：2021 年 8 月 5 日午後 5 時。

には在宅ワークが奨励され、学校には遠隔授業が導入されて、両親が子どもたちの日課を監督することになった。

二度目のロックダウン対処策は初回とほとんど変わらないのに、ずっと厳しく感じられた。通勤時の人出は見た目にも激減し、私の外出先も家、職場、スーパーなど数カ所に限られた。プラハの街からは観光客が消え、それ目当ての店も閉ざされて、街はもぬけの殻になった。本来ならモダンで都会的な会場で開かれるはずの会議は、自分の居間で、ただ一人孤独のうちに行われた。しかし、今回のサイバー上の接触は参加者に一体感をもたらしてくれた。ヨーロッパ各都市からの情況報告によって、私たちはきわめて似通った経験をしていることが確認できた。パンデミックが引き起こしたネガティブな不確実性のなかにあって、このイベントは、学者たちを日本研究という大きな世界に結びつけてくれる貴重な場であった。

本会議へお誘いくださった、「国際日本研究」コンソーシアム委員会委員長の荒木浩教授に感謝申し上げたい。準備の段階で、私はチェコ共和国の情況を正確に伝えるために、当地の事情を詳しく調べる機会を得た。またこの会議のおかげで、オンラインとはいえ、これまで会ったことのない研究者諸氏と出会うことができた。さらに重要なことだが、この方がたの各研究機関での奮闘について聞くことにより、パンデミックのネガティブな影響を直視し、パンデミック初年に私たちが失ったものを近い将来再構築するための試みがどんなものになるか考え直す機会が得られた。

この会議で私は、マサリク大学の同僚たちへのインタビュー結果を紹介した——なかでも日本研究学科長ユラ・マテラ（Jiři Matela）博士のインタビューに注目していただきたい[2)]。大学の抱える課題は教職員が共有しているが、今回は学生全員が（シャイで控えめな人たちも）自身の教育に助けや支援を求めるなど積極的な対応を迫られた。これには余分な努力や費用がかかる。なぜなら学生の大半が、自宅に良好な Wi-Fi 環境やきちんと機能するコンピュータのある作業スペースを設えねばならなかったからだ。Wi-Fi の安定性やノイズの問題、ホームオフィス環境全般の良し悪しなど、多くの学生が

抱える心配事について、私のもとにはさまざまな話が届いた。言うまでもなく、パンデミックは日本語学習者だけでなく、すべての学生に影響を及ぼした。けれど第 2 言語の習得に遠隔学習が必須だったという点で、言語学習者へのパンデミックの影響は甚大だった。たとえば、直接対話を成り立たせる親密感がなければ、コンピュータのモニターを通じての外国語習得は、どう試みようと脆弱である。言語習得には一般に学習者の強い意志と意欲が必要だ。しかしこのパンデミックの時代には、教師と学習者がともに心を一つにして、「本当にあり得る authentic な」場面と現実的な文脈を想定することで、ドリルと練習の繰り返しの言語学習がいまだに有効であると信じなければならなかった。たとえレッスンがどこか人工的だと感じたとしても、楽観的に学習を続けなければならなかった。パンデミックのせいで残念ながら日本に行けなくなった学生たちが、それでも将来留学プログラムに参加し、初心を貫いてくれるよう心から望んでいる。とくに高校卒業後、誰もがカレッジ教育を選べるわけではないチェコ共和国では、最終学年に予定されている留学の機会を実現させ、学生たちが日本人のいる「本当の」日本で、学習した日本語を試し、生きた日本語を学ぶ機会が訪れるよう願ってやまない。

私は 12 月の会議報告を、ロックダウンのとき感じたことに焦点を絞って書き直すことにした。パンデミックのネガティブな影響は、変化に向けた多くの議論を呼び起こした。これについては後述する。私たちはまた、選択肢から消えてしまうかもしれない留学経験を含み、大学でのゴールを実現できるように学生たちをどうやって助けるか真剣に考える必要がある。私は、変化への過激なアプローチをとるより、日本研究という学問分野の研究環境に存在する格差を細かいカリキュラム調整によって克服することで、中欧その他の日本研究に明るい未来をもたらすことができるすばらしい機会だと信じている。

数回にわたるロックダウンのあいだ、私は日本研究という学問がどうしたらチェコで繁栄し続けるかを明確にする時間を持てた。アメリカの複数の大学で学位課程を終了し、アメリカとイギリスで働いたのちプラハにやって来

た人間として、私はアメリカの研究機関との比較基準を持ち合わせている。それゆえに、チェコ科学アカデミーの東洋研究所に赴任したばかりの頃は疑問を抱いたものだ。当研究所は中欧でキャリアを追求する日本史研究者にとって最も尊敬される研究機関の一つだが、当初、ここの研究環境はとてももの足りなく思えた。しかし、やがて問題は研究所ではなく、私自身であり、自分の抱く期待であることが分かってきた。そして全世界にいる私のような日本研究者が直面する課題として、研究施設と資源が「不足」していることを了解した。この場でこの問題を取り上げるのは、もちろん不満を言いたいがためではない。それどころかこの弱点は、世界の日本研究の未来に向けた長所となり、可能性になることができると私は信じている。

私がプラハの研究所に赴任したのは 2017 年で、それ以前はアメリカ中西部で 20 年以上過ごした。イリノイ大学で大学院を終了したときは、その大半を教師や研究助手として働いていたため、大学院の授業料は免除されていた。加えて少額の月俸をもらっていたから、それを家賃、食費、本代に当てていた。このとき集めた書籍が今自分のささやかな蔵書の大部分になっている。私はアメリカの州立大学に学ぶ外国人留学生だったが、大学院の教育課程は院生ほぼ全員を支えられるようにプログラムされていた。アメリカの大学の多くは人文部門にフェローシップを出しているが、それは法律や医学分野と異なり、史学の博士号では奨学金の返済に困難をきたし、とりわけ私立大学ではお金のかかる大学院教育をまかなうのが難しいと分かっているからだ。私は母国日本で博士号が取れたとは思えない。両親は私が高度の教育を求めるのに積極的ではなかったから、自力で日本の大学院課程に入るのは金銭的に無理だったと思う。日本の大学院プログラムは学生や研究に対してあまり豊かな基金を用意していない。実際私の妹は心理学修士号を取ってから、最終的にその「スカラーシップ」を財団へ返済しなければならなかった。

スカラーシップやフェローシップなど奨学金の持つ意味は国によって異なる。少なくともアメリカでは、一般に学部生にはスカラーシップ、院生にはフェローシップが出る。こうした金銭的支援の目的は学生が自分の選んだ分

野で研究を進め、卒業後はそうして培った技能や知力を用いて社会と世界の幸福に役立ててもらうためだ。学生とはそもそもその知性と批判精神を限界まで伸ばす過程にある存在であり、奨学金で研究させてもらうことによって、技能や技術を習得するのみならず、その知的能力を開花させるのを助けてもらう。奨学金は、学生が大学へ通うための貴重な手段であり、社会福祉の観点からすれば、未来の社会の向上をめざす公共心を備えた市民の形成と育成に向けた重要な投資でもある。多くのヨーロッパ諸国のように大学教育が「無料」なら、学生への金銭的追加援助は不要に思えるかもしれない。しかし、フルタイムの大学院生であるということはフルタイムの仕事をしているに等しい。大学院のゼミは知的にも物理的にも厳しく、学生はリーディングとライティングの課題をこなすために、大抵一日中勉強している。だから、有望な大学院生に与えられるフェローシップの数が限られていると、それだけ競争が激しくなり、奨学金を申請する側が教育者・研究者・ライターといった職業への進路選択をより真剣に考慮するようになる。その結果、大学院プログラム申請者の質はかなり高い。

東洋研究所での私のポジションには、日本研究という分野で、論文や単著を発表することが求められている。こうした活動を通して、チェコ共和国で研究と学術を担う次世代の学者を育てるという重大な責務も含まれており、このことを私は真剣にとらえている。私が心から大切に思う日本研究という分野が、もしもこの国でしっかりと根を張らなければ、私の仕事はきっと限定的なものに終わるだろう。チェコ人がせっかく日本文化に深い関心を抱いているのに、それではあまりに残念だ。日本研究は学部生にはかなり人気のある科目だが、チェコの大学院プログラムは若い研究者を育てる場として改善の余地がある。総合的な大学院プログラムは、理想的にはスカラーシップ、フェローシップ、アシスタントシップを用意して、関連する知的環境で学生たちが若手研究者、助手、教師として費やす時間を最大化できるようにすべきだ。この点で、国際的に日本研究を活性化させようと活躍している組織がすでに存在することは特筆すべきだ。こうした組織は、図書館構築助成金、

図書寄贈プロジェクト、日本研究の学部プログラム開設基金、日本研究に特化した大学院生のフェローシップを備えた海外研究機関を提供している[3)]。その活動のすばらしい点は、学生支援だけでなく、日本がどちらかと言えば異国的な存在である国々の大学図書館に、日本の社会・歴史・文化・政治についての学術書を提供していることにある。

チェコ共和国は日本研究を着実に発展させてきた。また、100年を超すチェコ・日友好関係のおかげで、熱心な日本文化の実践者も少なくない。でも当然ながら、つい最近までこの分野の学術成果が主としてチェコ語でなされてきたため、日本に関するチェコ語文献の歴史は長いのに、私を含めチェコ語のできない者にはアクセスが難しい。また、チェコ共和国の伝統的な日本文化や歴史の理解はチェコ特有で、国際的視野に欠けている。10年程の空白の後に（再び）私のポジションを用意してくれたことからも明らかなように、当研究所は日本研究を国際化し、世界的規模で可視化したいと思っている。こうした流れのなかで、チェコ人の日本研究者にとっても国際的なインパクトが増大しつつある。若いチェコ人の研究者が英語、日本語、チェコ語で書かれた研究成果を読み進めることにより、この分野に新しい解釈をもたらすことが可能だ。彼らは日本研究の国際舞台でそれをする能力を十二分に備えている。

パンデミック以前、私は何度となく学会でチェコ人の日本研究者やその学生たちに会う機会があった。ブルノにあるマサリク大学の日本学科で講演したことも一度ある。ここはこの地域随一の日本研究プログラムを誇る大学の一つだ【図2】。このときの講演では、日本学科の学部生を相手に、17世紀日本の芝居や旅行案内など大衆メディアに現れた日本人の自他の意識の覚醒をテーマにした。学生たちは古代・中世・近世日本の文献を原語や翻訳で少々読んでおり、講演後の質問は真剣で、確かな学習経験に基づくものだった。彼／彼女らは日本近世史専攻でもないのに、この時代が文化的成熟を迎え、いわば日本文化のルネサンスだったことをよく知っていた。私がブルノで出会った研究者や学生のグループは結構な人数で、語学だろうが、文学、哲学

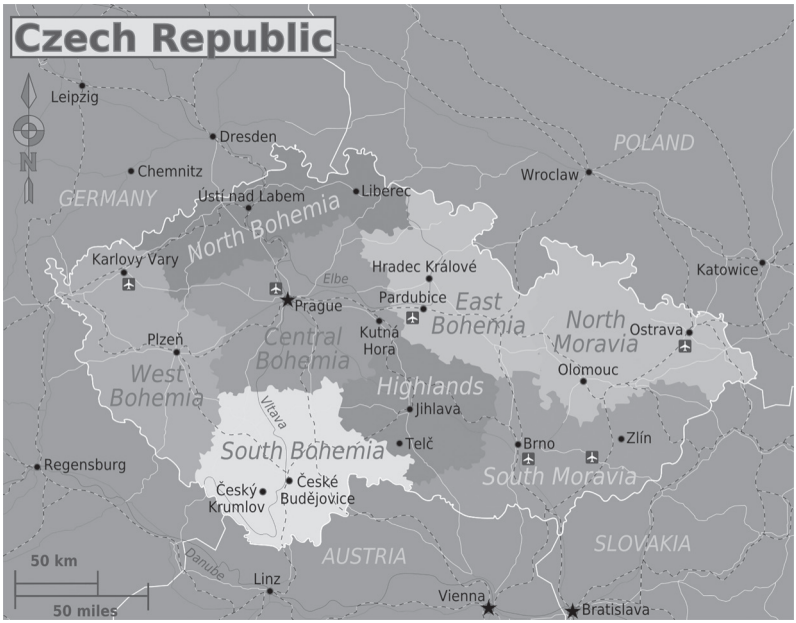


図２　チェコ共和国の地図。チェコではプラハのカレル大学、ブルノのマサリク大学、オロモウツのパラツキ大学、その他の小規模大学で日本の言語・歴史・社会・文化を学ぶことができる。本地図 “Czech-regions wts.png” は、グローブ・トロッター社（Globe-trotter）作成（ライセンスは CC BY-SA 4.0）。著作権については、https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0 を参照のこと。

だろうが、自分たちの研究やそれを実践する場を探すのに他では見られぬほど熱心だった。

大学教育が将来より良い職業に就くための道筋として主流になったことは、ほぼ万人の認めるところだろう。国によっては「今では誰もが大学へ行く」という単純化した言い方も誇張ではない。少なくともパンデミック以前は、多くの先進国でそうだった。しかし、カレッジや大学レベルで学ぶことが教育の当たり前のコースではない場所もまだある。チェコ共和国もそのような国だから、人文科学や社会科学で大学院へ行くには、学生の側にかなりの覚悟と責任が問われる。たとえ幸いにして部屋代や食費、書籍やコンピュータ代を支払ってもらえたとしても、学業を続けるには、月ごと、年ごとの生活費を稼がねばならないからだ。私がこの国で出会った多くの大学院生がそ

ういう暮らしをしており、なかにはアニメファンに日本語の個人レッスンをして学費を貯めている者もいた。それはそれで大したことだが、果たして持続可能だろうか？また、研究を進めるために限られた時間のなかで研究成果を最大化すべきときに、生活費を稼ぐのに多くの時間とエネルギーを割くのが、果たして理想的だろうか？もしも仕事と学校を両立させねばならないなら、学業や調べ物に費やす時間は当然減るし、エネルギーも取られ、その結果、大学院での研究も長引く。

この国で納得が行かないと思ったもう一つの局面は、研究資源である。東洋研究所の総合図書館は東洋関係の書籍や雑誌を最も多く所蔵しているが、日本研究関係の蔵書はとても十分とは言えない。これは研究所のせいだけではない。この図書館にはとりわけチベットや北朝鮮など、他には存在しない特別な資料が豊富にある。しかし、長いこと日本学科が空席だったため、日本研究を支える文献が整備されておらず、日本研究プログラムのあるアメリカの大学ならたいてい所蔵しているような資料が欠落している。

赴任当初から、私の長期目標はここに日本研究を根づかせるためにその研究図書館をつくることだった。幸運にもプラハの日本大使館からご支援をいただき、その強い勧めにより 2020 年冬に日本財団の「リード・ジャパン・プロジェクト」（Read Japan Project）の受賞者リストに選ばれた。その結果 200 冊近い日本研究の書籍の寄贈を受けることが決まった。財団には心からお礼を申し上げたい。ごく最近は、ドイツの学術賞を受けた、ベルリン自由大学教授のイルメラ・日地谷・キルシュネライト日本文学博士の個人蔵書を寄贈いただく手続きに入っている。また、2020 年冬には、国際交流基金から日本研究コレクションを構築するための潤沢な助成金をいただき、そのおかげで満洲国に関する貴重な文献や資料を数点購入することができた。新しく購入した満洲関係資料を他の日本研究者に利用してもらえるよう働きかけている。と言うのは、こうした共有が実現すれば、セミナーやワークショップを開いて学術交流が盛んになるからだ。さらにこの助成金によって、オンライン資料「ジャパンナレッジ」（JapanKnowledge Lib）へのアクセスが叶い、

私の個人的研究環境は著しく改善された。この贈物に唯一難点があるとすれば、それは「ジャパンナレッジ」を使うのが専ら私のみであることだ。当研究所の日本研究者が今は私しかいないためである。国内で「ジャパンナレッジ」の購読をしているのは当研究所だけなので、もしもこれを研究機関の境界を越えて拡張し、チェコ国内の他の日本研究者にもアクセスを与えることができれば、国際交流基金からの貴重な贈物がもっと役立つに違いない。図書館構築のこうした動きは始まったばかりだが、当研究所はこれからも研究資源の構築を続け、中欧その他の日本研究の拠点となっていきたいと思う。

とはいえ、私たちの歩みは微々たるもので、理想的な研究環境が完成するにはまだ時間がかかることを認めねばならない。参考資料データベースの購入費用はチェコの研究機関にとっては手の届かぬほど高額だ――チェコ通貨の価値は日本円の約 5 分の 1 に過ぎない（チェコ経済はヨーロッパの優等生なのに）。しかしパンデミックの最中にあっても、「政府は、雇用維持計画、自営業者や在宅を強いられる両親への所得支援のほか、確かな流通を強化するための貸付や保証プログラムなど、潤沢な緊急支援パッケージを導入した」と前向きに評価されている[4)]。消費と成長を促すための追加支援策もあって、こうした対策は 2021 年にはほぼ奏功してきた。端的に言うなら、チェコ共和国はデジタル技能のスキルアップと、エネルギー効率を高め、大気汚染と炭素排出量を削減させるエネルギー計画に向けて舵を切るなかで、近い将来、経済成長する能力があると予測されている。そこで、日本研究の世界的な活性化をめざす基金団体におかれては、中欧を投資の試験台としてぜひ考慮するようお薦めしたい。多くの大学に熱意ある多数の教授たちがいることに加え、大衆文化や食を含め、日本文化へのチェコ人の興味がしっかり定着した今こそ、日本に対する学生や一般の関心を喚起するチャンスだ。すべての大学図書館に「ジャパンナレッジ」のデータベースを備えて、学生や研究者が無料のオンライン辞書よりもはるかに総合的なこのサービスを使えるようにできたらすばらしい。たとえサイバー空間ではあっても、こういう質の高いデータベースは学習や研究に臨む学生が日本に似た環境に浸るのを可能にし

てくれる。図書館の一角にそうした日本の仮想空間が作れれば、日本語を上達させたいという学生のチャレンジ精神を掻き立てるかもしれない。「ジャパンナレッジ」を頻繁に使うようになれば、より適切で確かな情報資源をなぜ選ぶべきなのかが、おのずと分かってくるに違いない。

さらに重要なことだが、当研究所をヨーロッパにおける日本研究の篝火（かがりび）の一つにする努力が有意の前進を遂げるには、他の研究機関や大学と連携し、緊密な対話を交わすしかない。ベルリン国立図書館が運営する図書館間相互貸借サービス “Blauer Leihverkehr”（青色貸借）から早々にお送りいただいた多数の論説に心から感謝したい[5)]。当研究所の図書館がまだ機能しないなかで研究発表や出版をしつつ前進していかねばならないので、“Blauer Leihverkehr” の “Cross Asia” のような他の機関からの支援を利用させて頂く必要がある。同様に、「国際日本研究」コンソーシアムが潤沢な資源と専門知を備えた世界の日本研究者を輩出する指導・調整機関として果たすであろう、他に代えがたい役割も強調しておきたい。本コンソーシアムには、世界の研究環境に存在する格差を最小化するだけでなく、日本研究の分野を国際化し、相互連携を強化する重要な役割が期待されると思うのは決して私一人ではないだろう。

研究のあり方を変えていくための行動が求められている最近の趨勢はよく承知している。進行中のパンデミック危機が私たちの現実を変えつつあることがいよいよはっきりして来るにつれ、移動規制のためにアーカイブや図書館に行くことができなくなった研究者たちはいま、新しい研究法や、カレッジ・大学間の新しい交流基準の立ち上げを提起している。図書館まで出向いて資料を利用することができないなら、発掘現場に行けないなら、民族学的調査ができないなら、現行の研究システムや基準をどうやって維持できるのだろうか。研究ができないのに、研究者は今までと同じように学会や出版物で成果を発表するよう期待されている。「フィールドベースの科学はCovid-19 対策のなかで変貌しなければならない」と題する刺激的な記事がこう述べている。曰く、オンライン会議の利用や助成金の期限延長には限界

がある。こういう対処はパンデミック以前の常態にやがて戻ることを前提としているからだ。しかしいつ常態に戻るのかは予測がつかない。だから待つのではなく、「科学する方法を根幹から作り直」さねばならない[6)]。記事はさらに続けて言う。いま焦眉の急として最も求められる変化は「代替手段」を見出すことであり、それは「移動をなるべく減らす」と同時に、「公正な研究パートナーシップ」を実現し、「北半球に偏在する先進国パートナーの栄達にとって圧倒的に有利な、名前だけの協働を排すことである」[7)]。加えて記事は、この変化が気候変動との戦いを助けるために以前からずっと唱道されてきたことだったと注意を喚起する。（ドイツとベルギーの今夏の洪水によって気候変動が虚構ではないことが改めて示された後では、余計タイムリーだ。）記事の言うように、これは私たち全員にとって「フィールド科学の脱炭素化運動が長いこと唱道してきたゴール」なのである[8)]。

すでにストレスを抱えている研究分野におけるこの新たな試練は、特に日本研究者に限られたり、この分野特有だったりするわけではなく、人文科学や社会科学一般にも通底する。パンデミックは大学や研究機関にあまねく影響した。この記事の執筆者たちは、遠くない将来のアカデミアにおける制度的に重要かつ有意な変化について徹底的に考察しており、彼らが提起した問題の多くを私も共有する。しかしながら、将来の研究環境についての明確な展望なくして、日本研究の「新常態」とは何かを特定できるのかは疑わしい。その新常態は、将来の世代を日本研究の分野に惹きつけるだけの、これまでと同程度の質、独創性、有用性を持ちうるだろうか。マサリク大学その他の外国留学問題のように、研究を新しい基準に沿うように調整して「新常態」の基準を導入すれば解決になるのだろうか。新しい日本研究プログラムは、研究者の専門知という堅牢な基礎に支えられた知見を生産する根拠を担保してくれるだろうか。

こうしたことはむしろ抽象的な問題であり、大学のカリキュラムに留学プログラムが欠如している場合、学生にどれほどの悪影響が及ぶかの結果を見ずしては、有意な比較をすることができない。私たちの仕事がもっと公正に

評価されるためには、新しい変化を望む研究者や学生だけでなく、すべての当事者による十分な議論が必要だ。加えて、研究や教育の基準を調整するには助成機関、出版社、大学や研究機関の管理者からの意見も必要になるだろう。私がこの問題を取り上げたのは、過激な「代替手段」を提言するより、研究環境に存在する格差をまず是正するために、本コンソーシアムに担っていただきたいイニシアチブを改めて強調したいからである。日本の研究教育機関との協働を通じて言語学習と研究をもっと系統的に発展させられるなら、私たちの共有する資源や専門知をよりよく利用できないだろうか。私たちの目標は教育と研究で優れた実績を上げることであり、私たちの職業が追求すべきは、叶うかぎりの真実、公正、客観性だからである。そうした結果を研究に出すためには、数々の専門家との有意義な交流を通じた長期にわたる研究と執筆活動が必要だ。学術助成金をめぐる現在の制限要因を考えると、こうした手順は獲得しにくく、直ちに実現させるのが難しい。進行中のパンデミック下にある今でさえ、私たちは一流の国際的ジャーナルやモノグラフシリーズで研究発表することを期待されている。助成機関にとって現行の基準が公正かつ正当であり、現状に鑑みて審査委員会は柔軟に対応してくれているという言い方もできるだろう。しかしながら、そうした柔軟性は研究方法、出版要請、諸基準における長期の変化を反映した「新しい」あり方ではない。

パンデミックのおかげで私は研究と教育の価値を見直す機会を得ることができ、全世界それぞれの研究環境に根源的違いがあることに気づいた。私は、研究環境を、チェコ共和国ではとりわけ研究資源とサービスへのアクセスを改善することによって、研究熱心な学者や大志を持つ多くの学生がこの分野を活性化し、チェコ共和国を日本研究の中心にすることができると楽観的に考えている。いずれにせよ、私は可能な限りの手段で、一人前の日本研究者としての未来を渇望する学生を育て続けるつもりだ。

都市封鎖は私たちにネガティブで、多くの厳しい状況をもたらしたが、同時に遠隔学習の持つ可能性やIT資源の価値にも気づかせてくれた[9)]。経済

学者らはチェコ共和国が 2021 年後半には経済成長するだろうと予測している。助成機関や基金団体もその予言を考慮し、学生や研究者に健全な環境が整備される過程に大いに貢献していただきたい。そうすれば、日本研究に携わるすべての人の地道な努力が花開き、私が祈願しているように、中欧が強靱な日本研究プログラムの場に成長する日もそう遠くはないだろう。

（訳・朝倉和子）

1　データを公開し、非営利目的の利用者に自由に複製・再版・頒布・翻訳・転用を許可してくれた WHO に感謝の意を表する。“Total Cases for Czechia: World Health Organization; 2021”: https://covid19.who.int/region/euro/country/cz. (Last accessed: August 6, 2021. License: CC BY-NC-SA 3.0 IGO.) “WHO Health Emergency Dashboard (COVID-19)” のウェブサイトは内容が刻々と変化し、かつ情報量が多い。

2　スカイプによるユラ・マテラ（Jiři Matela）博士とのインタビュー（2020 年 11 月 3 日）。氏の貴重な知見に感謝する。

3　当研究所図書館に日本コレクションを創設するための貴重な書籍のご寄贈、ご支援、ご理解に関し、日本財団と国際交流基金に心から感謝の意を述べる。また日本大使館（とくに東海林郁夫氏）の温かなご支援なくして、当研究所が日本財団の Read Japan Project に選ばれることはなかったであろうことにも触れておきたい。

4　“Economic Forecast Summary (May 2021),” *OECD Economic Outlook*, vol. 2021, Issue 1: 39–41: https://www.oecd.org/economy/czech-republic-economic-snapshot/ (last accessed: August 8, 2021).

5　このサービスについての詳報は以下を参照のこと。https://crossasia.org/en/service/blauer-leihverkehr/

6　Eleanor M.L. Scerri et al., “Field-based sciences must transform in response to COVID-19,” *Nat Ecol Evol* (2020): https://doi.org/10.1038/s41559-020-01317-8 (last accessed: December 6, 2020).

7　同上。

8　同上。

9　一連の斬新な教育学的アプローチや、ウェビナーならびにトークを参照のこと。たとえば、AAS Digital Dialogue, “*Teaching About Asia in a Time of Pandemic*,” Monday December 14, 2020, 3:00 Eastern Time。この催しは David Kenley, ed., *Teaching About Asia in a Time of Pandemic* (Columbia University Press, 2020) が出版され好評

を得たのち開かれた。ほかに、Vinayak Chaturvedi, ed., *The Pandemic: Perspectives on Asia* (Columbia University Press, 2020)。また、新しく開設されたウェブサイト "International Japanese Studies Events Database" により、研究者や学生が日本に関するオンライン学術イベントに国境を越えて参加できる。https://datastudio.google.com/u/0/reporting/621571f0-8678-4efd-a158-c90f85b53513/page/DbleB

引用文献

» Chaturvedi, Vinayak, ed. *The Pandemic: Perspectives on Asia*. Columbia University Press, 2020.

» Kenley, David, ed. *Teaching About Asia in a Time of Pandemic*. Columbia University Press, 2020.

» Scerri, M.L. et al. "Field-based sciences must transform in response to COVID-19," *Nat Ecol Evol* (2020): https://doi.org/10.1038/s41559-020-01317-8 (last accessed: December 6, 2020).

» "Economic Forecast Summary (May 2021)." *OECD Economic Outlook*, vol. 2021, Issue 1: https://www.oecd.org/economy/czech-republic-economic-snapshot/ (last accessed: August 8, 2021).

» "Total Cases for Czechia: World Health Organization; 2021": https://covid19.who.int/region/euro/country/cz (last accessed: August 6, 2021).

コロナ禍における
エトヴェシュ大学の現状と試み

梅村裕子

はじめに

本稿は昨年 12 月に行われたシンポジウムの発表をもとに起稿し、それ以後の新しい事柄を若干加筆したものである。シンポジウムの趣旨は緊急討論としてこのコロナ禍を大学としてどのように乗り切っていくか、初めての試みで見えてきたもの、また今後を展望しようという呼びかけであった。まだ将来について何かを言える状況にはなかったし、感染症の今後を正確に見通せる人はいなかったのだから、テーマそのものに少々躊躇し、内容について逡巡したのも事実である。

あれから早 9 カ月が経ち、しかし未だに世界各地で違いはあるものの、抜本的な収束はなかなか見通せない状況が続いている。筆者は偶然にもこの原稿を東京にて執筆しているが、ブダペストと東京の違いもかなり大きく、各々の国民性や考え方、その国の政治の在り方などが微妙に影響している様子を目の当たりにしている。刻々と変化する現況について書いた原稿が論集に残すほどのものなのか議論の余地のあるところだが、シンポジウム以後の変化を加筆しつつ、ともかく欧州と日本に在る研究者が集まってこの困難な状況について共に考え意見交換した会には意義もあったと思われるので、新しい状況を加え、シンポジウムでの発言を中心に稿をまとめることとした。

1．エトヴェシュ大学日本学科について

ハンガリーという国は、まだ日本ではあまり馴染みのない遠い国だと思われ、当校についても、またハンガリー一般についても詳しくは知られていな

いので、大学及び日本学科、日本学研究についてまず少し紹介したい。

発表時においてはブダペスト大学という名称を使ったが、正式にはエトヴェシュ・ロラーンド大学といい、19 世紀に活躍した物理学者の名前を冠している。この学者も国際的にはそれほど一般的でなく、このままの表記では今回のような発表の場合、どこの国の大学なのか判らないということがあり得るので、通称のブダペスト大学という名前を併用している。（ラテン語表記では、ブダペスト大学という表現をする。）一方、ハンガリーは非常に親日的な国で、日本語教育という意味ではかなり伝統がある。実は第二次世界大戦以前にも、すでにさまざまな交流の歴史があり、選択科目の日本語講座も存在した。また 1930 年代には日本と文化協定を結び、密接な交流をしていた時期もあった。ハンガリーはもちろん欧州の一国だが、他のヨーロッパ諸国とは違い、アジアから欧州へ時間をかけて大移動してきた歴史があり、民族的には周りの国と違い、民族の孤島などと言われている。そのような背景があり、元々日本も含めた東方に対する親近感というものが存在したようだ。しかし第二次世界大戦以後は、冷戦の中で敵対する陣営に分かたれた。そしてそれまであった日本文化の研究とか日本語講座等はすべて中断してしまった。その後の期間は研究上も日本は敵対国という扱いを受けていろいろな制限があり、古い時代の図書は禁書にさえ指定されていた。大学で日本語講師になる予定だった日本人がスパイ容疑をかけられて、突然国外退去を強いられるというような、ひどい逸話も残っている。そういう関係が共産主義時代はずっと続いていた。

1980 年代からいくらかは緩和のきざしも見え、選択の日本語講座などは再開し、研究も再び始められるようになった。しかし長い間の中断により、人材育成という面はほとんど止まっていたので、その欠落の影響は大きい。その中でまずは語学の選択授業が始まり、まもなく日本専攻科が再開された。冷戦崩壊と体制転換によりようやく研究の制限はすべて撤廃され、自由な活動や交流が再開した。21 世紀になりハンガリーが EU に加盟したことで、さまざまな変化が起きた。2006 年に大学はボローニャ体制へ移行し、その

流れのなかで日本学科は独立した学科になるとともに、それまでの伝統的なカリキュラム等も変化した。今は高い人気を誇る学科の一つである。学士課程の BA、修士課程の MA、そして博士課程の PhD、日本語教育の教職課程とすべての課程を網羅している。一方、前述したように教員人材の面では資格のある教員が不足していて、今後の課題であり、学校の財政的事情も豊かとは言えず、インフラ整備の面では苦労が多い。

人気学科と書いたが、昨今の応募数はこのところ全種類の語学のなかでは、英語に次いで二番目に多いという驚くような状況が続いていて、嬉しい悲鳴を上げている。また当校は学生全員が自分の専攻とともに並行して副科を取るという制度になっており、副科専攻生も含めると 1 年生の初年度語学授業は 100 人以上の人数で始めるというような事態になっている。これは喜ばしい半面、主にインフラなどのさまざまな課題に直面している。なぜ人気がこれほど高いのかというのは、筆者も当事者ながら、実はあまりはっきりと分からない。今アニメとかマンガがヨーロッパでは非常にポピュラーなので、その影響が大きいと思われる。また日本文化を知るきっかけとしてはすでに伝統にもなっている日本の武術に基礎を置くスポーツ、柔道や空手から入る人が多いというのも傾向としてあるだろう。

また当学科博士課程において、最近はさまざまな領域の研究が進んでいる。例をいくつか挙げてみたい。たとえば文学では、江戸時代の黄表紙の研究、夏目漱石の作品中、俳句に焦点を絞った研究、あるいは二葉亭四迷の言文一致体の研究がある。言語学では沖縄の方言についての研究。先に武術関係について言及したが、実際にスポーツとしてだけではなく、それを学問的に研究している人も増え、たとえば江戸時代に書かれた武術秘伝書の研究がある。また法律面から武家諸法度について分析する研究、昨今は日本でも再評価されている貝原益軒の『養生訓』について書いた論文も学位を得た。

もともと当校の博士課程は、フィロロジーを中心にしていて、日本語で言うところの書誌学とか文献学に当たるが、書かれた文献を読んで分析・研究することが中心になっていた。しかし最近は研究の中心が学際的、つまり分

野をまたぐ研究も求められるということで、それがトレンドになっている。これに伴い、文献自体を研究するだけではなく、もう少し広い分野に研究の領域が拡大しつつあり、たとえば最近では仏教美術を中心とした博論も認められている。そのほか、社会科学の分野にまたがる、企業の慣習についての研究や、アニメとか映画などを中心にポップカルチャーを取り上げ、アニメの無国籍性について論じる研究も進んでいる。さらに教育分野における日本語教育についての方法論であるとか、日本における英語の教育とその特殊性について調査する研究…などなど。一方、ブダペストには当校以外に、キリスト教改革派が運営する私立大学にも日本学科があるが、まだ博士課程が設置されていないので、そこの卒業生たちも当校の博士課程で研究を続けている。

それ以外にはブダペスト商科大学に、日本学の専門ではないが、日本専攻があり、レベルの高い日本語や日本に関する教育が行われている。研究という観点で重要なのは、学内で行われる共同研究だ。我々の大学においては学部内がまず研究所単位に分かれていて、日本学科は東洋学研究所に属している。日本のほか、中国、韓国、モンゴルと仏教研究が学科単位で所属しているので横の連携があり、共同研究も盛んに行っているし、一緒に学術会議やシンポジウムを開催し、また論文集や紀要を共同発行している。ここ 2 年程は「家族と伝統」をテーマにして、アジア全体を広く扱う共同研究を行った。その一環で会議の開催や論文集の出版を続けている。国際的な共同研究というのは、まだあまり進んでいないが、国際交流基金のブダペスト事務所が主催する研究会や発表会などは近隣諸国から研究者が集い、国際的な交流の機会となっている。

2．COVID-19 感染症への対策と現状、当校の取り組みについて

ここからは感染症について当校における取り組み、現状について述べる。世界中に拡散した感染症がハンガリーへも及び、2020 年 3 月から学内すべての営みはリモートに切り替わることとなった。決定は早く、授業の移行は

思ったよりスムーズに進んだ。ハンガリーは現在、国会で多数派を占める安定政権が続いていることもあり、政府の対応も非常に早く、その時点での感染は、他の国と比べてかなり抑えられていたと思う。大学は政府の要請に対し迅速に応じ、訓令が出て、何をどのように行うかについて細かに決められた。ハンガリー全体に言えることだが、通常事務的なことはあまりスムーズでなく、たいてい何でも締め切りの間際にならないと事が動かず、連絡も遅くて、いつも最後に慌てることが多い傾向にある。今回はその慣習と違って、準備も早く連絡もスムーズで、ほとんど支障なく移行して授業を進めることができた。やはり緊急事態であるという認識が皆にあったのだろうと思われる。驚くとともに現場としては有難いことだった。

当校では、オンラインのやり取りについて、Microsoft の Teams を使うことで統一されており、やり方についても非常に細かい指示が学校から出ていた。オンライン業務の技術的なサポートを担当する係が学部ごとに決められ、そういう人たちがかなり頻繁にきめ細かくサポートをしてくれた。また試験などについてもすべてそのようなサポート体制のもとに進んでいったので、そういう意味では意外とうまくいったという感想を持っている。Teams は便利で使いやすいシステムだと思う。とにかく授業とか学生たちの進路とか、そういった大事な点に支障が出ないことに重点が置かれていたし、よく機能したと言える。

夏を経て 2020 年 9 月の新学期になり、その時点での感染状況を鑑み、ハイブリッド方式、いわゆる対面とリモートを取り混ぜた形態での授業が始まった。大人数が参加する講義に関してはすべてリモート、オンラインでやるということになり、対面は主にセミナーとか少人数の授業、あるいは語学のクラスに限られた。これに関してもかなり細かなルールが学校全体に定められたので、やり方について躊躇したり、どうしていいか迷ったりということがなかったのは良かったと思う。たとえば、当校の校舎は歴史的な古い建造物を使っていて、かなりさまざまな形、大きさの教室があるのだが、そのすべてについて何人までなら対面授業が可能であるのか一覧にして学校か

ら提示され、それに沿った形で授業の時間割を決めることになっていた。また大人数のリモート講義はオンラインのライブ形式、または自分の授業をビデオに撮ってビデオクリップとして皆に送るというようなことが行われていた。ただライブ講義をやる場合は、皆が学校にいて一度に接続すると、インフラ面の問題もあり回線がパンクしてつながらないということが起こり得る。なのでその種の講義は皆、必ず自宅から接続してもらうことを原則とした。寮にいる人は寮の部屋から接続することを求めた。そのため講義の時間は朝の 7 時か 8 時、あるいは夕方の 6 時か 7 時に原則定め、その時間内でやるようにと決められていた。実践してみてこれで良かったのだろうと思われる。とにかくはっきりした指針を学校が定めたことは、このような緊急事態のときは重要かつ必要な対策であったのだろう。

このように万全を期しての新学期だったが、残念ながらハンガリーも感染が拡大してしまい、10 月半ばぐらいからは、またオンライン形式に戻ることになった。ただ一部の論文指導等に関しては、会うこと自体、全面禁止というわけではなかった。その後、冬の試験期間に入り、1 月の試験は再び対面禁止になった。特に筆記試験は準備不足もあり、致し方なく講義の授業に出ていた全員に対して一人ずつリモートの口頭試験を実施することにした。50 人ぐらいいたので、相当な作業となった。次の半年の間にいろいろやり方を整えて、春の試験においては Canvas というアプリを使いクイズ形式の、時間や答え方を細かく決めて、不正等を比較的排除できる方法で行った。試験に関してはまだいろいろ改善の余地があり、方法を模索していく必要性を感じている。学期の試験だけでなく、この春の卒業試験もリモートとなった。すでに二回目だったが、今回の試験は例年に比べると若干レベル低下が見られ、試験に落ちた人も例年になく多かった。何人かと話をしたが、やはりずっと自宅で一人勉強するというのに難しさを感じる学生も多く、モチベーションの低下は避けられない問題となっている。リモートに戻らないことを祈りながら、学生へのケアについては何か対策を講じる必要性も感じた。

もちろん、大学生活全体をオンラインにしたことで良かった面もいくつか

ある。少人数のセミナーなどでは、対面授業とかなり差のないところまでできるというようなことが分かった。また今回の日文研のシンポジウムのように、外国にいてこのような出会いができるということは、非常に意味があると思う。先日は博士課程の最終公開審査会をオンラインで実施した。このときの論文の提出者は、日本に滞在中の院生だったが、彼女をブダペストと結んで審査会を無事に終えることができた。この会では、今まで来られなかった外国からの参加や、地方在住の人が傍聴に来たりということがあった。日本とハンガリーの間で、こういうことを滞りなく進めることができ、可能性の広がりを認識できたのは、困難の多い時世のなかでも、意義のあることなのだろうと思う。今後、この体験を生かして未来につないでいければというのが今の感想である。オンラインによるシンポジウムや学術会議も、盛んに行われている。会議については、任意参加で今までなら出るか迷うような会でも、自宅にいながらというので少し気軽に参加したこともあった。便利になった点であろう。

このような良い面や手ごたえがあった一方で、やはり対面、直接学生や同僚らと会うことに較べると、それは比較にならないほど直接会うことの価値を認識したというのが正直な思いである。リモートではしょせん代価的、臨時に補完するものにしかなり得ない。当分は感染症とつきあいつつの生活が続いていくのであろうが、ときにさまざまな制限やリモートを取り入れることを繰り返しながらも、今後は徐々に元の生活に戻っていけるだろうと信じている。

ハンガリーではこの春（2021 年）以降、速いペースでのワクチン接種が進み、夏にはほぼ生活が元に戻っていった。ワクチン接種証明書の携帯も一時義務づけられ、さまざまなイベントや会食などが復活した。現在はまた変異株によって患者が少し増えているが、これに伴い第 3 回目の接種も急速に進み、とりあえず感染拡大は抑えられているのが現状だ。夏の終わり頃にはすでにほとんどの人が義務でなくなったマスクをはずしてしまっていたので、若干不安はあったが、大学では 9 月の新学期から全面的な対面授業に戻っ

ている。そのような環境から今、研究の機会があって日本に帰国することになった。海外でワクチン接種を受けた人についてはやっと一部の種類に限り待機日数の短縮が始まったところで、いかんせん対応に時間がかかりすぎている感じがするし、いまだに外国人の入国が著しく制限されているのを複雑な気持ちで見ているところだ。ハンガリーの大学から日本への留学が決まっていた学生たちも、査証発行がほぼ止まったまま出発できないでいる。東京の大学ではいまだリモート授業のところが多いのを目の当たりにすると、このあたりに国民性とか、その時の政権の在り方などで国の方針が大きく違う様子が感じられる。

結びに代えて

このシンポジウムに誘われた折、これからの展望というのもテーマのひとつに挙げられていて、未来を語ることに意味があるのだろうかと考え込んでしまった。現在も各国の状況は変化が激しく、変異株などという1年前には予想もしなかった変化が起こっている。長期的な展望とか計画というのは、まだできる状況でないというのが実情ではなかろうか。その時にできることを、臨機応変にやっていくしかないだろうと思う。前述した通り、その場所でのお国柄とか、国民性というのは違いが大きく、日常生活にはそれが如実に現れる。ハンガリーと日本では明確に異なっていて、その共同体に合ったやり方というのがそれぞれあるのだろう。私自身は管理職という立場からも、目の前の課題に対し最善の方法を探っていくしかないのかなと感じている。

一方、分野によっては元に戻るしかない活動もあり、たとえば音楽だ。筆者は大学のコーラスに所属して歌っていたが、皆で歌うという行為はいわゆる三密の極みで、感染症の観点からは最も危ない行為のひとつであろう。現在、ハンガリーではワクチン接種を条件にマスクも着けたうえで活動を再開している。去年の秋も一時的に練習を始めた。全員マスクを着けたままディスタンスも取り、人数を15人くらいに制限し窓を開けての練習だった。そのうち状況が悪化して練習は中止、予定のコンサートも延期となった。しか

し、コーラス自体が消えていくとは思ったこともないし、必ず再開する時期が来ると信じていた。接種が進み状況の落ち着いた今秋、制限のなかでとりあえず活動が再開されている。今後も感染の波はまた繰り返すだろうが、今はようやく光が見える状況になったと感じられる。

最後に、自分の研究についても少し紹介する。主に日本・ハンガリー関係史を研究している。東欧の体制転換以後やっと自由な研究ができるようになったので、比較的新しい分野と言える。現在、第一次世界大戦後のパリ講和について調査をしている。日本はパリ講和で初めて大きな国際舞台に登場し、それも戦後処理という難しい場面であった。あまり発言しなかったためサイレントパートナーなどと揶揄されたと知られている。一方、この講和により、オーストリア・ハンガリー二重君主国は解体された。ハンガリーは自国領土の 3 分の 2 を周辺国に割譲されるという憂き目に遭った。不条理ともいえる和平の過程に日本も戦勝国として参加した。重要な概要を決める過程では積極的に関わらなかった日本だが、その後の細かい国境線を決める際には委員会の一員として日本人外交官も活躍した。現地視察とか、決定の経緯についての詳しい外交資料が残っている。それらについてはまだ研究や分析がなされていないので、現在解読している最中である。

文書は膨大な量であるが、今は大部分がデジタル化されており、公文書館へ行かずとも読める史料が大幅に増えた。図らずもコロナ禍の折、電子史料の存在は大変有難く、時代の変遷を感じるところだ。史料からは、国境線を引くという重い課題に対し、日本人外交官がどのように関わったかが良く伝わってくる。デジタル文書を扱うことでコロナ禍でも研究が進み、制限を受けながらも得られたことをこれからも生かしていきたいと思う。

Methodological Concerns of Researching Larp and Educational Roleplay in Japan: The (Im) Possibilities of Remote Fieldwork

Björn-Ole Kamm

Introduction

This paper concerns methodological issues in the field of live-action role-play studies due to the effects of the corona pandemic with a focus on the possibilities and difficulties of remote fieldwork. Live-action role-play, originally abbreviated as LARP in many languages, refers to a network of related practices, in which participants take on and interact as characters to co-create a shared story. In the beginning, these practices could be circumscribed as *Lord of the Rings* reenactments without an audience. Today, what is called live-action role-play has extremely diversified, ranging from such fantasy events to political and educational engagements. Similar to how radar and sonar are now used as words on their own, we find larp now written in lowercase covering a plethora of role-playing practices in which people act out their play full body (Holter, Fatland, and Tømte 2009).

My personal background is in Japanese Studies and Media Studies and my earlier research concerns mostly media use and media induced stereotypes in contemporary Japan. Since 2011 I have been working in the interdisciplinary field of Transcultural Studies, coordinating a respective international joint degree program at Kyoto University in collaboration with Heidelberg University in Germany. Transcultural Studies can mean many things but in this case concerns cultural

dynamics, such as how actors organize difference. My most recent publication is very much informed by this perspective. *Role-Playing Games of Japan: Transcultural Dynamics and Orderings* (2020) explores non-digital role-playing games in and from Japan, with which I refer to tabletop and live-action role-playing, such as *Dungeons & Dragons, Sword World, Call of Cthulhu* or larps offered by the group Laymūn in Saitama.

The book deals with the border-crossing flows of role-playing practices, conflicts about escapism and fantastic learning, and is based on cyber-ethnographic fieldwork, so qualitative interviews and participant observations on- and offline. This study began in a niche but always brought me to centers of calculation, such as customs offices or protests against former prime minister Asō Tarō.

Beyond my own research, I am also co-editor of the open access, peer-reviewed, bilingual *Japanese Journal of Analog Role-Playing Game Studies* (JARPS),[1] of which the 2020 issue includes contributions in English and Japanese on questions of emotional and psychological safety as well as the use of calibration techniques in tabletop RPGs and larps, so live-action role-plays. The 2021 issue deals with remote forms of role-playing and the effects of the corona pandemic. Like many of our authors I explore role-playing not only as a network of interrelated practices, their performance, development and dynamics, in my case, in and outside Japan, I also look into role-playing games and education.

My most recent research thus deals more with questions of employing role-playing as a method to translate anthropological research results into an experienceable form. My colleague Katō Kōhei (Tokyo Gakugei University), specialist in role-playing for communication support (Katō 2019), and I received a grant from the Japan Society for the Promotion of Science to explore live-action role-play as such a method for transcultural learning, for which we are currently designing a larp that seeks to translate the life-worlds and challenges of autists.[2] Due to COVID-19 the project currently stagnates, however, as it involves much

international travel. We are waiting for when members of the leading educational experience design group, the Waldritter,[3] can come to Japan to test-play our larp.

Before venturing into the field of role-playing games, much of my research concerned popular Japanese media, such as anime or manga, and their fans in Japan and Europe. I was concerned with stereotypes against media users, for example, heterosexually identified female readers of stories about male-male love and sexual relationships, so-called *fujoshi* (literally "rotten girls"), and all the essentialisms involved, be they about gender or nationality (Kamm 2013). This research followed the flow of the related media products from Japan abroad, and also the discourses about actors in the Japanese government appropriating these economic successes for nationalistic means (cf. Ōtsuka 2015; McLelland 2017).

My research into the lifeworlds of people who are in some form or another entangled with the stereotype of the *otaku* (Kamm 2015) brought me to analog or non-digital gaming, where I learned that certain forms of non-digital gaming—fore and foremost board games, such as *Settlers of Catan* (Teuber 1995)—had been on the move from Germany to Japan for quite a time, which is why they are called *doitsu gēmu* ("German games") on the Japanese market.

Live-action role-play, which was growing in player numbers and became increasingly sophisticated in Europe, however, was rather unknown or unpracticed in Japan during my fieldwork in 2010 (cf. Kamm 2011). When I came back in 2012, things had changed because a German larp player had helped set-up the first live-action role-play group in Tokyo. From then onwards, larp in Japan remained linked to German roots, but soon it explored new forms of performing this network of practices (Kamm 2019a).

Dynamics of RPG Practices

Such dynamics of role-playing game practices remain one focus of my research. This concerns larp as a form of entertainment, practiced usually as a hobby. Here, I

am interested in questions of how concepts of playing and for playing travel, how practices are translated and adapted. With translation I refer less to the movement across natural languages but to how certain actors appropriate, change, and employ practices that come from elsewhere to their own environment. I am studying who becomes such actors of mediation and also of gatekeeping; who can bridge boundaries of language and location. These movements of translation also link to the individual transformation of players: How they transform themselves and their bodies in their larp performances and how the larp transforms them.

Transcultural Engagements

Speaking of actors who mediate, like any researcher by researching I change what I am observing. Field site access builds on rapport and the collaboration of larp organizers, so that my fieldwork often was less participant observation but *observant participation*, stressing that I had to help out and become part of the play groups to be allowed access for my research.

Being able to navigate between German, English, and Japanese, this also placed me in the position of assisting members of the Japanese Larp Association CLOSS when they visited the world's largest larp event, the *ConQuest of Mythodea* (CLOSS 2020), held each year in Germany (see figure 1).

The association members wanted to see how such a big event was run, so they of course wanted to participate and play but were more interested into the larp's backstage. As member of the German larp association research working group, I could arrange for such access with the organizers of this event, which is the world's largest larp with over 8,000 participants.

Even though I had to function as an interpreter within the game play and also outside of it, I also gained insights into these transcultural engagements, for example in how not speaking a fantastic, made-up language adds to the immersion into the play world, while not speaking the meta-language, in this case German, can frustrate and pushes people rather outside the play experience.

Figure 1. ConQuest organizer showing a certificate for being the largest larp worldwide to the CLOSS members (photo by Kamm).

Edu-Larp

I have been studying larp practices for over a decade now and am still interested in their developments as hobby or business, especially in Japan, but recently my focus has shifted to the possibilities of using live-action role-play for the distribution of research results. This form of larp is usually referred to as edu-larp, short for educational larp.

From my perspective, edu-larp can be a tool for outreach and knowledge transfer beyond academic circles. Instead of asking the general public to read research papers, the idea is to translate the research into an experienceable form, so that others can get a glimpse into the lifeworlds of those people part of a study. These projects aim for what I have come to call transcultural learning.

With transcultural learning my colleagues and I designate an understanding of cultural processes of differentiation, the ways in which persons are made into an "other" different from "us." A prime example of these processes is stereotyping,

which increasingly turns into hate speech on the Internet and encourages actual violence against marginalized groups, such as migrants, sexual minorities, and people with disabilities (Flückiger 2006; Higuchi 2014). Direct encounters can function as safeguards against stereotypes (Pickering 2001). However, such encounters are often hard to facilitate, for example, because respective persons have lived in past eras, are located too far away, or it may be an ethical issue to present them in a fashion resembling a zoo exibit. Instead, mediated encounters—larps—in which participants take on the role of these "others" from a first-person perspective, may be a way to foster (trans-) cultural and media literacies to help people understand difference as non-threatening through direct, experiential knowledge. Part of this project is also to visualize respective learning effects, to help with reflection of the participants, and demonstrate the potential of this set of larp methods (cf. Kamm 2017).

As my colleague Katō has long worked with people diagnosed with autism and is aware and concerned about the stereotypes against them, we are currently developing a larp to make their challenges experienceable. We had good experiences with our previous edu-larp about *hikikomori*, people in social withdrawal (Kamm 2019b). At that time we also used a qualitative-quantitative mixed method based on a cluster analysis of phrases by the participants to visualize and discuss learning effects.

Forms of Larp

Before the attention of practitioners and academics ventured to educational purposes, larp was a hobby—and remains this for the majority of players. Even concerning mainstream entertainment larp, it remains difficult to show what it is or what it ought to be, so that I can only touch on possibilities. Tolkien inspired Sword-and-Sorcery is worldwide the most popular genre with huge so-called mass conventions or cons held in Europe each summer, such as the *Drachenfest or ConQuest*—until the corona

pandemic, that is. People stay in costume and in their characters throughout these five-day events, fight enemies, form alliances, and solve riddles. In-between those tasks the four to over eight thousand participants experience a pseudo-medieval fantasy everyday together with friends and family, sleeping and eating in huge tent cities.

Also in Japan, this kind of genre represents the most popular, followed by horror. The horror genre where you can participate with everyday clothes makes for a low-entry threshold for beginners, but so does ninja larp in Iga, one of many examples of history-inspired larp events (Kamm 2022). *Fairweather Manor* similarly mixes history with imagination and plays with class differences in the early twentieth-century England. This was also one example for so-called Nordic or artistic larp. The name hails from the annual Knutepunkt larp Conference in Northern Europe. Another example was *Delirium*, about intimacy in a psychiatry and played not in a chronological order.

More at home in the field of edu-larp, annual youth larp camps mix fantasy with education, for example about teamwork or how to behave in forests. One major representative of such events is the experience design group Waldritter who work with us on the larp about autism. They have created larps for children but also big, federally funded spaceship larps for adults, about what it means to be human. Also in Japan organizers explore education, for example by organizing library larps.

Halat Hisar is an award-winning Finnish-Palestinian coproduction about occupation and a prime example of political larps. Last but not least, one of the most popular artistic larps is *College of Wizardry*, a so-called blockbuster larp that brings people from all over the world together to experience magic.

Larp (Un-)Defined

These few examples alone demonstrate that larp has extremely diversified in the past two decades. After encountering the ever new forms of larp, I began to

rather question the point of defining larp in any strict sense. I understand larp in Wittgenstein'ish terms as a multitude of practices partially connected by family resemblance (Wittgenstein [1953] 2009) or envisioned in a network-form (see figure 2). Words like larp are better understood as hyperlinks that bring practices and practitioners into relation. This resonates with the discussion in the so-called "Nordic larp discourse" about artistic, political, and educational larp (Stenros 2014). Here we encounter the idea of "mixing desk of larp" (Stenros, Andresen, and Nielsen 2016), which visualizes possible design choices and asks larpwrights and larp organizers to be transparent about what people can expect from their events—instead of defining a norm for larp. Japanese game designers, such as Kondō Kōshi, have expressed a similar understanding of the fluidity of games (Kondō 2019).

About larp as a practice, it can be said that most related communities are very inclusive, with usually 50 percent women today, the acceptance of people with neuro-diversity also higher than in the surrounding population.

Even if you picked a prominent element, such as that you do not participate as yourself but as a character with its own life-history and personality, yet what a character means varies extremely, e.g. in the Japanese horror larp *Memento Mori*, you will pick skills and talents with abstract proficiency levels, such as medicine or the occult, you will have a profession, such as archeologist or journalist, and your character will be defined by their ability to wither certain kind of fears, such as gore or psychological threats.

In the Nordic larp *Limbo*, on the other hand, there are no skills or fighting bonuses. You define your character by answering questions, such as if you are scared of death or if you have regrets, because this larp takes place in a dimension between life and death, and players have to decide if they seek rebirth, transcendence or oblivion.

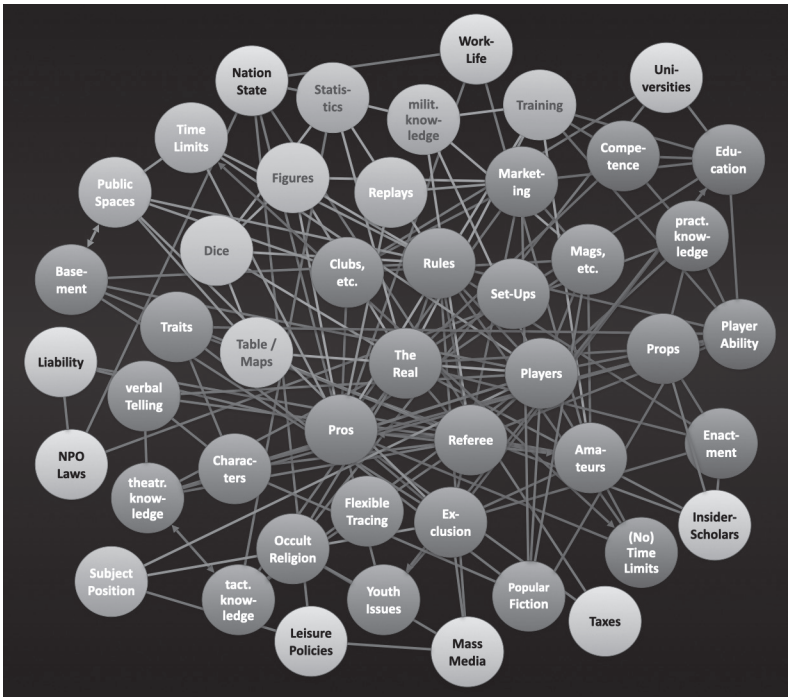


Figure 2. Larp as a practice-network.

Larp and COVID-19

Regardless of the mechanics, goals, themes, duration or location, most larps are very emotional and physical experiences. Physical can mean fighting but also intimacy, or simple exhaustion.

The emotions that participant experience may be part of a make-belief practice but they are nonetheless real. You really fear for your life when you run from a horde of enemies and you feel joy after a victorious confrontation. Larps following the "Nordic larp" tradition especially explore all kinds of feelings and emotions.

All these physical interactions involve, of course, aerosols. So that when COVID-19 emerged, it brought an immediate stop to all larp events. All big summer conventions were cancelled and most smaller ones, too. This has caused tremendous

losses and uncertainty, not only for organizations, such as those behind the mass conventions, but also for individual artists and craftspeople who could not perform or sell their wares at these events. It also brought uncertainty about how to hold events in accordance with regulations as many rules were constantly changing.

However, it also brought much community support. For example, there were some people not asking for their money back when an event was cancelled or postponed

LAOGs

COVID-19 also hailed in the golden age of LAOGs, live action online games, which had been an insider's tip and a niche before but could now bloom into their full potential.

Individual games take too numerous forms to cover them all, but space horror where participants play in darkened rooms, make-up sessions, communication between the dead and the living, or political games, where you have to convince an anti-vaxxer that vaccines do not cause autism are just a few examples; some of which won larp and game awards already. With *Enkakutsūshin LARP Remote Scope*, the Japanese larp association provided free scenarios for players in Japan to help them still their thirst for corona free larping.[4)]

Many of these online role-playing forms employ the same tools that academics use for meetings and conferences, so Zoom and similar tools are quite popular. But they have their limits, especially with larger groups. Recently, spatial chat, such as gather.town, is gaining attention. In this case, there is a 1990s Zelda-like User Interface and the participant can walk around a map. When you come closer to other participants, you start hearing them and their video feeds come into view.

Hygiene Concepts

Asides online gaming, there have been attempts at larping with corona as well. In Germany, for example, once federal states had released their COVID guidelines, larp organizers could create and submit so-called hygiene concepts. If approved by the respective health center, they could conduct their larp. Some best practice examples were discussed at the German larp conference MittelPunkt. These hygiene concepts clarify when and where to wear masks, how much physical contact is possible and so forth. Number of participants and locations are rather limited, though.

In Japan, I took the leap and conducted limited fieldwork at one ninja larp in Iga. Most participants used their costumes to have the masks blend in. So with the ninja setting suspension of disbelief was less strained compared to a fantasy larp, for example. Instead of direct fighting, the organizers had devised a form of representational battle, so that no physical contact was necessary.

Despite these and other measures, in the heat of the moment people did come closer to each other or masks slipped. Yet, no participant caught COVID during these events.

Barely a Substitute

Judging from the many discussions with players and organizers, most countermeasures or alternatives barely function as a substitution therapy. Zoom fatigue has become as widespread as corona, and it becomes clearer how limited play with masks and proper distancing is limiting the play to a few genres, where neither undermines the necessary suspension of disbelief. Post-apocalyptic larp has a thematic advantage but for some players is too close to home currently.

Similarly, research and fieldwork are limited. I could move onto the online discussions about the effects of COVID on larp but this is rather depressing and so far, nothing much is surprising.

Emic and Remote Fieldwork?

A mere observation without active participation also stands in contrast to the experiential core at the heart of larp. Larp in general has no audience; you cannot watch people play larp. Half of what they are doing does not make sense if you misse a previous interaction and you will not be able to grasp the overall plot as too much is happening at the same time at too many different places.

Thus, as a researcher, you also need to participate fully; you need to shiver in the rain when everybody else does so, to understand what it means to play a character by fully immersing yourself into another person.

Such a study mode privileges the rich who can travel to all the innovative larps worldwide. In the current times, when even money cannot buy a plane ticket, one could send a local representative. Such an approach is similar to how a researcher may design the codebook or interview guide but leaves the actual execution to trained coders and interviewers.

However, the extreme qualitative and explorative nature of researching larp, combined with human selective perception, may make this set-up rather unproductive. One could use cutting-edge technology, such as the newest action camera hidden in the staff of a wizard, and guide the intermediary in real-time. But this brings ethical questions about puppeteering another person to the fore. This too seems rather limited genre-wise.

Guiding a robot on an alien planet—something larpers have actually played—may actually work because the researcher would also be in character, e.g. the Houston to "Houston, we have a problem." It is also a good way for reducing carbon foot-print and thus, I believe, worth exploring in the future.

Beyond fieldwork, we currently experience rather adverse effects of corona also with the above mentioned JSPS-funded edu-larp design project for transcultural learning about autism.

Design Challenges

The tentative schedule for the project when we submitted the application to the JSPS in 2018 matches the agenda in figure 3.

Once we received the grant, we began preparations like, a literature review concerning autism and finding interview partners who were willing to talk to us about their experiences as "autist." I say "autist" here and not "person with autism" as many of our interviewees stressed that you cannot divorce autism from themselves. We conducted interviews between October 2019 and January 2020 and were also able to find people who would like to be involved in the design process. We had been planned a workshop in Germany with the Waldritter experience design group, our research partners, in March 2020 to kick off the design part. However, it already became a victim to corona and had to be cancelled. And, everything that should have come thereafter also fell flat.

We had collected many ideas, especially on how to make challenges like hypersensitivity or echolalia experienceable, but we were still facing a number of design challenges. From Katō Kōhei's work with autistic children and also through our interviews, we had identified middle schools in Japan as a place where autists

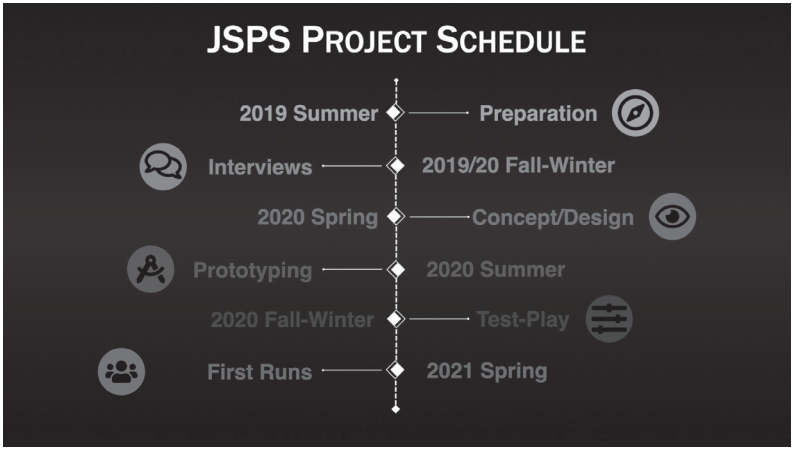


Figure 3. Tentative project schedule.

often suffer the most and middle school teachers as important gatekeepers. So, we began to plan the larp as a form of three-day vocational training for predominantly middle school teachers. In Japan, middle school represents a hard break from the fun, comprehensive learning in elementary school to test cramming. Combined with puberty and teenager differentiation games and the resulting bullying, dealing with all these changes is particularly difficult for an autist. Teachers furthermore have not much space to accommodate for neuro-diversity, which can lead to bullying from the teachers, too.

Many educational larps and other activities aiming for awareness and understanding, face the problem to engage people who are not already concerned. Thus, we seek to create a larp that has a strong story and setting that would interest people for their own sake. Discussions with the participants about autism would feature in the debriefing after the experience, not in the advertising or pre-play workshop.

The last challenge is, something we always keep in mind, that we want to make the larp based on the voices of autists, and involve their perspectives. As I mentioned before, we have a number of autists on board, some who also have larp and larp design experiences. We do not want to speak for them but with them, an approach advocate groups such as "Autism speaks" painfully lack.

Larp Design Sprint

Unsurprisingly, we had no chance but to move the design process online and also make up for the lost time. Thus, we conducted a four-day design sprint based on a model procedure developed for prototyping (Knapp, Zeratsky, and Kowitz 2016). This procedure goes beyond brain-storming and combines individual tasks with group work. Usually, it involves many whiteboards and post-it notes. Instead we used the online whiteboard Mural,[5)] identified awareness and care for diversity in the class-room as the long-term goal with autism as an example, created a

storyboard, and voted on various sketches by team members to form a basis for our larp prototype, which we then presented to an expert audience of larpers and autists.

Current State

Currently, we are planning two more online workshops to further develop the larp. However, we are still planning for a face-to-face larp and thus, at some point, will need to come together for actual test-plays. In this sense, corona still remains a wall between our goals and us completing the larp design.

Due to decreasing incidence rates, we were able to conduct a first, short test-play in September 2021 at the Waldritter Creative Campus in Herten, Germany. Even with corona restrictions still in place, we could follow through, because masks play a diegetic role in the larp and thus we could incorporate them into the play. In its finished form the larp will be a three-day event. The test-play now was a condensed version of five hours through which we tried to ascertain the playability of our ideas and what learning effects we can expect. We received much valuable feedback that we currently analyze. We now hope for another window of opportunity to conduct a full-length test-play if possible, also in Japan. This would necessitate changed border regulations, so that our partners from Germany can travel to Japan.

Imono Mika spoke at this conference about how she cannot yet see the light at the end of the tunnel after corona. For a long time, we felt the same, but the design sprint results have given us at least a little spark in the darkness concerning our project. And I think that there are many positive developments and ideas out there that we should retain. The online design sprint has comparably such a small carbon footprint that I would like to continue with this approach to collaborative design.

Final Thoughts

However, there are challenges, especially about research that involves fieldwork,

interviews and inter-human interaction, which we will need to consider beyond corona. As also Dr. Toyosawa cautioned, I do not believe that there will be a time after, only one with corona. And I doubt that anyone will learn from this pandemic. The last one, the Hong Kong flu in 1968/69 has been completely forgotten and no lessons have been learned. As everyone wants to go back to the old exploitive and destructive "normal" of pre-corona times, the next pandemic is already pre-programmed.

In the future, I hope we can keep the short Zoom faculty meetings and hybrid conferences that this pandemic brought us asides the immediate crisis but we will also find ways to get back to a more productive use of time with other tasks.

Acknowledgements

I am grateful to the organizers of the CGJS-EAJS Japan Conference held at the International Research Center for Japanese Studies, especially Professor Araki Hiroshi, for inviting me to discuss the issues for larp research during the corona pandemic.

1 Website: https://jarps.net
2 Website: https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-19KT0028/
3 Website: https://www.waldritter.de
4 Website: http://ex.closs-larp.com/archives/260
5 Website: https://www.mural.co

References

» CLOSS. 2020. *Road to Conquest - Doitsu Daikibo LARP He Bōkensha Wo Sasou Tabi Gaido*. Tokyo: NextPublishing.
» Flückiger, Katja M. 2006. "Xenophobia, Media Stereotyping, and Their Role in Global Insecurity." In *Policy briefs on the transcultural aspects of security and stability*, edited by Nayef R. F Rodhan. Zürich: LIT.
» Higuchi, Naoto. 2014. "Japan's Far Right in East Asian Geopolitics: The Anatomy of New Xenophobic Movements." *Tokushima Sociological Studies* 28: 163–183.

» Holter, Matthijs, Eirik Fatland, and Even Tømte. 2009. “Introduction.” In *Larp, the Universe and Everything*, edited by Matthijs Holter, Eirik Fatland, and Even Tømte, 1–8. Haraldvangen: Knutepunkt.
» Kamm, Björn-Ole. 2011. “Why Japan Does Not Larp.” In *Think Larp*, edited by Henriksen, Bierlich, Hansen, and Kølle, 52–69. Koppenhagen: Rollespilsakademiet.
» ———. 2013. “Rotten Use Patterns: What Entertainment Theories Can Do for the Study of Boys’ Love.” *Transformative Works and Cultures* 12. doi:10.3983/twc.2013.0427.
» ———. 2015. “Opening the Black Box of the 1989 Otaku Discourse.” In *Debating Otaku in Contemporary Japan*, edited by Galbraith, Kam, and Kamm, 51–70. London: Bloomsbury Academic.
» ———. 2017. “Translating Research into Larp: Village, Shelter, Comfort.” In *LARP: Silberhochzeit. Aufsatzsammlung zum MittelPunkt 2017*, edited by Rafael Bienia and Gerke Schlickmann, 31–60. Braunschweig: Zauberfeder Verlag.
» ———. 2019a. “Adapting Live-Action Role-Play in Japan—How German ‘Roots’ Do Not Destine Japanese ‘Routes’.” *Replaying Japan*, no. 1: 64–78. http://hdl.handle.net/10367/11682.
» ———. 2019b. “Experience Design for Understanding Social Withdrawal: Employing a Live-Action Role-Play (LARP) to Learn About and Empathize with Hikikomori in Japan.” In *Neo-Simulation and Gaming Toward Active Learning*, edited by Ryoju Hamada, Songsri Soranastaporn, Hidehiko Kanegae, Pongchai Dumrongrojwatthana, Settachai Chaisanit, Paola Rizzi, and Vinod Dumblekar, 387–396. Singapore: Springer. DOI:10.1007/978-981-13-8039-6_36.
» ———. 2020. *Role-Playing Games of Japan: Transcultural Dynamics and Orderings*. New York: Palgrave MacMillan.
» ———. 2022. “Reenacting Japan’s Past That Never Was: The Ninja in Tourism and Larp.” In *Reenactment Case Studies: Global Perspectives on Experiential History*, edited by Vanessa Agnew, Juliane Tomann, and Sabine Stach. New York: Routledge.
» Katō, Kōhei. 2019. “Employing Tabletop Role-Playing Games (TRPGs) in Social Communication Support Measures for Children and Youth with Autism Spectrum Disorder (ASD) in Japan: A Hands-On Report on the Use of Leisure Activities.” *Japanese Journal of Analog Role-Playing Game Studies*, no. 0: 23–28. https://doi.org/10.14989/jarps_0_23 (Accessed 13 August 2021).
» Knapp, Jake, John Zeratsky, and Braden Kowitz. 2016. *Sprint: How to solve big problems and test new ideas in just five days*. London New York Toronto: Bantam Press.

» Kondō, Kōshi. 2019. “Gēmu to iu kagerō o mae ni.” *Japanese Journal of Analog Role-Playing Game Studies*, no. 0: 3–4. https://doi.org/10.14989/jarps_0_03 (Accessed 13 August 2021).
» McLelland, Mark, ed. 2017. *The End of Cool Japan: Ethical, Legal, and Cultural Challenges to Japanese Popular Culture*. New York: Routledge.
» Ōtsuka, Eiji. 2015. “Otaku Culture as ‘Conversion Literature’.” In *Debating Otaku in Contemporary Japan*, edited by Galbraith, Kam, and Kamm, xiii–xxix. London: Bloomsbury Academic.
» Pickering, Michael. 2001. *Stereotyping: The Politics of Representation*. New York: Palgrave MacMillan.
» Stenros, Jaakko. 2014. “What Does ‘Nordic Larp’ Mean?” In *The Cutting Edge of Nordic Larp*, edited by Jon Back, 147–156. Gråsten: Knutpunkt.
» Stenros, Jaakko, Martin Andresen, and Martin Nielsen. 2016. “The Mixing Desk of Larp: History and Current State of a Design Theory.” *Analog Game Studies*. November 13 http://analoggamestudies.org/2016/11/the-mixing-desk-of-larp-history-and-current-state-of-a-design-theory/ (Accessed 13 August 2021).
» Wittgenstein, Ludwig. (1953) 2009. *Philosophical Investigations*. Translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker, and Joachim Schulte. 3rd ed. Malden: Blackwell Publishing.

Ludography

» *Call of Cthulhu* (1981) TRPG. Corebook. 1st edition. Petersen, S., and L. Willis. Hayward: Chaosium.
» *College of Wizardry* (2014–present) concept: Rollespilsfabrikken and Liveform, Dziobak, company P (since 2018). Website: www.wizardry.college (Accessed 13 August 2021).
» *ConQuest of Mythodea* (2004–present) concept: LiveAdventure. Website: www.live-adventure.de/index.php/en/ (Accessed 13 August 2021).
» *Delirium* (2010) concept: Høgdall, R. and Schønnemann Andreasen, P. Website: nordiclarp.org/wiki/Delirium (Accessed 13 August 2021).
» *Drachenfest* (2002–present) concept: DrachenFest UG & Co. KG. Website: www.drachenfest-larp.info (Accessed 13 August 2021).
» *Dungeons & Dragons* (1974) TRPG. Corebook. Gygax, G., and D. Arneson. Lake Geneva: TSR.
» *Enkakutsūshin LARP Remote Scope* [Telecommunication LARP] (2020). LAOG. CLOSS. Website: http://ex.closs-larp.com/archives/260 (Accessed 13 August 2021).

» *Fairweather Manor* (2015–18) concept: Dziobak. Website: www.fmlarp.com (Accessed 13 August 2021).
» *Halat Hisar* (2013, 2016) concept: Kangas, K., AbdulKarim, F., Pettersson, M., et al. Website: www.nordicrpg.fi/halathisar/ (Accessed 13 August 2021).
» *Kan'i han'yō horā LARP gēmu Memento Mori* [Simple & General Horror LARP Game Memento Mori] (2015) Larp rulebook. Hoshikuzu and CLOSS. Tokyo: Popls.
» *Ninja LARP: Tokugawa Ieyasu wo kyūshutsu seyo* [Rescue Tokugawa Ieyasu] (2019) concept: Tomono, S., Moroishi, H., Moroishi, Y., Yoshimaru, K. Website: ninjalarp.tumblr.com (Accessed 13 August 2021).
» *Sōdo Wārudo RPG* [Sword World RPG] (1989) TRPG. Corebook. Mizuno, R., and GroupSNE. Tokyo: Fujimi Shobō.
» *Sōdo Wārudo 2.0* [Sword World 2.0] (2008) TRPG. Rulebook I. Kitazawa, K., and GroupSNE. Tokyo: Fujimi Shobō.
» *Sword World 2.0 LARP* (2018) Larp rulebook. Bethe, Y. K., and Cosaic. Kobe: GroupSNE.

［日本語訳］

日本におけるライブ・アクション・ロールプレイ（LARP）および教育ロールプレイングの研究方法論における問題点：リモートフィールドワークの（不）可能性について

ビョーン＝オーレ・カム

はじめに

本稿では、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響を受けているライブ・アクション・ロールプレイ研究の方法論的問題について、リモートフィールドワークの可能性と難しさに焦点を当てて考察する。ライブ・アクション・ロールプレイは、もともと多くの言語でLARP（ラープ）と略されていた言葉で、関連する実践を結びつけるネットワーク的な集合体を指す。LARPでは参加者がキャラクターになりきって交流し、物語を共同で創作する。最初は映画『ロード・オブ・ザ・リング』を無観客で再現するようなファンタジー系のLARPに留まっていたが、今ではファンタジー系イベントから政治的・教育的な取り組みまで、非常に多様化している。はじめは略語として使われていたradar（レーダー）やsonar（ソナー）がやがて単語として定着したように、LARPも今では名詞として小文字でlarpと書かれるようになり、全身で演じるロールプレイの数々を意味するようになっている（Holter, Fatland, Tømte 2009）。

筆者は日本研究とメディア研究を専門としており、以前の主な研究対象は現代日本におけるメディア利用とメディアによってつくられるステレオタイプについてであった。2011年からは学際的な分野である文化越境研究

（Transcultural Studies）に取り組んでおり、ドイツのハイデルベルク大学と京都大学による国際共同学位プログラムのコーディネーターを務めている。文化越境研究の意味するところはさまざまだが、ここではアクターがどのように違いを組織化するかといった、文化的力学を指す。筆者の最新刊 *Role-Playing Games of Japan: Transcultural Dynamics and Orderings*（日本のロールプレイング・ゲーム――文化越境のダイナミックと秩序、2020 年）では、このような視点が大いに反映されている。この本では日本における、あるいは日本発の非デジタル（アナログ）形式のロールプレイングゲーム（RPG）を取り上げている。非デジタル・ロールプレイングとは、具体的には「ダンジョンズ＆ドラゴンズ」「ソードワールド RPG」「クトゥルフ神話 TRPG」などのテーブルトーク・ロールプレイングゲーム（TRPG）や、埼玉を拠点とする LARP サークル「レイムーン」が主催する LARP などを指す。

本書ではサイバー・エスノグラフィー的フィールドワーク、すなわちオンラインとオフラインでの質的インタビューと参与観察を基に、ロールプレイングの実践の越境する流れ、現実逃避をめぐる葛藤、空想学習について論じている。ニッチな研究として始まったが、日本発アナログゲームの欧州普及の主な障壁であったドイツの関税制度や、格差社会をめぐる麻生太郎元首相に対する抗議行動など、この研究は常に筆者を計算中心点へと引き寄せてきた。

筆者は研究活動に加え、日英 2 カ国語の査読付きオープンアクセスジャーナル『RPG 学研究：Japanese Journal of Analog Role-Playing Game Studies』（JARPS）[1] の共同編集者も務めている。2020 年号では、感情的・心理的な安全性の課題および TRPG と LARP におけるキャリブレーション手法（「ストップ」「ブレイク」など、プレイの強度を較正するための表現・方法）の使用に関する論文を掲載している。次の 2021 年号では遠隔 RPG と新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響について取り上げる。多くの著者同様、筆者はロールプレイを相互に関連する実践の集合体として、また実践のパフォーマンス、発展、ダイナミクスの観点から研究しているが、それに加

えて、日本と海外の RPG と教育についても研究を行っている。

したがって、最近の研究の中心は、人類学の研究結果を体験可能な形に変換する方法としてのロールプレイングの活用である。筆者は、コミュニケーション支援のためのロールプレイング（加藤ほか 2012）を専門とする東京学芸大学の加藤浩平とともに、日本学術振興会から科研費の助成を受け、文化的越境学習の手法としての LARP を研究しており、現在、自閉スペクトラム症児／者の生活世界や問題を体験するための LARP をデザインしている[2)]。本研究プロジェクトは海外での活動も数多く行ってきたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により停滞を余儀なくされている。今は、教育分野での体験デザインを主導する NPO「ヴァルドリッター」（Waldritter：森の騎士）を日本に招き、われわれがデザインした LARP のテストプレイを行える機会を待っているところである。

RPG 研究に足を踏み入れる前は、アニメや漫画などの日本のポップカルチャー、日本と欧州におけるその愛好者を主な研究テーマとしていた。関心があったのは、メディア利用者に対するステレオタイプ化、たとえば、男性同士の恋愛や性的関係を描いた物語（ボーイズラブ）を好む異性愛の女性読者、いわゆる「腐女子」や、それに関わる性別や国籍などの本質論であった（Kamm 2013）。この研究では、日本の関連メディア製品の海外への展開と、その経済的成功を国策に利用しようとする日本政府内の動きについての言説を追った（Ōtsuka 2015; McLelland 2017）。

筆者は、何らかの形で「オタク」としてステレオタイプ化された人びとの生活世界を研究しており（Kamm 2015）、この研究を通じて非デジタル／アナログゲームの世界に足を踏み入れた。そして、特定の形式のアナログゲーム、特に「カタンの開拓者たち」（Teuber 1995）に代表されるドイツのボードゲームがかなり以前から日本に輸入され、日本では「ドイツゲーム」と呼ばれていることを知った。

LARP は欧州ではプレイヤー人口が増え、内容も高度なものへと進化していったが、日本での知名度は、筆者が日本でフィールドワークを行った

2010 年の時点では低く、実践者はほとんどいなかった（Kamm 2011）。だが、2012 年に再びフィールドワークのため来日すると状況は変わっていた。あるドイツ人プレイヤーが東京で最初の LARP グループの立ち上げを支援していたのであった。それ以降、日本の LARP はドイツに由来するものであったが、ほどなくして新たな形も模索されるようになった（Kamm 2019a）。

RPG 実践の力学

こうした RPG の実践における力学は、筆者の研究テーマのひとつである。一般に趣味として行われる娯楽の一形態としての LARP に関する研究である。このテーマにおける筆者の関心は、遊ぶことや遊ぶための概念がどのように変遷するのか、実践がどのように翻訳され、適応されていくのかということである。ここでの「翻訳」とは、自然言語間の移動ではなく、あるアクターが他所から来た実践を自分の環境に合わせてどのように使用し、変更し、採用するかを意味する。筆者が研究しているのは、誰がそのような媒介のアクターになるのか、ゲートキーピングのアクターになるのか、言語と場所の境界を越えられるのかということである。このような翻訳の動きは、プレイヤーの個人的な変化にもつながる。LARP を行うなかで、彼らがどのように自分自身を、そして自分の身体を変化させるのか、また、LARP がどのように彼らを変化させるのか、ということである。

文化越境的な関わり合い

媒介するアクターについては、他の研究者と同様、筆者も研究することによって観察するものを変えていく。LARP に参加することは、LARP 主催者との信頼関係と協力関係のうえに成り立っている。フィールドワークにおいては、研究での参加を認めてもらうためにプレイグループの一員として手伝うことを重要と考え、参加者を観察（参与観察）するよりは、観察をしながら参加（観察参与）することが多くなった。

また、ドイツ語、英語、日本語ができることで、毎年ドイツで開催される

図 1　コンクエストが世界最大の LARP イベントであることを示す認定証を CLOSS のメンバーに見せるイベント主催者（撮影：筆者）

世界最大の LARP イベント「コンクエスト・オブ・ミソディア」（ConQuest of Mythodea; CLOSS 2020）に日本の「体験型 LARP 普及団体 CLOSS」のメンバーが参加することになったときにはサポートも行った（【図 1】参照）。

CLOSS のメンバーは、このような大規模イベントがどう運営されているのか見たいと考え、当然のことながら参加も望んでいたが、それ以上に関心があったのは LARP 活動の舞台裏であった。そこで、ドイツ LARP 協会の研究ワーキンググループのメンバーである筆者は、8,000 人規模の参加者を誇るこの世界最大の LARP イベントの主催者に連絡し、彼らが参加できるよう手はずを整えた。

イベントの開催中もそれ以外でも筆者の役割は通訳者であったが、それでも文化越境的な関わり合いについて洞察を得ることができた。たとえば、空想言語を話せないことでプレイの世界への没入感が増す一方で、メタ言語（この場合はドイツ語）を話せないと、人びとはいら立ち、むしろプレイの体験から遠ざかってしまうことがあるということである。

教育 LARP

筆者は 10 年以上にわたって LARP の実践を研究してきた。現在も、特に日本における趣味やビジネスとしての LARP の発展に関心を寄せている。だが最近では、研究結果の普及に LARP を利用する可能性に注目するようになってきた。このような形態の LARP は一般的に教育 LARP（education larp）と呼ばれ、英語では「エデュラープ」（edu-larp）とよく略される。

筆者は、教育 LARP は学問の枠を越え、アウトリーチ活動や知識伝達の手段になると考えている。一般市民に研究論文を読んでもらう代わりに、研究結果を体験可能な形に変換し、研究に携わっている人びとの生活世界を垣間見ることができるようにするのである。こうしたプロジェクトで目指すのは、筆者が「文化越境的学習」（transcultural learning）と呼んでいるものである。

筆者と共同研究者らは、文化越境的学習とは差異の文化的プロセス、つまり、人びとが「自分」とは異なる「他者」にさせられる過程を理解することであると考えている。このようなプロセスの典型的な例がステレオタイプ化であり、インターネット上でヘイトスピーチを活発化させ、移民、性的少数者、障害者などの周縁化されたグループに対する実際の暴力を助長している（Flückiger 2006; Higuchi 2014）。自分と他者との直接的な接触はステレオタイプ化を避ける方法となりうるが（Pickering 2001）、その人物が過去の時代に生きていたり、遠く離れていたり、また動物園の展示のように見せることに倫理的に問題があったりと、そのような接触を実現するのは難しい場合が多い。それに対して、参加者が一人称視点でこうした「他者」の役割を担う媒介的な接触、すなわち LARP は、人びとが直接的・体験的な知識を通して違いは脅威でないと理解するための（越境的）文化やメディアリテラシーを育成する方法となる可能性がある。このプロジェクトでは、それぞれの学習効果を視覚化することで、参加者の振り返りを助け、一連の LARP メソッドの可能性を示すことも目的のひとつである（Kamm 2017）。

共同研究者である加藤浩平は、自閉症と診断された人びとと長年にわたって活動しており、彼らに対してつくられたステレオタイプをよく分かっていて懸念を抱いている。そのため、われわれは現在、彼らが直面している問題を他者が体験できるようにするためのLARPを開発している。以前には「ひきこもり」をテーマに教育LARPを実施し、良い経験を得ることができた（Kamm 2019b）。このLARPでは、学習効果を可視化して議論するために、参加者によるフレーズのクラスター分析を基に、質的方法と量的方法とを掛け合わせた乗算的ミックス法も活用した。

LARPの形態

LARPは、実践者や研究者が教育分野での活用に目を向ける以前は、趣味として捉えられていた。大半の参加者にとっては今もそうである。LARPについては、主流である娯楽LARPでさえ、それが何であるか、どうあるべきかを示すことは難しく、筆者にできるのは可能性について触れることのみである。トールキンに触発されたソード＆ソーサリーは、世界的に最も人気のあるジャンルであり、新型コロナの世界的流行が起こるまでは、毎年夏に欧州で「ドラッヘンフェスト」（Drachenfest：龍の祭）や「コンクエスト」などの大規模イベント（英語ではmass conventionsまたはconsという）が開催されていた。5日間のイベント期間中、4,000人～8,000人を超える参加者がそれぞれの衣装に身を包み、キャラクターになりきって敵と戦ったり、同盟を結んだり、謎を解いたりしていく。その合間に、参加者は友人や家族と広大なテント村で寝食を共にしながら、疑似中世のファンタジー感あふれる世界での日常生活を体験するのである。

日本でもファンタジー系LARPの人気は高いが、次いで人気なのがホラー系LARPである。普段着で参加できるホラー系LARPは初心者にも敷居が低いが、数ある歴史系LARPイベントのひとつ、伊賀の忍者LARPも同様に参加しやすい（Kamm 2022）。20世紀初頭のイギリスの階級社会がテーマの『フェアウェザー・マナー』（Fairweather Manor）も同じように歴史と想

像力とを組み合わせたLARPで、「ノルディックLARP」（Nordic Larp）または「芸術的LARP」（Artistic Larp）と呼ばれるものの一例である。「ノルディック」と付くのは、北欧で毎年開催されるLARPの国際会議「クヌーテプンクト」（Knutepunkt：交差点、接合点の意）に由来しているからである。ノルディックLARPのもうひとつの例は、精神病院を舞台に親密な人間関係を扱った『デリリアム』（Delirium：精神錯乱）で、さまざまなストーリーが時系列に関係なく展開していく。

教育の分野では、若者を対象としたLARPキャンプが毎年開催されている。このキャンプは、チームワークや森での振る舞い方など、ファンタジーと教育とを組み合わせた内容になっている。代表的なものに、われわれと自閉症についてのLARPを共同制作しているドイツの体験デザイングループ「ヴァルドリッター」によるものがある。彼らは子ども向けのLARPだけでなく、大人向けにも、ドイツ連邦政府による資金援助のもと、宇宙船を舞台に人間とは何かをテーマにした大規模LARPを開催している。日本にも教育LARPを手がける団体があり、図書館を舞台にしたイベントなどを開催している。

賞も獲得した『ハラット・ヒサル』（Halat Hisar：包囲の状態）は、占領をテーマにしたフィンランドとパレスチナの共同作品で、政治的LARPの代表例である。そして最後に忘れてならないのが、世界中の人びとが魔法を体験するために集う、芸術的LARP『カレッジ・オブ・ウィザードリィ』（College of Wizardry：魔法の大学）で、大ヒットイベントとなっている。

LARPを定義する（ことの難しさ）

これまでに挙げた例を見るだけでもLARPの有り様がこの20年で非常に多様化したことが分かる。新しい形のLARPに出会うたびに、LARPを厳密な意味で定義することに疑問を感じるようになった筆者は、哲学者ヴィトゲンシュタインによる「家族的類似」（Wittgenstein [1953] 2009）に基づいてLARPを理解するようになった。つまりLARPは、「家族的類似」によって部分的に結びついたさまざまな実践の集合体である（【図2】参照）。「LARP」

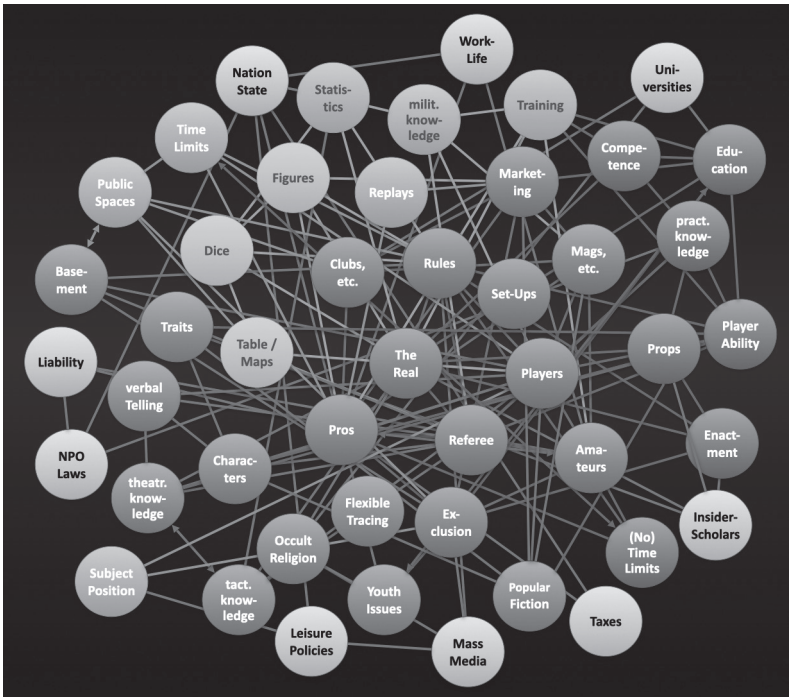


図２　さまざまな実践を結ぶネットワークとしての LARP

のような言葉は、実践と実践者とを結びつけるハイパーリンクと捉えるほうがよい。このことは芸術的・政治的・教育的 LARP に関する「ノルディック LARP の言説」の議論とも共鳴している（カム 2019）。ここで私たちは「LARP デザインの調整卓」（Mixing Desk of Larp）というアイデアと出会う（Stenros, Andresen, Nielsen 2016）。これは、考え得るデザインの選択肢を視覚化し、LARP の作者や主催者に対し、LARP の規範を定義するのではなく、自分たちのイベントから人びとが何を期待できるかを明確にするよう求めるものである。ゲームの流動性については、近藤功司をはじめとする日本のゲームデザイナーも同様の認識を示している（近藤 2019）。

実践としての LARP について言えることは、関連するコミュニティの大半は非常に包摂的であり、今日では女性が LARP 人口の半数を占めている。

さまざまな神経疾患を持つ人びとの受け入れ率も周辺のコミュニティより高い。

自分自身ではなく、独自の人生や個性を持ったキャラクターとして参加するという特徴的な部分ひとつを取ってみても、「キャラクター」の意味するところは非常に幅広い。たとえば、日本のホラー LARP ゲーム『メメント・モリ』では、参加者は医学やオカルトなどの技術や才能を選び、空想上の熟練度を決める。考古学者やジャーナリストといった職業も選び、流血や心理的な脅威といった、ある種の恐怖を和らげる能力によってキャラクターを定義する。

一方、ノルディック LARP の『リンボ』（Limbo：煉獄）は、生と死の間の場所が舞台となっており、プレイヤーは再生を求めるか、超越を求めるか、あるいは忘却を求めるかを決めなければならない。そのためのスキルや戦闘ボーナスはなく、死を恐れているか、後悔しているかなどの質問に答えることでキャラクターを定義する。

LARP と新型コロナウイルス

仕組み、目標、テーマ、期間、場所にかかわらず、ほとんどの LARP は非常に感情的で肉体的な体験である。肉体的とは戦闘だけでなく、親密な関係性や、単純に疲労を意味する場合もある。

参加者が体験する感情は、空想世界での実践の一部であるとはいえ、やはり現実である。大勢の敵から逃げるときは実際に命の危険を感じ、対決に勝利したときには喜びを感じる。特にノルディック LARP の伝統を受け継ぐ LARP では、あらゆる種類の感情や情動を追求する。

こうした身体的なやりとりには当然ながらエアロゾル（飛沫）が発生する。そのため、新型コロナウイルス感染症が流行り始めるとすぐに、すべての LARP イベントが中止となった。夏の大規模な大会は全部、小さな大会もほとんどが中止となった。これによって、大会の運営組織だけでなく、イベントで演じたり、グッズを販売したりできなくなった個人アーティストや職人

にも、多大な損失と不安を与えることになった。また、多くのルールが絶えず変更されていくなかで、規則に沿ってイベントを開催するにはどうしたらよいかという不安も生まれた。

しかし、イベントが中止や延期になっても参加費の返金を要求する声は出ないなど、LARP コミュニティからは多くの支持が得られた。

ライブ・アクション・オンラインゲーム

新型コロナウイルスによって、ライブ・アクション・オンラインゲーム（LAOG）は最盛期を迎えた。それまではごく内輪でのみ行われ、ニッチな存在だった LAOG が、その可能性を最大限に発揮させることになった。

ゲームの形態は非常に多岐にわたり、すべてを挙げることはできないが、たとえば、参加者が暗い部屋でプレイするスペースホラー、メイクアップセッション、死者と生者とのコミュニケーション、ワクチンが自閉症を引き起こさないことを反ワクチン派に説得する政治ゲームなどがある。LAOG のなかにはすでに LARP やゲームの賞を獲得しているものもある。また、日本の LARP 団体も遠隔通信 LARP「リモート・スコープ」という、LAOG を体験できるフレーム（枠組み）をプレイヤーに無償で提供し、感染の心配のない環境でプレイを楽しみたい人びとの要望に応えている[4)]。

このようなオンラインのロールプレイング形式の多くは、研究者が会議やカンファレンスで使用するツールを採用しており、Zoom や類似ツールの人気が非常に高いが、特に大人数での使用には限界がある。そこで最近注目されているのが、Gather.Town などの仮想空間でのチャットシステムである。ここでは、1990 年代の『ゼルダの伝説』シリーズのようなユーザーインターフェイスを使って、地図上を歩き回ることができる。他の参加者に近づくにつれ、彼らの声が聞こえ始め、やがてその姿が画面上に現れる。

衛生管理指針

コロナ禍における LARP の試みは、オンラインだけでなく、リアル環境

でも行われている。たとえばドイツでは、連邦政府が発表したガイドラインに沿ってLARP主催者が「衛生管理指針」を作成、提出し、管轄の保健所が承認すれば、LARPを実施できる。ドイツのLARPカンファレンス「ミッテルプンクト」（MittelPunkt：中心点の意）では、ベストプラクティスの例について議論が交わされた。こうした衛生管理指針は、いつ、どこでマスクを着用しなければならないか、どの程度の身体的接触が可能かなどを明記する。ただし、参加者の数や場所については制限されている。

筆者は、コロナ禍の日本で思いきって、ある伊賀の忍者LARPで限定的なフィールドワークを実行した。ほとんどの参加者にとっては、忍者の装束にマスクがうまく溶け込んでいたので、ファンタジー系LARPなどに比べると不信感の解消（suspension of disbelief：虚構の世界とは知りつつ、一時的に本物と思い込んでしまうこと）は阻害されない。主催者側も、身体的な接触が起きないよう、直接の対戦に代えた表現型のバトル形式を工夫していた。

このような対策を施しても、その場の勢いでプレイヤー同士が近づいてしまったり、マスクがずれたりすることもあったが、感染者を出さずにイベントを終えることができた。

代替策の難しさ

プレイヤーや主催者たちと議論を重ねて分かったことは、大半の対策は代替策としてはほとんど機能しないということである。Zoom疲れがコロナのように蔓延し、マスクの着用やソーシャルディスタンスを保ちながらのプレイがいかに制約のあるものかが一層明らかになった。マスクやソーシャルディスタンスが不信感の解消を阻害しないジャンルは少数に限られる。終末ものの LARPはテーマ的には有利だが、一部のプレイヤーにとっては現実の体験と重なる部分が多く、生々しすぎる。

同じように、研究やフィールドワークも制限されている。コロナがLARPに与える影響についてオンラインで議論することもできるが、これはかなり

気が滅入るものであり、今のところ驚くべき成果は出ていない。

イーミック／リモートフィールドワーク？

こうした単なる観察は、LARP の中心にある体験的な核心とは対照にある。LARP には観客という存在がなく、他者が LARP をプレイしているのを見ることはできない。また、彼らのやっていることの半分は意味をなさない。なぜなら、そこまでに至るやり取りを見られないからであり、あまりにも多くのことが同時多発的に起こるために、全体のプロットを把握することが難しいからである。

したがって、研究者自身も LARP に完全に参加する必要がある。皆が雨の中で震えているときには、自分も震え、他者になりきることによって、キャラクターを演じるということの意味を理解しなくてはならない。

こうした研究方法は、世界各地の革新的な LARP に行くことができる富裕層にとっては有利である。お金があっても飛行機のチケットが買えない現在では、現地の代表者を派遣することも可能だ。これは、研究者がコードブックやインタビューガイドをデザインし、実施は訓練されたコーダーやインタビュアーに任せるのと似ている。

しかし、LARP の研究は極めて質的・探索的な性質を持っており、人間の選択的な知覚と相まって、この設定はむしろ非生産的であるかもしれない。たとえば、魔法使いの杖に最新のアクションカメラを潜ませ、リアルタイムで媒介者を誘導するといった最先端の技術を使うこともできるが、ここで人を操ることに対する倫理的な問題が出てくる。これもジャンル的にはかなり限定的なものである。

異星人の惑星でロボットを誘導するという設定は（実際に LARP の実践者［ラーパー］もプレイしたことがあるが）、たとえば、アポロ 13 号の「ヒューストン、問題発生」（Houston, we have a problem.）の際のヒューストンのように、研究者自身もキャラクターに扮することができるので、うまくいくかもしれない。二酸化炭素排出量の削減にもつながるので、将来的には検討し

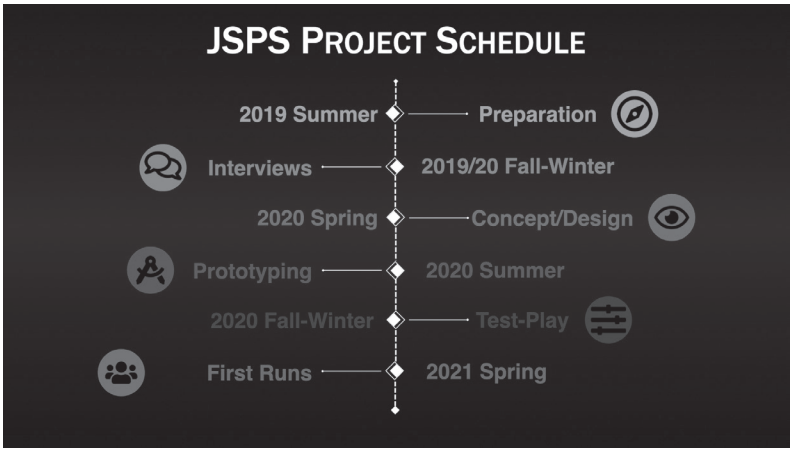


図3　プロジェクトの暫定スケジュール

てみる価値はあると考える。

フィールドワーク以外では、先に述べた科研費事業、自閉症についての文化越境的学習のための教育 LARP デザインプロジェクトも、コロナの影響を受けている。

デザイン上の課題

2018 年、日本学術振興会に科研費を申請した際のプロジェクトの暫定スケジュールは、【図 3】にある通りである。

助成金を得たわれわれ研究グループは、自閉症に関する文献調査や、自閉症者としての経験談を語ってくれる人を探すなどの準備を開始した。ここで「自閉症のある人」（person with autism）という言い方ではなく「自閉症者」（autist）としたのは、インタビューに応じてくれた人の多くが、自閉症と自分とは切り離すことができないと強調していたからである。インタビューは 2019 年 10 月から 2020 年 1 月にかけて行ったが、この期間にデザインプロセスへの参加希望者も見つけることができた。デザイン作業のキックオフとして、2020 年 3 月にはドイツで研究パートナーであるヴァルドリッターとのワークショップも予定されていたが、コロナの影響により中止せざるを得

なくなり、その後の予定もすべて頓挫してしまった。

過感受性や反響言語などの問題を体験可能にする方法を中心に多くのアイデアが集まったが、デザイン面では依然として多くの課題があった。加藤浩平の自閉症児との活動やわれわれが行ったインタビューから、日本で自閉症者が最も苦しんでいる場所は中学校であり、中学校の教師が重要なゲートキーパーではないかと考えた。そこでわれわれは、中学校の教師を主な対象に職業訓練としての 3 日間の LARP を企画した。日本では、中学校は小学校での楽しい総合的な学習から、受験に向けた勉強へのハードな移行を意味する。思春期とティーンエイジャーの違いによるからかいや、それに伴って起きるいじめなど、こうした変化に対応することは、自閉症者にとっては特に難しいことである。さらに、神経の多様性を十分に理解していない教師からいじめを受ける可能性もある。

啓発や理解を目的とした教育 LARP などの活動の多くでは、まだ関心のない人びとをいかに巻き込むかが課題となっている。そのため、われわれはストーリーや設定がしっかりしていて、それだけで人を引きつけるような LARP づくりを目指している。自閉症についての参加者との議論は、告知時やプレイ前のワークショップよりは、体験後のデブリーフィング（振り返り）の場で行うことを重視している。

最終的な課題は、常に心がけていることだが、自閉症者自身の声を基に、彼らの視点を取り入れた LARP をつくるということである。先に述べたように、われわれの活動には多くの自閉症者が関わっており、そのなかには LARP の参加者や LARP デザインの経験者もいる。われわれは、彼らのために話すのではなく、彼らとともに話したいと思っている。これは Autism Speaks（本部アメリカ）をはじめとする自閉症支援団体に大きく欠けている考え方である。

LARP のデザインスプリント

当然ながら、われわれはデザインプロセスをオンライン化し、コロナに

よって失われた時間を取り戻すしかなかった。そこで、プロトタイピングのために開発されたモデル手順（Knapp, Zeratsky, Kowitz 2016）に基づき、4日間のデザインスプリント（短期間で調査、プロトタイプ作成から検証までを行うプログラム）を実施した。この手順は、ブレインストーミングを越えて、個人作業とグループ作業とを一体化させるものである。通常は多くのホワイトボードと付箋紙が必要になるが、代わりにオンラインホワイトボードMural[5] を使用し、自閉症を例に、クラスルームでの多様性の認識と配慮を長期的な目標として掲げた。そしてストーリーボードを作成し、チームメンバーがさまざまなスケッチに投票して、LARP のプロトタイプの基礎を作り、専門家であるラーパーと自閉症者に提示した。

現在の状況

現在、この LARP を発展させるために、さらに二つのオンラインワークショップを計画している。リアル環境での LARP も引き続き計画しているので、いずれ実際に集まってテストプレイをする必要が出てくるだろう。その意味で、コロナは依然として目標の達成と LARP を完成させたいと願うわれわれの前に立ちはだかっている。

しかし、幸いにも感染率の低下を受け、2021 年 9 月にドイツのヘルテンにある「ヴァルドリッター」[3] のクリエイティブ・キャンパスにおいて、最初の短いテストプレイを行うことができた。コロナによる制約はあったが、マスクを LARP の物語の一要素としてプレイに取り入れることにより実現が可能となった。最終的には、この LARP は 3 日間のイベントとなる予定である。今回のテストプレイでは、5 時間という凝縮された時間のなかで自分たちのアイデアがどのようなプレイに適しているか、どのような学習効果が期待できるかを確認した。現時点での分析から、とても貴重なフィードバックが得られた。可能であれば、次は日本で全編のテストプレイを実践できる機会を持ちたいと考えている。そのためにはドイツのパートナーが来日できるよう、国境の規制が緩和される必要がある。

鋳物美佳は、当会議のなかで、コロナのトンネルの先にまだ光は見えないと語った。われわれも長い間そう思っていたが、今回のデザインスプリントによって、少なくともわれわれのプロジェクトの暗闇にはわずかながら光が差してきた。そこには多くの前向きな動きやアイデアがあり、われわれはそれを守っていかなくてはならない。オンラインでのデザインスプリントは環境負荷も抑えられるので、こうした共同デザインのアプローチを続けていきたいと思っている。

おわりに

特にフィールドワークやインタビュー、人的交流を伴う研究には、コロナを越えて考えなければならない課題がある。豊沢信子も戒めていたように、今後は「アフターコロナ」の時代は来ず、「ウィズコロナ」の時代になると考えている。また、前回 1968 ～ 69 年の香港風邪のパンデミックが起きたことも、その時学んだはずの教訓も、今では完全に忘れ去られているように、今回のパンデミックからも学ぶ者はいないのではないかとも考えている。誰もがコロナ以前の搾取的で破壊的な「ノーマル」な日常に戻りたいと望むなかで、次のパンデミックはすでにプログラムされているのである。

これからは、このパンデミックがもたらしたオンラインでの短時間の教授会やハイブリッド会議を、目の前の危機を越えた後も維持しつつ、他の仕事においても、より生産的な時間の使い方に戻れる方法を見つけたいと願っている。

謝辞

国際日本文化研究センターで開催された「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」の主催者の皆様、特に荒木浩先生には、コロナ禍における LARP 研究の課題についての議論に参加する機会をいただき、感謝を申し上げたい。

1 Website: https://jarps.net
2 Website: https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-19KT0028/
3 Website: https://www.waldritter.de
4 Website: http://ex.closs-larp.com/archives/260
5 Website: https://www.mural.co

引用文献

» CLOSS『Road to Conquest ～ドイツ大規模LARPへ冒険者を誘う旅ガイド～』NextPublishing Authors Press、2020年。
» Flückiger, Katja M. 2006. “Xenophobia, Media Stereotyping, and Their Role in Global Insecurity.” In Policy briefs on the transcultural aspects of security and stability, edited by Nayef R. F Rodhan. Zürich: LIT.
» Higuchi, Naoto. 2014. “Japan’s Far Right in East Asian Geopolitics: The Anatomy of New Xenophobic Movements.” Tokushima Sociological Studies 28: 163–183.
» Holter, Matthijs, Eirik Fatland, and Even Tømte. 2009. “Introduction.” In Larp, the Universe and Everything, edited by Matthijs Holter, Eirik Fatland, and Even Tømte, 1–8. Haraldvangen: Knutepunkt.
» Kamm, Björn-Ole. 2011. “Why Japan Does Not Larp.” In Think Larp, edited by Henriksen, Bierlich, Hansen, and Kølle, 52–69. Koppenhagen: Rollespilsakademiet.
» ———. 2013. “Rotten Use Patterns: What Entertainment Theories Can Do for the Study of Boys’ Love.” Transformative Works and Cultures 12. doi:10.3983/twc.2013.0427.
» ———. 2015. “Opening the Black Box of the 1989 Otaku Discourse.” In Debating Otaku in Contemporary Japan, edited by Galbraith, Kam, and Kamm, 51–70. London: Bloomsbury Academic.
» ———. 2017. “Translating Research into Larp: Village, Shelter, Comfort.” In LARP: Silberhochzeit. Aufsatzsammlung zum MittelPunkt 2017, edited by Rafael Bienia and Gerke Schlickmann, 31–60. Braunschweig: Zauberfeder Verlag.
» ———. 2019a. “Adapting Live-Action Role-Play in Japan—How German ‘Roots’ Do Not Destine Japanese ‘Routes’.” Replaying Japan, no. 1: 64–78. http://hdl.handle.net/10367/11682.
» ———. 2019b. “Experience Design for Understanding Social Withdrawal: Employing a Live-Action Role-Play (LARP) to Learn About and Empathize with Hikikomori in Japan.” In Neo-Simulation and Gaming Toward Active Learning, edited by Ryoju Hamada, Songsri Soranastaporn, Hidehiko Kanegae, Pongchai Dumrongrojwatthana, Settachai Chaisanit,

Paola Rizzi, and Vinod Dumblekar, 387-396. Singapore: Springer. DOI:10.1007/978-981-13-8039-6_36.
» ———. 2020. Role-Playing Games of Japan: Transcultural Dynamics and Orderings. New York: Palgrave MacMillan.
» ———. 2022. “Reenacting Japan’s Past That Never Was: The Ninja in Tourism and Larp.” In Reenactment Case Studies: Global Perspectives on Experiential History, edited by Vanessa Agnew, Juliane Tomann, and Sabine Stach. New York: Routledge.
» カム, ビョーン = オーレ「「Nordic Larp」入門：芸術・政治的な教育 LARP の理論と実践」『RPG 学研究』0 号（2019 年）5–14 頁。
» 加藤浩平・藤野博・糸井岳史・米田衆介「高機能自閉症スペクトラム児の小集団におけるコミュニケーション支援——テーブルトークロールプレイングゲーム (TRPG) の有効性について」『コミュニケーション障害学』29(1)、2012 年、9–17 頁。
» Knapp, Jake, John Zeratsky, and Braden Kowitz. 2016. Sprint: How to solve big problems and test new ideas in just five days. London New York Toronto: Bantam Press.
» 近藤功司「ゲームという陽炎を前に」『RPG 学研究』0 号（2019 年）、3–4 頁。https://doi.org/10.14989/jarps_0_03（最終アクセス：2021 年 8 月 13 日）
» McLelland, Mark, ed. 2017. The End of Cool Japan: Ethical, Legal, and Cultural Challenges to Japanese Popular Culture. New York: Routledge.
» Ōtsuka, Eiji. 2015. “Otaku Culture as ‘Conversion Literature’.” In Debating Otaku in Contemporary Japan, edited by Galbraith, Kam, and Kamm, xiii-xxix. London: Bloomsbury Academic.
» Pickering, Michael. 2001. Stereotyping: The Politics of Representation. New York: Palgrave MacMillan.
» Stenros, Jaakko, Martin Andresen, and Martin Nielsen. 2016. “The Mixing Desk of Larp: History and Current State of a Design Theory.” Analog Game Studies. November 13 http://analoggamestudies.org/2016/11/the-mixing-desk-of-larp-history-and-current-state-of-a-design-theory/ (Accessed 13 August 2021).
» Wittgenstein, Ludwig. (1953) 2009. Philosophical Investigations. Translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker, and Joachim Schulte. 3rd ed. Malden: Blackwell Publishing.

ゲーム目録

» Call of Cthulhu (1981) TRPG. Corebook. 1st edition. Petersen, S., and L. Willis. Hayward: Chaosium.
» College of Wizardry (2014–present) concept: Rollespilsfabrikken and Liveform, Dziobak, company P (since 2018). Website: www.wizardry.college (Accessed 13 August 2021).

» ConQuest of Mythodea (2004–present) concept: LiveAdventure. Website: www.live-adventure.de/index.php/en/ (Accessed 13 August 2021).
» Delirium (2010) concept: Høgdall, R. and Schønnemann Andreasen, P. Website: nordiclarp.org/wiki/Delirium (Accessed 13 August 2021).
» Drachenfest (2002–present) concept: DrachenFest UG & Co. KG. Website: www.drachenfest-larp.info (Accessed 13 August 2021).
» Dungeons & Dragons (1974) TRPG. Corebook. Gygax, G., and D. Arneson. Lake Geneva: TSR.
»『遠隔通信 LARP リモート・スコープ』体験型 LARP 普及団体 CLOSS、2020 年。Website: http://ex.closs-larp.com/archives/260（最終アクセス：2021 年 8 月 13 日）。
» Fairweather Manor (2015–18) concept: Dziobak. Website: www.fmlarp.com (Accessed 13 August 2021).
» Halat Hisar (2013, 2016) concept: Kangas, K., AbdulKarim, F., Pettersson, M., et al. Website: www.nordicrpg.fi/halathisar/ (Accessed 13 August 2021).
»『簡易汎用ホラー LARP ルールブック　メメント・モリ』星屑／ CLOSS 著、ポプルス、2015 年。
»『忍者 LARP　徳川家康を救出せよ』三重大学国際忍者研究センター／グループ SNE ／体験型 LARP 普及団体 CLOSS、2019 年。Website: ninjalarp.tumblr.com（最終アクセス：2021 年 8 月 13 日）
»『ソード・ワールド RPG』水野良／グループ SNE 著、富士見書房、1989 年。
»『ソード・ワールド 2.0 ルールブック Ⅰ』北沢慶／グループ SNE 著、富士見書房、2008 年。
»『ソード・ワールド 2.0 LARP』ベーテ・有理・黒崎／グループ SNE 著、グループ SNE、2018 年。

「ヨーロッパからの報告②」に関するコメント
Comments on the “Reports from Europe, Part 2”

キリ・パラモア／ Kiri Paramore

私の勤務するアイルランド国立大学にはいくつもの構成大学があり、カリフォルニア大学（UC）のような組織体系を持つ。そのうちアジア研究は、コークというアイルランド共和国では二番目に大きい都市にある国立大学コーク校に中心を置いている。

まずは私自身の論点をまとめて日本語で先に述べ、その後で英語に切り替えて、ゆっくりと一人ひとりの報告について検討させていただきたい。

論点でいえば、昨日も本日も、参加なさっている先生がたが今の状況下における教育研究の問題等を指摘されたが、私からのポイントとして、そういった問題点のほとんどが、日本研究に特有なものではないということである。物理学でも医学でも、分野やディシプリンが違っても、同じような問題を経験しているわけなので、それを少し念頭に置く必要がある。そして、特に豊沢氏が注目され、カミングス氏も少し触れておられた格差の問題については留意すべきだろう。なかでも、国家間の格差、これが非常に大切な問題だと思われる。

本会議は、五百旗頭真氏の基調講演から始まったが、そのなかで私がアイルランド国立大学を代表する者として少し気になったのは「大国」という言葉であり、その概念であった。私の年代の 20 世紀リベラリズムの考え方からすると、たとえば、小国の経済勢力とか、あるいはより小さい国と大きい

国との関係、あるいは帝国の歴史を持っている国々と帝国の歴史を持っていない国々（多くは元植民地）の差など、それらがあまり視野に含まれていなかったような気がした。特に、豊沢氏や梅村氏、私がいる国家をみると、オーストリアやハンガリーは帝国であっても、その後には植民地化された歴史（ソ連による支配期）を持つ国々でもある。同じヨーロッパでも、元帝国と元植民地それぞれの歴史を持っている国々がある。その観点からすると、五百旗頭氏がある瞬間に使った「遅れている国家」という表現はどのような意味だろうかと考えさせられた。

たとえば、ヨーロッパをみると、現在、GDP（国内総生産）の最も高い国はアイルランドである。オランダやフランス、イギリスの 2 倍近くに上る。コロナでいえば、感染者数の最も少ない国は、アイルランドである。アイルランドばかりでなく、ハンガリーなど東ヨーロッパのいくつかの国々にも同じような傾向が見られる。だから将来を見据えて、たとえば、資本主義的に今どこに投資するか、あるいは日本研究であっても他の分野であっても、今後どこに可能性や魅力性を見出すかということに関し、21 世紀のリベラリズム、あるいは 21 世紀的な大国のパワーポリティクス的に考えるのは一つだけれども、他の見方もできるというのが、もう一つの大切なポイントだと思う。

帝国の歴史を持っていない国々には、アジア研究の歴史もあまりない。だからこそ、国際交流基金や日文研のような機関のほんの少しの動きが、チェコやハンガリーなどの国々に与える影響力は大きい。私の現在の職名は Professor of Asian Studies で、アイルランド全土で唯一のアジア研究の教授である。日本だけではなく、韓国や中国に関する研究も担当している。その立場から、一つ面白いと思われるのは、中国政府にも孔子学院などいろいろな基金はあるが、中国の組織は結構、小さい国の支援にも力を入れているという点である。

ここアイルランドにおける中国の存在感も、非常に大きいものがある。逆に、日本の外務省、大使館、国際交流基金などは、イギリスやフランスへの

助成にはかなり注力しているものの、それ以外のヨーロッパ諸国での目立った活動や存在感はほぼないに等しい。

コロナ感染拡大以前に、打ち合わせのためダブリンに出かけたときの話である。中国の大使館からは大使をはじめとする多くの人たちが出席してくださり、いろいろと具体的な話ができた。一方、その際、ロンドンにある日本の国際交流基金からも担当者が偶然にダブリンを訪問していたので、打ち合わせを予約したところ、その担当者は 20 分も遅れて到着する始末だった。また、ダブリンにある日本大使館を訪ねた折には、文化関係の大使館員が 30 分ほど、自身のイラク滞在経験を語ってくださったが、私が 2 時間半もかけてコークから来たというのに、お茶さえ出してくれなかった。こういう経験が、特に中国の存在と比較すると無視できず、とても気にかかる。それは、私たち誰もが持っている、日本の外交官や日本の組織に対する一般的なイメージとは正反対である。一般に、日本の基金や政府機関に期待するイメージは、非常にプロフェッショナルで、約束の時間は守るといったものだが、実際の現場で遭遇しなかったのは一つの面白い体験だった。

最後に、今回の報告について。特に、カミングス氏とカム氏が非常に興味深い研究について報告してくださった。ここからは英語に切り替えて、各ご報告についてのコメントを行う。

I'd like to thank very much Professor Araki Hiroshi and Professor John Breen for inviting me to the consortium's conference today. It's wonderful to be involved with this consortium. I think this consortium is a fantastic initiative and I am hoping from the position here in Ireland and also for all those of us in Europe and beyond that we can play a role in supporting this excellent initiative and I'd like to thank Professor Araki for leading it. So, I've been asked to make some comments in English in relation to the various presentations so I'll just go through them one by one.

I'll start with Dr. Cummings' presentation. Dr. Cummings began by speaking about an issue that many presenters have spoken about during the

conference, which is the various problems of delivering education and carrying out research completely online or under the conditions that the coronavirus has imposed upon us. One point I just made in Japanese is that a lot of the issues we are facing of course have nothing to do with Japanese studies, they are just issues every single discipline—a chemist or somebody doing biology would face very similar issues and I think that's good to be aware of.

I was very happy to see the PDF that was sent around yesterday by the National Diet Library in relation to the National Diet Library's activities. I think the National Diet Library makes a major contribution, the capacity to access those collections digitally—this is before the pandemic as well—is a massive support for burgeoning Japanese studies programs. So those growth areas where Japanese studies is just beginning and has lots of potential benefit from these initiatives. I am talking about countries which are going ahead economically and there are many. Ireland is one such country, and there are others, that are economically growing—even during the coronavirus. These countries have strong economic growth and are bursting ahead but may not have strong traditions of Asian studies. I think these are the places to support. And the support that the National Diet Library already presents is massive because there is no way that a country just beginning Asian studies can attain a collection of material books. That's just never going to happen. So therefore, the digital path is really the only practical path and the NDL understands that and is playing a major role, so I commend them on that.

Then moving onto Dr. Cummings' research presentation—very, very interesting. Having a background myself in early modern Japanese history, I am always fascinated by research on kabuki. And finding these kabuki plays influenced by their own pandemic in their own time was very interesting. What I found fascinating about Dr. Cummings' presentation is it focused on the same issue that is often emphasized in especially Western studies of kabuki: This idea of individuality or I think the term that Dr. Cummings used was "individual

fashioning." And of course traditionally this kind of argument has played a major role in the so-called modernization thesis—a major element in the academia both of Japanese imperialism and Cold War American led Area Studies. In some of that more politicized scholarship on kabuki, we get the idea of individual choice and subjectivity being contrasted against Chinese Confucian values. And in the old days, 100 years ago or 50 years ago, this would be used to drive a wedge between Chinese and Japanese culture and show how British Japan really is, and therefore how fit for Western Empire Japan is—a justification of Japanese imperialism, and later of Japan's role in American imperialism. So that's an important history of this type of scholarship we should not forget.

But what I loved about what Dr. Cummings did is he instead of looking at that sort of big structural picture, he focused on these people's individual lives, these people have just experienced the pandemic, and looking for the motivation in that sort of interesting individuality rather in immediate local things that happened to these individual, so I thought that was fascinating.

Then moving on to Dr. Toyosawa's presentation. Firstly, Dr. Toyosawa mentioned a research project on Matsudaira Sadanobu and I just wanted to say, I mean I am always happy to talk about Matsudaira Sadanobu so I hope there's a chance in the future maybe within this consortium or elsewhere to hear Dr. Toyosawa speak about Matsudaira Sadanobu and I'd love to hear that. I wrote a little bit about him in a book that Professor Breen mentioned from Cambridge University Press, *Japanese Confucianism: A Cultural History*.

Dr. Toyosawa's main point about a gap in the global research environment was I think crucial and very welcome. In Europe, there is a big gap between countries with traditions of Asian Studies, and those without. For instance, where I was until last year, Leiden University, has 150 years of Japanese studies history. And what that means is you've got 150 years of books, actual books, and collections that's just sitting there, that you walk two minutes and there it is. Now a country like Ireland

or a country like Czechia is very different. They are never going to have this. It wouldn't be smart for them to even try to build up such a collection. My role is to make the argument for more Asia-related material in Ireland. But how can I make an argument for hard copy collections when there's like five people maybe who read Japanese in the country? Of course, I can't make an argument to spend, what, 50 million euros to obtain that kind of collection. So, in this sense the digital collections and access to them are crucial.

But just one thing, a point I made in Japanese and I'll make it again in English, I think it's very important that people, especially in Japan, understand that a lot of these, what Professor Iokibe in his talk I think referred to as backward countries or countries that have colonial rather than imperial histories, actually have much bigger economic growth than the old imperial powers. There are many of such countries in Europe. These countries are much more highly educated than the old imperial powers in Europe. So, the average individual in Czechia or Ireland is much more highly educated than someone in Britain. The education systems and the performance per capita are much better. On top of that they have much higher economic growth. So, the potential for investing in these countries regardless of what you are doing—including Japanese studies—the potential is massive. Whereas you can plow as much money as you like into England and France, they are still never going to have major economic growth, they are still always going to have less people educated, and they are still and at the moment going to have higher coronavirus figures than these countries smaller, newer, more quickly advancing European countries in Eastern Europe and Ireland. That's just the reality.

Now the point is, and I know this from my experience because I'm responsible for Chinese studies also, the Chinese government and institutions understand the potential of these high-growth European countries. And they act on it and they plow resources into these countries because they can have a big effect.

People from the Japanese authorities turn up here, by contrast, if they even bother to visit the non-imperial countries of Europe, turn up to meetings 20 minutes late, they don't even have people allocated to these countries. So, whereas some organizations like the National Diet Library are doing a tremendous job, some of the organizations like Gaimushō and some elements in the Japan Foundation that should be specializing on this issue have dropped the ball. I think this is because they have a sort of rather old-fashioned idea of what Europe is and where the potentials are in terms of research. So, I think I am really happy that Dr. Toyosawa, in much more politically neutral, much more diplomatic terms than I just did, highlighted some of these issues because I think they are really important.

Similarly, Professor Umemura's presentation was fascinating. It was fascinating to hear the story of Japanese studies in Hungary before the fall of the Austro-Hungarian Empire and afterwards. I think there's a fascinating story. But you noticed that Professor Umemura mentioned this thing of East Asian Collaborative Researches（*higashi Ajia kyōdō kenkyū* 東アジア共同研究）so the importance of Asian studies using the different countries including the different countries of Japan, Korea, China.

Now, I know many people in Japanese studies in Japan and in some bigger European countries like Germany they don't really like to mix up Chinese Studies and Japanese Studies, and of course I understand the political reasons for this. But in places where Japanese studies is growing or has growth potential, you have to have critical mass. Critical mass, you have to have enough activity. And for that reason collaborating with Chinese Studies and Korean Studies and where possible other non-Western areas is vital. That kind of East Asian centered research that Umemura-sensei is talking about is very, very important.

And of course she also mentioned how Hungary is doing a bit better in terms the coronavirus. And as I mentioned a lot of Eastern European countries, and Ireland, the non-imperial countries, are doing a lot better in general with the disease,

just as they do so much better economically. These places are the future of Europe, whereas the current focus of Japanese institutional activity—Britain, France and Germany—are more the past.

Then moving onto Dr. Kamm's presentation, which was very, very interesting, fascinating in fact, but a bit too far from my own areas of academic specialty to say very much about. But one thing I wanted to mention in relation to it is the issue of trans-culturalism—but also something that wasn't mentioned, multidisciplinary or interdisciplinary research. And maybe a question there. Because obviously a lot of what Dr. Kamm spoke about, from my perspective as a more classically educated person, would traditionally fall into the disciplines of either one, anthropology; or two, psychology; or three, psychiatry, right? I am sure from what he said, it's clear he interacts at least with the medical disciplines in some way. That was obviously clear. But in the presentation, Dr. Kamm didn't foreground the disciplines. And I think in multidisciplinary and especially interdisciplinary research and Japanese studies—and what is Japanese studies? Japanese studies is a multidisciplinary field—I think it can be helpful if very transdisciplinary research like Dr. Kamm is doing, if in that research we're given a few markers of which disciplines we are dealing with. Where is the anthropology, how does that interact with the other disciplines? And I think in general for these sort of consortiums in terms of conferences and stuff, I think a little bit of—of course we shouldn't be bound by disciplines—but a little bit of signposting or creating disciplinary lanes I think can just help people to communicate across the very diverse subjects we are dealing with.

And finally, on the issue of administrative overload that Dr. Kamm also mentioned—I mean absolutely, I think it's shocking. So hopefully in the future that will be something which will be reduced. So, the administrative load or the amount of bureaucracy obviously needs to be reduced. And also I think people—again, another point about small countries, I think for those of us who are running Asian

studies programs over a whole country or over big regions where you don't have a history, the amount of administrative work is massive but also the amount of political lobbying you have to do is significant. And the less admin you do, the more political lobbying you can do. So, like that meeting I was talking about, which occurred in Dublin where the Japan Foundation people turned up 20 minutes late, I was sitting in this pub and when I go to Dublin, I sit in this one pub because it is right across the road from parliament, that's right across the road from Leinster House where the parliament is. And I can sit there and I will have arranged a week before—I would have e-mailed people and various journalists or government people, people from the Dail International Relations Committee, and they will make appointments to see me. And I'll never suggest that particular place to them, but they will always all themselves suggest we meet at that particular pub. That one pub happens to be where everybody meets. It is the place to meet for these kinds of folks in Dublin.

So when that Japan Foundation person walked in—and people from Japanese Embassy never go there, they don't seem to realize about this place—when the person from the Japan Foundation came there, a Senator had been talking to me just before that. And the Senator said, well, Kiri, who is your next appointment? I said, someone from the Japan Foundation, and they are late. "Oh Japan, oh, you mean China?" Japan wasn't even on this Senator's radar. The footprint of Japanese state activity in Ireland is so small it is virtually invisible. So, I think these are also very interesting things about the world we are in. There's a lot of opportunities at the moment also through the pandemic for more international collaboration. And this consortium is one such opportunity. And it's needed, it's really needed.

And so I absolutely commend the creation of this consortium. I'd like to thank all of you for the very interesting presentations you've made and for your participation.

Column 3.

コロナ禍の後に
――大学教育・研究の転換とメタバース

藤本憲正

「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」には、ディスカッサントとして参加した。この会議が開催されたとき、コロナウイルスが 2020 年 3 月頃までには世界に拡散してから 9 カ月ほどが経っていた。そして、このコラムを書いているのは翌 2021 年 9 月であり、会議から約 1 年が経過した。会議では、当日の発表の整理と私の感想を述べたが、本コラムでは経過した時間を踏まえて感想を見直し、コロナ禍において私が経験した、学術面での変化と課題を述べたい。ところで、私はまだ若手の研究者であり有期の職にある。以下の記述は、その立場からのものになる。

学術面ではいろいろな変化があり、すでに本書や一般のニュースでも触れられている。一番の変化は、デジタル化が進んだことである。この会議がオンラインだったように、ほかの学会でも研究会でもオンライン化が進んだ。当初は Zoom がツールとしては先行したが、すぐにいろいろな選択肢が現れた。2021 年 8 月の EAJS は、Whova というアプリにて開催された。発表を見るだけでなく、チャット、メール、トピックチャット、ゲームなどまで揃っており、便利で使いやすく、面白かった。他のオンラインアプリでは、発表と質疑応答だけはできるが、発表者以外との接触が難しいと感じていた。しかしこのアプリは、発表後もしくは発表外に他の研究者と知り合う方法や機会が揃っていた。また、オンラインアプリでは、個人同士のちょっとした会話が難しいという点もあったが、Wonder というアプリにて個人やグループ

で自由に会話できる時間が設定されていた。このアプリにアクセスした人としか会話できないが、いろいろな参加者に話しかけることができた。今の雑談アプリの一つのような内容で、対面の学会にて発表の合間に出会った人と会話する感覚と似ていて、便利なアプリだった。

コロナ禍をきっかけにオンラインの会議、オンラインと対面式を混ぜた会議、対面だけなどいくつか方法が現れて、それに相応しいいろいろなアプリが次々と登場している。これ自体は社会のデジタル化の一環であり、今後もＩＣＴ技術の向上とともに次々に新しい方法が現れることは誰もが知るところである。そのため、今後、対面とオンラインとどちらが良いか、主流になるかという点は問題にはならない。

社会のデジタル化に関連して、最近「メタバース」が流行りというニュースを見た。「バース」は、“universe” の “-verse” で、それに “meta” がつながっている。この現実世界のほかに、インターネット上にもう一つの仮想世界を提供する技術であり、それを仮想現実や拡張現実を通して利用する。古いところでは「セカンドライフ」（Second Life）があったし、ゲームの「フォートナイト」（Fortnite）も有名だが、ゲームだけでなくいろいろなことができる。たとえば、バーチャル音楽ライブをしたり、公式ショップを出したりできる。もちろん仕事向けにも VR リモート会議ツールの「Horizon Workrooms」が提供されている。アバターを使いながら、実際に同じ部屋で話し合うことができる。パソコン画面だけでは、そこまで臨場感がないが、3 Dの眼鏡や専用の音響装置、記述装置を使えば、現実感を大幅に増やすことができる。もちろん、仮想空間を現実の物理世界に重ね合わせることも可能である。将来的には、より簡単に、複数のメタバースと物理世界とを重ね合わせた世界を行き来することができるだろう。ところで、昔々、子どものときに見た『攻殻機動隊』シリーズや『コレクター・ユイ』『サマー・ウォーズ』などに描かれるバーチャル世界はメタバースだったのだと今さらながら気づいた。

以上は現在の知られている動向であるが、大切なのは、これが研究・教育に与える意味は何だろうかという点だ。大学のオンライン授業は、コロナ禍

以降、すでに一般化した。以前からオンライン授業はあったが、それがメインになった様子だ。教養系授業は動画が多くなり、ゼミもオンラインで行われている。オンラインで完結する課程も提供されており、海外にいても、オンラインで授業を受けられる。学生側のメリットはいろいろある。移動の分の時間節約、分からないところや聞き漏らしたところを動画で何度も見返せる、大学に通う交通費や、場合によっては一人暮らしや海外生活の費用を節約できる。一方で、オンラインばかりで実際に学生同士や教師が会う機会が少なかったり、オンライン用に静かに議論できるような自分の居場所が準備できなかったりという問題もある。しかし、上述のメタバース技術がもっと一般化し、コロナ禍がワクチン等により落ち着いたら、会う機会や居場所の問題は減るように思う。もちろん、コロナ禍をきっかけとする精神的・経済的負担は学生に重くのしかかっており重要な問題であるが、これは大学側の対応力の不足が原因であって、社会のデジタル化の進行とは別に考える必要があるだろう。

さらに挙げるべき点は、オンラインの拡大に伴って社会に明確に意識されてきた、大学のあり方に対する疑問である。まず、オンラインが一般化すれば、大学の建物と敷地の意義が低下する。コロナ禍以前からすでにあったが、オンライン完結の課程が中心の大学がさらに増えるかもしれない。それだけでなく、現状、アメリカの学生ローンや日本の奨学金の返済問題などに見られるように、大学の学費と生活費の負担の重さ、その負担を背負うほどには卒業後の収入が確実には見込めないという問題もある。もし私が今、高校生だったら、何か才能やアイデア、よほどの資金がない限り、大学に行くかどうか迷うかもしれない。むしろ働きながらオンラインで勉強するほうが、学士取得まで時間はかかるが、メリットは多いかもしれない。また、現在は多くの企業の採用条件に大学卒業という要件があるから大学卒業が重要だが、もしその要件が無くなったら、大学以外の学習サービスで十分かもしれない。このように連想すると、オンライン完結の課程が増えるということに加えて、大学進学の必要性がいつまで社会で共有されるのか定かではない。

2021 年度の状況をみると、私立大学の約 46％で入学定員割れしており、さらに 2023 年 4 月には、国公私立大学の入学定員総数より入学志願者数の方が少ないという全入状態が到来する可能性があるという。18 歳以下の人口は減少し続けており、定員がある程度減っても、状況は変わらない。そうなれば、良質の教育と就職先を提供できる大都市の大規模校以外は、学生集めにますます苦労する。海外のオンラインの課程も競争相手となって、利用者としては選択肢が増えて良いが、大学運営側としては大変だ。

研究者として私が気になるのは、コロナ禍をきっかけに、ますます研究者の就職――特に人文系――は難しくなるという点だ。動画の授業なら、大学や学科ごとに準備する必要がないため、共通化が可能である。その分、大学教員の新規採用の削減や、非常勤講師を含め既存の教員の選別が進むのではないかと思う。また質疑応答とテスト採点だけの雇用というのもあるかもしれない。そのため、近い未来には、若手研究者が常勤の大学教員の職を得るのはますます困難になりそうだ。一方で、デジタル技術の高まりにより、大学と大学レベルの教育・研究が、徐々に一体化しなくなっているようにも見える。その点では、長期的には、何か新しい人文系研究者のあり方の可能性があると思う。

研究上で、オンライン化が進んで現時点で一番良かった点は、会議に参加する移動費と宿泊費、その時間が不要になったことだ。今までは海外の学会や、国内の遠方の学会などは、お金と時間の都合で参加できなかった。それが今では、地球上のどこの学会にも自分の家にいながら参加して、いろいろな人の発表を聞くことができるし、質問ができる。残念ながら時差の問題が残っているし、海外の学会参加費はなぜか安くならないが、すばらしいことである。低予算で、より広範囲に活発に学術意見を交換できる時代になったのだ。

コロナ禍をきっかけとしたデジタル化の促進という点では、図書館のデジタル化が、研究者としてはもっと進んでほしいと感じている。著作権の問題が難しいが、図書館のデジタル化が進めば、オンライン課程やオンラインだ

けの大学がより充実すると思う。また、海外からオンライン課程を利用できるように、世界のどこにいても日本の図書館にアクセスできるようになれば、研究と教育の両面で、望ましいことだと思う。日本語の資料が欲しい人は、日本国内に限らず世界中に存在している。

最後に、上述のようにデジタル化が進めば、大学の教育・研究を通して実際に人間同士が会う機会が減る。デジタル化できない実験装置や資料を扱うとき以外は、会う必要がない。これについては、いろいろな反応がある。私の周りを見ていても、年齢や性別、性格によって意見が異なる。対面を重視する人もいれば、まったくしない人もいる。しかし、結果的に将来は、社会がオンライン中心になるのと並行して、実際に会う機会の希少性と価値が上昇するだろう。オンライン化のおかげで、地理・資金・時間等の問題で実際には会えない人びとが一緒に議論することができるだけでなく、オンライン化で通勤などの時間を節約できる分だけ、家族など親しい人たちとの対話の時間を増やすことができる——そのようなニーズ向けの住宅販売も行われている。また、デジタル技術がさらに進めば、対面とオンラインで会うことの差はほとんどなくなるはずである。

付録
「国際日本研究」
コンソーシアムについて

設立の経緯と趣旨

2000年代に入って以来、日本では「国際日本研究」や「国際日本学」を掲げる研究所や大学院課程等の設置が目立つようになってきた。しかし、それらの機関の相互横断的連携を図る組織はつくられておらず、「国際日本研究」に対する教育体制、理念も個別に模索している状況にある。こうした現状に鑑み、国際日本文化研究センター（日文研）は、研究者コミュニティの要請を反映した連携体制を早急に推進していく必要があると考えた。

このような趣旨のもと、2016年度に「国際日本研究」コンソーシアム準備会が発足し、2017年5月にシンポジウム「なぜ国際日本研究なのか」を開催した。そして、同年9月に、「国際日本研究」コンソーシアムが正式に発足した。

「国際日本研究」コンソーシアムは、「国際日本研究」や「国際日本学」を掲げた大学の研究所や大学院課程のニーズを汲み上げつつ、連携を進めようとする我が国初の試みである。「国際日本研究」に関わる共同研究会や国際研究集会にコンソーシアムとして参加することによって、コンソーシアムを媒介としながら、国内研究者コミュニティを海外研究者ネットワークと結びつけることを目指す。

また、コンソーシアムにおいては、学術的共同研究の推進、国際共同ワークショップの開催を通じて、「国際日本研究」の学問的基盤を構築しながら、若手研究者の育成にも努める。研究成果等はデータベース化し、国内外へ発信する。

「国際日本研究」コンソーシアム規則

令和元（2019）年 10 月 8 日　制定
（「国際日本研究」コンソーシアム運営会議承認）

（目的および名称）

第 1 条　人文・社会科学系研究のグローバル化に対応するために、日本研究の国際的展開に関する学問的枠組の再構築とその成果の教育への活用に寄与することを目的として、「国際日本研究」コンソーシアム（英文名称：Consortium for Global Japanese Studies、以下、「コンソーシアム」という。）を設置する。

（活動内容）

第 2 条　コンソーシアムにおいて、次条に定める会員は、前条の目的に従い次の活動を行う。

（1）研究・教育に関する交流及び情報発信
（2）研究・教育機関の活動に対する支援
（3）優れた研究・教育の成果や取組の共有
（4）研究・教育活動の充実を図るための情報収集及び分析
（5）その他、国際日本研究の発展に資する活動

（会員）

第 3 条　会員の種別は、次の各号に掲げるとおりとする。

（1）正会員　コンソーシアムの目的に賛同する高等教育機関（部局単位）及び研究機関
（2）準会員　正会員となることを希望しないがコンソーシアムの目的に賛同する高等教育機関（部局単位）及び研究機関、ならびにコンソーシアムの目的に賛同する行政等機関

（代表幹事機関）

第 4 条　コンソーシアムの活動実施における連絡調整を行う機関として、代表幹事機関を置く。

2　代表幹事機関は、当分の間、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国際日本文化研究センター（以下「日文研」という。）とする。

（入会）

第 5 条　第 3 条各号によりコンソーシアムへの入会を希望する機関は、代表幹事機関への申し出を経て、第 7 条第 2 項に定める手続きにより承認を得る。

（退会）

第 6 条　コンソーシアムからの退会を希望する会員は、代表幹事機関への申し出を経て、第 7 条第 2 項に定める手続きにより承認を得る。

（運営会議）

第 7 条　コンソーシアム事業の実施に関する重要な意思決定及び連絡調整のため、代表幹事機関は必要に応じて、会員を招集し、「国際日本研究」コンソーシアム運営会議を開催する。

2　コンソーシアムの意思決定はすべての正会員の過半数をもって決し、可否同数のときは代表幹事機関の決するところによる。

（委員会）

第 8 条　代表幹事機関におけるコンソーシアム運営に係る企画立案及び連絡調整のため、代表幹事機関内に「国際日本研究」コンソーシアム委員会を置く。

（事務局）

第 9 条　代表幹事機関における庶務を行うため、代表幹事機関内に事務局を置く。

2　事務局の業務については、当分の間、日文研管理部研究協力課が担当する。

附　則

1　本規則は、令和元年 10 月 8 日より施行する。

2　本規則の施行に伴い、「国際日本研究」コンソーシアムに係る申合せ（平成 29 年 9 月 1 日制定。以下「旧申合せ」という。）は廃止する。ただし、旧申合せに基づき、本規則の施行前に実施されたものについては、本規則に基づき実施されたものと同等の効力を有する。また、旧申合せ第 3 条第 1 号の「機関会員」は本規則第 3 条第 1 号の「正会員」に、旧申合せ第 3 条第 2 号の「オブザーバー」は本規則第 3 条第 2 号の「準会員」にそれぞれ読み替える。

会員機関一覧（50 音順）

■正会員

・大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/
・大阪大学大学院文学研究科
https://www.let.osaka-u.ac.jp
・神奈川大学国際日本学部
https://www.ccj.kanagawa-u.ac.jp/
・九州大学大学院人文科学府
https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/
・京都大学アジア研究教育ユニット
https://www.kuasu.cpier.kyoto-u.ac.jp
・国際日本文化研究センター
https://www.nichibun.ac.jp
・上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科
https://dept.sophia.ac.jp/g/gs/
・総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻
https://www.nichibun.ac.jp/pc1/ja/education/intro.html
・東京外国語大学大学院国際日本学研究院
http://www.tufs.ac.jp/research/js/
・東京大学国際総合日本学ネットワーク
http://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp
・東北大学大学院国際文化研究科
https://www.intcul.tohoku.ac.jp
・東北大学大学院文学研究科
https://www.sal.tohoku.ac.jp
・名古屋大学大学院人文学研究科
https://www.hum.nagoya-u.ac.jp
・広島大学大学院人間社会科学研究科
https://www.hiroshima-u.ac.jp/gshs
・法政大学国際日本学研究所
https://hijas.hosei.ac.jp
・明治大学国際日本学部
https://www.meiji.ac.jp/nippon/
・名城大学国際化推進センター
https://www.meijo-u.ac.jp/
・立命館大学アート・リサーチセンター
https://www.arc.ritsumei.ac.jp/index-jp.html

■準会員

・独立行政法人国際交流基金（日本研究・知的交流部）
https://www.jpf.go.jp/j/
・ドイツ日本研究所
https://www.dijtokyo.org/ja/
・早稲田大学角田柳作記念国際日本学研究所
http://flas.waseda.jp/jcs-j/center/

［2022 年 3 月 1 日現在］

会員機関紹介①　法政大学国際日本学研究所

法政大学国際日本学研究所は、文部科学省 21 世紀 COE プログラムに「日本発信の国際日本学の構築」が、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）に「日本学の総合的研究」が同時に採択された、2002 年に設立された。以来、研究面では本学既設の伝統ある 2 研究所（野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所）、さらに研究者育成面では大学院人文科学研究科内の専攻横断組織として新設された国際日本学インスティテュートと連携し、上部組織として新設された国際日本学研究センターの統括の下、上記両事業を精力的に推進してきた。

これらのプログラムが終了した 2007 年度からは、同じ学術フロンティア部門で、それまでの成果を引継ぎ発展させる形で、新プログラム「異文化研究としての日本学」が採択され、やはり他の 2 研究所と提携して、国際日本学の引き続きの構築に取り組んでいった。このプログラムも成功裡に終了した後は、文部科学省による新たな「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」（2010 年度～ 2014 年度）に、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討――〈日本意識〉の過去・現在・未来」が採択された。本研究所では、永くこの事業を中心として研究活動を遂行してきた。なお国際日本学研究センターは 2013 年 3 月 31 日をもって廃止となったが、それはこれら四つの機関が独自に活動しつつ、他方で互いに連携していくことが着実に実現されたことにより、協働のための上位機関を置いて調整する必要がなくなったと判断されたからである。こうして、国際日本学研究所は、独自の力で他の 3 機関との連携を模索しているところである。

さて本研究所設立以前にも、「日本学」なる研究分野はもちろん広く世界各地に存在した。たとえばドイツでは Japanologie と呼ばれる学問分野である。つまり「日本学」そのものは、いわば外国産という側面が強く、ある言語圏で、日本の何らかの文化現象を対象に行われている学問研究が、その言語圏ではすべてまとめて「日本学」の名で呼ばれてきたし、それは今でも基本的には変わらない。そこには文学・哲学・社会学・政治学・人類学といった人間諸科学の多様な観点が共存しているのが普通である。このように「日本学」はもともと、それぞれの地域で学際的に開かれた存在であった。そこでこのような各地での「日本学」を結びつけ、それらにさらに国際的性格を付与することで、「日本学」総体に新たなダイナミックな展開をもたらすことを目指して、法政大学の提唱の下に立ち上げられたのが「国際日本学」という学問分野である。本研究所は設立当初から、この新しい研究分野である「国際日本学」の学問としての確立、あるいはメタサイエンスとしての「国際日本学」の確立に努めてきた。当初の研

究所長の多くが哲学を専門とする研究者であったのは、こうした経緯からすれば当然のことであるといえる。そしてこうした試みは着実に成果を上げてきたと自負している。私はこれまでとは異なって歴史学を専門とする者であるが、私が所長を継いだのは、こうした経緯を踏まえて、これからは徐々に方法論の確立からさらに各分野の内実を具体化することへの転換が期待されていたからである。なお現在の所長は江戸時代の日本文学（とくに怪談）の専門家である。

世界各地における「日本学」は、日本の経済的地位の低下とともにかつての勢いは失われているとも言われている。実際問題として、たとえばドイツの大学では日本学のポストが減りつつある。こうした時代にあって、「国際日本学」は日本における日本研究の諸成果が、より多量に、あるいはより直接的に国際社会に発信されるものであって、世界各地での「日本学」の活性化、あるいは日本文化への新たな関心を喚起していくことに貢献できるはずである。「国際日本学」によって日本の各分野の専門の研究者が、一国主義の殻に閉じこもり、これまであまり交流を持たなかった海外の研究者と接して、「外から見た日本」というきわめて刺激的、文化的インパクトを受け、それがまた日本人の日本研究にも反映していくという研究の好循環を期待している。

このように双方向に研究を開くことで、「国際日本学」は、グローバリゼーションが進行する現世界下における、日本文化の特殊性と普遍性の見直しおよび再発見、すなわち日本人研究者だけでは分からない真の日本理解が可能になっていくはずだ。本研究所は、名目だけではない、こうした「真の協業」を目指していきたいと考えて活動を続けている。

現在は「国際日本学」のウィングを広げるべく、これまで扱ってこなかった時代や地域テーマを複数取り上げて「新しい国際日本学を目指して」の名の下に繰り返し研究会を開催している。今後の活動に期待していただきたい。

（小口雅史）

会員機関紹介②
総合研究大学院大学 文化科学研究科国際日本研究専攻

総合研究大学院大学 文化科学研究科国際日本研究専攻は本年30周年を迎える。1992年4月に設立した当時、文化科学研究科には、1989年に設置されていた地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻しかなく、国際日本研究専攻は三番目の専攻として加わった。その後の1999年に日本歴史専攻、2003年に日本文学研究専攻が加わり、現在に至る。2001年にメディア社会文化専攻も設置されたが、2017年に廃止された。母体機関である総合研究大学院大学（総研大）は、学部を持たずに大学院だけを置く国立大学として、1988年10月に開学した大学院大学である。自然科学、人文社会科学諸分野にわたる18の大学共同利用機関などを基盤機関として構成されており、それぞれの機関のもとで高度で専門的な大学院教育を行い、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者の養成を目指している。

現在の文化科学研究科を構成する各専攻は各基盤機関と結びついている。地域文化学専攻と比較文化学専攻は国立民族学博物館、日本歴史研究専攻は国立歴史民俗博物館、日本文学研究専攻は国文学研究資料館、そして国際日本研究専攻は国際日本文化研究センター（日文研）がそれぞれ基盤機関となっている。これらの機関はすべて人間文化研究機構の構成機関である。

国際日本研究専攻には博士後期課程しかない。そのため、入学する院生は、学部生の活気で溢れる「大学」のような環境ではなく、むしろ院生よりも教員や研究者の方が多い研究環境に身をおくことになる。毎年約3名が入学し、院生全体では常に20名前後、これに加えて数名の研究生が在籍する。これまで課程博士・論文博士合わせて100名近くの院生に博士号を授与した。設立以来30年のあいだに国際日本研究専攻はさまざまな国籍の院生を迎えてきた。在学生の半数近くは留学生である。

人文科学・社会科学・自然科学にわたる国際的・学際的な日本研究を進めるために、教育・研究指導においては、全教員による、分野横断的な指導体制を設けている。これを可能にしているのは、文学・史学・宗教学・思想史・漫画・情報学・法学・対外交流史・民俗学・社会学・美術史など多彩な分野を専門とする教員陣の存在である。各教員はそれぞれ異なる切り口で日本文化の研究に取り組んでいる。各々の専門分野のエキスパートでありながら、さまざまな研究分野を横断的に扱う能力を兼ね備えている。

共通必修科目としては、「日本研究基礎論」「学際研究論」「論文作成指導」を提供している。「日本研究基礎論」では、各教員がリレー形式で講義を行い、日本研究の各分野における基礎となる理論的・方法論的枠組みを明確化するように指導する。「学際研究論」で口頭発表および質疑応答の演習を行い、博士論文執筆や学会発表のスキルを取得できるよう指導を行っている。一方、「論文作成指導」では博士論文執筆のために関係教員より院生一人ひとりに合わせたプログラムを設定し、専門的な指導を行っている。

特に注力しているのは、日本文化を内から研究分析するだけでなく、世界文化のなかに位置づけられる「国際性」と、一つの分野の手法にこだわらず、さまざまな研究分野の手法を取り入れる「学際性」である。このような教育プログラムを組むことにより、創造的で高度な専門的視野と、複数の専攻を横断しうる総合性を備えた研究者の育成を目指している。

共同研究会やセミナー、プロジェクトなど、日文研の学術研究活動への積極的な参加のほかに、院生のさまざまな活躍のなかで特筆すべきことは、院生プロジェクトである。この院生プロジェクトでは、博士論文の執筆に資する資料調査や学会発表などの経費を専攻が負担する。すべての院生が年に 1 回開催されるプロジェクト成果発表会で報告を行っている。また、海外派遣事業経費なども用意されている。このほかに、他専攻と協同で院生主導の文化フォーラムも毎年開催している。さらに「国際日本研究」コンソーシアムの行事や「若手研究者参加登録料助成事業」への参加も院生に呼びかけている。これらの事業を通じて研究への良い刺激になることを期待している。

在学期間中、常に日文研の学術的な雰囲気に触れているためか、ほとんどの院生は修了後に研究者の道を選び、大学や研究機関に就職する。学術研究を通じて社会に貢献できる一人前の研究者を育てることが国際日本研究専攻の使命であると自負している。

一方、総研大では、刻々と変化する学術分野の動向や社会の要請を踏まえ、複合的・融合的な課題に取り組む研究者人材を育成していく必要に迫られている。高度に専門的な教育リソースを分野の違いを乗り越えて柔軟に活用できる体制を構築するために、「研究科・専攻」というこれまでの教育体制を見直し、20 コース体制へ移行する検討を開始した。この体制刷新により、分野間の壁を低く抑えて、さらに分野横断的で学際的な環境を院生に提供し、次代の研究者育成を目指したい。

（フレデリック・クレインス）

あとがき――闇のなかで“未来図”を描く

白石恵理

2020年師走、「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」（プログラムは末尾参照のこと）の開始時間は、日本では夕方5時だった。ヨーロッパとの時差調整によるもので、当時はまだ珍しい試みだった。窓の外はすでに暗い京都の会場と、新しい朝を迎えたヨーロッパ各国にいる発表者、さらに諸地域の参加者をリモートでつなぎ、日本語と英語による対話が繰り広げられた。あれから早くも丸1年が経過したわけだが、状況は好転の兆しを見せていない。コロナウイルスは変異を繰り返しながら居座り続け、地球全体で何度目かの新たな感染の波が高まっている。日本での一日の新規感染者数は過去最多の5万人を超え（2022年1月23日現在）、またも行動制限やイベントの縮小などが避けられない勢いだ。

これまでの2年間のコロナ禍による人的被害と世界経済への打撃は計り知れない。しかし、明確な数字で現れる被害以上に気になるのが、若者たちの学びの場にもたらした影響のその後である。大学では長期にわたりオンライン授業を余儀なくされ、キャンパスも同級生の顔も知らないという新入生は数多い。また、複数の執筆者が触れているとおり、留学生や留学希望者にとっては、いくつもの貴重なチャンスや夢や将来設計をいったん手放さざるを得ない、試練の時となった。

当会議2日目にディスカッサントとして参加した私は、報告者それぞれのお話に触発され、かつて英国の大学院で学んでいた日々を思い返していた。無機的なモニターから漂うはずのない学食のスパイスやトマトソースの匂いを想像し、たった2年間とはいえ密度の濃い時間で得たものを数え上げていた。留学の目的は第一に学位取得ではあったが、知識や情報さえ得られれば良いという

ものではなかった。異国で暮らし、そこに息づく文化・言語を見聞きし、真似ながら学ぶことで価値観を揺さぶられ、視野を広げることこそが大切だった。もしあの体験がなかったと仮定するなら、本来であれば自由に享受できるはずのそのような機会を不可抗力により奪われた学生たちの無念のほどが、あらためて偲ばれる。

本書の表紙カバーデザインは、文学通信の岡田圭介氏ご提案によるものである。黒には、コロナ禍で命を落とした人びとへの哀悼の意が込められている。それとともに、ゼロ地点からのスタートという意味でも、これほどふさわしい色はないように思う。光が差さない世界でじっと目を凝らし耳を澄まし、やがてぼんやりと開ける視界の先に、どのような“未来図”が描けるか。今はただ、途切れることのない対話の継続を心から願う。

ご寄稿を快諾いただいた執筆者の皆さまにはもちろんのこと、制作に真摯に向き合ってくださった文学通信の岡田氏と西内友美氏、ならびに気配りをもってサポートしてくださった当コンソーシアム事務局の後藤万希子氏に感謝申し上げる。

＊＊＊

「ヨーロッパ日本研究学術交流会議

緊急会議　After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」

プログラム

2020 年

12 月 11 日（金）

進行：荒木 浩（「国際日本研究」コンソーシアム委員会委員長・国際日本文化研究センター教授）

17:00–17:10　開会の挨拶：井上章一（国際日本文化研究センター所長）

17:10–17:20　趣旨説明：荒木 浩

17:20–18:30　基調講演：「コロナ後の国際関係」五百旗頭 真（兵庫県立大学理事長）

司会：楠 綾子（国際日本文化研究センター准教授）

18:45–19:20　基調報告：「人文学研究におけるオンライン上の研究資源―現状と課題」

関野 樹（国際日本文化研究センター教授）

司会：山田奨治（国際日本文化研究センター教授）

12 月 12 日（土）

進行：荒木 浩

17:00–20:30　パネル発表「ヨーロッパからの報告（1）」

パネリスト：エドアルド・ジェルリーニ（ヴェネツィア・カフォスカリ大学フェロー）

佐藤＝ロスベアグ・ナナ（ロンドン大学 SOAS 言語文化学部長・准教授）

鋳物美佳（ストラスブール大学外国語学部専任講師）

アンドレアス・ニーハウス（ゲント大学芸術・哲学学部教授）

マルクス・リュッターマン（国際日本文化研究センター教授）

ディスカッサント：白石恵理（国際日本文化研究センター助教）

司会：安井眞奈美（国際日本文化研究センター教授）

12 月 13 日（日）

進行：荒木 浩

17:00–20:15　パネル発表「ヨーロッパからの報告（2）」

パネリスト：アラン・カミングス（ロンドン大学 SOAS 東アジア言語文化学部上級講師）

豊沢信子（チェコ科学アカデミー東洋研究所研究員）

梅村裕子（エトヴェシュ・ロラーンド大学 [ELTE] 人文学部日本学科長）

ビョーン＝オーレ・カム（京都大学大学院文学研究科講師）

ディスカッサント：

キリ・パラモア（アイルランド国立大学コーク校東アジア学部教授）

藤本憲正（国際日本文化研究センター機関研究員）

司会：ジョン・ブリーン（国際日本文化研究センター教授）

20:15–21:00　総合討論　司会：荒木 浩

21:00–21:10　閉会の挨拶：瀧井一博（国際日本文化研究センター副所長）

＊所属・肩書は開催当時のもの。表記は一部改訂

執筆者一覧（掲載順）

五百旗頭　真（IOKIBE Makoto）

兵庫県立大学理事長、ひょうご震災記念 21 世紀研究機構理事長、神戸大学名誉教授、防衛大学校名誉教授

『評伝 福田赳夫――戦後日本の繁栄と安定を求めて』（監修）岩波書店、2021 年

関野　樹（SEKINO Tatsuki）

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授

“Data description and retrieval using periods represented by uncertain time intervals,” *Journal of Information Processing* 28 (2020), pp. 91–99. (DOI:10.2197/ipsjjip.28.91)

楠　綾子（KUSUNOKI Ayako）

国際日本文化研究センター准教授・総合研究大学院大学准教授

「小泉純一郎――「市民感覚」の政治、制度的権力の勝者」「野田佳彦――統治責任の模索」宮城大蔵編著『平成の宰相たち――指導者 16 人の肖像』ミネルヴァ書房、2020 年、209–243、389–417 頁

Edoardo GERLINI（エドアルド・ジェルリーニ）

ヴェネツィア・カフォスカリ大学アジア・北アフリカ研究科研究員

『古典は遺産か？　日本文学におけるテクスト遺産の利用と再創造』（河野貴美子と共編）勉誠出版、2021 年

佐藤＝ロスベアグ・ナナ（Nana SATO-ROSSBERG）

ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）言語文化学部長・准教授

『学問としての翻訳――「季刊翻訳」「翻訳の世界」とその時代』みすず書房、2020 年

鋳物美佳（IMONO Mika）

明星大学教育学部准教授

『運動する身体の哲学』萌書房、2018 年

Andreas NIEHAUS（アンドレアス・ニーハウス）

ゲント大学芸術・哲学学部教授

Challenging Olympic Narratives in Japan, the Olympic Games and Tokyo 2020/21. Co-edited with Yabu Kotaro. Würzburg: Nomos/ Ergon, 2021.

マルクス・リュッターマン（Markus RÜTTERMANN）

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授

「二つの「中世」における「ウルクンデ／シャルト」vs「文書」―その概念的対置およびシンボル形式的比較によせて―」河内祥輔、小口雅史、M・メルジオヴスキ、E・ヴィダー編『儀礼・象徴・意思決定――日欧の古代・中世書字文化』思文閣出版、2021 年

安井眞奈美（YASUI Manami）

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授

『狙われた身体――病いと妖怪とジェンダー』平凡社、2022 年

山田奨治（YAMADA Shōji）

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授

『著作権は文化を発展させるのか：人権と文化コモンズ』人文書院、2021 年

Alan CUMMINGS（アラン・カミングス）

ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）東アジア言語文化学部上級講師

Haiku: Love. London: The British Museum Press, 2013.

TOYOSAWA Nobuko（豊沢信子）

チェコ科学アカデミー東洋研究所研究員

Imaginative Mapping: Landscape and Japanese Identity in the Tokugawa and Meiji Eras. Harvard University Asia Center, 2019.

梅村裕子（UMEMURA Yuko）

エトヴェシュ・ロラーンド大学［ELTE］人文学部日本学科長

Japánok és magyarok egymásról. Akadémiai Kiadó, 2017.

（『日本人とハンガリー人の相互認識』アカデミア出版、2017 年）

Björn-Ole KAMM（ビョーン＝オーレ・カム）

京都大学大学院文学研究科講師

Role-Playing Games of Japan: Transcultural Dynamics and Orderings. New York: Palgrave MacMillan, 2020.

Kiri PARAMORE（キリ・パラモア）

アイルランド国立大学コーク校東アジア学部教授

Japanese Confucianism: A Cultural History. Cambridge: Cambridge University Press, 2016.

藤本憲正（FUJIMOTO Norimasa）

国際日本文化研究センター機関研究員

『ハンス・キュングと宗教間対話――人間性をめぐるその神学的軌跡』三恵社、2021 年

小口雅史（OGUCHI Masashi）

法政大学文学部教授

『儀礼・象徴・意思決定――日欧の古代・中世書字文化』（河内祥輔ほかと共編著）思文閣出版、2021 年

フレデリック・クレインス（Frederik CRYNS）

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学国際日本研究専攻長／教授

『ウィリアム・アダムス――家康に愛された男・三浦按針』ちくま新書、2021 年

（所属・肩書は 2022 年 3 月末現在）

【編著者（「国際日本研究」コンソーシアム）】

荒木　浩（ARAKI Hiroshi）
国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授
『『今昔物語集』の成立と対外観』（思文閣人文叢書）思文閣出版、2021 年

白石恵理（SHIRAISHI Eri）
国際日本文化研究センター助教
“Fictitious Images of the Ainu: *Ishū Retsuzō* and Its Back Story,” *Japan Review* 36 (2021), pp. 89–109.

松木裕美（MATSUGI Hiromi）
国際日本文化研究センター助教
『イサム・ノグチの空間芸術———危機の時代のデザイン』淡交社、2021 年

ゴウランガ・チャラン・プラダン（Gouranga Charan PRADHAN）
国際日本文化研究センター機関研究員
『世界文学としての方丈記』法蔵館、2022 年

After/Withコロナの「国際日本研究」——ヨーロッパからの報告
Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe
「国際日本研究」コンソーシアム記録集 2021（非売品）

2022（令和 4）年 3 月 31 日初版発行

編　集　「国際日本研究」コンソーシアム
制作協力　文学通信
発　行　国際日本文化研究センター
〒 610-1192 京都市西京区御陵大枝山町 3-2

装　幀　文学通信　岡田圭介
印刷製本　モリモト印刷

ISBN（紙）978-4-910171-08-1　（電子）978-4-910171-09-8
© 2022「国際日本研究」コンソーシアム

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

https://cgjs.jp

設立趣旨・目的

「国際日本研究」コンソーシアムは、「国際日本研究」や「国際日本学」を掲げた大学の研究所や大学院課程のニーズをくみ上げつつ、連携を進めようとする我が国初の試みです。
「国際日本研究」に関わる共同研究会や国際研究集会に、コンソーシアムとして参加することによって、コンソーシアムを媒介としながら、国内研究者コミュニティを海外研究者ネットワークと結びつけることを目ざします。
また、コンソーシアムにおいては、学術的共同研究の推進、国際共同ワークショップの開催を通じて、「国際日本研究」の学問的基盤を構築しながら、若手研究者の育成にも努めます。研究成果等はデータベース化し国内外へ発信します。

ISBN978-4-910171-08-1

Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

After/With コロナの「国際日本研究」——ヨーロッパからの報告

「国際日本研究」コンソーシアム Consortium for Global Japanese Studies ……【編】

国際日本文化研究センター

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies
……【編】

第Ⅰ部
コロナ後の国際関係と人文学研究

コロナ禍と国際関係（五百旗頭真）
人文学研究におけるオンライン上の研究資源—現状と課題（関野樹）
Column 1. コロナと国際関係（楠綾子）

第Ⅱ部
コロナ禍と日本研究—ヨーロッパからの報告①

イタリアから見たコロナ禍と日本研究への影響（エドアルド・ジェルリーニ）
Covid-19（コロナ）を翻訳する（佐藤＝ロスベアグ・ナナ）
コロナ禍における見えるものと見えないもの（鋳物美佳）
面目を改める？　新型コロナウイルスとベルギーにおける日本学の現在と将来（アンドレアス・ニーハウス）
「良心」を考える（マルクス・リュッターマン）
After/Withコロナの国際日本研究—パネル発表「ヨーロッパからの報告①」を受けて（安井眞奈美）
Column 2. 国立国会図書館デジタル化資料等の海外送信・その後（山田奨治）

After/With コロナの「国際日本研究」

——ヨーロッパからの報告

Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe

未曾有のこの世界的な
パンデミックの事実と体験が
いかに変化して浸透し
時を駆け抜けていったか

第Ⅲ部
コロナ禍と日本研究—ヨーロッパからの報告②

Pandemic and Kabuki Dramaturgy（Alan Cummings）
［日本語訳］パンデミックと歌舞伎のドラマトゥルギー（アラン・カミングズ）
Covid-19 and Japanese Studies: Some Thoughts from Prague（Toyosawa Nobuko）
［日本語訳］パンデミックと日本研究に関して—プラハからの発信（豊沢信子）
コロナ禍におけるエトヴェシュ大学の現状と試み（梅村裕子）
Methodological Concerns of Researching Larp and Educational Roleplay in Japan: The (Im) Possibilities of Remote Fieldwork（Björn-Ole Kamm）
［日本語訳］日本におけるライブ・アクション・ロールプレイ（LARP）および教育ロールプレイングの研究方法論における問題点：リモートフィールドワークの（不）可能性について（ビョーン＝オーレ・カム）
「ヨーロッパからの報告②」に関するコメント／Comments on the "Reports from Europe, Part 2"（キリ・パラモア／Kiri Paramore）
Column 3. コロナ禍の後に—大学教育・研究の転換とメタバース（藤本憲正）

国際日本文化研究センター

荒木 浩「序文」より

2020 年 12 月 11 日－13 日の 3 日間、国際日本文化研究センターを舞台にオンラインを結び、「国際日本研究」コンソーシアム主催の「ヨーロッパ日本研究学術交流会議—緊急会議　After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」が開催された。この報告集は、その記録であり、同コンソーシアム刊行の第 5 論集にあたる。

＊

開催された年時とタイトルから明らかなように、コロナ禍 1 年目の真っ最中に企画された、緊急会議である。私が本コンソーシアム委員会（日文研）の委員長を引き受けた 2020 年度初頭の状況は、3 月以降、COVID-19 という初耳のパンデミックが日本でも深刻となって、多くの国際会議が中止・延期となり、また海外渡航そのものが中断を余儀なくされていく、現在進行形の暗転のただ中にあった。

＊

「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」は、その暗中模索の時期に、コンソーシアム委員会のメンバーで衆知を集めて人選し、企画・立案した。そのおかげか、幸い、今日の目で見ると、いまだ終熄が見えない足かけ 3 年間のコロナ禍を俯瞰するグローバルな記録であり、また未来へ向けての論集となった、という自負もある。